
カナリア

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナリア

【Nコード】

N7857C

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

シエラン王国ヴィクレア領レバン。その街にいるカナリアという男は凄腕と評判の「便利屋」だった。何故彼が便利屋などしているのか、似合いもしない可愛い名前と呼ばれているのか誰も知らない。そんなカナリアと愉快的仲間達の日常を描いた妖精さんも出てくるハートフルなファンタジックハイテンションラブコメディ！・・・って「ラブ」？違うよ！

小説『カナリア』注意書き

・この作品は素敵な素敵なファンタジックコメディです
・細かいところは気にしないで下さい。良い大人にはなれませんが。

・パクリ、に思えるところはあくまで仕様です。いんすぱいあーです。きわどい発言もチラホラします。

放送の関係上部分的に「×××」に変換される可能性があります。ご了承下さい。

・一部シリアスな部分が含まれますが、きつと菌のせいです。
・この作品にはアフロが含まれています。アフロが苦手な方は自己責任で読んで下さい。

・キツシュ、ジェラート、タルト、おこげなどを食べないで下さい。

・お客様の中で医者様がいらっしやいましたら名乗り出てください。

・シュリー様を「ドリルさん」と呼ばないで下さい。
・扱いによっては汁が漏れ出す可能性があります、品質には問題ありません。

・ジャイ。ンはジャ。子のおんちゃんです。
・主人公を網で捕まえないで下さい。
・万が一、喉に詰まっても当社は責任を一切負いません

以上の事を守って正しくお読み下さい。

（冗談を冗談として楽しめる方にオススメの作品です。同一作者の作品の中では相当異色な方に含まれますので、他の作品を読んで気になったから読もうとしているという素敵な方は注意してお読み下さい）

Story 1 黒い魔法使い(1)

1 仲介酒場「銀の麦」

「マスター、水くれーみずうー!!」

彼は酒場に入るなりすぐさまそう叫んだ。

まだ開店前と言うこともあつて酒場の中は人気がない。ふらつきながら何とかカウンターまで辿り着いた黒髪の男は、カウンターに置かれたグラスを取ると一気に口の中に流し込む。

次の瞬間、見事な霧を吹き出した。

「ぶー!!」

「あら、やるじゃない小鳥ちゃん」

少女はむせかえる男を見ながら楽しそうに拍手をする。

青い瞳は涙を溜めて彼女を睨んだ。

「これは何度の酒だ!? 殺す気か、アンナ!!」

「殺す気なら毒を注いでいるわ」

「胸を張って言うことか! あー、びびった・・・」

いくからお酒が好きでもこれだけの濃度を一気に飲めばただでは済まない。危うく酒の一気のみをすることであった彼はカウンターの中に入り、勝手に瓶から水を汲んで飲む。

「あ、泥棒」

「うるせえよ、文句があるならちゃんと接客しろよ」

「私、一言もお水なんて言っていないわよ」

しれっとした口調で言われ男は頭を掻いた。

「相変わらずの非道だな」

言いながら彼は水をもう一杯飲んだ。

二杯の水を飲み干してようやく落ち着いたのか、男は顔にかかる黒髪を後ろでまとめ上げた。癖のある髪は長さが足りないのか括っ

ても横から垂れ下がってくる。鬱陶しそうに髪を掻き上げながら彼は袖口で汗を拭った。

「マスターは？」

「彼は優しい笑みを浮かべて扉の向こう側へと消えた。それが彼女の見た父親の最後の姿だった」

「勝手に殺すなよ。父親泣くぞ」

さらりと真顔で言う彼女に突っ込みを入れて彼はカウンター席に座る。

彼はカナリアと呼ばれる男だ。無論本名ではないのだろう。その顔に似合わぬ名前を持つ男は、この界隈では有名な「便利屋」だ。金次第で何でも請け負う便利屋という職業はそれほど珍しいものではない。この酒場「銀の麦」は依頼人と便利屋とを繋ぐ「仲介屋」を兼ねている。

辺境と言って良いほどの小さな街だが、ヴィクレア領はシェラン王国の中で最も他国と隣接する地域のため、こういった小さな街でも酒場が繁盛し、また、出入りする便利屋も多い。

彼は、そんな中でも有名であり、名指しで仕事の依頼が来るほどの者だ。つまり、彼は優秀な人材と言えるのだ。

「こう見えて」

ぽつりと呟くアンナに反応してカナリアは顔を上げる。

「ん？ 何か言ったか？」

「こっちの事よ。それより何か食べる？ ちょうどここに美味しそうに湯気を立てている「手作り風ハンバーグ風」があるんだけど」

「風！？ 何か危険な匂いがするな」

「失礼ね、床下に生えていた怪しげなキノコなんか入れてないわよ」
「その匂いじゃ・・・っていうか、そんなもの人に喰わせるなよ」

「大丈夫、死にはしないわ。・・・多分」

「多分って」

カナリアは軽く目眩を覚える。

店に来るたびに怪しいものを食べさせようとするこの性格はどう

にかならないだろうか。

彼女の事を「魔女」と呼ぶ人間は少なくない。

彼女に初めて会った人間は可愛い少女としてしか見ないだろう。しかし中身は完璧に魔女だ。それでも可愛いという連中もいるが、彼らはまだ被害を受けていないか気づいていないかのどちらかだ。根本を知れば彼女の前では油断が出来なくなる。

「ああ、カナリア、お帰りなさい」

奥の戸口から顔を覗かせて中年の男は笑う。

背が高く、細身の男は紙袋をカウンターの上に載せると袖をまくって手を洗った。

「随分と早かったんですね。イステシアの方はどうでしたか？」

イステシアはここシェラン王国の隣国にあたる。複数の国に囲まれるようにしてあるため他国の治安が悪化するとすぐにその煽りを受ける。シェランはハーレル王の代になり、ようやく安定してきたが、先だって継承戦争が起きたばかりのイステシアは治安があまり良くない。

他国の動向が気になるのは当然の事だろう。

カナリアは少し肩をすくめて答える。

「徐々に持ち直している感じだな。まあ、ただ人手不足つてのは変わりがない。おかげで向こうから仕事を押しつけられてきたよ」

「ああ、それは間が悪い」

「ん？ 何だ？」

マスターは苦笑って紙を彼の前に置いた。

「指名の仕事依頼です。火急の依頼ですから貴方が無理なら他の信頼できる方に頼むことになりますが」

「んー、大丈夫そうだ。目的地も一緒だし。・・・アンナ、悪いけど頼めるか？」

「これ食べてくれたら引き受ける」

彼女はカウンターのの上に置いてある「手作り風ハンバーグ風」を示す。時間が経過してもまだ湯気を上げているそれは手も触れてい

ないのにわずかに蠢いた。

カナリアは引きつった笑いを浮かべる。

「おい、冗談はほどほどにしてくれ」

「そうね冗談は貴方の顔だけで十分ね」

「さりげなく暴言か！」

「・・・仕事は引き受けたわ」

カナリアは溜息をつく。

仕事を引き受けてもらうだけに何というやりとりだろうか。

「・・・任せたよ」

「どうかしたのですか？ ああ・・・随分と美味しそうなハンバーグですね。誰も食べないなら私が頂きますよ」

「あっ！」

「・・・あ」

制止する間もなくマスターは娘の作ったハンバーグを口に運ぶ。

「うん、美味しい。・・・おや、どうしましたか？」

啞然としている二人をマスターは不思議そうに見返す。

取り敢えず、即効性はないようだ。

「あ、いや何でもないっ！ 俺、ひとまず家に帰るから、何かあったら連絡してくれ」

何かが入っているハンバーグ風を凝視しながら彼は徐々に後退っていく。

わずかに動いていることにマスターは気がついていないようだ。

何かあつて連絡されても困るが、無事であることを祈りたい。

マスターは少し首を傾げる。

「飲んでいけないんですか？」

「き、今日は遠慮しておく。ほら、長旅で疲れているからな」

そうですか、と微笑むマスターの横でアンナが小さく舌打ちをする。

逃げるようにカナリアは戸口に向かった。

いつ、あれの巻き添えを食うか知れない。ここは早く帰った方が

上策だろう。

「それじゃ・・・のわっ！ 何か踏んだ！」

慌てて出て行こうとした彼は出入り口付近で何か柔らかいものを踏みつけて大きく飛び退いた。

足下にいたのは人だった。

「おや、人ですか？ 落とし物にしては随分と大きい落とし物ですね」

「あらホント、人ね。そんなところで寝るなんて変わった趣味ね」
「そんなボケを言っている場合か！ おい、大丈夫か、踏んで悪かった、生きているか？」

ほのぼのとした会話をする親子に突っ込みを入れて彼は踏みつけてしまった人を抱き起こす。

見覚えのない少女だった。十代半ばくらいで、茶色い髪の毛は短い。格好から旅をしてきたのだと推測できる。

快活そうな外見とは裏腹に、今の彼女がぐったりとして意識も朦朧としている様子だった。呼吸は浅く、顔色はわずか青ざめて見えた。

「おい、何かあったのか？」

ぬるり、と生暖かい感触がする。

鉄を含んだような独特な匂いは今まで幾度と無く嗅いだことがある。

カナリアは自分の手のひらを見、顔をしかめる。

「・・・血？」

少女の背に触れた左手は真っ赤に染まっていた。

Story 1 黒い魔法使い（2）

2 君は誰？

リン診療所に運ぶまでの間に少女は意識を失った。

大量の出血をしていたものの、少女の身体に残された傷跡は浅い。衣服の破れ具合からは「治癒」の魔法が使われた事が分かる。身体は衰弱している様子だったが、それは傷の回復の為に大量の魔力を使った為だろうと医師は診断した。

「『治癒』を使う魔法使いか・・・珍しいな」

「そうだな、マリンの同業者じゃないのか？」

マリンと呼ばれた医師（注：男）は首を振る。

「こんな小娘で治癒魔法を使う治療師なら噂くらい聞いても良いだろう。だが、そんな話は一切聞いたことがない。つまりこれは治療師では無いと言うことだ」

「お前が知らないだけじゃなくて？」

「バカを言うな。治癒の魔法がどれほど稀少かお前も知っているだろう」

「だよなあ」

ベッドで横たわっている少女を見つめながらカナリアはふうと溜息をつく。

そもそも全国各地にいる治療師の中で治癒魔法を使う者はそう多くはないのだ。マリン・・・ファーマ・リン医師のように魔力を一切使わないというのはもっと稀少であるが、治癒の魔法は珍しく教会や国の要人たちの直属の治療師になっていることが多い。

一般的な治療師達は魔力で薬を精製したり、痛みを止める、または患者の回復能力を高める手助けをしたりするくらいだ。いくら魔力が強くとも才能が無ければ治癒を使いこなすことは出来ず、下手

に使えば患者はもちろん自分自身の命すら危なくなるのだ。

だからこそ才能のある人間は重宝され、治療師になることが多い。こうして一般に紛れていることは非常に稀な話なのだ。

「まったく、面倒な事を持ち込んでくれたな、お前は」

カナリアは笑ってベッドの脇に置いてある椅子に腰掛ける。

「それ、患者を目の前にした医者と言葉じゃねーぞ」

「俺の処置などさほど必要無かっただろう」

「そらそーだけどさあ。……少年なら文句一つ言わないくせに」

ぎろりと美青年医師は黒髪の男を睨む。

カナリアは苦笑いを浮かべた。

「でも、まあ、確かに面倒なことのような。太刀筋から見ると、手慣れた人間の仕業だ。この子、ひよつとすると……」

言いかけたとき、少女がわずかに反応を示す。

うんと少しもどかしげに呻り声を上げてゆつくりと目を開いた。

「……ひよつとこ、ってなーに？」

「口がとんがって火を熾す男の事だよ。……ていうか、誰がひよつとこなんて言った？」

「気分はどうだ？」

「最悪、頭痛いし、気持ちも悪いよう」

彼女は目を開いているのも辛そうに腕を額の上に置いた。

「魔法酔いだな。痛み止めを処方する」

「んー？ ……あれえ？ こことこ？」

それはひよつとこよりも先に気にするべき事だ。

軽く吹き出してカナリアは説明をする。

「リン診療所だ。今の偉そうなやつら見栄えのいい男がここの医者でファーマ・リンだ」

「え？ いい男？ どうしよう……見逃した」

「後でゆつくり見ればいいさ。だけど奴は変態だから気を付け……ぐあっ！？」

「ごん、という鈍い音がしたかと思うと、カナリアの口から奇妙な音が漏れる。」

「・・・初対面の人間に何を教えている」

「つつ・・・！ 痛てえ・・・割れたらどうする！？」

「お前の頭蓋骨がどれほど丈夫か考慮した上だ。割れるわけがないし、割れたところで大した損害はない」

「ひどっ！」

「・・・これを飲むといい。少しは楽になるだろう」

「ありがとー」

「噛まずに飲め」

「え？」

既に遅し。

少女の口元からはぼりぼりという音が漏れる。瞬間、ベッドに横たわっていた少女は目をかつと見開き飛び起きる。

「に、にがー！ーい！！！」

絶叫して差し出された水を奪うように飲み干した彼女はベッドの上で丸くなる。

「・・・すごっ！ 頭痛も吐き気も一気に吹き飛ぶ苦さ！ あなた凄いい治療師ね！ しかも本当に美形だし！」

「本来そう言う用途の薬ではないのだが」

「ま、でも治ったようだし、いいんじゃないの？ ……で、何があつた？」

話を本題に持ち込まれ、少女は少し居住まいを正した。

彼らの人となりを観察するように見やった後、ためらいがちに言う。

「街道を歩いていたら突然知らない人達に襲われたの」

「山賊か？」

彼女はふるふると首を振る。

「違うと思う。・・・私、シア・ガンっていうの」

名乗った言葉を聞いてカナリアは驚いた風に言う。

「シーア・ガン？ あのか？」

「何だ、お前知っているのか？」

「まあ、有名人だからな」

鍛冶師、特に魔法武器を扱う者の中でも名工と言われる男がいる。
名を、イーア・ガン。

シーア・ガンはその娘にして、魔法武器の修復師なのだ。イーアの武器を修復出来る人間はイーア当人と娘しかいない。元々魔法武器の修復師自体が特殊なのだ。

武器に無縁であり興味もないマリンが知らずとも当然だが、カナリアは仕事の過程で幾度となく彼女の噂を耳にした。もし彼女がそのシーア・ガンなのだとなれば、彼女の稀な力「修復能力」を欲した人間が彼女を狙ったとしても不思議はないのだ。

しかし、彼女の身体にあつた傷は確実に命を狙うものだ。

それは尋常ではない事が起こっている証拠でもある。

「ひょっとして嬢ちゃん、ヴィクレア領主に呼ばれて？」

「・・・どうして知っているのか？」

カナリアの言葉に彼女は布団の端をぎゅっと握った。

明らかに警戒している様子にカナリアはくすくすと笑う。

「領主がイーアの武器を持っているってのは有名な話だよ。壊れたか調子が悪いかで嬢ちゃんに依頼したんだろう？」

「・・・うん、まあ」

彼女は歯切れ悪く答える。

「だから、急いで向かっていたんだけど」

「予定外な手傷を負わされた訳だ」

「・・・まさかとは思うが、すぐにでも発つつもりか？」

マリンは仏頂面で彼女を見下ろす。

彼女は苦く笑って答える。

「うん、まあ、そーゆーつもりだけど」

「一応止める」

「いちおう？」

怪訝そうに見上げるシアにマリンは表情を変えぬまま答える。

「どうせ止めたところでお前みたいな奴は勝手に出て行く」

「・・・何で当てつけがましく俺を見るんだよ」

「自分の心に聞け」

「えー？ 俺、何にも心当たりねーよ？ ・・・ま、だけど、出るなら明日の朝にしておけ。そうしたら俺もついて行けるから」

彼女は目を丸くした。

「ひよつとこさんが？」

「誰だよ！」

突っ込みを入れてからカナリアは自分がまだ名乗っていないことに気付く。一つ咳払いをして続ける。

「俺の名はカナリアだ。依頼の関係でな、ヴィクレア城下に行く用がある。あんたでなくとも女の一人旅は危険だ。出発を明日にするなら俺が送っていく」

「・・・いいの？」

「まあ、ついでだからな。・・・俺もその方が都合いいし」
「ん？」

ぼつりと呟かれた言葉に少女は首を傾げる。

カナリアはにこりと笑う。

「短い旅でも華がある方がいいからなあ」

胡散臭い。

マリンはそう思ったが敢えて口には出さなかった。

隣の男が何を思っているにも気にしない黒髪の男は背伸びをしながら立ち上がる。

「明日の朝迎えに来る。それまでゆっくり休んでおけよ」

「あ、うん・・・」

「じゃあ、彼女のこと頼むな」

不本意そうにマリンは頷く。

「致し方あるまい」

気乗りしなくても患者は患者と言ったところだろうか。

了承したのを見て、彼は診療所を出ようと扉を開ける。
そして、閉めた。

見たくないものが見えてしまった。

「・・・？ 何をしているんだ、お前は。開けたり閉めたり老化現象か？」

怪訝そうに問うマリんに、カナリアは青ざめた笑顔で振り向いた。
「ヤバイよう、マリンちゃん」

「何が？」

苛立ったようなマリン。

カナリアは貼り付いた笑顔のまま言う。

「・・・あいつが来る」

Story 1 黒い魔法使い(3)

3 その名はキュスラ

「あらん？ どうして私の顔を見て慌てるのかしら？」

優しく開かれた扉の向こう側から花の蜜をかぶったような甘酸っぱい香りが漂ってくる。

何故だか聞こえないキラキラとした効果音が聞こえてくる。

「何かやましいことでもあるのかしら、カナリイ」

撫でるような、脅すような目つきで女はカナリアに笑いかける。

彼は貼り付いた笑顔のまま降伏するように両手を上に上げた。

背の高い女だった。真紅の巻き髪を垂らし、露出の高いドレスに身を包んでいる。どこかの貴族のパーティーにでも参加してきたかのような姿だが、その手には大きな鎌が握られている。

まるで死に神か、戦いの女神のようだった。

顔立ちは整い、剣のように鋭く凛としている。髪の色、性別こそ違うがマリンと同じ顔をしていた。

もっとも、受ける印象は正反対だが。

「やましいことなんか、あるわけ無いだろ、キツシュ？」

カナリアは何かを誤魔化すようににこにここと笑う。

「それにしても随分と慌てているように見えるのだけど？」

「気のせいだ、気のせい！」

彼は彼女に診療所の中を見せないように衝立のようになりながら、後ろ手でマリンに合図を送る。

が、時は既に遅く、女の瞳はベッドの上にいる少女を完全に捕らえていた。

「あらん？」

かつかつとハイヒールを鳴らしながら彼女は寝台へと近付く。

その瞳は獲物を狙う獣の瞳。

「あらん？」

音を鳴らしながらくねくね近付いた彼女は寝台の上の少女をなめ回すように見る。

「あ、あの？」

しげしげと値踏みするように見つめられ居心地の悪そうなシーアがおずおずと女に声をかける。

んふ、と女の口から奇妙な声が漏れる。

「んもー！ 可愛いわっ！ 可憐だわ もー食べちゃいたいくらいか・・・ぬはっ！」

美女の口からあるまじき奇声。

彼女は腹部を押さえて二三歩後退する。

「何をやっているか、変態」

「それが久しぶりに会った姉に対して言う言葉かしら、ふーちゃん。しかもモツプで姉を殴るなんて人間のすることじゃありませんわね」「病人にいきなり飛びかかるお前にだけは言われたくない。分別つかないお年では無いでしょう、お姉様？」

弟の冷笑。

対する姉は頬をひくひくとさせながら笑う。

「まあ、可愛いことおっしゃいますのね」

「姉に似ましたから」

皮肉合戦は始終笑顔で交わされる。仲が良いのか悪いのか分からない姉弟の間を冷気が流れているのは言うまでもない。

カナリアは呆然としている少女に近づき耳打ちをする。

「気にするなよ、あの姉弟は顔を合わせるといつもあの調子なんだ」

「・・・双子？」

「いや、でもそのくらいそっくりだろう？ 中身は両方とも変態だし」

「そこ、聞こえてましてよ」

「この変態女と俺を一緒にするな」

振り返るタイミングが全く一緒にシアーは覚えず笑いを漏らす。
冷たい氷のような印象を与えるマリント、逆に熱い炎のような印象の姉。どちらも相反するようでよく似ているようだ。

赤髪の女はわずかに咳払いをして少女を見る。

先刻のようにいきなり飛びかかったりはしなかった。

「紹介が遅れましたわね、私はキユスラ・リン。あなたと私の仲ですもの、親しみを込めてキツシュと呼んで下さって構いませんわ」

「どんな仲だよ」

「あなたは黙っていらして。・・・それで、可愛らしいお嬢さんは何というお名前かしら」

突っ込みを入れる（邪魔な）カナリアを睨み付けてキツシュは舐めるような目つきで少女を見つめた。

「えっと、シアー・ガン」

「あらん？」

キツシュは珍しいものでも見るように目を瞬かせた。

カナリアの同業者である彼女もこういう話には詳しい。シアー・ガンという名前を知らなくとも「ガン」という名前でピンと来るものがあるだろう。

驚いた様子でいたキツシュは、やがてその赤い唇を歪め舌を這わせた。

「んふ、いいわ、ステキね。有名人じゃないの。こんなところで会えるとは思っていなかったから嬉しいわ、シアーちゃん」

女の手が少女の頬を撫でる。

細く長い指は吸い付くように少女を撫でまくる。

女は恍惚の笑みを浮かべる。

「ああ、柔らかい肌、そのくせ張りがあって弾力もあって・・・あはーん、若い女の子ってやっぱりいいわあ」

「こらこら、キツシュ、病人だつて言っただろ？」

「ああーん、触るくらい良いじゃないの、減るものでもありませんし」

「だーめ、減るの。お前が触ると生気を吸い取りそうなきがするし、放っておくと何するか分からないからな」

カナリアに無理矢理引き離され、嫌そうな顔をしていたが、それも仕方がないと彼女はしぶしぶそれに従った。

これ以上キツシュをここに置いておくと休むに休めないと判断したカナリアはキツシュを診療所から連れ出した。

本当にしぶしぶといった感じで出てきたキツシュはぶつぶつと文句を垂れる。

「どうして私が自宅にいてはいけませんの」

「あれは弟の職場兼自宅だろうが。たまにしか戻らないお前が文句言える立場じゃないと思うけどな」

「弟のものは私のもの、私のものも私のもの。それが世の中の道理ですわ」

「ジャイ。ンかよ」

カナリアは声を立てて笑う。

文句を言いながらも姉が戻れば受け入れ、彼女が寝起きするための部屋まで用意している弟は姉を疎ましくは思っていないようだ。姉の方はというと、弟が可愛くて仕方がないらしい。本人達は互いに変態と罵りあい顔を合わせるたびにケンカをしているのだが、カナリアの目からは仲の良い姉弟にしか見えない。

それはカナリアにとって少しうらやましいことだ。

「まあ、今日のところは俺に免じて我慢してくれよな」

「仕方が無いですわね……カナちゃん」

「ん？」

「あの子のことなんですけど」

不意に真顔になった彼女に、カナリアも表情を引き締めて頷く。

「気付いているよ」

「なら何故？」

男は都合が悪そうに首筋を掻く。

「色々あるんだよ、俺もあの子も。ま、悪いようにはしねえって」

「任せて大丈夫なんですネ？」

カナリアは真剣な眼差しを受け止めて頷く。

「ああ、それは信頼してくれて良い。それより、キッシュ、お前いつまでここにいられるんだ？」

「次の依頼が来るまで」

「なら、暫く待機してくれないか。頼み事が出来るかもしれない」
キッシュは男の青い目を見つめる。

青い瞳は真っ直ぐ見つめ返した。

「あの子関連ですか？」

「そうだよ」

暫く彼女は黙っていた。

やがて頷き返事を返す。

「わかりました。待ちましょう」

Story 1 黒い魔法使い（4）

4 カラス

レバンの街からヴィクレア領都までは病人や老人を連れて歩いたとしても三日とかからない。カナリアの足で向かえば一日で辿り着ける距離であったが、少女を連れての旅となれば自分のペースではいかなくなる。

彼女の体調も考慮すれば良くて一日半というところだろうか。

襲った連中が再び来ることも考えれば着くのは明日の夕刻になるだろう。閉門にさえ間に合えばゆっくりと歩いてもいいだろう。

カナリアは少女の様子を見守りながら歩く。シアは昨日とは違って変わって顔色も良く元気そうだった。

森を切り開いて作られた街道を歩きながら周囲を不思議そうに眺めている。

「そんなに面白いかな？」

黒いコートを着た怪しげな男が笑い半分で尋ねると少女は首を傾げる。

「ねえ、ここってそんなに主要な道なの？」

その質問で少女が何を考えていたのか分かった。

カナリアは笑って首を振る。

「そうでもないな。良く使われる道だが、大街道って訳でもない。ヴィクレアの道はどこもこんなもんなんだよ」

「そうなの？」

街道というのは人が通って出来ていく道が多い。

頻繁に人の通る道は国で整備する場合も多いがヴィクレアの街道は殆どが領主が管理している。シェラン王が今のハーレル王になる前後に国は大きく荒れていた。その際たくさん失業者が出たため

にヴィクレア領主が人を雇い道を整備させることで失業者を減らしたのだ。

道路整備の業務は好評であり、今も尚続いているという。

「そのことに関して領主は評価されているんだが」

カナリアは少し口ごもり、そして黙った。

領主の評判ははつきり言って良くはない。それでも極端に何かに傾倒し圧政を強いている訳ではないから、悪い噂という程度で留まっている。おそらく彼女自身もその悪評を聞いてはいるだろう。

彼女は暫く彼の言葉を待ったが、やがては興味を失ったように再び周囲を見回した。

「それにしても、変わっているね」

「何が？」

「この辺って木にアフロになるんだね」

「アフロ！？ どこに！？」

驚いて彼は周りの木を見渡す。

木の枝には茶色い物体。

アフロには見えなくてもないが・・・

「・・・栗だよ」

「へえ、栗ってアフロなんだ」

「いや、あれはアフロじゃなくて・・・」

彼は視界の端に何かを捕らえ、一瞬黙る。
不審に思った彼女は男を見上げた。

「どうしたの？」

「ああ、いや、何でもない」

「ふうん？ ね、もう少し進んだらアフロ食べよ？」

「食べねえよ。・・・どっちにしてもその前にやることがありそう
だ」

「ぬほ？」

「変な驚き方するなよ、俺が驚くだろうが！・・・振り向く
なよ、お前を襲った連中が森に潜んでいる」

「うほ！」

少女はわざわざ小声でされた忠告を無視して振り向く。もつどこから突っ込んで良いのか判らないカナリアは咄嗟に彼女の襟首を掴んで引っ張った。

魔法の火を孕んだ矢が、彼女が今までいた位置を正確に貫く。

間一髪逃れた少女は青い顔をしていた。

「お前はアホか！」

「く、苦しい、首が、首が絞まってるっ！」

「あ、悪い」

彼は慌てて少女を放す。

ようやく息が出来るようになった彼女はぜいぜいと言いながら舌を出した。瞬間的に黒い集団が彼らを取り囲んだ。

どう考えてもこちらに好意的なようには見えなかった。

「やあ、良い天気だね」

カナリアはにこにこ笑いながら集団の一人に言う。

「悪いけど先を急ぐんでね、通してもらえるとありがたいんだけど」

「・・・。お前、同業者か」

男の声だ。四十代後半かもう少し上か。危険な匂いのする男の声だった。

カナリアは笑顔を崩さぬまま首を傾げた。

「ん？ 何のこと？」

「その女に雇われ、護衛を引き受けたのかと聞いている」

「雇われた覚えはないな。目的地が一緒だから旅してるだけだし」

「ならば去ね。命までは奪わぬ」

「はーん、あんたら、彼女を殺すように依頼された便利屋か」

「ヴィクレアに向かわなければ良いだけのこと。我々は忠告をした。だが、その娘には聞く気などないようだからな」

男の言葉に少女が表情を硬くしたのが振り向かずとも分かった。

「だから、殺す、か。まあ、依頼を成功させるためにはそれが手っ取り早いが・・・」

カナリアは表情を無くし、凍てつくような青い瞳で男を見る。

「俺、そう言うの嫌い」

交渉の決裂を知った男が軽蔑の意味を込めて鼻で笑う。

「ならばお前も死ね」

三流の悪役のような決めゼリフに周囲の手下（？）たちが反応して動く。相手は五人、リーダー格らしい男を含めて六人。それが一斉にカナリアたちに向かって来ていた。

少女が半狂乱に成りながら叫ぶ。

「あああ！！！！ 生麦生足、生ワサビ！」

ふわりと、彼らの周りを包むように魔法の風が産まれる。それは一気に収縮し、炎の球になり少女の手から発射される。

真上に。

「きゃー！！ 失敗しちゃったあ！」

「今の呪文だったのかよ！」

流暢に突っ込みを入れている場合じゃなかった。

六人の手にした武器が、彼らを狙う。

「つつ！！」

鋭く舌打ちをしてカナリアはコートをマントをそうするように大きく広げた。

その姿はカナリアというよりはコウモリかカラス。

鳥が広げた翼で雛を守るようにシーアを包む。

次の瞬間、五つの悲鳴が少女の耳に届いた。

「？」

おそろおそろ彼女が顔を上げるとそこには迫ってくる剣もカナリアの姿もない。あるのは重いコートと、手を押さえ武器を落とした五人の姿。

シーアは慌ててカナリアの姿を探す。

彼は、リーダーの真後ろに立ち、首筋にナイフではなくスプーンを突きつけていた。

「髪が傷んでいるな、トリートメントはしているのか？」

「き、きしやま！」

背後を取られるなどという不覚の上、自分の半分程度しか生きていないだろう男にからかわれ男は真っ赤になる。

しかも、口がまわらなかった。

「俺、あんたらのこと知っているな。何か臭いそんな名前だったよ
うな・・・」

「フローラル一家よ。せめて香るって言ってよ、失礼ね」

五人の中から抗議の声があがる。どうやらシアと変わらないく
らいの少女のようだ。

「ああ、悪い。で、フローラルさん、ものは相談なんだが、今回の
依頼諦めてくれないか」

「何をっ！」

「大体あんたらがどこから依頼を請けたか分かる。まあ、悪いよう
にはしないさ。それとも、俺と、やり合うか？」

因みに、と彼は付け加える。

「参考になるか知らないが、俺はカナリアだ」

「カナリア・・・」

彼が名乗ると、フローラル一家が息を飲む。

明らかに名前に動揺している様子だった。

それに破顔してカナリアは男から離れ道の先を示す。

「通って良い？」

「・・・好きにしる。お前とやり合うくらいなら汚点を残した方が
マシだ」

「そ？ サンキュー じゃあ行こうか」

「あ、うん」

コートに埋もれていた少女は言われて頷く。

よく分からないが助かったようだ。

彼らの頭上で勝利を祝す花火のように魔法の火の球が弾けて消え
た。

Story 1 黒い魔法使い(5)

5 与えられた絶望

「やっぱりお前だったのか。早かったな」

男は暗がりの中、それに語りかけた。

昼間見かけたもの、それは見間違いではなかったのだ。

光を帯びたそれはゆっくりと男の腕に舞い降り、そして鳥の姿に変わった。白鳥のようでもあるが、その身体は明らかに小さい。手のひらでも十分おさまってしまうような小さな鳥だった。

彼は鳥に向かって話しかける。鳥は答えるように何かを呟いた。鳴き声にも、人の声にも聞こえる奇妙な声だ。

男と鳥は暫く何かをやりとりした後、不意に話を途切らせる。がさり、と暗がりで何かが動く気配がした。燦ったままの焚き火のすぐ近く。いるのは連れの少女だけだ。

「・・・カナリア？」

寝ぼけたような少女の声が響くと、鳥はばたたと音を立てて飛び立つ。

少女は不思議そうに鳥を見つめた。

「悪い、起こしちゃったな」

「今鳥と話をしていなかった？ 鳥語が分かるの？」

「ああ、だからカナリアなんだよ」

冗談なのか本気なのか分からない言葉を返してカナリアは少女の横に座る。

「疲れているだろ。寝心地の良い場所じゃないが、寝た方がいいぞ」

「何か嫌な夢を見ちゃって」

「どんな？」

「レオタード着たヒゲおやじがアスパラ持って追いかけてくる夢」

「怖っ！」

「でしょ？ 私アスパラ嫌いなんだよね」

「そこかよっ！」

無駄だと知りながら突っ込みを入れるのは体質だろうか。

そう言えば、とシーアが話題を変える。

「昼の臭いそんな名前の人達、誰に雇われたのか知っているの？」

「正確には分からないが、領都の者だろうな」

「リョウトさん？」

「領都に住んでいる奴らだよ。おそらく武器を直して欲しくない連中だ」

「何で？」

「脅威だからだよ」

カナリアは焚き火が燦るように上に燃えにくい木の枝をかぶせた。
「イーアの武器はあるだけでも人は怯える。あの城にある武器が何だか知らないが、壊れているならそのままがいいだろう。ただでさえ権力のある人間に強い武器が備われば・・・」

「鬼に豆鉄砲だね」

「何がしたいのか良くわからねーよ。ともかく、領主には力を持つて欲しくない連中が少なからずいるということだ。お前、国境越えするときにシーア・ガンを名乗っただろう」

「うん」

「襲われたのはそのせいだな」

彼女が領都に着かなければ武器は直らない。そう考えた「直して欲しくない連中」がフローラル一家を雇いシーアを襲わせたのだらう。

同じヴィクレア領に住む人間として気持ち分からないでもないだけに、カナリアには雇った人間を責められない。それでも、彼女が殺されるという状況は避けなければならない。

襲撃の危険性は消えたが、この場合根本を直さなければまた似たような事件が発生するだろう。

カナリアは少女が寝付くのを待つて再び手を宙にかざす。翼を羽ばたかせ、先刻の小柄の白鳥が彼の手に止まる。

鳥の姿を見て、彼は脱力感を覚えた。

「・・・何でアフロになっっているんだよ、お前は」

鳥は声を立てて笑う。

声はアンナのものだ。

「アフロじゃないわ。タワシよ」

「何だよそれは。つか、イガだろ？」

「忍者になった覚えはないわ」

カナリアは突っ込みたい衝動をこらえ真剣な眼差しでアフロ鳥を見た。

「キツシュに伝言を頼む」

領都についてすぐに彼女はカナリアと別れた。

彼にろくに礼も言えなかったが、ここまで連れてきてくれた事に感謝をしていた。彼がいなければこんなに早く着かなかった。

もう二度と会うことは無いだろうが、もう一度会えたならちゃんと礼をしよう。

彼女は誓うように男が立ち去った方に向かって頭を下げた。

謁見を申し入れると次の日の朝に受理されたと報告が入る。さすがにシアー・ガンの名前を使えば厳しい審査がなくすなりと受理されるのだ。

「凄いなあ、この名前は」

彼女はちらりと旅証を見た。修復師を示す紋章と、シアー・ガンの名前が書かれたその裏側には本物であることを示すため、発行

した人間の印が押される。押してあるのはこの大陸唯一の神聖国家
オーナディアの聖家アルタイルの印。間違いなく本物であり、偽造
されたものではない。

・・・印だけは。

靴底に仕込んだナイフが外から分らないかももう一度だけ確認し
て靴底を鳴らす。

重い音はしない。

謁見の間に武器を帯びて行くことは出来ない。万が一に備えて刃
物を持ち込むにはこれしか方法が無いのだ。

(・・・姉様)

彼女は目を閉じて呼吸を整える。

心臓が破裂しそうだった。

魔法は正直まだ上手くコントロールが出来ない。魔力や才能が無
いわけではなく、法術を教えるオーナディアでは魔法を学べる機会
に恵まれなかっただけのこと。今でも魔法よりも法術の方が得意だ。
でも使えないわけではない。

「お待たせしました、シアー様こちらへどうぞ」

「あ、はい」

使用人Aに声をかけられ彼女は扉の方へ向かう。

歩き始めた彼女に使用人Aが戸惑ったような声をかける。

「あの、右手と右足、同時に出ていますよ」

「いえいえそれほどでも」

受け答えとして間違った返答をし、ちぐはぐしたまま先に進む。

刹那、足がもつれ、そのまま彼女は謁見の間へとスライディング。

「にゃあー!!」

鼻がへし折れそうなほど顔面を強打し、彼女は悲鳴を上げる。

ぱちぱちと乾いた拍手の音を聞いて彼女は顔を上げる。

目の前にいるのは若い男。・・・否、見た目ほど若くはない。

それが誰なのか彼女は知っていた。

(ヴィクレア領主、ヴァルコ)

「派手なご登場の仕方ですね、シア・ガン。．．．それとも、エリカード・アルタイルとお呼びした方がよろしいですか？」

自分の名前を呼ばれ彼女ははっとした。

男は静かに笑いかける。

そこで彼女は気付いた。

周囲の人間が武器をこちらに向けていること。そして、

「どうして．．．」

彼女は、信じられないといった様子で彼を見る。

見つめられたと分かった男は、ヴァルコの後ろで薄い笑みを浮かべる。

黒髪の男、カナリア。

Story 1 黒い魔法使い(6)

6 因果律

「彼が教えてくれたんですよ、あなたが私を殺しに来るとね」
「・・・どうして」

床に伏せたまま彼女はカナリアを睨む。
武器を突きつけられた状況下で下手に動くことが出来ないのだ。
ふうと息を吐いて男は答える。

「俺はな、シア・ガンから『来られません』って伝言を預かってきたんだよ。だから本物じゃないことはすぐに分かった。君が誰かっという情報は知り合いに調べてもらった」

だとすれば、彼は知らないフリをして彼女を領都に入れ、情報を提供してヴァルコから報酬を得るつもりだったのだ。

命を救ったとなれば報酬額も伝言より大きい。

「・・・知っていて」

シア・・・いや、エリアードはきゅっと唇を噛む。

「知っていて私にアスパラを・・・」

「喰わしてねーよ。」

「嫌がる私を無理矢理・・・」

「何かいかがわしいコトしたみたいに言うな。っていうか、アスパラなんかこの辺に生えて・・・」

瞬間、彼の表情に陰しいものが浮かぶ。

「!!! まずい、気を付けろ!!」

叫ぶが早いかカナリアはヴァルコを庇うように捕まえて奥へと走る。

瞬時、彼女の法術が発動する。

「風!」

ふわり、と彼女の周りに風が産まれる。

風は彼女を中心に外側に円を描くように広がり、周囲にいた人間を次々と巻き上げる。高くなった謁見の間の天井近くまで巻き上げられた兵士達は、そのまま床に叩き付けられ戦闘不能に陥る。

遠くにいたため巻き込まれずに済んだ者たちもその圧倒的な術の強さに啞然とする。

「・・・法術でここまでやるとはね」

カナリアは感嘆の声を漏らす。

本来法術には攻撃に属する術はない。魔族の類に有効とされる浄化系のものは存在するが、それは攻撃には入らない。守る、補助する、癒す。その類を扱うのが法術だ。

彼女の使った呪文は「守る」に属するもの。直接人を傷つける事はできないが、間接的になら可能なのだ。

もつとも、あれほどの短時間で術を組み上げ、大人数を巻き上げるとなれば元々の魔力が高く無ければ出来ないことだ。

（この場合法力って呼ぶべきか。ま、結局どっちも一緒だけど）

「・・・ぐ、ぐるじー、く、首が」

「おわっ！？ 悪い、引っ張るところ間違えた」

襟首を捕まれ青くなっているヴァルコを見てカナリアは慌てて手を放す。

先日も同じような失敗をしたばかりだ。全く学習機能がついていない。

す、と彼らの前にエリアードが立つ。

その大きな瞳は殺気立っている。

「邪魔すると、殺してしまうよ、ホトトギス」

「依頼の関係上殺させる訳にはいかないな。っていうか、俺の名前はカナリアだよ」

「うるさい！ その男は・・・私の姉様を・・・」

言いかけて彼女は両手を前にかざす。

ぐん、と彼女の周りの魔力が強くなる。

「隣の客はよくガキ喰う客だ！」

「怖いよ！」

妙な呪文（？）に突っ込みを入れると同時に彼女の魔法が発動する。

（何で魔法の時だけ呪文が変なんだ！？　ってそんなこと考えている場合じゃねえ）

彼は瞬間的に領主の頭を掴んで床に伏せさせる。

ぐえっ、とカエルが潰れたような奇妙な声が聞こえたが、構ってられない。エリアードの放った呪文は彼らの頭上を通り越し、玉座と壁を破壊する。

壁にポツカリと穴が空く。

コントロールは悪いが、やはり魔力は強い。

苦笑いを浮かべてカナリアは立ち上がった。エリアードは反応するように構える。

「悪いけど、負けてやる気はない」

たん、とカナリアは床を蹴る。

「！」

反射的に法術を組み上げる。

間に合ったはずだった。しかし、法術は発動しない。呪文は喉元で塞き止まったかのように出てこなかった。

エリアードは靴に仕込んだナイフを抜く。

しかし、それは間に合わなかった。

彼女の身体はカナリアの腕力に押され、壁に空いた穴から外に投げ出された。

「こ、この高さからだ、落ちたら痛いよー！」

「死ぬよ」

加害者の冷静な突っ込み。

黒髪の男を見ながらエリアード助かるために法術を組み上げる。

焦っているためか法術は上手く組み上がらない。

地面までもうそれほど無い。

死ぬのだろうか。

思った瞬間、彼女の身体がふわりと軽くなる。同時に、花の蜜をかぶったような甘酸っぱい匂いを感じる。

「んふ、空から女の子なんて、まさにラ。ユタ」 役得ですわね」
声を聞いておそろおそろ目を開くと、そこにはリン診療所で遭った、何だか色々やばそうな赤髪の女性がいた。

「・・・え？ キュスラさん？」

「シユリーお姉様でよろしくてよ、あなたと私の仲ですもの」

普通の家の四階くらいの高さから落下して地面に激突するのが想像に難くなかっただけに、抱き留められた少女は驚いてキツシユを見る。

彼女は赤い唇を舐めて「うふん」とセクシーな声を出す。

「どうして・・・」

「カナちゃんに頼まりましたのよ」

「何で、何で？ あの私を・・・」

「んふ、それ以上言ったらキスしちゃいますわよ、エリイ？」

巻き髪の女はエリアードを抱き上げたまま笑う。

「あの人は、あなたのお兄様に頼まれてあなたを止めに来たのですわよ。オーナディアのお姫様がいくら何でも人殺しになるのはいけませんもの」

「知って・・・」

「いましたわ。それともう一つ、あの男を殺させる訳にもいきませんでした」

エリアードの姉を殺した男。

直接的ではないが、あの男が原因でエリアードの姉は死んだのだ。妻になり、利用されるだけされて、姉は死んだのだ。全てあの男のせいだというのに、どうして殺してはいけないのだろう。

領主だから？

だが、ヴァルコの評判は良くない。人を雇ってでもシア・ガンを近づけたくないほど彼に力を持たせるのを嫌がっている人達もいる。それなのにどうして。

「あの男が、領主であるから私怨で殺させる訳にはいかないのよ。・
・大丈夫、彼に任せておけば悪いようにはなりませんわ」

それは完全に信頼している人間の言葉。

なぜそこまで言えるのだろう。

「・・・カナリアって何者なの？」

「凄腕の便利屋ですわ。私の‘足下にも及びません’が、まるで魔法のように依頼をこなしていくことから私たちの間では黒い魔法使
いって呼ばれていますの。魔法を使っているところは見たことがあ
りませんけどね？」

「は、ははは・・・」

壁の穴から落下した少女を見て、ヴァルコは笑い声を上げる。

「死んだか？ 死んだのか！ あの娘は！」

「・・・そのようで」

カナリアは穴を見下ろして暗く冷たい笑みを浮かべる。

その邪悪な笑みを気に入ったのか、ヴァルコは大きく笑った。

「あははは、奴め！ 未熟な腕でこの私に楯突こうとするからこんな目に遭うのだ。まさか姉と同じ方法で死ぬとは思っても見なかつたがな！」

「同じ方法？」

「そうさ、あの女は、私の妻だった女は、飛び降りて死んだ！」

「・・・何故？」

「法术を無くした女には価値がない。そう言ってやったんだ。見物だったぞ、オーナディアの賢女と呼ばれたあの女が狂って死んでいく姿は！」

「・・・俺も立ち合いたかったな」

「あはは、やはりお前もこちら側の人間か！」

「そのようで」

カナリアが振り向いた。

ヴァルコはぞくり、とした。

男の顔には笑みが浮かんでいない。

表情すら無いようにさえ見えた。

瞳は凍てついた青。

収縮した瞳孔は血を含んだような赤。

死を連想させる無機質な瞳……。

「あ……お、お前は……」

うわずった声でヴァルコは後退った。

恐怖のせいで立ち上がることは出来ない。

すっ、と男は手を上げる。

それに反応するようにヴァルコの身体が見えない力によって引き上げられた。

「うつ、あ……こ、殺さないでくれ、頼む！」

「ああ、そのつもりだよ。お前には殺す価値もない」

男はきっぱりと言い放つ。

青い瞳が赤に支配された。

「オーナディアのアイナスからの依頼を遂行する」

男は顔を歪めて笑った。

それはまるで……

Story 1 兄への手紙

親愛なるアイナス兄様

時候の挨拶で候。

いかがお過ごしでしょうか。

まずは出がけにトムヤムクンひっかけてごめんなさい。

やけどとかしていませんか？

凄い匂いになっていませんか？

あの色に染まっていますか？

結局、兄様の言う通り、姉様の復讐なんて出来ませんでした。

ちよつと悔しいです。

味方だと思っていた人が実は敵でやっぱり味方だったり、色々あったから、昇っていた頭の血が一気に下がっていったというのもあるかもしれませんが、実のところ、復讐が失敗したと思ったらちよつとだけほつとしました。

まだ考えると憎いけど、何だか前ほどの気持ちはありません。

ヴァルコは王様に召喚されて色々問いただされることになったそうです。王様がどんな人なのか知らないけど、私たちにとって嫌な結果にはならないと私を助けてくれた人が言っていました。

その結果を待ちながらもうしばらくこっちで色々勉強したいと思っています。

っていうか、しばらく帰らないのでよろしくー

こっちはアフロの白鳥がいたり、頭からキノコが生えているおじさんがいたり、オーナディアにはない不思議なものがあって楽しい国です。

また手紙を書きます。

それからそのうちもみあげ送ります。

楽しみに待っていて下さい！

エリアード

追伸

ヴァルコが発狂したという噂も聞きました。繰り返し「ゆるしてくれ」と呟いているそうです。

もしそれが本当なら、ほんとうに少しだけ嬉しいです。

Story 2 伝説の英雄（1）

たとえ神様があなたを嫌っていても
私だけはあなたを愛しているわ

・・・だから泣かないで

1 代理人酒場

微睡むように夢を見ていた。

カナリアの鳴くような美しい女の声が聞こえる。
歌うような優しい声。

それは遠い昔の記憶を呼び覚ます声。
懐かしい。

誰かを思い出させる優しい記憶。

・・・誰の？

「小鳥ちゃん、朝よ」
「んー？」

呼びかけられて彼はうつすらと目を開く。

何か夢を見ていた気がするが良く覚えていない。

ほんの僅か目元が冷たい。

カナリアはそれを拭って声の主に言う。

朝という割にまだ薄暗い。

「何だよー、アンナ。まだ暗いじゃん」

「何言っているの？ もうお日様ぴかぴかしてくれんぼよ」

「意味分かんないし。・・・っか、何で・・・ついであっ!？」

カナリアは半身を起こし「何でお前が家にいるんだ」と突っ込みを入れようとして頭を強打して悲鳴を上げる。

「ごいん、と明らかに痛そうな音を立てて鳴ったのは天井。

驚愕と衝撃で再び元の位置に戻ったカナリアは抗議の声を上げる。

「何でこんなに天井が低いんだよっ!」

「低いんじゃないわ。あなたが大きくなっただけよ。昨日牛丸ごと一頭食べていたじゃない」

「喰ってねえよっ! ってか、そんなにいきなり大きく・・・ああ、何だベッドの下か」

ようやく自分がどこにいるのか気付いたカナリアはベッドの下から這い出る。

昨夜は確かにベッドで眠ったはずなのだが、どうしてベッドの下でなんか眠っていたのだろう。

ぶつけた頭をさすりながらカナリアは大きくあくびをした。

「相変わらず鬼のように寝相が悪いのね」

「鬼って寝相悪いのか？」

礼儀作法に基づいた突っ込みを入れてアンナを見る。

その姿を見つけてカナリアは硬直した。

「・・・アンナ、お前なんかそれやバイんじゃないのか？」

アンナの声を出しているそれは、不自然に耳の大きいネズミ。

絵にすれば著作権がどうか何かと面倒な事になりかねない、ミッ。ーってという名前の付いたネズミに良く似た格好だった。

「何がどうヤバイの？ 三文字以内で答えなさい」

「短いよ」

「もう、仕方ないわね」

ネズミがふうと溜息をつくとき小爆発が起こる。

今までヤバイネズミだったそれは一瞬にしてアンナの姿に戻る。

黒猫のジェラートを抱いた彼女は偉そうにベッドの上に足を組んで座った。

「これでいいんでしょう？」

「いや、ちよつと待て。何で猫まで一緒なんだよ！」

変身術、という自分の姿を変える魔法はよく知っている。普通は一人で変身するものであり、他の動物と一緒に変身してまた戻るなんてことは聞いたことがない。

あつさり猫と共に登場したアンナは飄々と答える。

「私の恋人だからに決まっているでしょう」

「いや、そう言うことでは・・・まあいいか。お前に常識を求めたところで何にもならないからな」

常識の規格外なのは最初から分かっていることだ。

「それで、どうした？」

アンナはぴらり、と紙を出す。

どこから出したと言う突っ込みは不要だ。

カナリアはそれを見て表情を引き締める。

依頼書だった。

「仕事か」

「そうよ。あなた指名の依頼よ。私のお父さんになって下さい」

「あはははは、お断りします」

アンナはにこりと笑う。

「あなたに拒否権はありません。三日の間、銀の麦のマスターを務めて頂きます」

「ん？」

「お父さん出かけたのよ」

「……お前、今度は何を盛った」

「何も？」

「その間は何だ！　つか、何で疑問系！？」

「男のくせに細かいことを気にするのね。いい奥さんになれないわよ」

「ならんわ！」

先日のハンバーグ風のせいで頭にちょんまげのようなキノコを生やす結果になったマスターの身に今度は何が起こったのだろうか。本当に出かけたのなら良いのだが。

「まあ、マスターの代理は前もやったから良いけど、今、仲介依頼はどうなっているんだ？　俺で捌ける量ならいいが」

「大丈夫、昨日一晩であらかた仲介終わったから」

「は？　一晩で？」

「うん、一晩で」

銀の麦に入ってくる依頼の量が多い。

多少の差異はあっても一晩であらかた片づく程の量では無いはずだ。それをやったのけてしまうマスターはもしかすると凄い人なのかもしれない。

「まあ、そう言うことで、お願いね？　私飛んで帰って準備しているから」

そう言い彼女は姿を変える。

今度は普通に鳥の姿だった。

文字通り飛んで帰るアンナの姿を見送って彼はほっと息を吐いた。

「それでカナリアがカウンターのそっち側にいるんだ」

カウンター席に座って黒猫のジェラートを撫でながら、エリーは珍しいものでも見るようにカナリアを見た。

エリー・・・エリカードはあの後、オーナディアには戻らずこの街に居座っている。人での足りないときにリン診療所や酒場を手伝っているらしいのだが、（これでも）オーナディアの姫君。世間知らずの彼女が本当に役に立っているかどうかは謎である。

「まあ、仕事だからな」

「でもさ、食べられるもの作れるの？」

「失礼だなお前は。マリンほどでは無いがそれなりの料理は出来るぞ」

「ふうん？　じゃ、何か食べさせてよ。毒味してあげる」

「あら、じゃあ私が・・・」

「ダメだ。お前に作らせると何が出来るかわからないだろ」

言う前に否決されアンナは舌打ちをする。

手には何か怪しい小瓶が握られている。

「ねー、ねー、じゃあカナリア作ってくれるの？　私お腹空いたよ」

「」

「仕方ないな。その代わり混み始めたら店手伝えよ」

「わーい♪　カナリア大好き」

両手を上げて喜ぶエリーに彼はほつとする。

暫く元気を失っていた彼女だったが、どうやら自分を取り戻したようだ。例えそれが空元気でもこうして笑っている姿を見るとほつとするのだ。

「・・・すみませえーん」

「ん？　何だ？」

しわがれた声を聞いて一同は振り向く。戸口のところに青い髪をした老婆が立っていた。

老婆はおぼつかない足取りでカウンターの方に向かってくる。

「すみませえーん、お水もらえませんか？　出来れば桶一杯くら

いの」

「ああ、はい」

老婆にしてはしゃべり方が若い印象を受けたが、カナリアは気にせず水を老婆の前に差し出す。

桶一杯と言うことは顔でも洗いたいのだろう。

差し出すと老婆はか細い声で礼を言いながら一気に飲み干した。

「飲むのか!？」

「あら、良い飲みっぷり」

「そんなに喉乾いていたの??」

老婆は三人の言葉を無視して桶一杯の水を飲み干す。

「はー、生き返ったあー」

「!？」

「誰!？」

「若返った!？」

アンナすら驚愕した老婆の変貌。

次回に続く。

Story 2 伝説の英雄（2）

2 水分のない娘

「はー、生き返ったあー」

「！？」

「誰！？」

「若返った！？」

水を飲み干した老婆は、もはや老婆ではなかった。

その姿は二十代前半くらいの若い娘。ふわふわとした長い青い髪に、青い瞳。露出した肌はみずみずしく艶々輝いている。

その明らかに不自然な変貌にアンナすらも驚いた。

「うそー！ 何で水だけで若返るの！？」

「アンナ！ 水瓶に何を入れたんだ！？」

「失礼ね、何も入れてないわよ・・・まだ」

・・・まだ。

「あ、アンタ大丈夫か！？ 他に何か変調は・・・」

「あー、大丈夫ですー。少し水不足だっただけで。体質ですから」

「水不足であんな風になるの！？」

もはや体質以前の問題の気がするが。

青い髪の女はおっとりとした口調で続ける。

「持ってきた水を切らしてしましまして、どうしようかと思っていました。本当に助かりましたよー」

「いや、ま、それなら良いんだけど」

何か腑に落ちない感じもするが、アンナが原因でこんな事になった訳ではなければそれでいい。マスター不在中には出来れば問題を

起こしたくない。

「というか、せめて自分の常識の範囲内の問題であってくれと切に祈る。」

「あのー、助けてもらったついでに聞くんですけど、銀の麦ってどこにありますか？」

エリーがにこにこ笑って答える。

「銀の麦ならここだよー？」

「ああ、じゃあマスターは？」

「今は彼よ」

アンナに指を差され、彼女はカナリアの方を見る。

そして暫く凝視した後、酷く驚いた様子で声を上げる。

「まあ！ 師匠ったら、暫く見ない間にこんなに若く・・・」
「なるか」

「あれえ・・・よく見たら師匠じゃないですねえー」

「よく見なくても分かるでしょ！？ 背の高さとか違っし」

「いやまず髪の色が違っし」

エリーとカナリアの突っ込みに彼女はにこにこしながら答える。

「私近眼ですから」

「あら、それなら仕方ないわね」

「さも当然というアンナの口調。」

「すかさずカナリアが突っ込む。」

「納得するなよ」

もうどこから突っ込みを入れて良いのか判らない状況にカナリアは溜息をつく。

代理一日目でこんなに疲れてしまっただけでは精神が保たない。これはマスターに報酬の上乗せを頼まなきゃ割に合わない。

頭の中で正当な料金を計算しながらかれは話を戻す。

「それで、マスターに何か用が？」

「ああ、そうでした。ちょっと捜し物をしていてえ、師匠ならご存じかと思って尋ねて来たんですけど・・・」

「彼は遠い異国の地に旅立ちました」

「お前は何でいつもマスターをどこかに行かせたがるんだよ。そんなに嫌いなのか!？」

「何言っているの、親子愛よ」

「親子？　じゃあ、あなたは師匠のお母様」

「何でそうなる!？」

激しく間違った近眼の娘の言葉にカナリアは突っ込みエリーは爆笑する。

「あはは、本当に目が悪いんだねーえーっと・・・」

「ああ、申し遅れましたあ、私、リーティアと言います。どうぞよろしく」

（リーティア？）

彼女の名前を聞いてカナリアは少し首を傾げた。

どこかで聞いたことのある名前だ。

前の依頼人の名前だっただろうか。珍しい名前でもないからはっきりと思い出せなかった。

「私はエリーだよ、よろしく　ええっと、女のの方がアンナで、黒いのがジェラートさんとカナリア」

「ああ、どうも、お世話になりますカナリアさん」

「・・・カナリアは俺だ」

「あはー、リーティアっておもしろーい!」

猫に挨拶をするというお約束のボケをした彼女にエリーは再び爆笑する。

ジェラートはカウンターの上でじっとリーティアを見つめていた。見知らぬ客が来てもカウンターの上に居座ったままでは珍しい。普段ならば人に構われることが嫌いな猫はアンナの側にいるかどうかへ出かけていくかのどちらかだ。こうしてずっと観察しているのは珍しい状態だった。

「ねえ、ところでさ、捜し物ってなーに？」

興味津々といった様子で尋ねる。

リーティアは身振りで答える。

「平べったくて薄い刃物と、長い柄の付いた盾です」

「随分アバウトだな。名称とかないのか？」

「ええっと、伝説の剣、伝説の盾って呼ばれていますけど」

それも随分とアバウトな話だ。

この世界に伝説と呼ばれる武器や防具がいくつあると思っているのだろうか。

「それって、コレクションか何かにするの？」

ジェラートを抱き上げながらアンナは問う。

そのものに力でもない限り、「伝説」と呼ばれるものは大抵過去の偉人や英雄が使った程度のものだ。

殆どの場合金持ちの道楽としてコレクションにされている。

それに、わざわざ古い癖のある武器を使わなくても、もつと使い勝手のいい武器があるのだ。伝説の武器などただの飾り物に過ぎない。

カナリアも以前依頼でいくつかの古い武器を探したことがあったが、見つけた先も、依頼の先もどちらも好事家だった。

使用目的で武器を探している人間は、大抵有名な武器職人のものを求めるものだ。それは武器商に頼めば何とか手に入るもので、便利屋に依頼するほどの事でもないのだ。

もつとも、古くとも新しくとも良い武器は高額だ。普通の人間が買いあされるものではない。

「えーっですなぁ、コレクションではなく……」

「じぶぎゅるぴるぴー」

突然の変な音に一同は固まる。

「……?」

「?」

「???」

「あ、ごめん、お腹鳴っちゃった」
てへ、と舌を出してエリーは笑った。
どうやら腹ごしらえの方が先のようだ。

Story 2 伝説の英雄（3）

3 師匠

カナリアは包丁を手に取り苦笑いを浮かべた。

「何か作るよ。リーティア、あんたも何か食べるか？」

「ああ、はい、お願いします。出来ればイカそうめんとお水を」
初めて聞く単語にエリーは不思議そうに問いかける。

「いかそうめん？」

「生イカを細長く切った食べ物ですよ、知りませんか？」

「え？ イカって生で食べれるの？」

「・・・生・・・面白そうね」

にやり、と笑うアンナをカナリアは意外そうに見返した。

「何だ、アンナも食べたこと無いのか？」

「私はゲテモノを食べさせる趣味はあっても、食べる趣味はないの」

「ゲテモノって・・・」

それではまるで自分の料理がゲテモノと認めているようなものだ。
この辺りではイカ自体がそれほどメジャーな食べ物でもない。この辺の人なら生で食べると聞けばまず同じ反応を示すだろう。生食が出来ること自体知らない人が多いのだ。

「カナリアはあるの？」

「ああ、前に仕事先で無理矢理食べさせられた事があって・・・見た目よりは美味しかったぞ。この辺じゃあ新鮮なものが手に入らないから、やらないけどな」

「あー、やっぱり無理ですかー。じゃあ、火が通っていてもいいですから、何か魚介の料理と水」

どうしても水にこだわるリーティアを笑い、エリーはリクエストをする。

「よっぽど喉乾いているのね。私アスパラ以外の食べ物」

「じゃあ、私はロシアアザミのソーでも」

「食えないし、材料が無いだろう!」

「仕方がないわね、パスタで我慢しておくわ」

「常に偉そうだな、お前は」

良識的な人の考え方では、人に者を頼む時は仕方がない何て言葉は吐かない。

彼女に常識的な事を求めたところで返ってくる答えは更に非常識なことになるのは目に見えて分かっている。

あえてそれ以上突っ込みは入れずにカナリアは何かリクエスト通りに作れるものがあるかと材料を確認する。

むろん、生イカとロシアアザミは無かった。

「カナリアってさー、料理上手いんだね」

魚介トマトソースパスタを頬張りながらエリーは言う。

まるでリスのように頬袋をふくらませながら食べる彼女の口の周りは赤い。テーブルマナーなんてお構いなしだ。これで、本当に姬がつとまっていたのだろうか。

カナリアは口元に手を当てて笑いをかみ殺して答える。

「まあな。必要に迫られてやつだよ」

「小鳥ちゃんは一入暮らしが長いもの」

「そうなの?」

エリーはアンナを見る。

彼女はジェラートをこねこねしながら答えた。

「十年ちよつとね」

「師匠と別れてからだから・・・ああ、もうそのくらいになるな」

「師匠って・・・あなたも、マスターに?」

リーティアに問われカナリアは首を振る。

「いや、俺が教えてもらっていたのはモズ呼ばれていた人で、もう

亡くなっている」

「それから一人暮らし？」

「ああ。っていつても、一年の大半はここにいないから一人暮らしってよりは一人旅が長いって感じだな」

ここに初めて来た時はかれこれ二十年前になるだろうか。

便利屋の師匠でもあるモズはここを訪れる事が多かった。拠点を構えるにあたってここを選んだのはやはりそれも要因になっているのだろう。

「まあ、だけど、料理が上手くなったのは一人暮らしだからって訳じゃないぞ」

「そうなの？　じゃ、何で？」

「モズ師の手料理が恐ろしく不味かったんだ」

今となつては良い思い出・・・になるわけがない。

アレは食べ物に対しての冒涔だ。

「何て言うか、食べただけで脳が耳から出てきそうなレベルの・・・んー、どう説明すべきか」

「まるで殺戮兵器のような味」

「そうそうそんな感じ・・・って何でお前が知っているんだよ」

まだモズが健在だった頃、既にマスターは開業していたがアンナがここに来たのはそれから随分と後になってのことだから、食べたことはないはずだ。

噂で聞いたのだろうか。

彼女は何故か誇らしげに笑う。

「彼は伝説の料理人よ」

「え？　そんなに酷いの！？」

「はあー、それだけなら一度食べてみたかったですねえ」
知らないというのは平和なことだ。

確かにモズは伝説だった。

食べられるものを食べられないものにする天才だった。

焼き物を焦がして炭化させるなどという生やさしいものではない。

アンナの手料理と師匠の手料理、どちらを食べるかという究極の選択に迫られた場合、後々酷いことになるのを覚悟でアンナの手料理を選びたくなるほどに奇怪なものを作る。

元の食材がなんなのか、何を作ろうとしたのか皆目見当が付かない何かを作る。

モズの料理は口に含んだ瞬間から何かが起こる、そういう代物だった。見た目も味もいいだけ、アンナの方が数倍マシだ。

おかげで料理の腕は上がったが、思い出したくもない記憶でもある。

「じゃあ、カナリアにとってモズさんは料理の師匠なんだね」

「何でそうなるんだよ」

「え？　じゃあ何の師匠なの？」

「あ・・・それは、あれだ。うん、便利屋のノウハウを教えてもらったり、戦い方を教えてもらったり・・・あの人は料理以外何でも出来る人だったからな」

「ふうん？」

急にしどろもどろになったカナリアを訝しげに見ながらエリーは首を傾げる。

リーティアも首を傾げた。

「うちの師匠とどちらが凄かったんでしょうねえ」

「あれ？　そう言えばマスターって何の・・・」

「ぐぎゅるぴるぴー」

本日二度目の音。

一同の視線がエリーのお腹に集中する。

エリーは赤くなって手を振った。

「え？　え？　今の私じゃないよ！？　っていつか、むしろ外から聞こえたし」

げるげるぽぴゅるぽびー

「ああ・・・確かに外から聞こえるな」

「きつとやまびこよ」

「個性的なお腹の音ですねえ、やまびこさん」

「いや、やまびこじゃないだろう。鳴き声・・・のようにも聞こえるな」

「鳴き声？」

「・・・ああ！」

「ぼん、とリーティアは何かを思い出したように手を叩く。

「忘れてましたよ」

「何？ 何か知ってるの？」

「ええ、と彼女はにこにここと笑いながら頷く。

「私、ドラゴンに追われていたんですよ。すっかり忘れていました」

・・・

・・・

・・・

「・・・え？」

Story 2 伝説の英雄（4）

4 具現魔法

彼女の突然の告白に、最初に我に返ったのはエリーだった。

「え？ ええ？ 何で竜が??」

「竜じゃないですよ、ドラゴンですよ」

「ふえ？ どう違うの？」

「それより何でそんなのが追って来るんだ？」

竜であれ、ドラゴンであれ、一人の人間を執拗に追いかけてくることはまずない。

そのものが魔法である竜は人と関わることを嫌い、滅多に人前に姿を現さない。竜人という竜と人の性を持つ者もいるが、彼らですらあまり人と関わりとうとしないのが通例だ。人を警戒し、よほどのことがない限りは人を襲うことはない。

魔物としての性の強いドラゴンは人を襲うことはある。それはむしろ獣としての性質、つまり、縄張り意識や捕食、繁殖の意思によるものであり個にこだわることはほとんど無いと言っている。

よほど怒らせるようなことをしなければ追われるなんてことあるはずがない。

「私、動物に好かれる体質なんですよ」

「ああ、それでジェラートさんが獲物を狙っているような目で見ていたのね」

納得したようにアンナは頷く。

「え？ それって好かれるって言っの!？」

「好かれているんですよ。それに、あのドラゴンは弟が描いたものですから」

ぴくり、とアンナの表情が動く。

驚愕と畏怖の入り交じったような表情。エリーが彼女のこういった表情を見たのは初めてだった。

カナリアも同様に複雑な表情を浮かべアンナの方を向いた。

「街の人間を避難させてくれ」

「遊んでいる場合でもないから了解したわ」

「ど、どうしたの、急に」

急に真顔になった二人にエリーは狼狽する。

カウンターに脱いだエプロンを置いて、彼はいつもの黒いコートを着ながら彼は答える。その表情には軽いものはない。

「具現だ。これは厄介だぞ」

「小鳥ちゃんは振ったら汁が漏れそうな程に巻き込まれやすい体質よね」

「どこでどう繋がっているんだよ、意味わからねえよ」

「私、小鳥ちゃんのそう言うところ好きよ。私は依頼をこなしてくるからおこげちゃんと水知らずの人、後のことを頼んだわ」

そう言い残して彼女は裏口から出て行く。

彼女に任せれば街の人間の避難は大丈夫だろう。

「おこげちゃんって私の事？」

「じゃあ、私は水知らずの人ですか言い得てますねー」

リーティアはくすくすと笑う。

笑っている場合では無いことを分かっているのだろうか。

彼女は「弟が描いた」と言った。つまり、絵が具現化したのだ。

絵を具現化する能力は古代魔法と呼ばれる類の魔法。具現化した者は生命を持たない。それは急所を狙って攻撃したとしても無意味なことを意味する。

元々生命ですらないため、死も苦しみも存在しない。それを止める方法は二つ。原型をとどめなくらいに破壊するか、もしくは動力源である魔力が尽きるかのどちらかだ。

もしも、術者が意識的にやっているのなら、魔力を送らなければ済む。ただ、術者が無意識だったり、描いたものが暴走してしまっ

たとしたら術者が死なない限り止まることはない。

「弟はあんたを殺そうとしているのか？」

「そんなことは無いです。弟は成人もまだしていない子供ですもの」

「だとしたら早く何とかしないと弟死ぬぞ」

「わかつてますよー、だから伝説の剣を捜しに来たんです」

「ともかく外に出て……」

ずん、と街が揺れる。

外からは怒号のような人の声と、がらがらと崩れ去る建物の音が響く。

ドラゴンはまだ街の中に入ってきていたのだ。街中で暴れさせたらどんな被害が出るか分からない。

息を飲んで彼は外に飛び出した。

それにエリー、リーティアと続く。

外に出た瞬間、彼は絶句した。

「何あれっ！」

エリーは口元を押さえて叫ぶ。

コウモリのような翼、黒く光る胴体、鋭く赤い瞳。

人の数倍。いや、人の十倍以上はあるだろうか。

背中に羽を生やした巨大ウナギが街を見下ろしていた。

「なんじゃこりゃー……！」

カナリアは覚えず叫ぶ。

それはドラゴンには似ても似つかない巨大生物だ。

身体全体は墨で描かれており、目の部分だけが赤い。幼い子供がドラゴンを描こうとして失敗したような形容しがたい外見。しかも二色だけで描かれているため、完全に落書きが動き出してしまったような感じた。

リーティアは相変わらずのおっとりした口調で答える。

「何って、ドラゴンですよ」

「へえドラゴンってこういう形をしているんだ」

「どこがドラゴンなんだ！ どう考えてもウナギかせいぜい羽の生えたヘビだろう！ 手足すら無いじゃないか！」

「何言っているんですか、どこからどう見ても立派なドラゴンじゃないですか！ 私の弟に失礼ですよ！」

初めて怒りの色を見せた彼女。

そう言えば彼女、恐ろしく目が悪かった。

いや、それとも単に弟を溺愛しているだけなのか。

カナリアは首を振って腰にあったナイフを引き抜く。

「とにかく、あれを街の外に誘導する。このまま戦ったら街が壊滅する。・・・エリー、場が魔力に満ちているから魔法は気を付けて使えよ。最小に押さえて攻撃しろ」

「はい了解！」

「リーティアあんな魔法は？」

「多少なら使えますけど」

「よし、じゃああんたも手伝え。方向は向こう側だ」

カナリアは街の人間が逃げる方向とは真逆の方向を示す。

そちらに向かって走りながら攻撃をして、街の外に誘導する。ドラゴン（？）がリーティアを狙ってきているのなら囿になれるだろう。

原型をとどめない位に破壊するにも、街中でやるよりはよっぽどいい。

エリーの魔法は多少不安ではあるが、カナリアの「能力」を使えばフォロー出来るだろう。

二人が頷くのを確認して三人は同時に走り出す。

ドラゴンはこちらに気が付いていない。

「エリー！」

「東京特許きよきやつ！？ わわわ、失敗！」

「いきなりか！」

彼女の手から出てきた炎の球は妙なうねりを見せて酒場の方に向

かつて突っ込んでいく。

カナリアはナイフを構えた。

（なるべく温存しておきたいんだが、仕方ない！）

彼の瞳孔が急激に収縮する。

ナイフが魔力を帯びる。

刹那。

「驟雨^{しゅうう}！」

カナリアの真後ろから魔法が発動される。

雨、と呼ぶには激しすぎる水の塊が炎の球に向かっていく。

水の塊は炎を包み込み、風と水蒸気だけの軽い爆発を引き起こして消滅する。

音だけは派手で大爆発のように感じられたが、空中で爆発したために街には被害は全くない。

（やるな、瞬時にあの炎を打ち消すだけの水を集めるなんて・・・
よほど使い慣れていると見える）

カナリアは感心してリーティアを振り返った。

そして驚愕の声を上げる。

「誰！？」

Story 2 伝説の英雄（5）

5 竜を倒した剣

叫んで、彼は絶句した。

そこにいたはずのリーティアの姿が見えない。代わりにいたのは老婆だった。

「嫌ですよー、リーティアですってば」

「そんな・・・声まで変わって！」

すっかりしゃがれ声になっている彼女にエリーは衝撃を覚えたようだ。初めて酒場に入ってきた時よりも老化している女は頬に手を当てて嘆く。

「この辺って乾燥していて嫌になりますね。大気の水じゃ足りませんよ」

「乾燥しているってレベルの問題じゃ・・・」

「不便でも水分補給しなきゃ使い物になりませんから、私ちよつと死に水を取ってきます」

「え？ ちよつと、死に水って誰の！？」

「っーか、お前何者なんだ！？」

彼女は申し訳なさそうに笑って酒場の方に戻っていく。

説明をするよりも先に水が欲しいのだろう。

おそらく彼女は自分の中の水を操って魔法を使ったのだ。契約や誓約に縛られない違った種類の魔法。それはアンナやカナリアの使う魔法の種類に似ている。

とどのつまり、それは

「！」

彼ははっとして真後ろに飛んだ。

眼前を巨大ウナギの尾が通過し大通りに構える商店の店先を破壊

する。今まで入り口だった場所は瓦礫へと代わり、土煙を立てた。先刻の爆発で奴はこちらに気付き、敵と認識したようだ。

魔法生物の赤い瞳がこちらを見下ろしていた。

「きゃー！ ど、どうでしょう！！ 目があっちゃった！」

ぐん、と辺りの魔力に変動が起こる。

強い魔法の匂いを感じ、カナリアは舌打ちをした。

少女の周囲に魔法が集まっている。

「止める、その魔力じゃ街を破壊・・・」

「生ナナめたけ舐めただけ！！！」

相変わらず不自然な呪文を唱えると、巨大なエネルギーが彼女の手のひらに集まる。魔法生物がいるという特殊な状態で、場が魔力に満ちあふれていたため彼女の魔法のレベルは桁外れに上がっている。

元々彼女の魔力は強い。

制御することがなかなか出来ないだけで、本来の力としては魔術師の塔で学んだ人間を凌駕するほどの魔力を有している。

それがあの魔法生物にぶつかれば跡形もなく消し去ることは可能だろう。

街の半分を道連れに。

「・・・っ！」

彼の瞳が赤く染まる。

エリーの魔法が発動すれば、街の半分が壊滅する。万が一にも暴走すれば、一つの街が消し飛ぶ威力はある。それだけの魔力の変動が一瞬のうちに起こっているのだ。

何としても止めなくてはならなかった。

黒く芯を残した瞳孔が燃えるように微振動を起こす。

その振動に巻き込まれるように、周囲の空間に歪みが生じる。それは周囲の魔力を吸い取るように強い渦を作り上げた。

場の魔力の流れが急激な変化を見せる。

少女の元に流れていた魔力はカナリアの方へと集まってくる。

燃える瞳孔が流れ込む魔力を押さえ込むように激しく揺れる。

（・・・くそつ、全部は無理か）

彼は半ばはじき飛ばされるように後退った。

酷い頭痛が起こる。

魔力よりも精神を強く使ったせいだろう。いくら訓練しているとはいえ、これだけの魔力を吸い取ってしまうというのは無茶な話だ。竜や純粋な竜人ならともかく、彼の精神ではとても堪えきれぬ量ではない。

無茶をすればカナリア自身が暴走をしかねない。

カナリアはその場に膝を付く。

「きゃー！ カナリア危ない！！」

「・・・え？」

彼は顔を上げる。

目の前にはエリーの作った魔法の球。

避けることは・・・出来なかった。

「！！！！！！」

悲鳴は瓦礫の崩れる音でかき消される。

魔力を押さえられていたとはいえ、まともに攻撃された彼は飛ばされ壁に叩き付けられる。

勢いで崩れた壁が瓦礫となり、彼を生き埋めにした。

「カナリア！ 大丈夫！？」

これで大丈夫な人間がいたらお目にかかりたい。

頭痛が物理的な要因によるものになり、彼は頭を押さえた。ぬるりとした嫌な感触がする。出血しているようだ。

あれだけの爆撃でこの程度で済んだのは奇跡なのだろうが、この状況下でのこれは痛手だ。

「大丈夫だ、それより早く・・・」

逃げる、と言いかけた時、目の前を青い影が通過する。

ふわりと風になびく青い髪、青緑をした不思議な色の瞳、青くしなやかなヒレのような耳は人間のそれとはまるで違う。

それがリーティアであることを認識するのにそれほど時間はかからない。

彼女は盾と剣を手に、ドラゴンへ向かい走る。

盾と、剣？

いや、フライパンと、包丁だ！

「無茶だ！」

カナリアは慌てて立ち上がる。

いくらなんでもフライパンと包丁で戦うのは無茶が過ぎる。

しかし、彼女は平然とした様子でドラゴンの前に立った。

「おいで」

彼女はにやりと笑う。

挑発されたドラゴンは、彼女に向かって巨大な尻尾を振り落とした。

「リーティア！」

エリーが悲痛な声で叫ぶ。

土煙が立ち、彼女の姿が見えなくなる。

潰されただろうか。あの至近距離で避けることが出来なかったのなら、彼女はもうあの尾に潰されてしまっているだろう。

カナリアは顔をしかめた。

が、

「この程度じゃ、私を殺せない」

自信に満ちた女の声。

ドラゴンの攻撃を片手に握ったフライパンで完全に捕らえていた彼女はにやりと笑う。そしてそのまま、もう片手に持った包丁を振った。

包丁から風が産まれる。

それはドラゴンの巨大な体をいともあっさり半分に切断した。

「すごっ・・・」

「・・・思い出した」

「え？ 何を？」

「竜殺しの英雄、リーティア・ミステリア・・・彼女、亜精霊種だ」

「亜精霊種？」

カナリアは頷く。

神話ほど昔、精霊達は人間と共に地上で暮らしていた。しかし、竜族と人間との間に大きな戦争が起こったため、精霊達は争いを嫌う天界へと去った。その時、精霊達の中には地上に残る事を選んだ者たちがいる。それは時を重ね、人と精霊との交ざり合った亜精霊という種族を誕生させた。

今は人類ほど多く残されていない彼らは、封鎖されたアインハイトの中に籠もり、滅多に人と関わろうとはしない。

彼女は、その中でも水の精霊に近い種族の亜精霊種なのだ。

そして、三十年ほど前、北のラン王国で正気を失った竜を剣と盾だけの軽装で倒した伝説の英雄・・・

（ひょっとして、あれがその伝説の武具なのか！？）

伝説の武具に関して多少の憧れを持っていた彼は動揺する。

竜を倒した程の武具だ。相手が具現化したドラゴンであろうと、その剣で切りつけられれば原型をとどめないように破壊するまでもなく消滅させるのは可能だろう。

だが、とても信じられない。

確かに彼女の握ったフライパンと包丁は強い魔力を帯びている。どう見たって銀の麦にあった包丁とフライパンなのに、魔力を帯びている。

（し、信じたくねえ）

あれが伝説の武具なんて。
彼女が伝説の英雄なんて。

信じたくない。

Story 2 伝説の英雄（6）

6 知らなかった方が幸せな時もある

「それで、こんな風になっていたんですね」

マスターは納得がいったように頷いた。

「また、アンナが何かしたのではないかと冷や冷やしましたよ」

「失礼ね、私が原因ならお父さんが戻るまでに分からないように戻しておくわよ」

「ああ、それもそうですね」

「嫌だな、その納得の仕方」

マスターが戻ってきた時、街はまだ修復工事を続けていた。修繕費は全てリーティアの家、ミスティア家が負担すると申し出たため、壊滅状態にあった家なんかはむしろ喜んでいるくらいだった。みな、我先にと被害状況を報告してきた。

それはカナリアにとっては災難だ。酒場に入った復旧依頼を処理していたため殆ど休む暇が無かった。マスターが戻ればすぐにこなしてくれそうだったが、依頼を請けている以上、中途半端な仕事はプライドが許さないのだ。

結局休むに休めず事後処理に回ったのだ。

リーティアは一旦アインハイトに戻り報告をしてくると言い残しこの街を去った。

そして、工事が続いている事を除いて日常に戻る。

「怪我人は無かったのですか？」

「それは大丈夫。ノーコン娘の爆撃にあたった小鳥ちゃんだけよ」

「ああ、それは不幸中の幸いすね」

「どこが幸いなんだよ」

「んー、どうして真っ直ぐ飛ばないのかな」

口元に指を当てて彼女は不思議そうに首を傾げた。
頼杖についてカナリアは息を吐く。

「……お前、他に言うことあるだろうが」

彼の頭部にはまだ白い包帯が巻かれている。

全治一週間。

その程度で済んだのはさすがに石頭だ、とマリンに嫌味を言われながら治療を施された傷口はもう殆どふさがっている。それでもまだ包帯を巻いているのは余計な詮索をされないようにするためだ。

法術を使わずに治ってしまうのはさすがに普通じゃない。

マスターはふてくされた男の前に陶器で出来たジョッキを差し出す。

「まあ、お酒でも飲んで元気を出して下さい」

「労ってくれるのあんただけだよ」

カナリアは溜息をつく。

あの時彼が何をしたか、彼以外誰も知らない。リーティアやアナが近くにいたのなら気付かれた可能性もあるだろうが、あの状況下では「仲間の攻撃にあたるミスを冒した役立たず」としか映らない。

別にあの力の事で褒めて欲しいとは思わないが、努力が報われないのは些か悲しいモノだ。

「それで、彼女は元気でしたか？」

マスターはリーティアの残していった武具を見ながら懐かしそうに微笑む。

彼が言うには伝説の武具がこんな形になったのは、水の一族は宗教的風習的な事情から武器を使つては行けないと言う戒律があるからなのだという。武器という形を隠すために、彼女専用の武具として作らせたそうだ。

結局、30年前の竜退治の一件で家族にばれてしまい彼女が連れ戻され、この武具は銀の麦の厨房で働いていたのだ。

専用武器だから彼女でなければ反応しないものだが、違和感なく

使ってしまったカナリアは、これに対してもショックだった。

この三日間、ショッキングなことが多すぎた。

「リーティアはねえ、乾いたり潤ったり繰り返しながら、イカとか食べてたよ」

「ジェラートさんに狙われながら結局味見もされずに戻っていったわ」

「そうですか、相変わらず元気そうですね」

「・・・あれが日常なのかよ」

亜精霊に出会ったのは初めてではない。外見的特徴と、精霊に近い能力を除けば人間と殆ど変わらないのを知っている。中には外見すら人間と変わらない一族も知っているから、カナリアは亜精霊に対して幻想を抱いていなかった。

だが、伝説の英雄となると話は違う。

さすがに戦っている時はそれらしく見えた。

しかし、普段はあれなのだ。少し、がっかりした。

「それにしてもさ、私、亜精霊って初めて見たよ」

「彼らは滅多にアインハイトを出ませんからね。ああ、でも、気が付かないだけで以外と身近にいたりするものですよ。彼女も初めは普通の人間のふりをしていたでしょう？」

「あ、そっか」

「もつとも、彼女は水の一族の中でも異端児ですけどね。だから私なんかには弟子入りをしたんですけどね」

異端でなければ家族に隠すために形を変えた武器まで使って師事しようとは思わないだろう。

「マスターって何を教えていたの？」

「色々ですよ」

彼は満面の笑みを浮かべる。

「色々です」

二回続けるあたりが意味深だ。

答える気がないのが丸分かりな答え方に、ふうん、とだけ返し、

彼女はもう一つ気になっていた質問をぶつける。

「リーティアってさ、30年前の英雄なんでしょ？　今、いくつなの？」

「そうですね、イステシアでイーファ女王の即位を見たことがあると言っていましたから、私より年上ですね」

「そうなの？　へえー、お水沢山飲むのって美容にいいんだ」

「いや、そもそも亜精霊は人とは寿命も年の取り方も違うんだよ」

「あら、だけど、いい水は本当に美容にいいのよ」

「え？　どっちなの？」

アンナは（どこに入っていたのか）ジェラートの腹の辺りを探り、小さな小瓶をとりだす。その中には透明な液体が入っている。

「ここに、ちつとも怪しくない美容に良さそうな水があるのだけど」

「怪しすぎるだろ！」

「失礼ね、イチゴの苗に一滴垂らしたら紫色のイチゴが一晚でなった怪しげな液体なんて使っていないわよ」

使ったのか。

この娘と、マスターが親子なんてとても信じられない。

さすがにその美容に良さそうな水は異常だと判断したのか、エリは、満面の笑みで「使ってみる？」と聞いてきたアンナの申し出を丁重に断った。

「そう、使いたくなったら言ってね？」

そう言いながらアンナは再びジェラートの腹の辺りに小瓶をしまった。

飼い主に似て、謎の多い猫だ。

そういえばジェラートの瞳とアンナの瞳の色は同じだ。まさか、ジェラートはアンナの実験で作成されたものなのだろうか。

いや、それ以前に本体はどっちなのだろう。

（・・・あれ？　そう言えば・・・）

「なあ、マスター」

「何でしょう？」

「その包丁とフライパン戦いに使っていたんだよね？」

「そうですよ。彼女は腕が良いですからね、魔法生物を初めとして様々な魔物を退治してきましたよ」

「まさかとは思いが、×××とか×××××とかの退治したとか言わないよな？」

思わず放送禁止にしまうほどヤバイ魔物。

そんなものを退治した後、料理に使うなんて普通の精神を持っている人ならとても出来ないことだ。

そもそも、竜を殺した剣で料理するのでさえどうかと思うのだが。マスターはにこりと微笑む。

「ああ、大丈夫ですよ」

「そうか、良かった。マスターは良識の・・・」

「ちゃんと洗ってありますから」

衝撃。

凍り付くカナリアの後ろでアンナがにやりと笑う。

「え？ 何？ 何を退治したの？」

聞いていなかったらしいエリーは慌てて聞き返すが答える者はいない。

知らない方が幸せな時もある。

大丈夫ですよ、とマスターは再び微笑んだ。

「ちゃんと、洗ってありますから」

やっぱりこの人アンナの父親だ。

挿話 睡蓮（1）（前書き）

（注意：この話は本編の7年ほど前の話です。本編未読の方でも分かるように書いてあります。コメディ要素はほぼ皆無ですのでご了承ください）

挿話 睡蓮（１）

覚えていたのは、男の独特な剣の構え方。
まるで闇を落としたように深い黒髪。

一話 毀すには必要ない

今更後戻りなんか出来ないし、するつもりもない。

この職業を選んだ時点で、自らの手を汚すことは覚悟していた。
もちろん、もう既に自分の手は血で汚れている。

多分、この職業に就く前から。

「・・・だから何とも思いませんの。残念ですけど」

そう言っただけで彼女は真紅の髪を揺らして笑った。

貴族のような巻き髪を横に垂らし、凄艶に微笑む女は赤いドレス
を着ている。手には長い柄の付いた巨大な鎌。

彼女はその鎌を大きく振り上げた。

どん、と鈍い音が響く。

壁は血色に染まり、鉄錆を含んだような濃い血の匂いが垂れ込め
る。ごろり、と転がった丸い塊は、人間の・・・

ぞんざいな手つきで彼女はそれを拾い上げ、手近にあったテープ

ルクロスでそれを包み込む。

真っ白なクロスに赤い染みが広がった。

「依頼完了」

視線を上げた女と戸口にたたずむ子供の視線とがかち合った。

十歳を少し超えた位の少女。崩れかけの髪は美しくよく手入れされている。着ている服は贅沢なもので、所々宝石があしらわれている。

今まで汚いものを見たことのないというような純白の少女。

その目が怯えと侮蔑に揺れる。

彼女は左手で布包みを持ち、右手で得物を構えた。

びく、と少女の方が震える。

「選りなさい。ここで死ぬか、それとも一人で生き延びるか。あなたを守る父親はもういません」

少女は気圧されるように後退った。

女の瞳が少女を真っ直ぐに見据える。

一歩一歩震える足で後退し、やがて壁に行き着いた少女はやがて震える声で答える。

「……いや……死ぬのは……いや」

その声はか細い。

弱々しく、誰かに助けを求めるような声。

不快そうに眉を寄せた女は小さく頷いた。

「ならば殺しません。その代わり、その目で見て覚えておきなさい。あなたの父が何故殺されたのかを。それでも私が許せないと言うのであれば、私を捜して殺しなさい。生を選んだあなたにはその権利があるのですから」

言い放ち、真紅の女は少女の前で膝を折る。

涙に濡れた少女の瞳が困惑したように震えた。

「……この顔と名前を覚えておきなさい。私の名前はシュリーです」

彼女は少女の鳩尾に当て身を喰らわす。

少女は目を見開き、そして気を失った。

シュリーは落ちていたナイフで少女の髪をぞんざいに切り、衣服を引き裂いた。

まるで、浮民の子供に見えるように。城主が慰みをするために連れてきた少女のように見えるように、出来るだけ汚れて見えるように。

この屋敷は既に民衆がなだれ込んできている。暴動が起き、城主側と民衆側とで争い多くの血が流れている。

このまま少女を放置しておけば彼女は殺されるだろう。

それだけ恨みが強く、また子供も平気で殺せるほどに民衆は興奮している。

ここまでしておけば、後々彼女が娘だと分かったとしても、すぐに殺されることはないだろう。後は、彼女次第だ。

少女は自分を憎むだろう。

どんな親でも親は親。簡単に殺されるつもりはないが、自分を憎んで殺しに来るのならそれで良いし、負の感情でも生きる望みに繋がるのであれば自分が敵役になるのも厭わない。

復讐など、自己満足以外の何にもならないとしても、生きる力になるのなら彼女にはそれが必要なのだ。

自分がそうであるように。

そのために、殺された親の復讐のために、全てを捨てられるのであればこの少女も自分と同じように追いかけてくる。

シュリーはそのために全てを捨てて、全く別のものを手に入れた。捨てられなかったのは自身の存在と、後一つだけ。

「……だって、他のものなんて必要ありませんもの」

一人ごちて、鎌に付いた血を振り払った。

男は、深く思案を巡らせながら息を吐いた。

「真紅のシュリー、か」

夕暮れを過ぎた酒場の中は、様々な職業の人々にぎわっている。街の人間はもちろん、旅人達も思い思いに酒を飲み交わしている。カウンター席に座る彼は癖のある黒髪を半端に伸ばした年齢不詳の男だった。

長い前髪が顔の半分を覆っているせいで、まだ十代の青年のようにも、三十を過ぎ後数年もすれば老いを見せ始めるほどの年代にも見える。瞳は夜を連想させる蒼。

酒に浮かれた店内の中で、彼だけが異質な存在だった。

そのくせ、誰も彼のことを気にかける者はない。まるでそこには存在しないかのように彼は気配を殺していた。

初老を少し過ぎた位の店主は薫製肉を薄くスライスしながら彼の呟きに答える。

「ここ数年で一気に有名になりましたね。元々は犯罪人を中心に『狩り』をしていたハンターです。年の頃は二十代半ば。この稼業に就く前の経歴は一切不明。容貌や言葉遣いからおそらくバーク公国の中流階級以上の出身でしょう」

「マスター、会ったことは？」

「ありません。ですが、相当な美女と噂されていますよ」

「へえ、美女ね」

彼はちらりと笑う。

「その美女が何でまた王侯貴族を殺して回っているんだろうな」

彼女が関わって殺された要人は両手両足の指を使っても数え切れない程いる。それを専門にした殺し屋であれば、この業界内で名が

知られるというのは少くない。だが、彼女の噂は、殺し屋はおろか便利屋にでさえ無関係なところにいる人間から出さえ聞ける。

それはよほど目立った行動をとっている証拠だ。

悪名高い王侯貴族を中心に、民衆を扇動して弑逆する。

「良くないでしょうね」

「ああ、良くないな」

彼は頷く。

彼女のしている事は危険なことだ。おそらく彼女が思っている以上に。

「依頼をしてもよろしいですか？」

マスターが言くと、男は頷く。

短いつきあいではない。

お互いに何をとまで言わなくとも分かっているのだ。

「ああ、どっちにしても誰かがやらなきゃいけないだろう」

目の前にあったグラスを空けて、彼は立ち上がる。

黒い衣服がまるでカラスの羽のようだ。

マスターは戦地に向かう武人を送り出すかのように恭しく頭を垂れる。

「お気を付けて、カナリア」

睡蓮（２）

二話 どこまでも深く

頭の奥で流れるメロディ。

異国の歌。

何と歌っているのか分からない。
けれど、その歌声を覚えている。
優しい、女の人の歌声。

どこかで覚えている。

懐かしい曲。

深く、深く落ちていくような歌。

泣きたくなるほど優しく儚い。

どこで聞いたのだろうか？

ずっと昔？

まだ自分が幼かった頃？

歌っていたのは？

どこで、聞いた？

歌っていたのは、誰？

「ごそり、と何かが動く気配を感じて彼女は目を覚ました。すぐに武器を手についたのはこの職業に就いてから身に付いた癖だった。」

警戒する。

自分が誰かを狙うように自分を狙う者もまたいるからだ。

死ぬわけにはいかない。

まだ護るべき物がある。

「起きているかい、姉さん」

呼びかけられて、彼女はほつと胸をなで下ろす。

自分を狙ってきた奴ではない。馴染みの「つなぎ屋」の男だった。彼女はドア近くに鎌を置いて僅かに彼の姿が見える位に戸を開く。彼はハギと呼ばれている。茶髪に碧眼の男。三十代くらいだろうか。柔和な顔立ちをし、とてもそんな職業に就いているようにはみえな。それが彼の武器なのだろう。彼は国にも認められている仲介屋が切り捨てた仕事を幹旋することを生業としている。

見た目は優しそうに見えるがなかなか侮れない。しかし、シュリ―にとっては信頼できる数少ない人間だった。

「何の用ですの、ハギ」

「ん、姉さんに手紙。急ぎだと悪いんで届けに来た」

「それはご苦労様。・・・二通あるわね」

受け取って、彼女は彼を見上げる。

「一通はこの宿のオヤジについてだからって頼まれた。何でも黒髪の男があんたについて持ってきたらしいよ」

「黒髪の、男？」

彼女は訝しげに封書を見る。

一通は蓮の花の紋章で封緘されているものだった。

それは弟が自分だと示すために使うもの。アス帝国の南の方へ留学してから年に一度くらい届く手紙だ。

彼女は封筒を爪先で破り中を取り出す。

弟の神経質そうな文字で「もうすぐシエランに帰る」とだけ書かれていた。それ以外の記述はない。

数ヶ月ぶりの手紙だというのに酷く簡単な内容だが、それは彼らしいことだ。

「何か良いことでも？」

「ええ、弟がこちらに戻ってきますの」

「へえ、あんたに弟なんかいたんだ？」

「可愛いもんじゃありませんよ。頭の出来はよろしいですけど、小生意気で憎たらしい弟ですわよ」

ハギはくすりと笑う。

「仲がいいんだなあ」

「ええ、二人きりで生きてきましたからね」

シユリーは笑う。

ただ一人の肉親。今は、夢の為に違う土地にいる。離れて暮らしているけれど片時も忘れる事はなかった。

両親を殺され、住み慣れた場所を追い出されるように逃げてきて、その時握っていたのは幼い弟の手。長時間歩き続けても、空腹でも泣き言一つ言わなかった弟。

弟が留学をしたいと言い出すまで、彼女たちは二人で生きてきた。彼女自身もまだ幼かったし、辛い事の方が多く、何度も死のうと思っただけで、幼い弟の寝顔を見るたびに、それだけはすまいと何度も励まされた。きっと、支えていたのは自分ではなく弟の方だったのだろう。

弟を守るという使命感が彼女に全てを忘れさせていた。

辛いことも、悲しみも。

だから彼がいなくなつた時、蘇ってきた感情は、復讐心。

それから犯罪者を「狩る」のを止め、民衆を煽り目立つやり方で王侯貴族達を殺してきた。

それは両親を殺した男と同じやり方。そうしていればいずれ相手の方から接触してくるはずだと思った

のだ。

直感的に。

「で、そっちの手紙は誰から？」

問いかけれシユリーははつと顔を上げた。

「ああ、そうでしたわね」

「姉さんのいい人から？」

「そんな人、いませんわよ」

「へえ、じゃあ俺にもチャンス有り、かな？」

にやりと面白そうに笑う彼は、明らかにからかっている様子だ。

「馬鹿なこと言っているんじゃないやありません」

ぴしゃりと言って彼女はもう一通の手紙に目を落とす。

一体誰からのだろう。

黒髪の男と言われて心当たりがあるとすれば、遠くで微かに覚えているあの男。

彼女は封筒におかしな細工がされていないのを確かめてから注意深く封書を開いた。一般的に良く使われる上質とは言えない紙に癖を感じない無機質な文字が並ぶ。

内容を読んで背筋がざわめいた。

(・・・これは)

内容としては簡単なものだった。

話をしたいことがあるから、指定した場所まで来て欲しいと。それだけの内容だ。しかし、そこに記されている名前は同業者のものだ。

(カナリア、ですって?)

会ったことはない。だが、彼女もその名を聞いたことがあった。レバン周辺で活動をする便利屋。同業者の間では「黒鳥」という二つ名で通っている男だ。二つ名のあるのは有能であるか、あるいは噂になるほど無能かのどちらか。

黒鳥は前者の方。

その黒鳥が何の目的で自分と接触しようとしているのだろうか。

（まさか、あの男が・・・？）

ぎゅっと彼女は手紙を握りしめた。

「どうしたんだい、姉さん？」

「あなた、カナリアという男を知っています？」

「黒鳥の？ 俺は会ったこと無いけど、噂は良く聞くな。何でも金次第で人捜しから人殺しまでするって言う、掃除屋、だよ。まさか、彼から？」

シュリーは頷く。

彼女の聞いていた噂と大差がない。

依頼の大小、難易に構わず依頼を請け、誰も手を付けないようなものまでこなすのが掃除屋だ。彼らは時には同業者の失敗の処理にさえ回る。規模の大きい仲介酒場になれば、常駐している掃除屋が何人かいるものだ。

おそらく彼はレバンどこかの酒場の「掃除屋」なのだろう。

あの男だろうか。

あるいは関係者が。

どちらにしても、相手から接触を求めてきた以上、会うのが礼儀だ。

「気を付けてね、姉さん。酒場を介している便利屋達は、俺たちみたいなのを嫌っているから」

「分かっていますわ。・・・心配して下さいあってありがとう、ハギ」

睡蓮（3）

三話 紫の雷撃

指定された場所に向かうと男が立っていた。

レバンの町外れ。遠くには街の明かりと空からは月の明かりが見えるが、それ以外に赤く照らす物はない薄暗い場所だった。

暗がりのせいで顔はよく見えないが、黒っぽい衣服を纏った男だった。

シュリーは鎌を握る手に力を込めた。

「あんたが、真紅のシュリーだな」

「・・・あなたが黒鳥ですの？」

そうだ、と男は頷く。

不思議な声をしていた。

カナリアという名前ほど美しい声ではないが、濁ったようなものでもない。まだ若い青年の声にも、歴戦を勝ち抜いてきた武将のよくな重みのある声にも聞こえる。

思っていたより若い。

それが彼女の第一印象だった。

「単刀直入に言う。これ以上、民衆を扇動するのは止めて欲しい」

「どうしてですか？」

「危険だからだよ」

「あら、私の身を案じて下さるの？」

もちろんそうではないことは分かっていた。

シュリーは挑発半分で男に笑う。

暗がりの中で男が肩をすくめたのが分かった。

「誰が勝手にやっているあんたの心配をするか。ここはバーグとは

違う。誰に習ったか知らないが、向こうのやり方が通じると思うな」
ぞんざいな言葉遣いに少しむっとする。

同時に、自分の思っていたようなチャンスでないと少しがっかりした。彼は、この辺りの「やり方」を荒らす自分を諫めに来ただけなのだ。

「正式な仲介屋を通さない依頼が、どんなに危険か分かっているのか？」

「むろんです。仲介人が蹴るような仕事ですもの、誰も手を付けない依頼なんて危険で割の合わない仕事だと分かっているでいますの。あなたには関係のないことですわ」

「そう言う意味じゃねえよ。あんたのやり方はこの国では非常に危険だ。・・・今ここで、あんたから止めるという確約をもらえなければ殺すしかない」

「結局はそう言う事ですのね」

シユリーは鎌を構えた。

危険な仕事、割に合わない仕事、それを引き受けてこなしているシユリーはこの国の便利屋にしてみれば「縄張り」を荒らす存在ではない。

忠告して、相手が応じないのであれば排除する。彼ら流のやり方だ。

汚い。

こいつらはそう言う連中ばかりだ。

そして、両親を殺した男も、同じ「便利屋」の男。

「私はここで止まるわけにはいきません！」

鎌を振り上げる。

疾風を伴った刃先が虚空を薙ぐ。黒い影が空中を舞った。避けられる、と予測していた彼女は、鎌を切り返す。

男はその攻撃をも交わし、僅かに笑いを含んだ声で言う。

「速いな」

「当然ですわ」

魔力の込められた鎌だ。

軽い短刀を扱うのと同じくらいの速度で扱うことも可能だった。ここまで慣れるのには随分と時間がかかってしまったが、おかげで多くの人間がこの鎌に油断をする。こんなスピードが出るとは思っていないのだ。

カナリアは有能と言われるだけあって、強い。

彼女の攻撃を余裕で交わしているのが何よりの証拠だ。

「避けてばかりいないで、攻撃したらどうですか？」

「むろん、そうする」

空中で男が腕を抱きかかえるようにして丸まった。

経験から、男が小さなナイフを仕込んでいると見当が付く。

シュリーは鎌を盾のように構える。

刹那。

広がった男の手から、無数のナイフが彼女の周りに落ちてくる。

「！」

鋭い刃は、まるで豪雨のように降り注いだ。

彼女は鎌でナイフをはじき飛ばしながら後方へと飛ぶ。はじききれなかったナイフがドレスを引き裂き、巻き髪の一房を切り落とした。

赤い髪が、地面へ散る。

地上に降りたカナリアが、何故かひるんだ素振りを見せる。

シュリーはその隙を見逃さなかった。

構えた鎌が冷たい魔力の風を帯びる。

大気の力を飲み込み、大きなエネルギーの塊を作り出す。

黒鳥が走った。

彼女は鎌を振るう。

「・・・・・・！」

男の唇から、聞き取れない奇妙な言葉が漏れる。

空が、紫色に光る。

「・・・・・・紫電」

「え？」

耳元で、男が呟くのが聞こえた。
ややあつて、痺れるような衝撃が全身を駆け抜けた。

歌が聞こえる。

誰かが歌っている。

色とりどりの花が咲き乱れる中庭で、誰かが歌っている。それを
少女は不思議そうに見守っていた。

これは夢だろうか。
それとも記憶？

だとしたら、いつの記憶？

あれは誰？

何の歌を歌っているの？

『どこの国のおうた？』

少女は問いかける。

問いかけられた人が振り返った。

黒い、長い髪をなびかせた女。

地面に届きそうなほど長いまっすぐな髪。

瞳の色は琥珀のような色をしている。

産まれて初めて、見とれたほど綺麗な女の人。

『・・・私の故郷の歌よ』

女は優しく笑った。

『コキョウってどこ？』

『ラン王国の西の方』

寂しそくに、答える女。

名前は何と言っただろうか。

花の名前だった。

綺麗な花の名前。彼女によく似合っていた名前。

・・・そう、キンレンカ。

お父さんとお母さんの「友達」だった人。

前にいた国に、いられなくなつたからと、昔の友人を訪ねてきた人だった。追われ、傷つき、色々な物を失いながらも懸命に生き続けていた女性。

『キンレンカはそこから逃げて来たの？』

『そう、そしてシエランで暮らしていた。でもだめね、私はそこからも逃げ出してしまった』

『どうして？』

無神経な子供の言葉にも、彼女は誠実に答える。

優しい人だった。

暖かい人だった。

彼女が、その時どう答えたのか・・・覚えている。

『守りたかつたから』

睡蓮（４）

四話 王の盾

「・・・？」

目を開くと、彼女は男の腕に後ろから抱きかかえられていた。一体何が。

認識するよりも早く、苦痛に満ちた男の顔が見えた。

癖のある黒髪で顔の半分を覆った男は、まるで何かから彼女を守るように抱きしめている。間近で見た彼は随分と若い。弟と同じくらいかもつと若いくらいでは無いだろうか。

彼が、カナリアなのだ気が付くのに少し時間が必要だった。

「・・・つてえ・・・」

「あなた・・・何していますの！？」

シュリーは叫ぶ。

瞬間、彼は手で彼女の口を塞いだ。

「・・・黙ってる。見つかりたいのかよ」

「・・・？」

どういうことか、と聞きかけて彼女は自分がどんな場所にいるのかを理解した。

茂みの中。

何かから隠れるように男は息を殺している。

すぐ近くに彼女の鎌が落ちている。遠くで、何やら声が聞こえた。複数の人間が何かを探しているような声。途切れ途切れに聞く言葉の中に、自分の名前と、「王の盾」という言葉を聞き取る。

王の盾・・・それは、シェラン国王直属の騎士達の俗称。国の大事があつたとき、王の命令で動く私設部隊。護衛はもちろん、王に

仇成すものの暗殺まで行う騎士団。

それが何故こんなところに来ているのだろう。

そして、何故彼らの会話の中に自分の名前が出たのだろう。

何より自分を殺そうとしていたカナリアは、何故自分を庇っているのだろうか。

彼は周囲の様子を窺うように睥睨して、ちつ、と舌打ちをした。

「・・・奴ら、あんたを追ってきたようだな」

声を殺して囁くように彼は言う。

「見つかるのも時間の問題か・・・話の分かる奴がいてくれば良いんだが」

「・・・どういう事ですの？」

「あんたのしていることは危険だって言っただろう？ あんたのしている事は、いずれ民衆の手で王を弑逆することになりかねない。盾が動かない訳がないんだ」

「・・・保身の為ですわね」

「まだそんなことを言っているのか？ この国はバーグとは違っていていっているだろう」

彼は呆れたように息を吐いた。

意味が分からず彼女は首を傾げた。

彼は彼女の行動を無視し、遠くの音を聞くように耳に手を当てた。

「・・・っち、聞き取れねえか」

腹を押さえながら黒鳥は体勢を立て直す。薄暗いのと彼の服が黒いせいでよく分からないが、その腹部は血で染まっているように見えた。

証拠に、押さえていた男の手は赤い。

鉄を含んだような血の匂いがした。

「あなた・・・その怪我」

「お前がやったんだよ、加害者」

「そんな・・・」

シユリーは驚いて口元を押さえた。

怪我をさせたことに驚いたのではない。彼に攻撃があたっていた事に驚いたのだ。普通に会話をしていたから、てっきり当たっていないのだと思っていた。

あの距離で、しかも腹部に当たったのであれば死んでいてもおかしくない。

しかし、普通に話をしている。苦痛の色こそ浮かべているが、普通に動いている。

あの時、呪文を唱えていた気配は無かった。

あの状況で、この程度の怪我で済むはずがない。

一体、何をしたのだろうか。

「来いよ」

「どうして？」

「逃げるんだよ」

「助けて下さるの？」

言うところ、彼は首を横に振った。

「そう言う訳じゃない。口上もなしにいきなり攻撃してくるやり方が気に入らない。盾にあんたを殺させる訳にもいかない。しかし、誰だ？ 紫電なんか使った阿呆は」

「・・・紫電って何なんですの？」

鎌を拾いながらシュリーは問う。

騎士達の様子を伺いながら彼は答える。

「雷撃系の高等魔法だ。俗称だけだな。威力が大きい上に見た目も派手だから戦場で使われる魔法」

「それってこんな街に近い場所ですって平気ですの？」

「いや、相当危険な行為だ。だからこういった場所でするのは禁止されている。今のがまともに落ちていたら、俺たちどころか騎士団や街にまで影響が出ていただろうな」

シュリーは目を見開いた。

「不発、でしたの？」

男は苦い笑いを浮かべる。

「まあ、そんなところだ」

王の盾は本気でシュリーを殺すつもりのようなのだが、いくら何でもやりすぎだろう。不発だから良かったものの、術が発動していれば国民の反発も大きかったはずだ。それなのに、そんな危険な魔法を使うとは何を考えているのだろうか。

不意に気配を感じシュリーは武器を構えた。

男も警戒したように腰元に手を当てた。

暗がりの向こうから威圧的な声が聞こえる。

「武器を捨て地に伏せる。さもなければ命はないと思え」
王の盾の者だろうか。

シュリーは言われた通りにすべきか否か迷った。相手が一人ならば、切り抜けられる可能性もある。カナリアにその気があれば確実に。

ちらりと、表情を伺うと、黒鳥は表情をゆるめた。

「・・・トキ？」

「その声は・・・まさか！」

トキ、と呼ばれた男が驚いたような声を上げる。

近付いてくる気配を感じ、シュリーは警戒心を強める。大丈夫だ、と示すようにカナリアは彼女の前に手をかざした。

ようやく顔の見える位置まできた男は体格の良い金髪の男で、無精髭を生やした四十代前後の男だった。

腰には二本の剣を下げ、武骨な鎧を着ているというのに何故だか軟派なイメージがきまとう男は、カナリアを認めて破顔した。

「ああ、やはりお前か、カナリア！ 元氣そうじゃねえか！」

「あんたもな。どうしたんだ、その格好は」

にやりと笑って男は砂避けのマントを止めている階級章を示した。
「今や俺様は王の盾の副将だぜ？ 立派なもんだろう？」

「似合わねえよ。・・・それより先刻の紫電はあんたらが？」

彼が尋ねると、トキはとたんに真面目な顔つきになる。

「と、いうと、お前らではない訳か。そっちの嬢ちゃんが真紅の？」

そうだ、と黒鳥は頷く。

トキに睨まれてシュリーは一步後退した。王の盾が自分に好意を持っているとは思えない。話の向きから、彼らは知り合いだろう。戦いになったとしてどちらかが自分の見方になるとは思えない。

金髪の男は苦笑して肩をすくめる。

「俺たちは、真紅と話し合いに來ただけだ。ある筋の情報屋から今夜ここに現れると聞いて張り込んでいたら今の騒ぎだ。止めたのはお前だな」

黒鳥は何か誤魔化すように笑う。

「何のことだよ。・・・で、その情報屋は何者だ？」

「ハギと名乗る男だ」

シュリーは目を見開く。

「なん・・・ですって？」

驚いた彼女の元に二人の視線が集中する。

金髪が彼女の肩を掴んで前後に揺さぶる。

「嬢ちゃん、知っているのか？」

揺さぶられて彼女ははつとする。

とても信じられなかった。

もし、トキの言うことが真実なら、ハギは自分を裏切ったことになる。

売ったのだ。

王の盾に。

目を閉じて、やるせない思いで彼女は答えた。

「・・・私に仕事の斡旋をしていたつなぎ屋ですわ」

睡蓮（5）

五話 悪魔のような男

「お前なんつー奴信じているんだよ」

呆れたようにカナリアが非難する。

「仕方ないだろう。こっちに流れてくる情報が乏しいんだ」

「だったら俺に依頼すればいいだろう？」

「どこにいるか、分かんなかったんだよ」

「師匠といた時と一緒だよ。レバンを拠点にしているって、師匠が知らせただろうが！」

「俺がそんな大昔のこと覚えている訳が無いだろう！」

「威張って言うことか！」

「あの・・・論点ずれていますわよ？」

指摘されて黒鳥は息を吐いて髪を掻き上げる。

青い瞳が星を散らしたように揺れている。

不思議な瞳だ。

「ともかく、だ。ハギという男を捕まえよう。今の攻撃もそいつの仕業かもしれない」

「そう言うことならば俺の部隊を使え。俺が仕込んだ連中だから、優秀だぞ。今呼び寄せ・・・」

言い差して、男は表情を陰しくさせた。

トキの瞳がシュリーの武器を確認して次いでカナリアの方に向けられる。

笑ったのか呆れたのか、微妙な表情を浮かべて彼は自分の腰に下げた二本のうち一本をカナリアの方に放る。

「使え。・・・嫌なこと思いつから嫌だとかぬかすなよ」

「分かっているさ。俺だって状況を読めない訳じゃない」
「上等だ」

「……どうしましたの？」

問いかけたものの、彼女はすぐに気が付いた。
すぐ近くから、殺気にも似た鋭い気配がする。それはまるでこちらに居場所を伝えるかのような気配。

あの時と同じ。

両親が、殺された時と同じ気配。

戦いに慣れない子供の自分でも分かるほどの禍々しい狂気のような気配。追って、辿り着いた先には横たわる両親の骸と、傍らで赤く染まった剣を握る黒髪の男。独特な剣の構え方。

その男が、何かを言った。

覚えているのはそれだけだ。

気が付くと自分は弟の手を引いてアルバークから離れているところだった。

あの男が両親を殺した。

そして今、それと同じ気配を感じている。

あの時と。

がさりと、茂みが動いた。

構える彼女の目の前に出てきたのは、鎧を着た兵士。

「……副……長」

目を見開いた兵士は、トキを呼び、そのままの姿勢で倒れた。
背には剣が突き立てられている。

「！」

「トキ！」

駆け寄ろうとする金髪を黒鳥が止める。

倒れた男の真後ろに、もう一人男が立っていた。

見覚えのある茶髪の男。

薄笑いを浮かべた、

「……ハギ」

「ああ、姉さん、生きていたんだね」

男は人の良さそうな顔で笑みを浮かべている。しかし、その表情に感情は込められていない。作った笑顔。普段の彼とは違う。自分の心配をしてくれた彼とは違う。まるで悪魔が人を嘲笑うかのよう。な冷たい笑い。

「心配したんだよ」

「よくもそんな・・・言えたものですわね」

シュリーはハギを睨む。

彼は肩をすくめた。

「本当に心配していたんだよ。ちゃんと死んでくれたかどうかってね」

「貴様・・・一体何の目的で・・・」

「決まっているじゃないか。王の盾に英雄を殺させたかったんだよ。この国の人は、萎縮して動けなくなるか、大反乱になるか、どっちだろうね？」

「貴様！」

トキが跳躍した。

抜きはなった剣でハギに切りつける。

しかし、

「甘いね」

ハギがにやりと笑った。

その蒼い瞳の奥が、闇色に染まる。

刹那、男の巨体が見えない力によって吹き飛ばされた。

ぞくりとした。

男は呪文を唱えていない。

呪文を専門に学んだ訳ではないから、一瞬にしてここまで組み上げられるのかどうかは分からない。だが、尋常ではない力を感じた。シュリーは今まで味わったことのない恐怖を覚える。自分の今対峙している男は、信じられない程の力を備えている。

十中八九間違いなく普通の人間ではない。

鎌を持つ手が震えた。

ハギが楽しそうな笑みを浮かべる。

「その構え方、懐かしいね」

彼の瞳はカナリアを見ていた。

カナリアは剣を抜き構えている。

眼前で水平に構える独特な剣の型。

あの男と同じ。

「モズ、っていったっけ？ あんた、あの男の徒弟か何か？」

「・・・師匠を知っているのか」

「ふうん、鳥の徒弟は鳥か。でも、あんたは雑種だね。剣の扱い方が下手そうだもん。あの時は負けたけど、あんたには負けそうにな
いね」

「お前は誰だ！」

カナリアが叫ぶ。

ふっとハギの姿が消える。

「スイレンドよ」

カナリアとシュリーとの間に彼が姿を現す。

反射的に彼女は鎌を振った。

それは虚空を薙ぎ、振り終えた刃先にハギが乗る。

「ハギ！」

シュリーは忌々しい想いで男を睨む。

「スイレンドってば」

笑って高く飛び上がる。

今まで彼がいた場所をカナリアの剣戟が通り過ぎる。

シュリーは刃に魔力を込めた。

「止せ！」

「この・・・！」

慌てて止めたカナリアの声は、彼女に届かなかった。

彼女の鎌から鋭い牙のような風が産まれる。

それは、男を狙って真っ直ぐに飛んでいく。完全にハギを、スイ

レンを捕らえているように見えた。

この距離で、あのスピードで、避けきれぬ訳がない。
当たる。

思った瞬間、彼女は強く後ろに引つ張られる。

自分の手を引く金髪の男。前方には黒髪の男が間に割って入った
のが見えた。

「きゃあ！」

彼女は強い風で後方に飛ばされた。

「うわっ！」

耳元でトキが呻くのを聞く。

何かに激突したような激しい衝撃があつてようやく彼女たちは止
まった。

自分の攻撃を反射されたのだと、すぐに気が付いた。

彼女は視線を上げる。

彼は、カナリアはどうなったのだろうか。

割つてはいたのならば、彼は再びあの攻撃を受けた事になる。あ
の傷で二度目ともなると今度こそ助からない。

しかし、

「うわあ、よく生きているね」

激しい土煙が上がる中、彼は立っていた。

肩で息をし、満身創痍になりながらも彼は生きていた。

あの時と、同じだった。

「お前、雑種の鳥のくせして生意気」

始終笑顔だったスィレンから笑みが失われる。

男の瞳はもう青くは無かった。

白い部分までもが暗闇色に染まり、芯だけが造り物のように青紫
色に輝く。

「しね」

空が、

スイレ^んが、

カナ^リアが、

街^が、

全^てが、

青紫^色に輝^いた。

睡蓮（6）

六話 花は散る

不安が自分の中にあつた。

薄暗い廊下を走り抜け、両親がいるはずの寝室へと急ぐ。

『お父様、お母様！』

勢い良く扉を開いた少女は横たわる両親の姿を見た。傍らには血に濡れた赤い剣を握る男がいる。

闇を落としたような深い黒髪の男。

彼は振り向き、剣を降ろした。その目には悲哀の色が浮かんでいる。

『……助けられなかった。すまない』

『そんな……』

男の足下には仮面をつけた男の死体が転がっている。

黒髪の男も、仮面の男にも彼女は覚えがなかった。

ただ、本能的に、両親を殺したのが仮面の男であり、それを殺したのがこの黒髪の男であることを悟った。

黒髪の男は膝を折り、彼女の肩を揺すった。

『あの人は、彼女はどこにいる？』

すぐには答える事ができなかった。両親が死んでしまったこと、これから起こる事が恐ろしくて彼女は答えることが出来なかったのだ。

『頼む、教えてくれ、手遅れになる前に。あの人はどこにいる？』

『あの、ひと？』

呟いて、彼女は誰の事を言っているのかに気付く。

キンレンカの事だ。

彼女は、誰かに連れさらわれた。

突然、仮面の集団が入ってきて彼女を無理矢理連れて行ってしまったのだ。

泣きながら訴えると、黒髪の男は顔を覆う。

間に合わなかったのか。

そう、男は言った。

大人の男の人が、こんな風な表情をするのを初めて見た少女は一瞬泣くのを止めて男を見た。

白髪交じりの男だった。大量に返り血を浴びているために深い黒のように見えていたのだ。男は体中傷だらけで生きているのが不思議なくらいに見えた。

『おじさん・・・』

誰？

と、聞きかけて少女は後退った。

男も顔を上げる。

暗闇の向こう側で何かが動いた。

逃げなさい、と男は彼女に囁いた。

『弟を連れて逃げなさい。守ってくれる両親はもういない。弟を守り、生き延びろ』

『で、でも・・・』

男は剣を構えた。

眼前に水平に剣を構える独特な握り。

少女を庇うように立ちはだかって。

『守るために、逃げろ』

思い出した。

あの時、何が起こったのか。

どうして忘れていたのだろう。

どうして、自分を助けてくれた人のことを仇だと思い続けてしまったのだろう。

耳をつんざくような激しい雷撃の音と激しい光の中、シュリーは古く間違った記憶が次第に明確な物に変わっていくのを感じていた。罪悪感があつたのだろう。

両親を守れなかったこと、恩人を置き去りにして逃げてしまったこと。だから彼女は誰かを仇と思うことで自分を救おうとしていたのだ。

あの日、唯一鮮明だった男の事を「仇」と思い。

(では、本当の仇は？)

あの時自分はもう一人見たはずだ。

それは、茶髪に碧眼の男。

スイレン。

「・・・ホント、お前生意気」

忌々しげに吐き捨てるスイレンの顔は半分が血で汚れている。血に邪魔されて左目は閉じかけ、今にも崩れ落ちそうな程に姿勢が低い。

彼と対峙するカナリアはもう立っていることすら出来ない様子で地面に膝を折っている。その表情はうかがい知ることとは出来なかった。

何が起こったのかシュリーには分からない。

ただ、大地に紫電が落ちた気配は無かった。

憎しみに満ちたスイレンの表情がやがて何かに気付いたように驚愕の色を帯びる。見開かれた右目は蒼く色を戻し、カナリアの方を見ていた。

「そうか！ お前、あの女の」

「何の・・・話、だ」

「しらばつくれる気？ それとも本当に知らないの？ まあ、どっちでもいいけど。あの女はあの人が入れたんだから、お前の存在なんて些細なもの。うん、だけど、殺しておいた方が正解だね？」

誰に問うわけでもなく、彼は呟いた。

どこにそんな力が残っているのか、彼は手のひらに光る剣を創り出し重い足取りで男はカナリアに近付く。

彼は動かなかった。おそらく、もうそんな余力は残っていないのだろう。キツシュは鎌を握り直しスイレンの方へ向かって走った。

死なせてはいけない。

あの時は逃げるだけだったけれど、今は戦う力があるのだ。復讐の為ではなく、カナリアを生かすために。

反射されても、はじき飛ばされても、やるだけのことはやりたい。

「あなたの相手は私ですわ！」

「・・・！」

スイレンがこちらを向いた。

強風がシュリーの身体を高く巻き上げる。

それでも彼女の瞳は男を捕らえていた。

上空から見えたのは、男の後方に立つ金髪の姿。その手には剣が握られており、剣はスイレンの身体を貫いていた。

風が弱まり、彼女の身体は地上へと落ちる。

「首を落とせ！」

トキが叫ぶ。

本能的に彼女の身体が動いた。

鎌が、スイレンの首を捕らえる。

青い目が、彼女を睨んだ。

人の首が空中を舞った。

「大丈夫ですよ、カナリア」

「てて・・・傷口が開いた」

「全く無茶するからだ。お前師匠そっくりだな」

「揶揄するようなトキの言葉にカナリアは声を立てて笑った。

思っていたよりも彼の傷は軽い。丈夫なのか、それとも最初から命に関わるような攻撃が無かったのか。

トキと共に彼を立ち上げらせながら彼女は怪訝そうに彼を見た。

「あなた、何をしましたの？」

紫電が二度とも失敗したとは思えない。あの一瞬の間で、彼は何かしたはずなのだ。おそらく一度目も彼が何かをした。

誤魔化すように笑う彼は「魔法だよ」と答えるが、シュリーは納得がいかなかった。ただの魔法ではかたづけられないような気がした。

だが、怪我人にこれ以上追及するのは酷だ。それ以上は何も聞かずにおいた。

それよりも、とカナリアは話題を変える。

「その髪、悪かったな」

「髪？」

言われてようやく房の無くなった髪のことを思い出す。

「あなた私を殺そうとしておいて」

「俺はお前に確約をもらいたかったただけだ。いくら悪辣な奴でも、ああいうやり方で殺さないで欲しいってな」

「国民に英雄視されている私が殺されれば混乱が起きるということ？」

それはスイレンが言っていたことだ。

トキは軽い調子で笑う。

「それもあるだろう。だが、一番は国民に人を殺して目的を果たすと言っことを覚えさせてはいけない。この国は王が法だ。今は内政

を正すことで手が回らないが、いずれはハーレル王が裁きを下す。それまで堪えてもらえなければ、もっと多くの人が苦しむ事になるんだよ」

「・・・そしてこの国にとって王は・・・その血脈は失ってはならないものの一つ。戦いを覚えた民衆は王すら殺すだろう。そうなればこの国は滅びるより他がない」

最後の下りは意味が分からなかった。

ただ、そこには他国の者が干渉してはいけない何かがあることを感じた。

シュリーは頷く。

「約束、しますわ」

自分がしてきたことが、敵討ちには無意味なことだと分かったからもうしない。それに敵討ちはもう終わってしまった。

達成感などない。

だが、ずっと抱き続けていた罪悪感はない。

やることは無くなってしまったけれど、それはこれから見つければいいこと。

「なあ、シュリー」

「・・・キツシュ、でよろしいですわよ」

「うん、ならキツシュ」

カナリアがだるそうな声で言う。

足下はおぼつかない。

「レバンで掃除屋やらねえ？ 俺の他に腕の立つ奴がいる方が助かる」

「それは・・・」

そう、それも良いかもしれない。

シュリーは気のない風の返事を返す。

「・・・考えておきますわ」

「そうか・・・」

彼は呟いて目を閉じる。

「カナリア？」

問いかけても返事はない。

一瞬、青くなりかけるがすぐに気付く。
トキがカナリアに肩を貸したまま笑う。

「寝たな」

「何なんですの、この人は！」

呆れた風に彼女は叫んだ。

どうやら自分は随分と癖のある人間に関わってしまったようだ。
だがそれも良いだろう。

その方がずっと楽しめる。

彼女はようやく自分の人生を歩き始めたところなのだ。

街に向かって歩き出した彼らの見ていない場所で、胴体と首の切り離された死体がゆっくりと灰色に変わる。

それはまるで砂で出来た彫像のように姿を変え、吹く風に流され形を失った。

誰も見ていない場所で、ゆっくりと。

「睡蓮」

了

Story 3 滅亡の系譜（1）

それは、突然起こった。

人間とは異なる種族『亜精霊種』の住まう土地、アインハイト。水の一族が治める西のオステン。

水族の女と、外見だけは人と変わらない男。

その二人が、別々の方向から歩いてきて擦れ違う。

どこにでもある何気ない風景だった。

ただ一瞬、男と擦れ違う瞬間、女の手が白く光ったように見えた。訝った街の者が振り返る。

「あ……っ！」

女が、腕を押さえてうづくまる。

ごとり、と女の腕が地面に落ちた。

それは吸い寄せられるように擦れ違った男の掌中へと治まる。

朱赤色の目をした男。

髪は灰を落としたような緑色をしている。

男の手には剣が握られていた。

不自然にしなる、長い鈍色の剣。

「……なるほど」

男はぽつりと呟いた。

闇の淵に佇むような、ただ、ある、だけの淡々とした声。

悲鳴が上がった。

思い出したかのように女の腕から血が吹き出る。

おびただしい血液は大地に落ち土を暗く染める。

彼の所行に気が付いた者が、威嚇するような顔つきで男に近付いた。

男の瞳はそれすらも見ていなかった。

ただ、愛でるように剣柄を眺めていた。

街の人間が彼につかみかかるうと手を伸ばした瞬間、風が吹いた。男を中心に竜巻でも起こったかのような激しい風が吹く。人々は反射的に目を瞑った。

彼らが目を開いた時には既に男の姿は無かった。

そして、女の腕も。

1 王の血脈

エリーは片手を前に突き出し呪文を唱えながら、まるで指揮でもするかのような動きで空中に何かを描き始めた。

彼女の指先が通った道を示すように青白い光が魔法陣を形作る。

まるでお手本のように正確に描かれた魔法陣は彼女の詠唱通りに魔力を帯びていく。

「・・・盟約に従い我等が敵を焼き払え！」

組み上がった瞬間、魔法陣は赤い光を放つ。

炎がそのまま目標に向かっていく・・・はずだった。

「あ、あれ？」

彼女の放った炎は動き出さず、その場で激しく燃え上がる。

その炎は勢いを増し、エリーの前髪に引火する。

「きゃー！！ 髪の毛が燃える！！」

「・・・水よ、」

ぱちん、という音と共に上空から大量の水がエリーに向かって降り注ぐ。まるで罰ゲームのような水量だったが、その水によって魔法で作られた炎は完全に消し去られる。

後には前髪の少し焦げたずぶぬれの少女が残った。

「えーん、びしょびしょ」

「構成、呪文、発動も完璧なのに、何故失敗するのかしら。これも才能ね、おこげちゃん」

「嬉しくないよお」

服に染みこんだ水を絞ってエリーは息を吐く。

数日前からアンナに頼み込んで町外れで魔法の特訓を始めたのだが、彼女のコントロールの悪さは変わらない。

アンナは普段は無茶苦茶な魔法を使いその才能を発揮する機会など殆ど無いが、本来は知識・実力ともにトップクラスだ。もしも彼女が魔術師の協会や‘塔’に入っていたならば上位に位置づけられる程の力を持っている。

講師としては申し分ない人材だった。

そのアンナを付けても、エリーのノーコンは一向に良くなる気配を見せない。これはもはや才能としか言いようが無かった。

「その様子だと、また失敗の様だな」

「あら、小鳥ちゃん、ごきげんよう」

「おはよー、カナリア。朝帰り？」

「仕事帰り、だ」

激しく誤解されそうな単語を力一杯に否定する。

「言い直すところが怪しいわね。どこで何をしてきたのか5W1H 3アフロで答えなさい」

「3アフロって何だよっ！・・・お前、何か不潔なものを見る目で見るな！」

「うえーん、カナリアの変態」

「そう言うのはリン姉弟を示す単語だろうか！」

例えエリーの想像したような事があっても、彼女にカナリアを非難する権利などない。大体、彼の年齢になってまでそういう経験が一度もない方がおかしい。

だが、そんなのは年頃の少女には通じない。言い争えば確実にカナリアの方が分が悪くなる。

彼は話題を変える。

「で、アンナでもダメだったんだな」

アンナは寝ていたジェラートを頭の上に乗せながら答える。

「ええ、私でももみあげだったわ」

「それを言うならお手上げだ。うーん、最初に教えた奴が妙な組み方教えたか、あるいは血脈のせいか・・・」

「血脈？」

「エリーはオーナディアの聖主と同じ血を引いているだろう？ 代々法術を使い続けた家系だから、魔法に関して拒否反応のような事が起こっているかもしれないな」

エリーは目を丸くする。

「え？ 魔法って遺伝するの？」

「したりしなかったりね」

「どっちなの！？」

「魔法使いが良く出るといふ家系ってのがあから遺伝はするんだろうな。リン姉弟のような例もあるから、一概に全部が全部という訳にはいかないが」

キツシュは強い魔力を持つ鎌を使う。魔法を込められた武器を使えるのは魔力がある証拠だ。その点においてキツシュは魔法を使えるということになる。だが、マリンの方は初歩的な魔道具を使うのすらやっとなという魔力だった。皆無と言うことは稀だが、マリンの魔力は皆無に近い。

完全に遺伝すると思えばどちらか一方が強いのはおかしい。

血筋というのは一つの要素であり、他にも何かあるのだろうと思う。

「ふうん、何だか詳しいんだね」

カナリアは苦笑する。

「仕事柄魔法使いを相手にする事があるから必然的にな」

「敵を知るにはまず味方からってやつ？」

「ん？ あ？ それじゃ意味が・・・ま、いいか」

とどのつまり、有利に事を運ぶには相手のことを知っておく必要があるということだ。カナリアが魔法に詳しいのには他にも理由があるのだが、実際に役立っているのもそれ以上言う必要はないだろう。

「ね、ね、魔法使いが多い家ってこの辺にもあるの？」

そうだな、とカナリアは思い付く限りの名前を羅列する。

「有名な所でいくと、竜の血脈であるシェラン王家、ネセセア神の加護のあるラン王家、南の古い魔女の血筋のグーヤ家。アインハイトの亜精霊を除けばそのくらいだろうな」

「もう一つ忘れ物よ、灰の目の一族」

エリーは首を傾げる。

「ハイノメ？」

「灰色の目」

「目が灰色なの？」

「実際には灰色ではないらしいわ」

「でも灰の目の一族？」

「そう、便宜上ね」

「??」

「その昔、灰の王と呼ばれる神をも凌ぐ魔力を持つ男がいたの」
灰色の目、灰色の髪をもつ者で、彼は「恒星落陽」と呼ばれる大きな力を使い、世界を滅ぼさんとしたために四王・・・竜王、魔王、精霊王、冥王の力で封印されたという。

その灰の王と同じ血を引く者たちは「灰の目の一族」と呼ばれる。

実際に灰色の目をしている訳ではなく、同じ知識の目を開く者、という意味合いが強い。彼らは灰の王には及ばずとも強い魔力を有して産まれてくる者が多いという。そして、知識すらもその血に受け継がれているとか。

「死んだら身体が灰になるとか、その目で見られた者は灰になるまで燃やし尽くされるとか、そんな話もあるわ。真相は貞子ではないけれど」

「定か、だろ。貞子って誰だよ」

「井戸から出てくる少女」

「何だそれは。大体、灰の目は実在するか曖昧なところじゃないか。文献に少し名前が記されている程度だし」

アンナはうんと頷く。

「そうなのよね、だから私は実在すると思っっているわ」

「・・・」

「何で？ だって情報自体少ないでしょ？」

「少なすぎるのよ、まるで誰かが目立たないように消しているように。シェランは竜王信仰の厚いところだから、王宮図書室で調べれば出てきそうなものだけれど」

「だけど？」

「民間人は出入り出来ないんだよ」

カナリアが口を挟む。

何故か彼は少し苛立っているような口調だった。彼にしては珍しい、とエリーは思う。

「じゃあさ、私ならどうなのかな？」

「オーナディアに戻って親書作成して来ても許可が下りるかは微妙だな」

「ふーん、そうなんだあー」

残念そうに彼女は口を尖らせる。

魔法の血筋に関して興味を持ったのだろう。だが、一度国に戻らなければいけないという条件は飲みたくなかったようだ。

さてと、とカナリアは腰に手を当てる。

「俺はそろそろ戻るからな」

「はい、じゃあまたね」

「街に戻るならリン診療所に届け物を頼んで良い？ その包みなんだけど」

アンナは少し離れた木の根本に置いてある包みを指差す。

緑色の布で包まれたそれは人間の頭部くらいの大きさがある。

カナリアは首を傾けた。

「構わないけど、何だ？」

「開けてみて良いわよ。爆発はしないから大丈夫。爆発しても小鳥ちゃんなら大丈夫」

「わー、極悪非道だなあ」

そう言いながらカナリアは包みを開く。

いくら彼女でもこんな街に近い場所で爆発はさせないだろう。包みは開いても爆発はしなかった。代わりに、ごろんとオレンジ色の奇妙な形のカボチャが転がり出る。

彼はそれを見てたまらず声を上げた。

「うわっ！ 何だこの形！」

Story 3 滅亡の系譜(2)

2 若！

リン診療所を訪れると、すぐに寝台に座るキツシユの姿が目に入る。

元来触診のために使われる寝台は彼女によつて大きなソファのようになっていた。

今日はいつもの「戦闘服」ではなく、黒いベロア調の生地には赤い薔薇の刺繍を入れたフレアのワンピースドレスを着ている。刺繍の部分が大きいために赤いドレスのように見えた。元の生地がつややかなためにいつにも増して派手だ。

診療所にいるのは不自然な雰囲気醸し出す女だが、見慣れているために違和感は覚えなかった。

「あら、カナちゃん、ごきげんよう」

アンナと同じ口調で挨拶をされ、カナリアは吹き出す。

「その挨拶流行っているのか？ 今日には珍しい格好しているんだな、キツシユ」

「あはん、ごめんなさい、パジャマ姿のままで」

「お前、それパジャマなのかよ」

どう考えても貴族のパーティに行く時の格好だ。

「私としては何も付けなくてもよろしいのですけど」

ちらりと彼女は弟の方を向く。

仏頂面で何かを書いている男は彼女をちらりとも見ずに答える。

「目障りだから止めさせた」

「まあ、暴言ね、失礼だわ」

「うーん、俺は良いと思うんだけどなあ」

ぼつりと言うとキツシユは揶揄するように笑う。

「あらん？ 問題発言？ エリーちゃんが聞いたら何と云うかしら？」

「お前・・・いくら女に飢えているからと言って、これに手を出すなど酔狂にも程があるぞ」

「いや、今の良いと思うは、姉弟ではつきり言い合えるのはいいな、にかかるのであつて、キツシユが寝る時に・・・っていうか、何でそこでエリーが出るんだ？」

「んふ、カナちゃんも男の子ね」

喜々として言われカナリアは溜息をつく。

どうも今日はそう言われる運命のようだ。にべもなく変態扱いするエリーよりはこの姉弟の方が些かマシだろう。

「で？」

「・・・で？」

「何か用があつて来たのだろうか？ それともまた怪我でもしたのか？」

一段落が付いたのか、マリンは書く手を止め振り向く。

ようやく目的を思い出した彼はにやにやと笑いながらマリんに例の包みを手渡した。

「アンナからの差し入れ。畑でとれたんだってさ。カボチャ」

「・・・うわっ！ 何だこの前衛的な形のカボチャは！」

「え？ 私にも見せて・・・きゃあ！ 何ですの、この恥ずかしい形のカボチャ！」

自分がしたのと全く同じ反応を示す二人にカナリアは笑う。

放送の都合上モザイクのかかった「とても個性的な形のカボチャ」を凝視したマリンはぼつりと疑問を漏らす。

「・・・食べられるのか？」

あのアンナがお土産に持たせたものである。

こんな形をしていれば疑うのももつともだ。

「同じ種からとれたものを孤児院に届けるって言っていたから、大

丈夫だと思っぞ」

「まあ、アンナちゃんがいくら湾曲した性格の持ち主でも、子供達には手出ししませんものね」

「湾曲って・・・」

言い得ているだけに笑えず、カナリアは失笑する。

「お前、女の子が好きとか言っている割に、彼女に対して酷い言い草だな」

弟の突っ込みに「そうなんですわよね」と溜息をつく。

「自分でも不思議なのだけど、アンナちゃんは可愛らしいのに何故か食指が動きませんの」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・うつ、何だか色々と寒気が」

知らなくとも良い部分を垣間見てしまった気がして彼は鳥肌の立つた腕をさすった。

彼女が見かけ通りの年齢でなくても、百歩譲って人間で無かったとしても本人から告白されれば「やっぱり」で済ませられる。だが、こうして疑惑の念を抱くとどうしてこうも禍々しいものを感じてしまう。その上そうだと仮定すると、キツシュは本能的に悟ったことになる。

それはそれで恐ろしい。

「ああ、そう言えば、カナちゃんに見て欲しい物がありましたの」
「うん？」

見上げると、キツシュは赤褐色のエンブレムを見せる。

カナリアはそれを受け取って確認をする。

マントを止める丸いエンブレムだが、そこには階級を示す絵が彫られている。彫られているものと色から察するに、持ち主はシエラン王国の貴族かそれに近い階級に属する人間だと推測出来る。

裏に示された文字を見てカナリアは確信した。

「ハマール家のものだな。こんなものをどこで？」

「昨日ここに運ばれた男が持っていたものですわ。・・・本物だと思います？」

彼は気付かれないようにエンブレムの裏をそつと撫でる。

指先の触れた場所に緑色に光る文字が記される。古いネセセア文字で「エトス」、それが持ち主の名前だろう。ハマール家は王家の血縁にあたり子が生まれるとその名と階級を示したエンブレムが王から直接渡される。偽造されたものであればこの文字は記されない。すなわち、これは本物であるということだ。

彼は頷く。

「十中八九間違いない」

「そうですね。調べましたところハマール家は軍人の家柄。先王フエネルの時代に起こった戦争でほとんどの者が亡くなり、現在は二十五歳の当主エトスのみ」

「だが見つけられた男は五十代後半くらいの老人だ」

「いきなり随分と歳喰ったもんだなあ。よほど怖い目にあつたのか？」

「その可能性もあり得ますわよ、実際その老人は怪我を負っていた訳ですし」

ボケたカナリアに乗るキツシュ。

たまらずマリンが突っ込みを入れた。

「いや、いくら何でもその変貌はないだろう。・・・くそつ、こんなところでベタな突っ込みを入れるなんて」

不覚というよりは屈辱的な表情を浮かべマリンは額に手を当てた。普通に考えれば、その老人が盗んだかエトスの身に何かあつたと考えるのが妥当だ。後者の場合、老人はハマール家の使用人と考えるのが正しい。

「ともかく、その老人に話を聞かなければ始まらないな。病室の方に？」

「ああ、麻酔で眠っているが」

「ふーちゃんったら麻酔が効いていることを良いことに、彼を裸に

してあんな事やこんな事を・・・」

あること無いことを言い出したキツシュをマリンは睨み付ける。
いくらカナリアが冗談の分かる人間でも、そんな事を吹き込まれるのはプライドが許さないらしい。

「俺は十五歳以上には興味はない！」

「いや、突っ込むところはそこじゃないかと・・・つか、そんな堂々と言われても」

「私は純情可憐なら二十五歳までよろしくてよ」

「黙れ変態！」

「何ですって！ お姉様に向かって変態なんて失礼よ、××××のくせに！」

「あ、いや・・・キツシュその発言はやバイって。本当の事でも」

「お前、知らないくせに勝手なことを。××××かどうか、見てみなければ分からないじゃないか！」

「うわっマリン、お前まで！・・・寝不足か？ お前寝不足でテンションが」

よく見ればマリンの目の下には隈。

普通の状態ではあり得ない発言にさすがのカナリアもたじろぐ。

「この俺がたかが三日の徹夜如きでハイになる訳がなからう！ 待っている、今証拠を・・・」

「わ、分かったから、落ち着け、服は脱ぐな！ おい、キツシュも止めるよ」

「おほほほ、弟の裸なんてリンゴの皮むきと大差ありませんわよ」

「比較対照が間違っているだろう！ お前ら姉弟はどうしてこう・・・」

ばたん、と突然診療室と病室を繋ぐ扉が開く。

立っていたのは五十代後半くらいの目の細い男。開いているのか閉じているのか分からない目でじっと三人（のうちの誰か）を見つめ、やがてはらはらと大粒の涙を流し始める。

「若！！」

「バカ？」

「変態の間違いだろう？」

「おほほ、この状況下で誰が一番変態にみえるのかしらね」

男の服を脱がしているのか着せているのか分からない微妙な位置で止まっているカナリアが、一番変態に見える。

Story 3 滅亡の系譜(3)

3 恍惚の人

「若様・・・お会いしとうございました」

老人がよろめく足取りで三人の元へと歩いてくる。

椅子にぶつかり

しきりを倒し、

最後はゴミ箱に足を突っ込んで激しく転倒。

そのあまりの凄まじさに声をかけるのすら忘れカナリアはのぞき込んだ。刹那、老人は鼻水と涙と鼻血でぐしゃぐしゃになった顔を上げた。

何とも嬉しげな表情で。

(うわぁ・・・関わりたくねえ)

本能的に変人と悟ったカナリアは慌てて身を引いた。

しかし、老人はしっかりと彼の手を握りしめる。

何故かしつとりとした手で。

「若様ぁ、お怪我はありませんか！」

「あんたこそ大丈夫かよ!? 特に頭」

「幸いじいやはこの年でもふさふさでございますぞ！」

「いや、そう言うことではなく！」

自らをじいやと呼んだ老人は「何故かしつとりした手」でカナリアの顔やら髪やらを触りまくる。

ぞわり、と鳥肌が立った。

「お、俺はあんたに若なんて呼ばれる覚えはねえぞ」

「何をおっしゃっているんですか! 世の中ラブ&ピースですぞ!」

「あんたこそ何をおっしゃっているんですか」

転んだ拍子に頭を強打したのだろうか。

あまりにも頓狂な受け答えに狼狽える。

「じいがあなたを見間違っ訳がございません。ああ……白く透き通るような肌、宝玉のような瞳……美しくウェーブする漆黒の髪……今日もじいやの心を驚づかみんぐ」

五十も過ぎたおじいちゃんに、ぺ。ちゃんの様なキュートな顔でウインクされても。ねえ。

「凄い勢いで褒めているな。このただのちぢれ頭を」

「黙らぬか！ エロメガネ！ このお方をどなたとヨーソロ！」

「どうしてその文脈からヨーソロが出てきますの！？」

「エロメガネ……」

完全に無視をした老人はテンションを激しく上げていく。

「恐れ多くも先の副将軍水戸光……ぐはっ！」

飛んできたメスを額に受け、老人は後方に倒れる。

何かを成し遂げたような清々しい笑顔でマリリンが笑う。

「いやあ、間一髪だったな！ 著作権法に引っかかる所だっただろう？」

「お前……さりげなく暴言に関して制裁を加えただろう」

「何のことだ？ ああ、今日も良い天気だなあ」

「……恐ろしくどんより曇ってますわよ」

局所的にどんよりと。

その中でマリリンだけがきらきらと輝いている。

こんなにすっきりとした表情のマリリンを見るのは久しぶりだ。

それはともかくとして、とカナリアは頭にメスを喰らった老人を見る。

（これは……完全に死んだだろうな）

病院で病気とか関係なく死人が出るなんて、世も末だ。しかも医者自らとどめを刺すという念の入れよう。

「うーん、どう始末するか……」

倒れた老人の脇にしゃがんで彼は刺さったメスを引き抜く。

瞬間、老人が勢いよく半身を起こした。

「おお！ 若様自らじいの心配をして下さるなど、何という幸せ！」
「う・・・！ 生きてたのか！」

「当然だ。医者が人を殺す訳ないだろう・・・ちっ」
普段通りに戻ったマリンは黒い顔で舌打ちをする。

さりげなく聞き流して、と言うよりは老人が激しく迫ってきたために突っ込みを入れることが出来なかった彼は顔を近づけてくる老人を何とか押しやる。

「何を勘違いしているか知らないけどな、俺は若でも光圈でもないぞ」

「何と！ まさか若様記憶喪失に！！」
「違うだろう」

誤解が解けるまで三十分ほどお待ち下さい。

誤解が解けたところでカナリアは軽く話を整理した。

ハマール家の当主であるエトスはシェラン王ハーレルの命令で近頃アインハイトや近隣の国で起きている「切り落とし」と言われる事件を調べていた。人や亜精霊種の手足などを切り落とし、持ち去る者がいる。犯人を見つけ出し拘束、あるいはその場で処刑しろ、というのが命令だった。

軍頭としてエトス、補佐役として執事のルース（老人の名前）が付き五十人ほどの部隊でレバンの北側に位置する要塞都市ドルシュを訪れていた。

ところが、駐屯地を定める間もなく部隊は何者かに襲われ全滅する。

残されたエトスとルースは必死に逃げるも、執拗に追いかけてくる者によって再び襲われ、ルースは彼とはぐれてしまう。

エトスを捜し三日。

彷徨った挙げ句辿り着いたのがレバンの外れ。行き倒れ、リン診療所に運び込まれることになったのだ。

「取り乱してしましまして申し訳ありません、カナリア様」

「分かってくれたなら良い。・・・その、様つてのは止めてくれよ」

「はい、カナリア様」

「いや、だからさ・・・ま、いいか」

もう突っ込みを入れすぎて疲れ果てていた。

これ以上突っ込みを入れても話が滞るだけなので諦める。

「ところで、そのエトスさんはそんなに似ていますの？　これに」

「これとか言うなよな」

ルースはマリンによって付けられ、マリンによって治療された額を撫でながら答える。

「はい、それはもう。未だに若様で無いというのが信じられないくらいに！　おお、そうでした、私エトス様の肖像を肌身放さず持つておりましたぞ！」

そう言って老人は首から下げているロケットを開いて見せる。

中に描かれた肖像は貴族の青年が薔薇を一輪持った肖像画だった。小さくてはつきりと見ることは出来ないが、その外見は確かにカナリアに似ている。

目に見えて笑いをこらえている感じのキッシュがふるふると震えながら呟く。

「こ、これは本当に・・・」

「何だよ」

「う、胡散臭い感じがそっくりですわ」

後方でぶふつ、と奇妙な音がした。

マリンが明後日の方向を向いて肩を振るわせている。

「お前ら……」

自分でもそう思ってしまったために、彼らに激しく突っ込めない。
ブルーだった。

肖像画の青年の瞳も、カナリアの気持ちも。

Story 3 滅亡の系譜（4）

4 拒絶

「ああ、来ていますよ、エトスさんを捜して欲しいという依頼」
依頼書の束をめくりながらマスターは頷いた。

この辺り一帯の便利屋への依頼は銀の麦を通して行われる。そのほとんどをマスター自身が管理しているため、普通の便利屋達よりも彼の担う仕事の方が大きいだろう。酒場を経営しながらこれだけの仕事を捌ける人間はそうそういない。

カナリアやアンナが手伝いをすることはあるが、それぞれ便利屋と情報屋という別の仕事もあるために入り浸っている訳ではない。最近ではエリーが店を手伝ってくれるので楽になったと言っているものの、彼女がこの店で役立っているのかは疑問だ。

カナリアは陶器のカップを置いて確認するように頷く。

今日はまだ仕事があるためにアルコールは飲んでいない。

「その仕事、俺が受けるからな」

「ルースさんに関わったから気になるんですか？」

「も、あるけど、他の連中が受ければ十中八九俺と間違っだろう。そうになったらいちいち対処が面倒」

「確かに」

マスターは口元に手をやった。

「お二人は・・・瓜二つですからね」

「笑うなら笑えよ」

必死に笑いをこらえている感じの彼もまたルースに例の肖像を見せてもらった口だろう。口角がふるふると震えているくらいならいっそのこと笑ってもらった方がありがたい。

彼は頼杖をついてあさつての方向を向く。

すかさずマスターが謝った。

「すみません、つい。でも、他人でそこまで似ているのは珍しいですね。血縁とか無いんですか？」

「どうだろうなあ。実際に会ってみなきゃわからねえ」

「・・・生きていると思いますか？」

「どうだろうな」

カナリアは微かに笑う。

おそらく普通の状態ではないが、エトスは生きている。あのエンブレムがきちんと形として残っているのが何よりの証拠だ。気になるのは光が緑色であったこと。通常の状態であれば色は青く輝くはずだ。

瀕死であるか、あるいは魔法にかけられた状況であるか。どちらにしても良くない状況であることは確かだ。

「今日の仕事が済み次第ドルシュの方へ行く。アンナにはハマー家の事を詳しく調べるように伝えてくれ」

「承知しました」

「マスター、カナリアこっちに来てる？」

大きな紙袋を抱えたエリーが店内に入ってくる。

その後ろからやはり大きな紙袋を抱えたルースが入ってくる。

「ええ、来ていますよ」

「ああ、良かった。ルースさんがね、折り入って頼み事があるんだって。これ、頼まれていた買い物」

「ご苦労様です。随分と多いようですが、頼んだのはレモン二つでしたよね？」

カウンターの上に紙袋を置くと、ルースもそれに習ってカウンターの上に袋を置く。衝撃でころりとレモンがこぼれた。

「八百八さんにオマケしてもらっちゃった　多すぎて困っているところをルースさんに助けてもらったの」

マスターはにこにこルースに頭を下げる。

「それはありがとうございました」

「いえいえ、私も声をかけましたらカナリア様のご友人と言うことで泥船にのったつもりで大盤振る舞いでしたぞ！」

「いや、それ色々間違っているし。つか、誰もこの八百八の異常さに突っ込みなしか？」

「おお、キレのいい突っ込み！ さすがカナリア様！」

褒められても嬉しくないところで褒められて彼は微妙そうな顔をする。

しかも、彼の突っ込みがキレがいいかどうか微妙なところだ。

「・・・で、頼みつてのは何なんだよ」

「おお、そうでした。お美しい御髪に見とれて忘れておりました」

「え？ 見とれてたの！？ っていうか見れてたの！？ その目で！」

「エリーさん、それは暴言ですよ」

ルースは彼女の暴言を気にせず続ける。

目が細い事に関して言われ慣れているのか、もう既に（エトスそつくりの）カナリアしか眼中にないのか。

とにかくルースは本当に気にしていないようだ。

「実は、あなたにエトス様の身代わりをして頂きたいのです」

「身代わり？」

「若様の身代わりになるのはあなた様しかいらつしやりません！

おおおおお、若様の替え玉とは淫靡な響き！ じいは何だかぞわぞわしてきましたぞ！」

頬を赤らめるルースさん（58歳）血管が切れて今にもぶっ倒れそうな程に興奮している。

「それを言うならゾクゾクだし、お前のその反応間違っているぞ」

「ルースさん、鼻から血が出ているよ！」

「おお、これは失礼を！ 興奮しすぎました！」

何をどう想像してそうなったのかは知らないが、カナリアはじつとりと嫌な汗をかく。

ルースはマスターから受け取ったタオルで鼻血を拭きながら恍惚の表情でカナリアを見つめている。

関わりたくない。

本能的に思ってももう遅いだろう。仕方なく話だけでも聞くことにした。

「んで、何でもまた身代わりなんか。生きているなら探すのにそんなに時間はかからないと思うが」

「それが、そうもいかないのです」

「何で？」

「実は事件の報告もかねて今月中に陛下に謁見せねばならないのです」

「・・・ハーレルに？」

「そうです！　しかも陛下直々に個人的な会食に誘われております。これは先代の時には叶わなかった悲願・・・ああ、だから若様は素晴らしい！」

王の血縁とはいえハマー家軍人の家柄。色々な貴族達を集めた晩餐会やパーティーなどならともかく、個人的な会食に誘われるというのは確かに先王の時代には滅多にないことだった。

現在の王ハーレルは国が大きく傾いている時期に貴族達特権階級が無駄な時間と金を使わないようにと、そう言った大々的な催し物は先王の時代の半分以上までに減らしている。

当然起こる貴族達の反感や不満を和らげるために、ハーレルは個人的な会食を増やしているのだが、ルースにしてみれば誘われた事が重大であってその希少価値などどうでもいいようだ。

悦に入ったルースをカナリアは冷たく睨んだ。

「そんなもんは体調が優れないとか適当なこと言って断れよ」

「なんとおこがましいことを！　若様が約束を違える男と思われるても良いのですか！　それは頂門の一針ですぞ！」

「そんなの俺には関係ない！」

また微妙に間違ったルースの言葉にカナリアからの突っ込みはな

い。

その代わりに怒号のような声が響き、一同は驚く。彼は怒るという意思表示はきちんとする人間だが、こうして声を荒げることなど滅多にない。

おそろおそろという風にエリーが問う。

「どうしたの？ カナリアがそんな風に言うなんて珍しい」

彼は決まり悪そうに俯く。

「……、悪い。だけど、その仕事は受けられない」

「何かあるの？」

「俺は城には行けない。個人的な会食なんてもつての外だ」

彼が仕事を拒否することも珍しい。

元々何でも引き受け、何でもこなすから彼は掃除屋と呼ばれるのだ。よほど無茶な仕事でない限りはスケジュールさえあれば引き受けてきた。

最近この酒場で手伝いをしていたエリーはそのことをよく知っている。

彼女は首を傾げた。

「ひょっとして昔悪いコトして捕まったことがあるの？」

「エリーさん」

それ以上聞くな、と言う風にマスターが止める。

カナリアはうつむいたまま答えた。

「そう思ってくれて構わない」

がたり、とカナリアは立ち上がる。

普段とは明らかに様子が違う彼に誰も何も言うことは出来なかった。

カナリアはそのまま酒場を後にした。

Story 3 滅亡の系譜(5)

5 昔の秘密

「カナリアったら・・・お腹空いていたのかな？」

静かになった店内でぽつりとエリーが呟いた。

さすがに気落ちした風の老人は出直してくると宿泊先の宿に戻った。どっちにしても本人がいなければ話にならないのだ。

マスターは少し笑いをかみ殺した様子で答える。

「そう思いますか？」

「違うの？ だってお腹空くと気が立って人に当たったりするですよ？」

「確かにそうですね。でも、そう言うわけでは無いんですよ。やんわりとした口調でマスターは言う。

エリーは首を傾げた。

「マスター何か知っているの？」

「彼の師である人から少し伺った程度です。彼が自分で言わないのでしたら私から話すような事ではありませんが」

「ししょーってモズさん？」

「知っていましたか」

「うん、前に少し。料理が下手だって事しか知らないけど」

「そうですか。確かに殺人的でしたよ、彼の料理は」
遠い目のマスター！。

表情は笑顔のままだ。

虚ろな。

「た、食べたことあるの？」

「あります。そうですね、例えるとしたら、ドキドキ　ひと夏の

臨死体験、って感じの味でした」

「す、凄いね。そこまで言われると何か食べたくなってくるかも」

「……………良かったですね、モズがいなくて」

「ねえ、その間と笑顔がすごく怖いんだけど」

「やる気無さそうなのに三倍速ね」

「こういう時の依頼は早く終わるんだよ」

アンナに呼びかけられ、彼は振り向かずに応えた。

依頼は思っていたよりも簡単に終了した。自宅に戻ったカナリアは軽く旅支度をしてドルシュまで向かうつもりだった。

一度引き受けた以上、最後までやり遂げるか、あるいは誰か信頼の出来る人間に引き継ぐのが彼のやり方だ。私情で依頼を蹴ることなんてできない。

「これからエトス搜索に行く。話は聞いているだろう？」

「ええ。けれど、残念ね、あなたに食べさせるタンメンはないわよ」

カナリアは苦笑いを浮かべる。

「……マスターが？」

「そうよ。私とノー娘。コンビで新境地にデビューよ」

「そうきたか」

マスターは仕事に関しては厳しい人だ。

こちらの事情を多少は把握しているであろう彼はカナリアが城に行きたくない理由の見当も付いているだろう。だからといってルー

ス本人の前で出来ないと言い切った彼に、関連の仕事がこなせるとはどうてい思えなかったのだろう。

依頼はアンナとエリーに任せ、彼は外されたのだ。

その判断は間違っていない。

平等で冷静な人だと思う。

「口には出さないけれど、小鳥ちゃんに依頼を請けて欲しいのよ。だから私が説得しに来てあげたわよ」

「何かいちいち偉そうだな・・・って、どうしたんだ、お前のところの黒猫は！」

振り向いて彼女の頭の上に乗っている物体を見てカナリアは驚愕の声を上げる。

通常の倍以上に膨れあがったジェラートの姿。よく見るとまるで全身をアフロにしたように毛が縮れている。

「どうって、何が？」

「異常に・・・膨らんでいるような」

「ああ、これね。さっきマイタケを食べたせいよ、私が」

「それが原因！？」

マイタケから突っ込むべきか、アンナが食べたのに膨らんだのがジェラートと言うことに突っ込むべきか。

相手が彼女なだけに、どちらの突っ込みも有効ではなさそうだ。

「・・・俺は、城には行かないぞ」

「行ってくれたらもれなくこの『ふわふわもこもこのチョコ』可愛いジェラートさん」を付けるから何も怖がる事は無いわよ」

「まずその黒猫が怖いから！」

「あら、意外と臆病。そんなんじゃ虎の檻の中で一生遊んで暮らすなんて事出来ないわよ」

「したかねえよ・・・で、どこまで知っているんだ？」

アンナはシャンプーをするようにジェラートをもみながら答える。

「ネコ科の動物で大きいもので体重が280キロ近くあるらしいわ」「虎のことじゃねえよ」

「分かっているわよ」

ベッドに腰を下ろし、黒猫を膝の上に置いた女は嘆息するように息を吐いた。

窓辺に寄りかかってカナリアは彼女の方を見る。

彼自身、自分のことをよく知っている訳ではない。幼い頃の記憶は曖昧で断片的な事が多い。モズや、その前に世話になっていた老師に聞いてそうなった事情や真相を自分なりに推理した程度の事なのだ。

マスターはモズの古馴染みだったから、ある程度の事までは知っている。だが彼女はどのようなのだろうか。情報収集能力に長けた人だ。マスターが喋らなかつたとしても知っている可能性だってある。

「あなたのことなら何でも知っている、と言いたいところだけどね、私は何も知らないわ」

「そうか」

「昔は泣き虫だったとか、女の子みたいに可愛かったとか、闇市で迷子になって売り飛ばされそうになったとか、そのくらいしか知らないわよ」

「うわあ、知られたくない奴に過去の失態を知られたよ」

アンナはにこりと笑う。

「大丈夫、それで脅して実験台になってもらおうって計画立てているから」

「大丈夫じゃねえな、それ」

お先真っ暗。

激しい頭痛に頭を抱える。

彼女は真顔（？）に戻って言う。

「冗談はともかくとして、あれだけ派手な活動している割に小鳥ちゃんの生態は謎に包まれているのよね。原因はおそらくあなたの師匠だけだ」

「出生とか言えよ」

「もずもずのウハウハ隠蔽大作戦　のせいで私がこんなに苦労す

るとは思っていなかったわ」

「何だよその作戦名は」

溜息と同時に肩の力も抜ける。

こうして彼女と話をしていると自分の悩んでいたことが馬鹿馬鹿しいことのように思えてくる。アンナの言動に癒されるのは重症である証拠だ。

本当はそこまで思い詰めるほど深刻ではないはずだ。いや、深刻なのは本当だ。けれどもからこそ自分はこの国に留まっていたのだ。目的を果たすためには城に行く必要なんてないけれど、拒んで悩み続けるよりは今ここで解決してしまった方が容易い。

自分としてではなく、エトスとして行くのだから、もうこれは自分の心の問題なのだ。

彼は自嘲気味に笑う。

「分かったよ」

「何が？」

「その依頼請けるよ」

アンナは喜々として答える。

「あら、じゃあついに私の実験台に・・・」

「そっちなじゃねえよ」

Story 3 滅亡の系譜（6）

6 襲撃

略式であつても「正装」と呼ばれる貴族の服を身に纏つて彼は顔をしかめた。

軍人の家らしく、どことなく鎧を思わせる衣服に砂避けよつものマントを羽織り、それをエトスのエンブレムで止めている。

誰の指図か、さりげなく袖や内側に投げナイフを隠せるような細工のされた服は彼に似合っている。

こうしているとカナリアでも階級の高い人間に見えるので不思議なものだ。

「思いのほか動きにくいな」

普段着慣れない衣装を着るとやはり動きにくいものである。

「何もレバンからこういう格好をしている必要はないだろう？」

嫌そうにする彼とは対照的にルースはにこにこ微笑みながら答える。

「いいえ、いつボロが出るかわかりませんから、慣れておく必要があるんですよ。そう言うわけで、若様とお呼び致しますぞ」

「言っていることはもつともだが、鼻血拭いてから言ってくれ」

「ち、違いますぞ、これはチョコレートを食べ過ぎたのであって決して、エトス様そっくりなコスプレに萌え、悶え！」なんていう現象ではありません！ ぶはっ！」

「うわっ！ キタネ」

ルースが出した血しぶきを避けながら、彼は前途多難な雰囲気を感じていた。

別人と言うことは分かっているようだがどうやら彼の外見を非常に気に入っているらしい。そのおかげでカナリアの言動一つですぐに「あちらの世界」にぶっ飛ぶ。このままいくと首都ラグネに着く前にどちらかの血管が切れそうで怖い。

・・・もう既にルースの鼻の血管は切れているようだが。

「おお、そうこうしている間に馬車が来ましたぞ」

「・・・服は準備したくせに馬車は供用かよ」

「準備が間に合わなかったのです。別に、その美貌を世間に晒そう大作戦’ではありませんぞ！」

「・・・鼻血拭けよ、じじい」

「ぶはっ！ その言い方エトス様そっくりです！」

カナリアはまだ会ったことのないエトスに同情する。

こんなぶっ飛んだ執事と毎日暮らしていたのだから、心労も相当なものだろう。ひよっとすると彼はこの人から逃亡したのかもしれない、という根も葉もない予感がカナリアの中に生まれたのは気のせいでは無かった。

馬車に乗り込むと既に一人乗客の姿があった。

供用馬車はここからいくつかの街を経由してラグネへと向かう。

実際全て同じ馬車で行ける訳ではないが、運営するのは同じ商家の者だ。供用と言っても庶民の使う馬車ではない。中流階級以上が使う程度の良いものだ。左右にある座席は少しでも快適な様にクッションを付け、周りにはそれらしい装飾が施されている。

普段ならば滅多なことで馬車は使わないし、使うとしてももっと安価な馬車を使うのだが仮にもハマー家の人間がそんなものを使う訳にはいかず、ここはルースに従うことにした。

乗客はどうやら女性のようにだったが、フードを被り、こそこそと隠れるように馬車の隅に丸まっている。

ルースは少し首を傾げた。

「おや、この馬車には護衛がないですね」

通常この手の馬車には盗賊対策に護衛が同乗しているものだ。

その姿が見あたらず彼は少し不安そうな表情を浮かべた。

「いざとなれば俺が戦えるから大丈夫だよ」

「ですが万が一にもあなた様にケガなどあつたら・・・じいは、じいは・・・！」

「いちいち迫るな！」

「あ、あの・・・」

女が顔をおずおずという。

必死にフードを引つ張つて顔を隠そうとしていた。

「その、護衛は・・・私なんですっ！」

「あんたが？」

カナリアは彼女の方を見る。

とても護衛が出来そうな人には見えないが、戦闘となると正確がらりと変わる人間も何人か見ているために不信感は無かった。

だが、彼女は彼の視線を不審と不満の目と感じてしまったようだ。突如怒濤の様に謝り始める。

「す、すみません！ すみませんっ！ 私のようなものが馬車にただ乗りしてラグネに行くために護衛なんかしてしまつてすみませんっ！」

「いや、謝らなくてもいいから！ っていうか、俺にそんな告白されても困るし！」

「おお！ 早速ご婦人に愛の告白をさせてしまうとはさすが若様！」

「愛の告白じゃねえ！」

「すみません、すみません！！ 勘違いさせてしまつて申し訳ありません！」

「だから俺に謝るなつて！・・・くそ、マジで前途多難」

がたん、と音を立てて馬車が走り始める。

振動でよろめいた彼女のフードがふわりと外れる。初めて素顔を見ることになった男性陣はその容姿にぎよっとする。

「あ、あんだ」

「ぎゃー！！ すみません！ こんな醜い姿をさらしてしまい申し訳ございません！」

「いや、醜いなんて・・・」

醜いどころか、綺麗すぎた。

金色の髪に宝石のような緑の瞳。真珠の様に輝くような肌。整った顔。好みか否かは人それぞれだろうが、よほど外れた美的センスの持ち主でもない限り彼女を美女と評価するだろう。

驚いている彼の様子を完全に別の意味に取り違えた彼女はわたわたとフードを直し始めた。

「醜いどころではなくもはや嫌悪を覚える程の！？ すみません！ すぐあなた様の目に触れない様に致しますので！ どうぞ命だけは・・・ガタガタ」

「ガタガタって口で言ってるし！」

「私どもは命をお取りするつもりなんてありませんよ。むしろあなたは美人・・・」

「そんな無理に褒めて下さらなくても！ いいんです、分かってます。以前絵描きに絵を描いてもらった時、この世のものとは思えない顔で森一つ吹き飛ばしてしまうほどの破壊力があっただんです！ ですから・・・ですから分かってるんです」

彼女の美的感覚がおかしいのか、絵描きが彼女を書くことが出来なかったか。あるいは、絵描きが抽象画を描いたか。可能性はいくらでも考えられるが、自分が不細工だと思いこんでいる彼女には何を言っても通じそうにない。

ふと、カナリアは以前会った亜精霊種の事を思い出す。

リーティアは弟共々随分と個性的な感覚を備えていた。ひょっとしたら、あの一族の誰かが彼女の絵を描いたのかもしれない。

「その絵描きつて……ん？」

彼は険しい表情で外を睨んだ。

「どうかされました？」

「え、私、また、何かしましたか！？」

「静かに」

カナリア彼らを制して外の様子を窺う。

がたがたと揺れる馬車の音に混じり、遠くから何かキリキリという音が混じってくる。

矢をつがえた時の独特の音。

「伏せる！」

叫んでルースと女の頭を床ギリギリまで押し下げる。

ひゅん、という鋭い音。

はめられたガラスが割れ、馬の嘶きが響く。

馬車が大きく揺さぶられた。

ごん、という音と共に、ルースの悲鳴が聞こえたが無視をした。何者かに襲われたのは明白だ。馬車が襲われた場合、盗賊と思うのがセオリーだ。しかしまだ街から出て間もない。盗賊にしては随分と街に近い位置で襲ってきている。

普通なら乗っている者を全員殺害し、後からゆつくりと金品を強奪するために、街の応援が駆けつけにくい場所で狙うのが普通だ。そして、こんな少人数しか乗っていない馬車を襲うことも少ない。護衛が乗っている可能性が高い以上、それを倒す労力を考えると割に合わないのだ。

（そうなると、可能性が高いのはエトス目的か）

ルースの話によれば部隊が何者かに襲われたという。

もしもその連中が彼らの生存を知れば再び襲撃してもおかしくはない。

むろんそれ以外の可能性も皆無ではないが、そう考えるのが妥当だ。

（なら、なぜ一気に決着をつけないんだ？）

魔法で馬車ごと吹き飛ばせば簡単なことだ。

だが、そうしないということは、他に目的があるということか。カナリアはナイフを袖から引き出した。

「若様！」

「大丈夫だ。目的は知らないが、苦戦するような相手じゃない」

冷静に言ってみたものの、実際どうだか分からない。

矢を射た者は確かに未熟で気配も殺せないような相手だ。苦戦するようなものではない。だが、単独で襲ってくる事はまずない。すなわち、それは囿で他に気配を殺して潜んでいる連中がいるのだ。

これだけ完璧に気配を殺しているとなれば苦戦は否めない。

彼は息をぐつと飲み込んで馬車の外へ躍り出た。

Story 3 滅亡の系譜（7）

7 情報収集

要塞都市ドルシュ。

大昔、その辺りはラン王国の領土であったが、現在はイステイアとシェランの国境に跨る都市である。故に三国がそれぞれ自国の領土と主張するも現時点でどの国の支配も受けていない。

独自の法を持ち、その都市自体が国であるような場所。

いつの時代に立てられた建造物なのか知らないが「城」と呼ばれる街の中央にある要塞はありとあらゆる攻撃を跳ね返してきた。その庇護にあやかるように街が作られている。

城の中に入ることこそ出来ないが、この街ではほとんどのことが自由で黙認されている。自由で治安も良くないこの街で殺人事件が起こったことは一度も起こってはいない。

「一度も？」

アンナに言われて彼女は首を傾げる。

この街がいつ出来たのかは知らないが、その間に殺人事件が一度も起こらないというのは奇妙な話だ。ただのケンカでも人が死ぬことはある。

「死体が見つからないって言った点ではね。この街では死体も商品なの。だから、その辺で見つけてもすぐに誰かが処理をする。死体が見つからない以上、ここでは殺人事件が起こらない。「王」が死体を食べる、とか死人使いとかいう噂もあるわ・・・両手を上げて言えないけど」

「それって、大きな声で言えない、の間違いだよ！」

「ああ、そうとも言っわね」

アンナはくすくすと笑いながら鶏団子スープをかき混ぜた。

ドルシユの街に到着してすぐに彼女はお世辞にもキレイとは言えない飲食店に入った。料理はおいしいものの、雰囲気は良いとは言えない。エリー一人では到底入る気になれない場所だ。

居心地が悪そうに店内を見渡して、アンナに耳打ちをする。

「・・・ねえ、私たちって場違いじゃない？」

「そうね。ジェラートさんがいれば三角関係に見えたけど、私たちがたと少しそっち系の趣味みたいね」

「？ そっち系って？」

「・・・、やっぱり小鳥ちゃんの方が面白いわね」

「ええ？？ 私パートナー失格！？」

からかったつもりでも相手が分からないのなら意味がない。これがあの黒髪が相手だったら楽しい反応を返してくれるところだ。

「失格という訳ではないわ。仕事とは全く関係の無いことだもの」「ならいいけど、」

少しほっとした様子で言葉を切り、少し言いにくそうにエリーは首を傾げる。

「・・・ねえ、カナリアとアンナちゃんってどういう関係なの？」

「食うか食われるかの関係よ」

「そんな激しいの！？」

「嘘。ただの仕事仲間。あなたの期待しているような関係ではないわね」

「期待って！ 別に私は・・・何も」

真っ赤になって否定しつつ、彼女の声は次第に小さくすばまっていく。

すかさずアンナは問い返す。

「安心した？」

「え？ 何で！ 私のようなものが！」

「言葉遣いおかしいわよ、ぶっとび執事のルーちゃん並ね」

「え？ それって比較級！？」

「最上級よ」

「きゃあ！ 私ってばなんてことを！ 恥ずかしい！」
顔を覆って嘆くエリー。

カナリアの様な鋭さはないが、からかいがいのある相手には間違いないようだ。ただボケ、ボケのコンビではぐだぐだになりやすい（これは気を付けないといけないわね）

ヴィクレアの魔女ともあろうものが、こんな半端な笑いで満足してはいけない。

「・・・ああ、話が脱線事故を起こすところだったわ」
「事故！？ って、何が！」

「こつちの話よ。・・・場違いと言ったけど、私とジェラさんはよく来るのよ」

「そうなの？」

アンナは頷く。

この街はあらゆるものが集まる。情報も、真実であれデマであれ、幅広く集まってくるのがこの街だ。信頼できるソースさえ手に入れば簡単に情報収集は可能だ。ドルシュ近郊で小部隊とはいえ全滅する人数が死んだとあれば、ここに情報が流れ込んでいないわけがない。

テーブルにどかん、と大皿料理が運ばれてくる。

屈強そうな巨漢がアンナを見下ろしてにやりと笑う。

「よお、魔女。そろそろ来る頃だと思っただぜ」

アンナは男を見上げて口の端を上げる。

「繁盛しているわね」

「おかげさんでな。・・・目的は大体見当は付くが、一応聞いておく。何を知りたい？」

「……で、思わせぶりに回をまたいだくせにこのオチか」

カナリアは地面にしゃがみ込んで溜息をつく。

その様子を見てツインテールの少女は妙に偉そうに腰に手を当てる。

「何よ、文句あるの!？」

「大ありだよ。馬車を破壊して……客や母親にケガさせたらどうするつもりだったんだ、匂い袋の長女!」

少女はきつとカナリアを睨み付けた。

「ジャスミンよ! しかも匂い袋ってフローラル一家だって言っているでしょ、物覚えが悪いわね、黒頭!」

「じゃじゃじゃジャスミンちゃん、人様に罵声を浴びせるなんてそんな恐ろしいことをを!」

「どもりすぎよ、お母様! しかも私の名前で」

彼女は母親に突っ込みを入れる。家族だろうが他人だろうがお互いのテンションは変わらない。これがフローラル一家の長女と母の素なのだろう。

前回エリアード関連で会った時は覆面をしていたため、顔まで見られなかったが、母親に似て美人に鳴りそうな顔をしている。活発な印象を与えるツインテールが少し幼さを与えているが、彼女にはよく似合う。

「お知り合いですか、若様」

「若様ではなくカナリアが、な」

馬車に矢を打ち込んできたのは彼女だった。

母親に連絡を付けるために矢文を車体に刺すつもりが誤ってガラスを割ってしまったようだ。傍迷惑な親子だ。それにしても、護衛の女がまさかあのフローラル一家の母親だとは、偶然というのは恐

ろしい。

「それで、何を伝えに来たんだ、ジェイ」

「勝手に人を略称で呼ばないでよ。大体、同業者に易々情報を漏らすわけがないじゃない……って言いたいところだけど、今回は迷惑かけちゃったし、教えるわ。切り落とし事件のことよ」

ぴくり、とルースが反応する。

「……もしや、ハーレル王に頼まれて？」

「そうよ。大々的に調査を行っているらしいわね。ひよつとしてあなた達も」

そうです、と答えようとするルースの口を押さえ、カナリアは首を振る。

「いいや、俺はこのじいさんの依頼で謁見につき合うだけだ」

「ふうん、それでそんなステキな格好していたの。………」
「似合わないけど」

「余計なお世話だ」

「若様つたら……爺やの口を押さえ押し倒すなんてなんて大胆な……」

「押し倒してねえよ。……ルース、少し黙っててくれないか。話が續かない」

顔を赤らめるルースを黙らせてジャスミンの方を向き直る。

「悪いが、もう少し詳しく聞かせてくれないか？」

うん、と彼女は何の疑いも無く頷く。

彼が本当に関わりないと思っているのか、あるいはその気になればすぐに調べられると思っっているのか。

易々と情報提供をする彼女の顔には何故か誇らしげな表情が浮かんでいる。

一人で調べたのだろうか。

彼女の情報提供はアンナに比べると見劣りはするが、的確に調べている。

フローラル一家がそれなりに名のある便利屋であるのは、それぞ

れの得意分野を生かしているからだろう。

「・・・って訳。どう？ よく調べてあるでしょ？」

「ああ、上出来だ。見直したぞジャスミン」

胸を張る彼女の頭をぼんぽんとたたくように撫でると少女は赤面した。

「なななな、何よ、女の子の頭を気軽にたたくなんて、信じらんない！ ばか」

「ん？ ああ、悪い」

「ときめいちゃったじゃないの！」

罵声を浴びせておいてときめいたんですか、お嬢さん。

「もう、今度あった時は覚えておきなさいよ、私はジャスミン・フローラルよ！ 鳥頭！」

呆然とするカナリアに向かって更にボケ、カスなどと罵声を浴びせながら少女は森の中へと入っていく。

その様子を黙って見守っていたルースはにたりと笑う。

「モテモテですな」

「・・・いや、何かもてたって感じがしないんだが」

「すみません、すみません！ 娘がときめいちゃってすみません！」

Story 3 滅亡の系譜（8）

8 王の品格

シェランの首都ラグネについてすぐにルースは親書を城へと送った。

元々、ハーレルの方から誘った会食だ。やって来た者を待たせるのは威信に関わると思ったのだろう。ハーレル王はすぐにハマー家の人間が滞在する場所へ使者を送った。

王都ラグネについて間もなく城内に入ることになった二人は、使者に案内されるままに食堂へと入っていった。

「ああ、待っていたよ」

部屋に入るとすぐにハーレル自らが出迎えた。

王は、カナリアより十歳以上年上なのだが、同年代かもう少し若くさえ見える。癖のある金色の髪に青い瞳。顔立ちは父親である先代王より、母親に似たのだと印象を受けた。

カナリアは恭しく頭を垂れながら周囲の様子を窺った。

微動だにしない飾りの鎧の中に人の潜んでいる気配がするのは、万が一に備えての事だろうか。妙に兵士の数が多いのも気にかかった。警戒を怠らないようにしながら彼は答える。

「陛下におかれましてはますますご健勝のことと・・・」

「いや、堅苦しい挨拶は止めよう。私と貴方は同じ先々代の血を引く者同士。兄のように思ってくれると嬉しい。・・・ああ、それにしては父によく似ている」

ハーレルはどこか懐かしそうに目を細めた。

髪の色はともかく、エトスの外見は確かに先代フェネル王に似ている。つまり、カナリアも似ていると言うことになる。

「陛下と若は従兄弟にあたりますから、似ていて当然でございましょう」

「ルース、相変わらず物言いが冷たいね」

「……冷たい？」

確かに今のルースの口調は冷めている。だが、カナリア（というよりエトス）を褒め称える時は異常に暑苦しかった。

このギャップは何なのだろう。

「彼は僕の教育係だったんだよ。そのころからこうだった。従兄弟殿も苦労しただろう？」

カナリアはルースを振り返った。

ルースは頬を赤らめる。

「わ、若様、そんなに見つめられるとじいは心ドキウツキウキで死んでしまいます！」

「ルース！ 場をわきまえろ！ つーか、目を閉じてキス待ちするな！」

「な、何と！ 若様が冷たい！ ええええ、エトス様を失ったらじいはどう生きてゆけば良いのですか！」

「あはははは、従兄弟殿は随分とルースに気に入られたようだね。」

ルースがこんなに取り乱したのを見たのはシェリルがいなくなった時以来だ」

ルースが険しい顔をしてハーレルを睨む。

「……シェリル様は貴方の妹君ですぞ。笑って話すことではございせん」

金髪の王はうんと頷く。

「知っているよ。けれど、母違いであるし、いなくなったのは私が王位に就く前の話だ。そんな昔のこと、目クラゲを立てて怒る事ではないよ」

「目くらです、陛下」

クラゲが立ったらちよつと怖い。

つい、敬語で突っ込みを入れてしまった。

ハーレルは声を立てて笑う。

「あはは、従兄弟殿は突っ込みだね。．．ルース、私のことを気に入らないのは分かるけどね、過ぎると、'大好きな若様'に恥をかせることになるよ、分かってる？」

「．．．．」

彼はぐつと押し黙った。

いくら偽物だからと言っても、カナリアに恥をかかせることはエトスに恥をかかせることに等しい。

彼が黙り込んだのを見て、にこり、と王は笑う。

「それじゃあ、事件についての話を聞かせてもらっても構わないかな？ 食事時にするような話ではないけれどね」

年齢不詳の王に促され、カナリアは席に着く。

その真後ろにルースは立つ。

王と同じテーブルに着くのを拒んでいるかのような行動だ。

ルースは王の目を盗んでカナリアに耳打ちをした。

「．．．．くれぐれもお気を付け下さいね」

「何をだ？ 俺の後ろで変質者の如く鼻息を荒くしている奴にか？」

「若様の背後を狙う輩が！？ むう、おのれ！」

「．．．お前の事だよ」

運ばれてきた食事は豪華なものだった。

豪華であるが、おいしいものかと聞かれればそうでもない。何か含むところのありそうな品選びに困惑する。

王も、ルースも、どう考えても好意的ではないのだ。エトスとしての立ち居振る舞いを学ぶためにルースから一通りの事を聞かされていたが、どうもそれ以外になにかあるようだ。

これはルースに一杯食わされたかもしれない。

食事を取りながらカナリアは王に「切り落とし事件」の報告をする。

部隊が襲われたこと、そして、ジャスミンたちから入手したこと。となると、こういう事だね。切り落としの犯人は少なくとも二組

存在する。一方はこう切れ味のいい刃物で切ったように切り口が綺麗で、もう一方は」

だん、と彼は荒々しく肉にナイフを叩き付けた。

ソースが飛び散り、王の服やテーブルクロスに黒い斑点を落とす。とても王という人間が食事中にする行為には見えなかった。

「いずれ、フローラルから報告があるかと思いますが、そう言うことです」

ふうん、とハーレルは興味無さそうに頷いてからナイフに着いたソースを舐める。

切り落とし事件は最初アインハイトで起こった。鋭い刃物で切り取ったような綺麗な傷口。持ち去られた腕。被害者は生きている上目撃者も多数あったが、犯人に関する明確な情報はない。それが始まりの事だ。

それ以外に切り落としの事件が存在する。それはシェラン内で起こり、無理に叩ききったような荒々しい傷跡。落とされた部分は同様に持ち去られている者の、被害者は亡くなっている。そして、目撃者はほとんどない。

模倣して恐怖を煽る為か、金品を強奪するためか。

あるいは誰かの死を目立たなくするために、誰かが行ったことか。もしそうだとすれば、エトスの部隊を襲った犯人は模倣された側の切り落としの犯人と同様の可能性が出てくる。

初めから彼を殺すために、事件を起こし、彼をドルシュに行かせたのだ。

ハーレルか、ルースのどちらかが。

（・・・ルース？ そうか！ そう言うことか！）

「どうかした？ 従兄弟殿」

「ああ、いえ何でもありませんよ。それより陛下、本当は別のことを聞きたいのではないですか？」

問いかけると彼は食事の手を止めて興味深そうに顔を傾けた。

「例えば？」

「どうして、生き残ったのか、と」

「意味が分からないな」

「では、こちらから質問してよろしいですか？」

「認めるよ」

「お前、誰だ？」

問いかけると、ハーレルは乾いた表情で笑う。

慌てたようにルースが声を上げた。

「え？ 私はルースですよ！ お忘れですか若様！」

「お前じゃねえよ」

Story 3 滅亡の系譜（9）

9 黒猫大作戦！

「何か、勘違いしているようだね、従兄弟殿」

王は乾いた表情で口の端を上げた。

カナリアはゆっくりと腰を浮かせる。

「私はハーレルだ。それ以外の何者でもないよ」

「それにしても品性の欠片もないな」

「私にそう言う口の利き方をすることが、どういう事か分かっているのかい？」

「当然の事だ」

飾り鎧が動き出すのと、カナリアが立ち上がりながら両手に仕込んだナイフを投げるのは同時だった。

見事な軌道で真っ直ぐ鎧に向かっていくナイフ。

それは確実に甲冑にある僅かな隙間を捕らえていた。

しかし、

「なっ！ 避けた！？」

カナリアは驚愕の声を上げる。

あの重い鎧を着て避けられるはずがない。

しかし鎧は下に沈んで・・・。

「・・・あれ？」

様子のおかしい鎧達にカナリアは瞬いた。

「陛下、鎧が重くて起き上がれませーん」

「しかも、他の兵士達も巻き込んだんじゃないー」

「なっ！ 役立たず！」

どうやら避けた訳ではないようだ。

カナリアは襟に仕込んだナイフを引き抜く。

「刃物マニアですな、そんな狂気の若様もステキですよ！」

「言っている場合じゃないぞ、ルース。あれは偽物だ」

「だから、偽物じゃないって・・・っ！ その構えは・・・」

眼前に水平に構えられたカナリアのナイフ。

目撃したとたん、ハーレルの表情が変わる。

憎悪に満ちたような、悦に浸っているような顔。

「なるほど、お前は鳥の一族の！ それで私を嗅ぎ分けられたのか」

カナリアはにやりと笑う。

「やはりそうか」

「何だと？」

「悪いな、俺は花の匂いを嗅ぎ分けられない雑種なんだよ」

「お前！ オカマ掘ったな！」

「カマをかけた、だ！ そのじじい、何赤くなってるんだよっ！」

まだまだ青春まっさかりのルースさんは心臓を押さえながら真っ

赤になってカナリアを見つめている。

何を期待しているか、分かりたくもない。

「ともかく！ これでお前が偽物だって判明した。本物のハーレル

をどうした！」

「だから、私は本物だよ。身体だけはね」

「！」

「言葉を抜き取る為には殺すよりも同化した方が効率的だからね。

同じ要領で私の配下の者がエトスの言葉も奪うはずだったのだけど、

失敗して殺してしまったと連絡を受けていたからね。お前が生きて

戻ってきて助かったよ」

「・・・悪役は聞いてもないことを良く喋ってくれるな」

挑発するように言う。

冷静さを欠いてくれればやりやすくなる。だが、そんな単純な作

戦には乗ってこなかった。

彼はせせら笑う。

「メイドさんのお土産だよ」

「若様！　じいというものがありながらメイドにまで手を出したのですか！？」

「俺はもう突っ込まないぞ！　意地でも突っ込まねえ！」

「あはは、そういう強気なところ、嫌いじゃないよ。だけど、王の瞳の奥が、闇色に染まる。」

「多少、痛めつけさせてもらうよ」

魔力が満ちあふれた。

咄嗟に投げつけたナイフはあっけなくはじかれる。

カナリアはルースの腕を引いて自分の側へと引き寄せた。

「若様！？」

「来るぞ！」

どっ、と強い魔力の風が襲いかかってきた。

刹那。

黒い影が、

二つの間に割ってはいる。

「！」

黒い小さな塊は、光を帯び、

魔力の塊を吹き飛ばした。

とん、と軽い音を立てて床に舞い降りたのは黒い猫。

見間違うはずもない。

何故だか身体全体がボンバーになっている目つきの悪い奴。

「ジェラート！」

『間に合ったようだな、焼き鳥』

「人を勝手に焼くな！　っていうか、お前・・・」

声はどう考えてもジェラートから発せられている。

驚いた様子でカナリアは言う。

「こ、声が美輪。宏！！」

『突っ込みどころはそこか』

魅惑の美輪様ボイスの黒猫は床にちょこんと座ってカナリアを睨

む。

何だか異様に怖い。

『普通、猫が喋った事に驚かないのか』

「いや・・・お前アンナの猫だし」

『ふん、お前に普通を求めた俺がバカだったようだな。まあいい、この場は俺が預かる。お前らは逃げる』

四本足で立ち上がってジェラートはハーレルに向かって牙を剥く。

「けど、お前」

『俺が何の策略も無しに、花の名を持つ者』に挑むと思うか。安心しろ、今は十周年記念　助けて！　黒猫大作戦キャンペーン中だ』

「何だよそれは！」

「ほほう、キャンペーンですか。ならばじいは出血大サービスで先着三十名様にこの若様のマル秘ブロマイドを・・・！」

「お前・・・鼻が大出血してるぞ」

「おお！ 私としたことが大興奮してしまいましたぞ！」

「・・・ねえ、君たち、私と戦闘中だと言うことを忘れてないかい？」

いじけたように呟くハーレル。

美輪様・・・もとい、ジェラートはくくつと笑う。

『忘れてはおらぬよ。お前は俺が相手してやる、安心してかかってくるがいい！！』

ジェラートの身体が沈んだ。

まるで、床にと溶け込むかのようにどんどんとその姿形を失っていく。

いや、小さくなっている？

カナリアはおそろおそろ覗き込んだ。

「・・・？ ジェラート？」

『ああ、間違った』

「ぐはっ！」

急激に巨大化したジェラートのアップーカット!!

カナリアのあごにクリティカルヒット!

カナリアは大ダメージを喰らった。

どうやら致命傷のようだ。

このままではカナリアが死んでしまう!

アンナ調合の怪しげな薬を使いますか。

↓ はい いいえ

「使っなー!!!!」

「おお! さすが若様! 戦闘不能は免れましたな!」

『・・・ちっ』

「その黒いの! 舌打ちすんじゃない!」

巨大化したジェラートはまるで象のような大きさだった。

異常な大きさであるが、驚いている暇は無かった。

黒猫の尻尾がカナリアとルースの身体をまとめてつかみ上げる。

『空間を渡らせる。行け、お前に死なれるとアンナが悲しむ』

「そ、それは実験台がいなくなるからか!？」

『そうだ!!』

きっぱり言い切ったジェラートに壁に向かって飛ばされた二人は、そのまま壁に飲み込まれて消えた。

Story 3 滅亡の系譜（10）

10 肖像画の女

空間を飛ばされ、辿り着いた先はほこり臭い真っ暗闇の中だった。城の倉庫か何かであろうが、勢いで何かに激突し、破壊しまくってしまったようだ。高級品ならもったいない。

しかし、そんなことに構ってもいられない。

カナリアは起きあがってルースの気配を探った。

「……つてえ……大丈夫か」

「若様？ ああ……ご無事そうですね。暗がりでも見えませんが」

「それを良いことに触りまくるんじゃないよ。つか、もう演技する必要はないだろう」

ルースは暗がりの中カナリアの身体に触り続けながら言う。

「そうですね、カナリア様。ですが私めはあなた様の事もエトス様と変わらず……」

「そのことじゃない」

ぴたり、と手の動きが止まった。

明らかに狼狽した様子のルースがゆっくりと離れたのが気配で分かった。

「……何の事でしょう」

「とぼけるなよ……器替えの法、古いネセセアの呪術だ。どいう経緯があったかは知らないが、お前はエトスだ。そうだろう？」

暗闇の中では彼の表情は見えない。

だが、困惑しているのは気配で分かる。

カナリアは続けた。

「ルースという名前はネセセアの流れを汲む者の名前だ。器替えの技術。魂と肉体を切り離し、別の肉体に魂を注ぎ込む呪術。・・・それがまだ存在しているとは思わなかった。おかげでハーレルの身だけが偽物である可能性を思い付いた訳だが・・・」

「なるほど、さすがに凄腕と呼ばれるだけのことはある」

「認めるんだな」

正直、はつきりとした確証があったわけではない。

ハーレルの時と同様にカマをかけてみただけだ。

問いかけには笑いを含んだ声が返ってくる。

「ああ、だが、一つだけ訂正させてもらおう。私はエトスじゃない」
カナリアは顔を上げる。

暗がりのせいで表情が見えない。

「そして、ルースでもない。ルースがネセセアから継承した器替えの技術は完璧ではなかったんだ」

「それじゃあ・・・お前は・・・」

「そう、ラブ&ピース！ エトス&ルースでございますぞ！」
明るく言うエトス。

いや、これはルースの性格の方だろうか。

「一体何があった？」

エトスが答える。

「私の部隊が襲われた時、私はもはや死を待つだけの存在でしかなかった。気付けば私はルースの身体の中にいた。今はこうして精神が半ば分断された状態だが、徐々に私たちは同化を始めている。それはともかく、私を襲った男は初めから私を殺すつもりだったようだな」

「奴との話が食い違うな。殺さず『言葉』を奪うのが目的だったはず」

「それは私も疑問だったのだ。奴が・・・私を襲ったスイレンとい

う男が王の配下にいる者だと知っていたから真意を確かめるためにここまで来たのだが」

「スイレンドって？」

カナリアは目を見開いた。

七年ほど前、その名前を持つ者はキツシュが殺したはずだ。あの時、確かに首を落とした。それをカナリアも確かに見ている。

同じ名前の男。

無関係には思えない。

もし、連中が首を落としただけでは死なないとしたら、器替えの技術が死んだ人間に対しても有効な手段だとすれば、スイレンドは別の形で蘇ったことになる。蘇った男がエトスを見てカナリアを思い出さない訳がない。

だとすれば、エトスが死んだ理由の一端は自分にある。

「知っているのか？」

「・・・ああ。エトス、お前が死んだのは」

「それ以上言うつもりならキスしますぞ、カナリア様」

「ルース」

「連中が私を襲った理由は『言葉』を持つ者の一人だからだ。要因があつたとしても君のせいじゃない」

「だとしても、ここまで似ていなければ殺されなかったかもしれない。」

ハーレルのように少なくとも身体だけは残り、元に戻る可能性を残していたかもしれないのだ。

責任を感じない訳がない。

「それよりもあの連中は何だ？ どうして言葉を集めているんだ？」

「連中は『花の名を持つ者』だ。俺もよく知っている訳ではないが、あいつらがしようとしている何かに王の言葉が必要なのだろう」

「・・・何故、お前が『王の言葉』の存在を知っている？」

「俺が『鳥の一族』の者だからだ」

それはカナリアの周りでもごく一握りの人間にしか話していない

ことだ。

話す気になつたのは罪悪感と、同じ顔を持っていた人間だからかもしれない。

どちらにしても、言葉'を継承した男だ。

少なくとも信頼に足りると思う。

「鳥？ お前、鳥なのか？ 羽がないぞ！ むしられたのか、虐待だ！」

「人間の身体に鳥の羽がびっしりあつたら怖えーよっ」
「的はずれな言葉に的はずれな突っ込みを返す。

エトスのそれは天然だろうか。

「便宜上そう呼ばれているだけだ。鳥の名前を付ける風習があるせいだろう」

「それで、カナリアなのか。似合わないと思っていたんだ」

「余計なお世話だよ」

鳥の一族は、花の名を持つ者たちを監視している。そして奴らが何か行動を起こした時、その善悪を見極め止める役目も担っている。カナリアやモズが生まれるずっと前からそうなっていたことだ。

一族ではそう教えられる。それを疑問に思う者は鳥の一族の中にはいない。生まれながらにして花を嗅ぎ分ける能力を持ったため、食事を取ることと同じくらい普通なことなのだ。

そして鳥の一族はシェラン王家を守っている。

王家の血を引く者は、盟約によって、言葉'を使うことが出来るからだ。

言葉は先代王フェネルにより、五つに分けられ、血を引く者に振り分けられている。カナリアは誰の元にそれがあるのかは知らなかったが、エトスはどうやらその言葉を持っていたのだ。

「ところで、魔法を使っても大丈夫だと思うか？」

「ん？」

「暗くて何も見えないんだ」

「ああ、光の初級魔法くらいなら大丈夫だろう」

城内の灯りは少なからず魔法が使われている。

ここで使ったとしても気配で気付かれることはないだろう。

「光よ、」

エトスが呟くとすぐに仄かな光が生まれた。

それはぼんやりと明るく、部屋の中を映し出した。

ほこりっぽい室内は思った通り、城内の倉庫だった。使用されていない家具や、少し欠けたシャンデリアなどが置かれている。随分と長い間人の入った形跡がない。これだけのものでも持ち出せば随分な金になる。

「フェネル王朝の名残だな」

エトスは皮肉るように笑う。

カナリアも頷いた。

「国庫が困窮していた時に売って足しにすれば良かったものを」

「どうやら、この部屋の主は王の側室のようだよ。肖像画がある。

随分綺麗な人だ」

「……!!」

真っ直ぐな黒髪を長くのばした女。

その髪は椅子に座った状態で床についてしまっている程長く、琥珀をはめ込んだような瞳は虚ろに遠くを見ている。白い簡易な服を着ているが、彼女に着せると高貴なもののようにさえ見える。腹部が膨らんでいるのは子があるからだろうか。

見てみれば女は母親の様な顔をしていた。

おそらくフェネル王に見初められ、無理矢理側室にされた女の人だろう。寵愛の程が知れるように彼女の周りには沢山の宝石や貴金属が落ちている。贅沢なものに興味の無さそうな女の左手には無骨な手錠がはめられている。

フェネル王朝が衰退し始めたのには、彼が女に溺れたからだという噂があった。その存在は隠し通されていたために真偽は定かではなかったが、肖像画の女を見る分には本当の事に思える。

この女性に心を奪われた王は、女が喜びそうな事は何でもした。

だが、彼女は何にも興味を示さなかった。

エトスは肖像の下の文字盤を指でなぞりながら書かれた文字を読みとった。

「ナ・・・タ・・・？ ああ、古くなっていて上手く読めないな。・・・どうした、カナリア？」

様子がおかしくなったのに気付き、エトスは彼を揺すった。

反応はまるでない。

焦点が肖像画に固定されたまま、青ざめた表情でかたかたと震えている。

何もないと思える方がおかしい。

エトスは肖像画を見上げた。

女はただぼんやりとどこかを見つめていた。

Story 3 滅亡の系譜（11）

11 俺様参上

歌が聞こえる。

カナリアのさえずる様な優しい声。

・・・誰の？

何故こんなにも優しいのに、歌が悲しいのだろう。

何故こんなにも慈愛に満ちた声が、呪いの歌を歌っているのだらう。

歌っているのは、誰？

「じゃじゃーん、俺様参上！ って・・・あれ？」

突然扉が開かれ金髪に無精髭を生やした派手な格好の男が妙なポーズをきめながら入ってくる。

反応しない黒髪の男と、すぐに短刀を構えた老人を見て彼は首を傾げる。

「何だ？ せっかく助けに来てやったのにこんな歓迎かよ」

「おのれ、何やつ！ じいとカナリア様の密会に乱入するとは不届

き千万！　今ここで叩ききってやる！」

「あー、お前が魔女ちゃんの言っていたエトスだな。んー、ルースだったか？　ま、どっちでも良いから混ぜちゃえ。えっと、ルトス、俺様が来たからもう安心だぜ」

「おおお！！　若様とのまぜこぜ大作戦！　なかなかやりますな！」

「だろー？　俺様は王の盾の隊長、正義の味方、トキ様だ！」

「ばさー、とマントを翻し、彼は自分に酔いしれた様なポーズを決める。」

四十前後とはいえ、彼は綺麗な顔をしている。無精髭など生やしていなければもう少し若々しく見えるだろう。特別にあつらえさせたような派手な鎧を着ているが、にやけたような表情のためどうしても軟派なイメージがまとわりつく。

そして、バカっぽい。

「おい、バカは余計だ」

「トキというお名前・・・貴方も鳥の一族の方で？」

「ん？　何だ。その話聞いたのか。そうともさ、俺様は鳥の現・族長・・・おっと、サインならファンクラブを通してくれよ」

金髪の中年男はあごに手を当ててにやにやと笑う。

そして視線を固まったままのカナリアに移す。

「で、そいつはどうしたんだ？」

「ああ、彼はこの肖像を見てからこうなってしまったのです」
「肖像？」

彼はようやく壁に掛かっている肖像画を見上げた。

「・・・っ！！　あんのバカ猫、よりもよってこんなところに」

「この女性は一体・・・」

「先代王の寵姫。まあちょっとこいつと因縁ある人だから、こんなところで見るハメになって驚いたんだろう。目を覚まさせるには・・・」

ルースは喜々として答える。

「やはり王子様（私）のキスでしょう！」

「（俺様の）キスうー？ ダメだ、それは可愛い女の子限定！ 野郎はこれで十分！！」

彼は腰に帯びていた剣を鞘ごと引き抜き、カナリアの後頭部目がけて思いっきり振り降ろす。

ごがつ

思いっきり陥没したような音を立ててカナリアの身体が沈む。

「あつれー、おかしいな。何で起きないんだ」

「・・・ たった今、こと切れたんじゃないですか？」

「えー？ こいつそんなにヤワじゃないって。・・・ あ、動いた」

悪びれもせずけらけらと笑った男は、カナリアの身体が反応したのを見て喜々として覗き込む。

「痛いー・・・ 頭の形変わるだろ！ ・・・ ああ？ トキ？」

「お前せつかく助けに来たのにその態度はないだろー」

後頭部をさすりながらカナリアはトキを睨む。

「・・・ 元はと言えばお前がすっかり監視してりゃこんな大事にならなかっただろ。匂いで分からなかったのか？」

「仕方ないだろ、身体が変わった奴は魔力を使わない限り匂いが曖昧になるんだからよ」

カナリアは舌打ちをする。

「・・・ で、上の方はどうなっているんだ？」

「黒猫ちゃんと王様が戦闘中、 ありや十中八九猫の勝ちだな」

「ほほう、やりますな、黒猫どのは」

「どんな戦い方してんだよ」

花の名前を持つ者の魔力は高い。ましてあのスィレンを配下に治めるほどの実力を持っている者だ。いくらジェラートが魔法生物であろうと、ほぼ100パーセントの勝率になるのはなかなか考えにくい。

一体どんな方法で戦っているのだろう。

見たいような、知らない方がいいような、微妙なところだ。

「黒猫の主からの伝言だ。遺体は全身の血が抜き取られた状態でド

ルシュの要塞内に持ち込まれたそうだ。それ以上はつかめなかった」と

「アンナでも難しかったか」

だとすればもう彼を見つけることはできない。

どちらにしろ、身体がはつきりと死んだのであればエトスとルースを元の状態に戻すことは不可能だろう。しかしそれは初めから分かり切った些末な問題だ。この時点で一番大きな問題は身体と精神、どちら側に言葉が残っているのか。それ次第では最悪な状況になりかねない。

あちら側には既にハーレルの言葉が落ちている。

肉体の方に残っていたのなら、ドルシュに持ち込まれたのは幸いだろう。あの強固な守りでは「花」も迂闊に手を出せない。もしもエトスの精神に言葉が残っているのなら、万が一にも彼が捕まることになれば二つ目の言葉が向こうに落ちる。

それだけは何としても避けなければならない。

「トキ、ルースを外に連れ出せるか？」

「・・・ああ、やれる」

「頼んだ。・・・俺はここで迎え撃つ」

「カナリア様？」

怪訝そうにするルースの腕をトキが掴む。

花の匂いを嗅ぎ分ける事のできる彼には状況が分かっているのだ。「行くぞ。俺らが残っても足手まといになるだけだ。・・・くっそー、タイトルでは俺様が大活躍する予定だったのになあ。結局いつも出番少ないでやんの」

「どういう事ですか？ 一体何が・・・」

ぐん、と目の前の空間が歪む。

にたり、と笑ったハーレルの姿が歪んだ空間から徐々に姿を現し始める。

「逃げおせると思ったら大間違・・・んっ・・・あれ？ 穴が小さすぎたかな？ ちょっとまってて、邪魔な上着脱いでくるから」

服が引つかかって出てこれなかった王は、再び穴の向こう側に戻る。

早く行け、とカナリアは手で示した。

彼らは頷き、部屋の外へと抜け出していく。

ぬうつと、今度はじゃらじゃらしたマントを脱ぎ捨てたハーレルが完全に穴から抜け出してくる。

「お待たせ・・・って、がーん、待ってて言ったのにつ！ 一人しかいない！」

「目的は俺なんだから十分だろ？」

「まあ、そうだけどさ、寂しいじゃん」

「ジェラートはどうした？」

「黒猫なら今頃どこかでのたれ死んでいるだろうね。私の相手ではなかったよ」

「それはそれは随分とお強いことで」

カナリアはにっと笑う。

余裕な風に笑っているが、彼の魔力は随分と消耗している。これならばカナリアにも出来るかもしれない。

カナリアの瞳の奥が僅かに振動を起こし始めた。

Story 3 滅亡の系譜（12）

12 言葉のゆくえ

「さあ、言葉を渡してもらおうか。拒んでも無駄だよ、私には融化
つていう能力があるんだ」

じり、と彼は一歩近付く。

「・・・つまり、今お前はハーレルと解け合っている状態か」

「そう言うこと。だけど無理に引き離そうとしても無駄だよ。鳥如
きの技術じゃあハーレルまで殺しちゃうよ」

「花の連中は全員がそんな能力をもっているのか？」

「基本は私だけだ。要素があれば貸し与える事もできるが、一時的
なものだよ」

「お前がスイレンに分け与えたのか」

くすりと笑ってもう一歩近付く。

カナリアは動かない。

「そうだよ。上手くいかなかったようだけどね。奴さえ拘らなけれ
ば、あんな役立たずに力を与えたりはしなかったのに」

「奴？」

「お前には関係のない話だ。・・・武器を捨てなさい。抵抗しなけ
れば命だけは助けてあげるから」

「スイレンは、一度死んだはずだ」

「よく知っているね。従兄弟殿は物知りだ。確かに奴は陽動に失敗
してどっかの便利屋に殺された。けれど灰が残っていたからね、あ
いつが作り直したんだ」

「あいつ？ 作り直す？」

「質問はそのくらいにしておいてもらおう」

また一步、近付かれてカナリアは後退した。

舌打ちをして、袖口に仕込んだナイフを床に投げる。

くくつと男が笑う。

その瞳の芯が黒く揺れる。

「殊勝な心がけだ。従順なお前にご褒美をあげよう。私の名はイソトマだ。様付けで呼んで褒め称えても良いよ」

「イソトマ様」

「いいねえ、気に入ったよ、エトス君。私の下で働かないか？　まあ、言葉を奪ってからの……………」

視線が交わった。

黒い芯が妖しく揺れるイソトマの瞳と、赤く染まったカナリアの瞳。

血のように赤い瞳は奥が闇の色に染まりイソトマのそれと同じように微振動を起こしている。

一步、後退したのはイソトマの方だった。

「お前は……………」

「俺はカナリアだ。残念ながらハマール家の生き残りではない」

「何故…………何故お前のような者が……………」

「王の身体、返してもらうぞ」

カナリアは手を伸ばした。

男は足の裏が貼り付いたように動けなくなっていた。場所の魔力は全てカナリアの方に傾いている。

イソトマに勝ち目は無かった。

悟り抵抗する気も失った男ははっとしたように叫んだ。

「…………そうか、お前は！」

彼は底から笑う。

「ははは！　アナナスめ、計画が綻んだことも知らず今頃」
カナリアの手がハーレルの身体に突き立てられた。

「本当はね、君があまりにお人好しに見えたから上手く丸め込んで私のフリを続けてもらおうと思ったんだ。それこそ、一生ね」

ラグネから少し離れた村の宿。

外を見つめながらエトスは言った。

王と、イソトマを引き離れた後、激しく消耗したカナリアは城を出たところで力尽き気を失った。

状況を悟ったトキは機転を利かせ彼らを王都から離れたのだ。あのまま二人が留まれば王を襲ったと言われかねない。

ハーレルが目覚め、もうイソトマの支配下にないことを確かめるまでいることは出来なかったが、トキが何か言ってこない以上、終わったと考えていい。

気になるのは言葉の行方だった。

ハーレルの言葉はまだ彼の元に残っているだろうか。それともイソトマによって他の誰かに伝えられた後だっただろうか。

「君にすべきことがある以上、私のわがままを聞かせる訳にはいかないな」

「これからどうするつもりなんだ？」

普段の黒いコートを身に纏いながらカナリアは問う。

やはりこの姿のほうが落ち着く。

「一度はハマー家に戻る。跡継ぎのない家だ。私がいなくなれば断絶する他ない。ルースとして身辺整理をしてくるよ」

少し名残惜しそうに笑んだ老人の顔は、エトスの表情だ。

何代にも渡つて存続してきたハマー家を自分の代で潰すことになったのだ。覚悟を決めたとはいえ複雑な気持ちだろう。

「……そうか、力になれることは？」

「キスしてくれないか？」

「………は？」

自分の失言に気付いたエトスは顔を真っ赤にしながら弁明する。

「あ、いや、すまない！ 言い方が悪かった！ そうじゃなくて、君に『言葉』を預かってもらいたいんだ。私はこの先国外に出るつもりだから……外に持ち出す訳にいかないだろう？」

カナリアは頷く。

エトスの言葉は精神の方に残っていた。

「で、何でキス？」

「言葉は口から口へ。やり方は教えられないがそうすることで私の言葉は君の中に移される。君ならば悪用することはないだろう？」

そして簡単に奪われることもない」

「まあ、それはそうだが」

カナリアは嫌そうにする。

これが若くて可愛い女の子なら、役得とばかりに喜んでしまったのだが、相手はエトスで外側がルースだ。

嫌でなければマニアだ。

「王の残した五つの言葉……正確には呪文だが、王の血を引き、強い持つ者が紡げば竜が復活すると言われている。連中が何をしようとしているのかは知らないが、君達はそれを止めるつもりなんだろう？」

「ああ。けどなあ、男とのキスは」

「何事も経験だ」

「んんー！」

口を塞がれカナリアは硬直する。

流れ込んできた言葉。

それに伴う断片的な知識。

王が正気を失いかけながらも何とか分けて残した言葉の欠片。

「……ふふふ……やはり唇まで若様にそっくりですな、カナリア様は」

「何を気色の悪いことを！」

「照れなくてもよろしいのですよ。こんな猫の挨拶程度のキスで、お望みならばいいがぁんなことや、こんなことを……」

「するな。想像すらするな」

悶え始めたルースに突っ込み、溜息をつく。

どうして彼はこんなにもこの顔が好きなのだろう。

冗談にしてもやりすぎだ。

「ま、こう言うのも奇妙な気がするが、二人とも元気だな」

ルースか、エトスカ。

身体を持ち主は微笑んで頷いた。

「貴方も、どうか元気で」

荷を担いで部屋を出て行く老人は、これからどんな人生を歩むのだろうか。そして二人はどこまで混じり合うのだろうか。

それはまだ誰も知らないことだ。

何とも言えない気持ちでその背を見守った。

彼が立ち去るのと入れ替わるように、窓から黒猫が飛び込んでくる。

大きさも毛並みも通常に戻った目つきの悪い黒猫は窓のサンの上に乗って嘔吐した。

「……ジエラート、挨拶前にそれか？」

『猫だから仕方ないでしょ』

そう言った黒猫の声は美輪様ではない。若い女の声だった。

カナリアは目を開く。

「その声、アンナか」

『そうよ。ジエラさんはキャンペーン終了したからもう喋れないの、ごめんなさいね』

「何なんだよ、そのキャンペーンは」

『企業秘密よ。それより無事で良かったわ。ジェラさんのおかげね、感謝して頂戴』

「ああ、感謝はするが・・・どうやって逃げてきたんだ？ てつきりあの男にやられたと思っていたが」

『何とかかなりそうなメドが立ったから死んだふりして早々に引き上げただけよ。目的も果たしたことだし』

「目的？・・・あ！」

思い至ることがあつて声を上げる。

確か、アンナは王宮図書室に行きたいと言っていなかったただろ
うか。灰の目の一族についての資料を集めるとか。

まさかとは思うがあのどさくさに紛れて忍び込んだなんてことは・・・ありそうだ。

「アンナ、お前なあ」

『読み終わったらちゃんと返すから平気よ。チャンスは気からつて言うでしょう？ こんな好機逃す手はなかったのよ』

「くそつ、結局お前の一人勝ちじゃねーかよ」

結果的にはラグネまで来たことで、ハーレル王を救い、エトスの言葉を連中に奪われることは阻止できたものの、全てがアンナの思うように事が運んだのが悔しくてならない。

実験台にならないとしても、彼女から逃れる手だてはないようだ。魔力を使いすぎたせいでまだ本調子に戻っていないカナリアは、ただただ深い溜息をつくしかなかった。

Story 4 心臓のない少年（1）

眠ると記憶の中に蘇るあの気配。

純血の人間の手によって作られた武器の中で、最も強く邪悪な力を持つ武器。破壊することはもちろん、誰一人としてその力を使いこなすことが出来なかった。

それを作り出した当人でさえ、持つ魔力に困惑した。

本来ならば古きネセセア神の力と、アインハイトの魔力を使い誰の手にも届かない場所へと封印されるはずだった。

その闇の力が浄化され人に害をなさなくなるまで封印されるはずだったのだ。

それが、奪われてしまった。

剣は今もどこかで振るわれている。

誰かの血を流している。

「！！」

彼女は目を覚ました。

強く鼻につく邪悪な魔力の気配。

ある。

近くに。

あの剣が。

「・・・・・・どこ？」

彼女は古代文字の刻まれたワンドを手に、眠っていたままの服装で外に飛び出す。

外が酷く騒がしかった。

街中に人だかりが出来ている。

彼女は人だかりをかき分けて更に向こう側の気配の方向へ駆けていく。

男がいた。

不自然にしなる鈍色の剣を持つ男。逆の手には人の足が握られている。その足のとなりにあるはずのもう一方の足も、繋がっている胴体もない。

ただ足だけを握っていた。

「・・・！」

女は息を飲んだ。

灰を落とした緑色の髪。横顔で見る男は若い。まだ二十代か、もっと若いようにさえ見える。それなのに、まるでこの世の地獄をすべて経験してきたかのような深く暗い気配が漂っている。

まるで彼そのものが闇のようだった。

「そ、その剣を・・・」

彼女はやつとの思いで言葉を絞り出す。

押さえつけられているような、奇妙な威圧感が男には存在した。

男はゆっくりと彼女を見た。

鈍い赤い瞳。

夕陽より赤く、夜よりも深い。

感情を含まない瞳が、ほんの僅か価値のあるものを見つけたかのように光を帯びる。しかし、それはすぐに消える。元の空虚な瞳がこちらを見ていた。

男の唇が何かを言う。

しかし、それは小さすぎで彼女の耳には届かなかった。

彼女はもう一度息を飲んで言葉を絞り出した。

「その剣を、返しなさい」

男がゆっくりと近付いた。

女はワンドを構えた。

魔術を構成する言葉が出てこない。それどころか、身体が思うように動かなかった。表情のない瞳が酷く恐ろしかった。

男がゆっくりと手を伸ばす。

のばされた手が怖くて、彼女の身体は跳ね上がった。

男の手が彼女の頭部に触れた。

優しく、慈しむように。

「・・・・・・・・・・」

「え・・・・・・・・？」

掠れてどこか淵に佇んでいるかのような深く低い声。それにほんの僅か感情らしきものが含まれる。詫びるような、寂しげな色。

囁かれ、彼女は振り返って男を見た。

そこに男の姿は無かった。

あの武器から発せられる邪悪な気配も消え果てていた。

・・・・・・・・・・いずれ返す。

男の深い声だけが彼女の耳に残されていた。

1 霧のトリア

カナリアがリン診療所を訪れることは珍しくない。

だが、今回彼がここに来ている理由は少し珍しいことだった。

「お前が依頼人ねえー」

彼が銀の麦で依頼を聞いたのはつい先刻のこと。元々、マリンは

便利屋に依頼してくることは少ない。たまに依頼を持ちかけることはあっても、人手が足りない、研究を手伝ってくれ、程度のことではカナリアの方まで回ってくることはほとんど無く、依頼は他の便利屋に回る。

だが、今回彼はカナリアに指定依頼をしてきた。

それは今までに無いことだっただけに、依頼されたカナリアもマスターにもう一度聞き返してしまうほどだった。

マリンはごほんと咳払いをする。

「今回は特殊な事を頼みたい。人となりはともかくとして腕が信頼出来る奴はお前しか思い浮かばなかった」

「それって貶しているのか？」

「褒めているんだ」

きつぱりと言われたが、ちつとも褒められている感じがしない。

カナリアは椅子の上にあぐらをかいて座る。

「で、何てキツシュに頼まねえの？ あいつなら安価でやってくれるだろう？」

「え？ 何それ家族割？」

同じく彼の依頼を請けたエリーがボケる。

「そうそう、通話もメールも半額」

カナリアが続く。

「ダブルホ×イトだから無料だ・・・って何の話だ」

さらに続いてみたのはいいけれど、話が未知の世界の事柄に及び、マリンは覚ええず突っ込みを入れる。

意味が分からない上に、誰かから言わされたとは思えないきわどい単語が混じったために一部音声が変わってしまった。

「本当にタダなの？」

「ああ、俺の仕事はキツシュの仕事。キツシュの仕事はキツシュの仕事だからな」

「お前はタケシか！」

少し前に姉に突っ込んだことと同じ事を突っ込んでしまった。

何と言うべきか。

この姉弟は良く似ている。

「キツシュさんならタダ？　ならどうして頼まないの？」

「あいつに借りは作りたくない」

「んじゃ俺には？」

「お前にはちゃんと正規の料金を支払うだろう。借りにはならない」
不服そうにカナリアは頬を膨らませる。

「えー？　俺、お前の依頼最優先で来たんだけどなあー」

「嘘を付くな。大きな依頼が無くなったのは確認済みだ」

「へえ、カナリアのスケジュールを把握するなんて、マリンちゃん
つていい奥さん！」

『気色悪いことを言うな！』

ほぼ同時にステレオで突っ込まれエリーは肩をすくめた。

タイミングばつちりなんて仲が良いんだね、何て言う突っ込みを
入れたらもつと怒られそうなので自重する。

「んーと、それで、依頼って何なの？　私まで呼んだのって何か訳
あるの？」

マリンは頷く。

「結論から言えばエリアードには暫く診療所のことを頼みたい」

「え？　マリンちゃんどこかに行くの！？」

「それが依頼に関わることだ。理由あつて診療所を空ける。護衛の
仕事をカナリアに、治療の仕事をエリアードに任せたい」

エリーは瞬く。

確かに診療所の手伝いをしていることもあつて勝手は知っている
が、エリーにはマリンのような判断も治療もできない。重症患者は
さすがに法術で治療することはあつたが、そうでなければマリンの
「処置」で大体終えてしまう。

その代役など彼女につとまるのだろうか。

「常連になっている連中にも、便利屋達にも事情は説明してある。
治癒の魔法が必要なほどの患者でなければここに来ることもない。

万が一の時のためにいてくれるだけでいいんだ」

「それってどのくらい？」

「案内人次第というところだが、せいぜい一月と言ったところだろう」

一月、とカナリアはつぶやく。

そもそもこの医者がレバンを離れること自体珍しいのだ。時折どこかへ出かける事があったが、十日ほどで戻ってくる。徒歩で出かけると言うわけではないのだから、国内であれば王都以西に向かったとしてもそれほどかかるものではない。

「お前、一体どこまで行くつもりなんだ？」

「トーアだ」

「そりゃまた物好きだな」

ラン王国トーア。国の南方、すなわちシェランに近い高地にある街。一年の大半が霧に包まれており、慣れない者は目的の場所へたどり着けないと言う。その昔ネセセア王朝があった時代、ルビートイトという強い魔力を持った老婆が子孫を守るためにトーアに霧を張り悪魔から隠したためなのだと言われている。

大昔の呪術が今もなお継続されているとは思いが、トーアが深い霧に覆われているのは事実だった。

トーアは高地にあり、霧という悪条件が重なって馬車や馬で入るのは難しい。

レバンからは近いものの、往復となれば一月近い日数がかかってもおかしくはない。

「トーアって何かあるの？」

「霧のトーアって言われるほど霧が深い場所だ。作物がほとんど育たないから人が住むのには適さないけど、遺跡と鉱脈がある。あとネセセア信仰の中では聖地と呼ばれる場所の一つだな。医者には無縁の場所だと思うんだが」

「医者とは無縁だから行くんだ」

「え？　どういうこと？」

エリーは首を傾げる。

苦笑いをしてカナリアが答える。

「単純に考えればトーアに患者がいるって事だな」

「あ、なるほど」

ちらりと医者の方を見ると、彼は少し肩をすくめて見せる。

心得た、という風にカナリアは頷いた。

「で、いつ出発になる？」

「トーアまでの案内人が到着し次第だ」

「案内人って？」

カナリアはちらりと戸口の方を見る。

「どうやらタイミングが良いやつのようにだな」

マリンとエリーの視線もそちらに向く。

扉が音を立てて開いた。

「わっ、俺ってば何か注目されまくり！？」

「わあ、アフロ！」

「こりやまたすっぱーアフロ」

「何故アフロなんだ？」

入ってきた男は二十歳そこそこの若い男だった。

どっかの漫画でありがちな熱血バカの主人公を諷める立場にありながら、主人公に翻弄されまくるといふ損な性分の「親友」顔をしていた青年。

服装もそれらしく地味だが、髪型だけが 商品番号21番・アフロ1.5倍（当社比）。今流行の白髪染め風のパープルに色とりどりのラメをあしらったおしゃれなカツラ。誰かに叩かれると「ぱきゅ」と可愛い音を立てながら「」を放出するという魔法機能付き。一つ一つ職人の手作りのため値段は少々高めの金貨5枚（魔法料金込み）。只今会員特別価格20パーセントオフでご奉仕中。

限定商品ですので先着20名さまのみとさせていただきます。

ご注文方法はフリーダイヤル××××××。黒猫急便までお電話下さい。番号お間違いのないようお願いします。なお、携帯電話か

「らへご利用いただけませんのでご了承ください。
「って、何でテレビショッピング風なんだよ！」

Story 4 心臓のない少年(2)

2 拷問

「ここに来る途中、黒猫連れた女に、今、レバンで大流行の兆し、
つて言われてかぶせられたんだけど・・・ひよつとして俺、変？」
カナリアは顔をしかめる。

「・・・あいつ絡みか」

こんな意味不明な行動をする黒猫連れの女は彼女しかない。
ちよつと頭痛がした。

エリーは手を叩いて喜ぶ。

「すごい！ お兄さんアフロ似合ってる」

「おつ、そうか！？ はつきり言つて道行く人に変な目で見られる
し自信なかったんだよな。・・・ええつと、依頼人のF・リン医師
つてあんたのことか？」

「私じゃないよー、マリン先生はあっち」

青年はやんちゃな感じで笑う。

「へえ、珍しい。魔術師じゃないんだな。しかもマリンなんていう
名前の割に男前」

「勘違いしているようだが、私は、ファーマ・リン、だ」

メガネを上げてマリンは睨む。

凄まれて少しは萎縮してもいいところだが、彼は気にした風もな
くけけらと笑った。

「オーケー、ドクターリン。あんたは名前を間違われるのが嫌なん
だな？ 了解だ。俺はゼラニウム・フローラル、ゼルって呼んでく
れよな。あんたの依頼で来た便利屋だ」

「・・・」

マリンは嫌そうな顔でゼルを見る。

おそらく、苦手なタイプなのだろう。まるで炎属性と氷属性のようない関係だ。

ゼルはカナリアの方を向いた。

「あつ！ あんたは！」

「その節はどーも」

「・・・何だよ、あんたも絡んでいるのか？」

「カナリア知り合いなの？」

「知り合いなのってお前・・・」

一度は命を狙われていたくせにフローラルの名前に反応しないとは、頭が弱いのか、図太い神経なのか。

そもそも、彼の方も、自分が家族とともに命を狙っていた相手を今回の依頼人と間違うのはどうかしている。

ゼルはようやく気づいたように手を鳴らす。

「ああ、あんたシアー・ガンの偽物！」

「きゃー！！ 言わないで！！」

「あんたのおかげであの後色々大変だったんだぜ！」

「ご、ごめん。もう修復師ごっこなんかしないからっ」

「情報の確信なしに動いたお前らだって悪いだろうが」

カナリアに言われ、彼は肩をすくめる。

「同業者は手厳しいな」

エリーがオーナディアの聖家アルタイルの印の入った「シアー・ガン」の旅券で入ったのだから、例えそれが偽造品でも彼らが信じてしまっても仕方がない。だが、有名人であるシアー・ガンの容姿と明らかに異なるエリーと間違うのは便利屋として恥だ。

急いでいたとはいえ、命を狙うのであればそれなりの裏付けは必要なのだ。

そのために便利屋の中にはアンナのような情報を専門に扱う「情報屋」がいる。顔の広さも便利屋の腕に影響するものなのだ。

「これからは気を付けるよ。それより、出発はいつになるんだ？」
今すぐにでも、と医師は答える。

「悪いが急ぐんだ。カナリア、エリアード、準備を頼む」
オツケーと、エリーが座っていた寝台から降りて頷く。

「んじゃ、私はアフロの準備してくるね」

「アフロなんか用意してどうすんだよ」

「えへへ そのアフロ見ていたら欲しくなっちゃった。じゃ、
また後でね」

どうしてこれでアフロが欲しくなるのかが疑問だ。

慌ただしく出て行くエリーを見送り、カナリアは頭を掻いた。

マリンはメガネを押し上げながら言う。

「ではこっちも準備してくる・・・アフロの」

「え？ さりげなくお気に入り！？」

「アフロだと何故か評判が良くなるかもしれん」

「何の評判だよ！ つーかお前が意外とノリがよくて俺はビックリ
だ！」

さしずめ動機は子供の患者（この場合ある一定年齢以下の少年に
限定される）が笑顔を見せて懐いてくれると言っものだろう。

そうでなければこの高圧的な態度の医師が評判を上げるためにア
フロ装着なんてするわけがない。

動機が変態だ。

「あんたはアフロの準備しなくても良いのか？」

マリンも準備（アフロではなく旅支度と思われる）のために奥に
消えると、ゼルは喜々としてカナリアに尋ねた。

「俺は結構だ」

カナリアは淡々と答える。

「何だよ、あんたさっきまでとうって変わって愛想が悪い・・・！
！」

言い差して、彼の言葉は途切れる。

それ以上声を出すことが出来なかった。

突然カナリアの手が彼の首に巻き付いたのだ。

「・・・ん なっ・・・！・・・何・・・を」

「何を嗅ぎ回っている？」

カナリアはそのまま青年の身体を持ち上げた。

床に着いていたはずの彼の身体が宙に浮く。

凄まじい力だった。

ぱさり、とアフロのカツラが床に落ちた。

彼の髪は明るい茶色だった。短めの髪を横に流し青年らしい精悍な印象を受ける。彼の容貌によく似合う髪型だった。しかし、その顔は激しく苦痛に歪んでいる。

「・・・んの、事だ・・・？」

「母と娘に会ったと思えば今度は次男、花の一族が、俺の何を嗅ぎ回っている？」

「・・・知ら・・・な・・・」

カナリアの瞳が血を含んだように赤く染まった。

辺りに強い魔力の気配が垂れ込める。

彼の瞳の奥が収縮し、微振動を起こし始める。

「誰の命令で、ここに来たのか、答えろ」

びくん、と青年の身体が震える。

カナリアはゆっくりと手を下ろした。

しかし、青年の身体はそのまま宙に浮かんでいた。見えない何かの力で空中に留まっていた。

目は見開かれ、虚空を見ている。まるで廃人にでもなってしまったかのように、焦点が合っていないかった。

にやり、と彼は残虐な笑みを浮かべる。

「命令ハ、サレテイナイ」

「何故、花の一族がここに来た？」

「・・・花ノ一族ガ何力知ラナイ」

「それならどうして花の名を持つ？」

「親父ノ趣味・・・」

「・・・」

答えたところで彼は見えない力から解放され床に落ちる。

「・・・忘れる」

耳元でカナリアが囁いたとたん、その場の魔力が一気に収縮する。まるで何事もなかったかのように元通りの空間が広がっていた。

「あんたはアフロの準備しなくても良いのか？　・・・ってあれ？　俺さつきも聞いたか？」

カナリアはちらりと笑う。

その瞳はもう元の青に戻っている。

「俺はいいよ、何か呪われそうだから・・・アンナに」

「そっかー、似合うと思うんだけどな。っていうか、何で俺床に座ってんの？」

「俺に聞くなよ、自分で座っておいて」

「そうだっけ？　んんっ、何だか喉の調子が変わだな、風邪かな？」

「大丈夫か？　あんまり調子悪かったらマリンでもエリーでもいいから見てもらっとけよ」

「ん・・・ああ」

腑に落ちない、と言う風にゼルが頷く。

自分の行動に違和感を覚えているようだ。

カナリアは彼を見ないようにして外へと向かう。

「俺も少し準備してくるよ。暫く任せるからな」

返事が戻るのを待たず彼は逃げるように外へ出た。

Story 4 心臓のない少年(3)

3 焦り

「……」

リン診療所を出て、彼は道ばたで立ち止まった。
手が震えている。

殺そうと思えば簡単に殺せた。

純血の鳥のように花の匂いを嗅ぎ分けることが出来ればわざわざあんなことをしなくても良かったのだ。フローラル一家が「花の名前を持つ者」と関係のあるかを確かめるためだけに、あの瞬間ゼルを殺してもいいと思ったのだ。

実際、彼らが花の一族ではないと鳥の族長トキから聞いていたけれど、これだけ頻繁に一家と関わることがあると嫌でも疑念が湧いてしまう。

ここ数年、花の動きが活発になっている。そうでなくても花の名前に敏感なカナリアが、彼らと関わることになって不安感を抱いているというのに。

(……俺は……何を焦っているんだ?)

カナリアは手のひらを見つめた。

青年の首の感触がまだ残っている。

無関係な人間を、苦しめてしまった。

「……マスターに頼んで料金上乘せしてもらったとか」

あんな拷問のようなことをしてそんな簡単なことで罪滅ぼしが出るとは思えない。

ただ、自分がされたことを忘れている彼に詫びて許しを請うこともできないのだ。

せめてそのくらいのことをいないと、自分の気が治まらなかった。
「ばつかな、俺」

自分が罪悪感を覚えることが分かり切っていてこんな事をするなんて、バカ意外の何者でもない。

「あらん、どうしましたの、暗い顔をしてますわよ？」

ぼんやり歩いている少女の顔を、キツシュは舐めるように優しく撫でた。

「キツシュさん？・・・あ、お帰りなさい」

旅先から帰ってきた直後に、可愛い女の子が出迎えてくれるのは嬉しいけれど、暗い顔をしているのはいただけない。

一瞬だけ微笑んだけど、その表情は強ばってすぐに落ちてしまった。

「あらあら、本当にどうしましたの？いつものエリーちゃんらしくない」

エリーは一瞬何かを言いかけるが、すぐに目を伏せた。

姉の敵討ちの為にヴィクレア城を目指していた時の彼女よりずっと暗い顔をしていた。

街に何か変化があったのなら、弟かマスターが連絡をしようと鳥を飛ばすだろう。彼女の様子は今し方何かあったと言うような顔だった。

きつと表情を強めてキツシュは問う。

「まさか、カナちゃんに何かされたんじゃないでしょうね？」

「あ、ううん、違うの！ そう・・・じゃなくて、そうじゃなくて、と彼女はもう一度呟く。

（彼に何かされた訳ではないけれど、何か彼関連なのですね）

キツシュは鎌を持つ手に力を込める。

エリーが色々助けてくれたカナリアに対して好意を持っているのは知っている。若い彼女なのだからおそらく恋心を抱いているのだろう。

恋する乙女は綺麗。

女の子が美しくなるのなら、と敢えて何も口出しをしていなかったキツシュだったが、元気で可愛い彼女にこんな暗い顔をさせるというのは許せなかった。

何があつたのかは知らないが、

「・・・その首・・・私が狩つて差し上げますわ・・・うふふ」
「え？ キツシュさん!?」

「大丈夫ですわ！ これは私怨ですもの、料金は頂きませんわ！ あはん、みていらっしやいませ、こんにちは！ カナリアちゃん、美味しく料理して差し上げますわ」

さーで、今回から始めましたキツシュさんのわくわくクッキン
グ！

第一回のメイン食材はカナリア！

黒くて丈夫なカナリアは絞めるまでにちよつと手間がかかります。強い人は戦つて倒すのも良し。

しかし、キツシュさんのように弱い乙女が料理することが多いこの食材。手取り早く仕留めたい時にはこれ！ 『誰でも眠っちゃーう 試作品その5』（黒猫製薬）

これを手に入れたらまずこっそり食事や飲み物に混ぜて眠らせましょう。

眠ったところで、

「鎌でざつくりと！ 勢いが命ですわ！」

「ええええ！！ ちよつと待って、キツシュさん、誤解だつて！」

「誤解？　こんな可愛い子にこんな顔させたのはあの男でしょう？
昔から乙女の恋路を邪魔する奴は鎌に狩られて死んじゃえ　　っ
ていうのよ！」

言いません。

「そうじゃないの！　そうじゃなくて・・・あのね」

エリーは言いにくそうに手を揉む。

「・・・カナリアね、この間帰ってきたばかりなのに、マリン
先生の依頼でちよつと長くレバンを離れることになったの。それで・
・・」

「まあ！」

キツシュは顔を赤くする。

芝居がかつて見えるほどのオーバーアクションでエリーの顔をさ
わり、包み込む。

「まあ、まあ、まあ！　なんて可愛いんですの！？」

「キ、キツシュさん？」

「この子ったら何て可愛いんですの？　好きな殿方と一時でも離れ
たくないなんて・・・あはん、それでこそ少女！　それでこそ乙女
！　んふ、でも我慢なさいませ。待っている乙女もまた美しいので
すわ・・・ふふふ・・・そして邪魔者がいない間に私があーんなこ
とやこーんなことを・・・」

「妄想邪魔しちゃって、ごめんなさい、キツシュさん！！　お願い
だから帰ってきてー！　助けてパー。ン！」

あつちの世界に突入してしまったキツシュはエリーの顔を両手で
押さえ込んだままアレやこれや考えて舌なめずりをする。

身動きとれない彼女はどこから飛んできてくれそうなのヒーロー
に助けを求める。

ヒーローは来てくれなかったが、キツシュははつとしたように身
を剥がした。

「あらん？　ごめんなさい、エリーちゃん。私ったら頭の中であな
たにあらぬ事を」

「え？ 謝るところってそこ！？」

「んふ、私、これからマスターのところに報告して、弟を拷問……じゃなかった尋問して来ますわ。後でまたお会いしましょう、私の可愛いエリーちゃん」

拷問でも、尋問でも怖いものは怖い。

笑顔で立ち去るキツシュを引きつった顔で見送ってエリーは再び表情を暗くさせる。

カナリアがまた暫くいなくなってしまうのは寂しい。それだけではなく、今回はリン医師もいなくなり、その代理を自分が勤めることになったのだ。不安じゃないと言えば嘘になる。

けれど、彼女の気持ちを暗くさせているのはそれではなかった。アフロを誰に貰ったのかを聞き忘れて確認に戻った時、彼女は見てしまったのだ。

カナリアの瞳が赤く染まっているところを。

ゼラニウムは宙に浮かんでいた。

彼女の位置からは彼の表情も、何を喋っているのかも聞こえなかったが、カナリアが何かを質問してゼラニウムが答えている様子だった。

（まるで……拷問みたいだった……）

赤い瞳のカナリアは、彼女の知っているカナリアとは随分と違っていた。

顔立ちやセンスの悪い服装なんかはカナリアだったのに、目の色と表情の作り方がまるで違った。

彼は宙に浮いている青年を見て残酷な笑みを浮かべたのだ。

（見間違い……だよね？）

とても信じられなかった。

あの優しい彼が、人にそんなことをするなんてとても信じられなかった。あんな邪悪な笑みを浮かべるなんて、とても信じられなかった。

怖くなって途中で逃げ出して来てしまったが、あれはきつと気の

せいだったのだろうと思う。角度や光の加減で、不自然に見えてしまったのだろう。

「見間違い、だよね」

彼女は呟いた。

答えは、どこからも返らなかった。

Story 4 心臓のない少年(4)

4 言うんじゃなかった

「ここからトーアまでは、惑わしの霧」が発生している。まだランがネセセアっていう国だった頃、何代目かの王后が子孫を隠すために禁呪をかけたためにそうなったそうだ。迷ったら二度と出られないから気を付けてくれよ」

そう言った案内人、ゼルは緊張感のない顔で笑った。

「お前が迷ったら気を付けようもないな」

「あはは、ちがいない」

マリンの嫌味にゼルは屈託なく笑う。

「まあ、俺はこういった道には慣れているんだ。だから安心してくれ」

トーアの麓までは馬車で来ることが出来た。国境越えをする際、いまだ起こっている「切り落とし」の事件を警戒しているのか普段より検閲が酷かったが、魔術を使わない医師としてそれなりに名のあるファーマ・リン医師の名を出すとあっさりと入国許可が下りた。有事ともなればこんな簡単にもいかないだろうが、さすがに医者という名前は強い。

麓までの道のりにはさして危険はなかった。盗賊に襲われたとしてもゼルで対処できる範囲だっただろう。そしてトーアまでの霧の道はゼルが案内人に立つ。ここまでカナリアがついている必要は無かった。

そもそも「黒い魔法使い」を指名で雇うのは安くない。何か思惑がありそうだった。

「お前はこの道何度も上ったことあるのか？」

マリンが尋ねるとゼルは頷く。

「ああ、トーアには遺跡があるからな。俺遺跡大好きなんだよー、そのために二十回？　そのくらい往復してるな」

「よく迷わないな」

「当たり前だろ！　遺跡の匂いがぶんぶんしている場所で迷うわけがないじゃないか！」

「・・・マニアか」

マリンの言葉に彼は声を荒げる。

「失敬な！　俺は研究者だ！　あんな愛でて喜んでいるだけの連中とは一緒にしないでくれ！　・・・あ、すまん、遺跡のことになるとつい感情的に」

ああ、なるほど、彼もまた変態か。

カナリアは納得したように頷く。

「それにしても本当に霧が濃いな」

「そうだな。いつもにも増して深い感じがするな。面倒な事になるかもしれないから、お互いの身体を縛るけど構わないか？」

「ああ、緊縛か」

「きん・・・ま、間違つてねーけど、ドクターが言つと嫌らしく聞こえるぜ」

そう言いながら彼はロープを出す。

霧や雪が深い場所では近くを歩いていてもお互いを見失いやすい。互いを縛り合うのは基本的な事だ。

きつく縛る、という意味では緊縛という表現は正しいのだが、マリンが言つと何か別の意味合いを持つように聞こえる。鬼畜顔のせいか。

ゼルがマリンの腰にロープを縛り付け、同じロープをカナリアの腰にも結ぼうとする。

「俺は止めてくれ」

「うん？」

「真ん中を歩くから大丈夫だ。危険が無いとは言え、いざというと

きに自由に戦えなければ護衛の意味がない」

「この上には獣とか出ないぜ？」

「万が一の為の護衛だ。はぐれたら置いていって構わねーよ」

「そこまで言うなら無理強いはいないけどな」

ゼルは少し余裕をとって、ロープの反対側を自分の身体に結びつける。

手慣れた手つきから、旅慣れた感じが知れた。

「じゃ、行くか。足下気を付けてくれよな」

彼の先導で一行は歩き始める。

霧のトーアの道は少し列を離れればすぐに見失ってしまうほど深い。山道と言うよりは崖に近いほどの道で、陽が当たらない為か、草木が生えている気配すらなかった。

靴底で感じるざらりとした感触は乾いた砂。

霧、と言っても水分を含んだ霧とは違うようだった。

（魔力が満ちているけど・・・誰かが魔法を使っている気配はしないな）

神か精霊か。人間ではない思念の力が働いていると考えた方が良さそうだ。ラン王国に残る信仰や伝承を考えるとネセセア神の意思と考えるのが妥当だ。トーアには神が守りたいと思うほどのものがあるか、あるいは神そのものが眠っているのかもしれない。

「なあ、マリンちゃんよ」

「何だ」

「お前、ホントのところ、トーアに何の用があるんだ？」

「・・・」

「カナリアと旅行がしたかったの、だから高い金払って誘っちゃった、って訳じゃないんだろ？」

「・・・兄さん、どこから声出しているんだ？」

彼の「きやるん」とした声にゼルが突っ込む。

マリンは真顔で答えた。

「実はその通りだ」

「うわぁ・・・」

覚えず、退。

カナリアではなく、ゼルの方が、
変わらない声音でマリンは言う。

「冗談だ」

「・・・冗談に聞こえねえ。怖えーよ、ドクター」

「褒め言葉だな」

ふん、と彼は鼻で笑う。

これで結構マリンはゼルのことを気に入っているのだろう。でなければいちいちじつたりしない。もともと、年齢は対象外ではあるが。

「冗談はともかくどうなんだよ、マリン？」

「兄さんは動じないな」

「ん、まあ、それなりにつき合い長いからな」

しかし、それでも計りきれないところはあるのだが。

そもそも彼が診療所で本当の理由を言いたがらなかったのは説明が長くなるからではなく、エリーがいたからだ。カナリアが「患者がいる」と言って、安堵の色（全く表情を動かさないようにも見える微妙な変化）を見せたのは彼女に知られたくないことが会ったのだろう。

少年好きのくせに、彼女を診療所で働かせたり、そうかと思えば秘密事を作ったり、今ひとつ考えていることがつかめなかった。

「トーアには患者がいる。それは事実だ」

「だがそれじゃあ・・・」

自分を雇う意味がない。

言葉を遮るようにマリンが言う。

「依頼人はヴィクレア領主だ」

「あ、なるほど」

それで全ての納得がいく。

エリーに聞かせたくなかったのも、カナリアに依頼したことも。

霧に包まれた道は薄暗く、太陽の位置も分からないために時間もまた分からなかった。判断する要素があるとすれば自分の身体の疲労だろうが、山道ということもあって判断が難しかった。

「ゼル、休憩しよう」

カナリアが声をかけると霧の向こうから声が戻ってくる。

真ん中にロープがなければ先を行くゼルの姿も、マリンの姿も見えない。それだけ霧深い場所だった。

「何だ、もうばてたのかよ？ まだまだ先が長いぜ」

「先が長いから休憩をするんだ。俺らはいいが」

ちらりと後方を見やると、ぶっきらぼうな言葉が戻ってくる。

「俺なら大丈夫だ」

「慣れた奴の言うことは聞いておくべきだ、マリン」

「・・・」

「ともかく休憩だ。ゼル、休めそうなところがあつたら声をかけてくれ」

そこから少し進んだ場所で焚き火を熾した。

火を熾すと、その周りだけが反応するように霧の気配を消した。

呼応するように奥の霧はますます深さを増す。迷えば二度と出られないというのは分かる気がした。

マリンはむっとした様子でカナリアを睨んだ。

「こんなすぐに休んだら何日かかるか分かったものじゃないな」

「だからといって無理したらもつと時間がかかるだろう？ 足を見せて見る」

「何？ ドクター怪我でもしてんのか？」

彼は首を振る。

表情からは本当か否か判断しかねる。

「していない。しているとしても自分で治療は出来る」

「こんな山道歩くための補強は俺の方が専門だよ。もう随分痛んできてるんだろう？」

「………すまない」

そう言つて彼は大人しくカナリアの言う通りにした。

歩き慣れていないマリンの足は布を巻き付けてあるものの、もう既にめめがいくつかつぶれかけていた。

彼が出かけるとしたら馬車が普通だろう。歩くことがあるとしても、こんな山道を何時間も歩くことはない。いきなりこんなキツイことをさせたのだから、無理もないだろう。

塗り薬と布で補強と固定をしながらカナリアは言う。

「………疲れそうだな」

「誰がマヌケの小足だ。この、ろくでなし」

「言つてねーよ」

「ん？　なんだそれ、暗号か？」

「医学用語だ。バカの大足、マヌケの小足、中途半端はろくでなしだ」

「んじゃ、俺バカかよ!？」

「……医学用語なのか？」

「嘘だ」

「……」

「……」

真顔で冗談。

黒猫を連れた誰かを彷彿とさせる。

「それにしても、兄さん良く気付いたな。歩調が弱まった訳でもないし、ドクター弱音吐かないから気付かなかったぜ？」

くくつとカナリアは笑う。

「こいつはやたらとプライドが高いからなあ」

「うるさい」

「凶星だから怒るんだよな」

揶揄するように笑うと医者に睨まれる。

カナリアは肩をすくめた。

ゼルがしみじみと漏らす。

「二人とも愛し合っているんだなあ」

『気色悪いことを言うな!』

ステレオ現象。

二方向から言われゼルは喜々として手を叩いた。

「タイミングぴったり! あんたら本当に仲が・・・うをお!!」

「それ以上言うと今度は当てるぞ?」

「かまわん、葬ってしまえ」

「ぶ、物騒な話は止めてくれ!」

突然飛んできたナイフとメスを何とか交わし、彼は心臓を押さえる。ばくばく鳴る心臓は口から飛び出して来そうだ。

口は災いの元。

言うんじゃなかった。

気も合うようだし、ますます仲が良いなんて三つ目の地雷を踏む気にはなれない。それこそ、今度こそ命がなくなる。

Story 4 心臓のない少年(5)

5 闖入者

「むー」

「あら、仏頂面ですわね、せっかくの可愛い顔が台無しですわよ」
キッシュに言われ、エリーはますます頬を膨らませた。

診療所に患者の姿はない。いるのは、エリーとキッシュ、そして
アンナの女性組。唯一の男は、アンナの膝の上を陣取っているジェ
ラートくらいだ。

「だって暇なんだもん」

「病院が暇つてのは良いことですわ」

うふふ、と優雅そうに笑う女をきくと睨む。

「あ・の・ね、キッシュさん！　このくらい唾付けておけば治る
、って患者端から追い返しているのはいい事じゃないよ！」

「だって本当にあの程度なら治るんですもの。大体、いつもは医者
を嫌がる連中が、エリーちゃん目当てで来ているの見え見えですわ
・・・制裁されないだけマシと思って頂戴ませ？」

「言葉変だよ」

「あはん」

突っ込みを入れられたのに嬉しそうに笑うキッシュさん（年齢不
詳）。机の上に腰を下ろして見事な大腿部を披露。

アンナは寝台に寝転がりながらジェラートと遊んでいる。

そもそも客が減ったのは何やら妙な薬品を飲ませようと待機して
いるアンナのせいでもあるのだ。二人とも仕事があるのだろう。こ
んなところで油を売っていいのだろうか。

口を尖らせたままエリーは息を吐いた。

「せつかなんか役立てると思ったのに・・・」

「溜息をつくと幸せ逃げるわよ、スリッパちゃん」

「スリッパ!？」

「何ですの、その真新しい呼び名は？」

「機密作戦中よ」

アンナは身体を起こして座り直す。

「・・・あらん？ エリーちゃん、スリッパが左右の色違いますわよ」

「あ！ ホントだ！ しかも両方右！ なるほど」 それでスリッパちゃんなんだね！ アンナちゃんおもしろーい！」

面白いのはあんだだよ。

カナリアがいればすかさず突っ込みが来ただろう。不毛でしまりのない会話に少し違和感を覚える。

彼女は少し表情を暗くした。

「どうしたの、卓球ちゃん」

「ん・・・あのさ、二人から見て、カナリアってどんな人？」

「どんなつて・・・安心なさいませ、私は女の子にしか興味ありませんわよ」

それはそれで問題な気もする。

「そう言う事じゃなくて、ええつと・・・」

「人と形のことを仰っているんですわね？」

「うん」

アンナがジェラートの腕を掴んで「高い高い」をしながら答える。胸がだれーんと長く伸びた猫はされるままになっている。

「それなら答えは簡単。実験台よ」

「実験台!？」

「丈夫で長持ち。耐性がありすぎるせいでサンプルには不向き。危機に関して敏感だから、ヤバイものとそうでないものを区別してくれるから便利、と言うところね」

「ええ?? カナリアの扱いってそんななの!？」

「んふ、確かに彼つて随分と頑丈に出来ていますわよね」

「そう、だから実験台としてはまあまあいい方つてところ」

何だか酷い。

酷い発言の次はキツシュが少し神妙な面持ちで続ける。

「・・・私から言わせて頂きますと、敵に回したくない相手ですわね」

敵に回したくない、彼女は口の中で反芻する。

赤い瞳の彼を思い出した。

「信念があつて動いているようですわね。それに障りなければ関係は良好でしょう。彼は随分とお人好しですもの」

「・・・でも、便利屋つて・・・掃除屋つて人殺しもするんだよね？」

銀の麦の中でマスターがやりとりしている仕事を見ると「人殺し」に分類される仕事も少なくない。厄介なものになると、ほとんどが「掃除屋」と呼ばれるカナリアやキツシュたちの方に回される。

今日の前で穏やかそうに笑っているキツシュだって、人を殺して来ているのだ。

「依頼次第ではそうですわね」

「そう・・・だよね」

殺人はほとんどの国で犯罪なのだと明記されている。しかし、便利屋が依頼で人を殺す事はほとんど黙認されるのだと聞いた。あまり派手に人を殺したり、依頼を良いことに殺し回っているとすればさすがに国も動くが、国自体が秘密裏に依頼してくることもあるためほとんどの場合許されるのだと言う。

それは彼女がこの国に来てから知った世界のほとんどの場所を通じる仕組み。

どんな事情でも人殺しは重犯罪だったオーナディア出身の彼女にとっては異常なこと。オーナディアでは襲いかかった盗賊を追い払うために誤って殺してしまっても罪になるのだ。

そんな環境の、しかも最も安全な場所で育ったエリーがカナリア

の行為を気にしない訳がなかった。

それに、彼のあの表情を見てしまったから余計に気になるのだ。
人を殺すためにシエランに入った自分が責められる立場にないことは知っている。だけど、彼の顔はまるで拷問を楽しんでいるようだった。

あの顔で、人を殺しているのだろうか。

「何かあったの？」

「・・・」

見間違いかもしれない。・・・そうあって欲しいと思う。

口に出せばそれが現実になるような気がして、言えなかった。

ふわり、とキツシュが微笑む。

優しくエリーの髪を撫でる。

「ふふ・・・何があったのか知りませんが、彼はいつも最善の方法を選びますわよ」

うん、とアンナも頷く。

「ドリルさんも死にかけて小鳥ちゃんに助けられたのよ」

「・・・どうしてあなたが知っていますの？」

「企業秘密よ」

「え？　どんな企業！？　株式会社！？」

「カブを売るなら黒猫産業カンパニー株式会社よ。代表取締役はジエラさん」

「すっごーい！　格好良い！」

会社名が？　それとも代表取締役が！？

「・・・どうでもいいけど、長い名前ですわね」

「略すとクロカンブシュ」

「・・・」

略されていない上に何だか美味しそうな名前だ。

「ね、ね、何している会社なの！？」

「アフロの製造とアフロの販売。冷凍アフロに瞬間接着アフロ」

「え？？　アフロばっか！」

「アフロ一筋黒猫コーポレーション有限公司社二号店よ」

「・・・会社名変わっていますわよ」

「細かいことを気にするといいドリラーになれないわよ」

「なりません！　しかも細かくありませんわ」

「突っ込みを入れると膨らむわよ」

「何が!？」

「ジェラさんが」

アンナはキツシュの目の前にジェラートを差し出す。

瞬間。

もわっ！

ジェラートがハリネズミのように毛を逆立てた。

「・・・あら、冗談のつもりだったけど本当に膨らんだわ」

「あらん　ふわふわもこもこで可愛いすわね」

「猫ちゃんすごー！　さすが代表取締役！」

「関係ありませんわよ」

「どうかしら？　・・・だけど遊んでいる場合でもないみたい」

アンナはもこもこになったジェラートを頭の上に載せる。

無表情の為、急変したのかも分からないけれど、雰囲気的に何となく急変したようなアンナの表情を見てキツシュは表情を硬くした。

「何かありましたのね？」

「え？　どうかしたの？」

「闖入者よ。少し様子を見てくるわ」

「私も行きますわ」

キツシュが立てかけてあった鎌を手取る。

「ドリドリさんは、・・・そうね、一緒に来てくれると大活躍の兆し」

とジェラさん

彼女が一人で大丈夫と言わないと言うことは、闖入者は厄介な相手と言うことになる。

ごくりと唾を飲んでキツシュは強く頷いた。

Story 4 心臓のない少年（6）

6 才を持つ少年

「ここが、トーア」

頂上にたどり着くと同時に深かった霧も晴れた。

現れたトーアの街並みは整然としており、村や町というよりも古代都市という印象の方が強い。霧は雲海のように包み込み、まるで空中に浮いている飛行都市にのような錯覚さえ覚えた。

都市はピラミッド状に盛り上がり、一番高い場所には宮殿か神殿の様な場所がある。ゼルのような遺跡マニアでなくとも、この街並みを見れば少なからず感動を覚えるだろう。遠くを見やると都市と雲海を隔てた向こう側に緑が青々と茂る放牧場の様な場所が見える。少なくとも放牧は出来る程に作物は育つようだ。

霧が外部との接触を拒んでいるために、もつと閑寂な場所だろうと思っていた。意外と人の姿も多く驚く。彼らは入ってきた三人を珍しそうに見ることはあったが、警戒している様子は見られなかった。

（妙だな、もう少し奇異の目で見られることを覚悟していたんだが）様子を窺うと上の方から人が降りてくる気配を感じた。

口。ア人に連行される宇宙人・・・もとい、背の高い青年二人に挟まれて背の低い老人が段差をゆっくり降りてくる。

老人はマリンの前で立ち止まると静かに礼の形を取った。

「遠路遙々痛み入ります、リン医師でございますな？」

口調は尋ねているようだったが、老人は確信をしている様子だった。

「ああ」

「お待ちしておりました。私はトーアのシドと申しますじゃ
ゼルがすかさず耳打ちをする。

「・・・シド家はトーアの王族みたいなものだよ」

「そんな立派なものでもありませんぞ、フローラル殿」

「へえ、耳の良いはーさんだ」

カナリアは感心して漏らす。

「・・・ばーさん？」

不審そうにゼルとマリンが見る。シドと名乗った老人はヒゲを生
やしている。どう見ても爺さんにしか見えない。

「ん？ あれ？ 女の人じゃねえの？」

「ヒゲあるじゃん」

「付け髭じゃ！」

ぶちいっ！ と音を立ててシド老人のヒゲがもぎ取られる。

「何故！？」

「何で！？」

驚愕の声を漏らすマリンとゼル。さすがにいきなりヒゲをむしる
とはカナリアも驚いた。

少し勢いよく取りすぎたせいで痛かったのか、老婆は顎をさすり
ながら答える。

「朝晩冷え込んで顎が寒くての」

「そんな理由！？ っていうか、何であんた分かったんだよ！」

「え？ いや、だってどう見たって女の人・・・」

「ほっほっ、お若いの、良い目をお持ちじゃの」

「さすが無類の女好きと言ったところか」

「節操なしみたいに言うなよ」

カナリアはおかしそうに笑いをこらえるマリンを睨んだ。

直接会った方が早いと言われ、すぐに患者のところに行くことになった。

トアに入ったとたん、良くないことに遭遇するという懸念を抱いていたカナリアは、当面何かある様子がないことを悟り、少しだけほっとする。

ヴィクレア領主の名前で依頼が来た以上、患者が何か特別な意味を持つ人物の可能性が高い。治療が終わればマリンが消される可能性もある。

領主はつい先だってヴァルコからその息子ファルノに変わっている。先代は姉を孕ませて奥地で処置した。そしてそれに関わった医者も処分したという経歴を持っている。それだけに息子も同じような事をしないと限らない。

もう一つ考えられるのが、領主の名をかたった可能性だ。

マリンに恨みがあつた、若しくは彼を利用しようとした。その名を出せば無下に出来ない領主の名を出してここまで来させたのだ。少なくとも彼に恨みがあつて殺そうとしたという可能性だけは薄くなったのだが。

「患者はこの中じゃよ。あまり大勢で近付くと汚れが移る故、少数での」

「ん、じゃあ俺は治療が終わるまでその辺をぶらぶらしてくる」
ゼルは喜々と言う。

遺跡を見たくてうずうずしているらしい。

「分かった。・・・カナリア、お前は来てくれ」

「了解」

「わしらはここで待つておりますゆえ」

老婆達と別れ、カナリアとマリンは建物の奥の方へ向かう。

街の中央に近い方の広い建物の中だった。古くはあつたが、造りは案外と頑丈に出来ている。石壁には細工のようなものが施され、この建物が建てられた当時は貴族階級の者が使っていたと想像できる。どうやらこの街は中央ほど身分が高い人物が暮らしていたよう

だ。

「ここのようだな」

マリンは言つて扉に手をかける。
ゆっくりと扉が開く。

カーテンのような薄布が何枚も吊され、奥に小柄な人影が見えた。
「だれですか」

たどたどしい口調の子供の声。

一瞬、二人は顔を見合わせた。

「二人いますね、せんせいと、じょしゅの人ですか？」

子供はカーテンをかき分けるようにして近づいてくる。

薄青い髪の少年だった。腰まで届くほど長く真っ直ぐな髪。若草色の瞳。歳はまだ六歳に満たないくらいだろうか。微かに水の匂いがした。

少年はカナリアを見て指をさす。

「おにいさん、かなりあですね？　ぼく、しっています」

「？」

少年は自分の服から何かよれよれになった紙を取り出す。そこには黒と青でぐちゃぐちゃ書かれた人らしきものが書かれていた。

彼はそれとカナリアを見比べて叫ぶ。

「そっくりです！」

「それ俺か！？」

「あねうえが、かいてくれたです。ぼくが、ぐげん、した、どらごん、をたおすの手伝った人です」

すぐに何の事なのかわかった。

伝説の英雄リーティア・ミステリアの弟。描いたものを具現させる能力を持つ少年。

「……亜精霊種」

彼はにこにこ笑いながら答える。

「はい、ぼく、あせーれいです。らねる・みすていあ、です」
マリンは目を丸くする。

「ラネル殿はミスティア家の当主のはずだが」

「はい、そうです。これでもおにーさんたちより年上ですよ」

にこにこしながら答える少年はやはり少年にしか見えない。亜精霊種が見かけ通りの年齢ではないことはよく知られているが、ここまですぐに違和感を覚える。

「俺を呼んだのは亜精霊特有の疾患のせいかな」

「そうです、せんせい、さすがあたまいいです、すごいです！」

ぱちぱちと手を叩いて喜ぶ姿は、純粹な子供だ。

じっと見つめていたマリンは難しい顔でカナリアを呼ぶ。

近付いてきたカナリアの襟首を掴み引き寄せた彼はラネルに聞こえないように小声でささやく。

「まずいぞ」

神妙そうに言われ、カナリアは些か不安になる。彼が泣き言を漏らすなど滅多にないことだ。

「……その疾患のせいかな？ それとも亜精霊ということかな？」

「……と」

「と？」

「年上にときめいてしまった」

「死んでしまえ、変態」

Story 4 心臓のない少年（7）

7 イチイの実

「こんな街、壊しちゃえばいいのに」

彼は街並みをぐるりと眺めながら物騒な言葉を呟いた。

茶色い髪に青い瞳の十二、三の少年。人を見下したような瞳には、残虐で自分勝手な性格が如実に表れていた。

少年の後ろには大人しそうな金髪の女と、傭兵風の男が控えていた。奇妙な取り合わせにも見えるが、レバンではさして珍しい一団ではない。

「・・・破壊はなりません。それがアナナス様のご命令ですよ」

「分かっているよ。いちいち僕に指図するな。花の名前も持たない雑草のくせに」

「申し訳ございません」

素直に謝る傭兵風の男を気に入らないといった風に見ていた少年はやがて追い払うように手を振った。

「もういい、はやくあの木偶人形探しておいで」

「承知しました」

そう言つて男は街中の方へ走っていく。

女はくすりと笑つて長い髪を耳にかける仕草をする。サラサラとした金髪は腰の辺りまである。二十代前半くらいの大人しそうな印象の女だった。瞳は青く、微睡んだように半分しか開かれていない。

「あなたは本当にあの子の事が嫌いなのかね」

「当然だよ、つぎはぎ人形のくせにアナナスに気に入られちゃってさ。しかもしょっちゅうどっかに消える。捜しに来る僕らの身にもなれっての」

女は微笑んだまま首を傾げる。

「だけど、あの子は私たちの王よ」

「いずれ王の器になる、ってただだよ。王が目覚めたとしても、僕に命令して良いのはアナナスだけだよ」

「本当にアナナス様のことが好きなのね」

楽しそうに笑った。

そして不意に視線を街中の方に巡らせる。

「……あら、何か来るわ」

「ムスカリの言っていた厄介な連中ってそいつらのことかな。どうせあれの妙な気配を感じて動き始めたんだろう？ いっそあいつらが処分してくれないかな」

「そうしたらアナナス様がお悲しみになるわ」

「うん、だから仕方ない。計画の弊害になりそうな奴らは全部僕らが排除するんだ。リコリスも手伝ってくれるだろう？」

女は笑って頷く。

「スイレンの役に立てるなら何でもするわ」

「うう……暇だよー」

エリーは呟いて横に揺れる。

客が来ない上にキッシュやアンナまでいなくなってしまったらとたんに暇になった。待つことも仕事の一環だが飛び回っている方が性に合っているため長時間閉じこもっているのは苦痛だった。

「・・・あ！ そうだ」

彼女は思い立ったように手をあわせる。

手近にあった紙に何やら書き込み、診療所の目立つところに貼りつける。

「これでよし！」

その紙はカルテであり、その上、シエラン語で「用があつたら裏に回ってね リン診療所」と書くつもりが間違つて「命が惜しければ引き返せ 闇医者」と書いてしまっている。

彼女は気付く余地もなく喜々として診療所の裏手に走っていく。

どうせ暇なのだから魔法の練習でもしようという安易な考えだ。

万が一診療所を破壊しても、破壊しそうな位置にある病室の中に患者はいないから害はない。

「うん、うん、おーるおっけーだね」

自分のコントロールの悪さが想定外であることを全く意識せず彼女は慎重に魔法を組み上げていく。

「ええつと・・・土の低級魔法は・・・土瓶茶瓶はげちゃびん！ 教師び。びん物語！」

作者の年齢詐称疑惑が再燃しそんな呪文を唱え、彼女は大地の魔法を組み上げる。

予定では地面から槍のような鋭い岩の塊が彼女の見つめている方向に向かって吹き出して来るはずだ。

しかし、予定は未定。

鋭い槍のようなものが飛び出したのは確かだが、それは斜め上に向けて弾弓を使ったかのように飛んでいく。

「きゃー！！！！ 何で！？ 失敗！？」

彼女の放った小さな石の槍は頂点まで達すると急に角度を変えて落ちてくる。

その先に人の気配。

「わっ！ 逃げて！」

「？」

人影が顔を上げた。

石槍は目前まで迫っている。

「！！」

エリーは覚えず顔を背けた。

悲鳴は・・・聞こえて来なかった。

代わりに何かがはじけ飛んだような音が響く。

「・・・？」

おそろおそろ顔を上げると粉々に砕け散った石槍が彼を避けるようにバラバラと落ちていくところだった。彼は無表情のまま、エリーの方を見つめていた。

彼の瞳は血のように赤かった。髪は灰を落としたような鈍い銀色。バラバラに切られた髪の両サイドだけが胸にかかるほど長い。歳はエリーと同じくらいかももう少し下だろうか。体型を覆い隠すように真っ白いローブを身に纏っている。

「・・・今の、君？」

「え？ あ・・・うん、ノーコンでごめんなさい」

「当たらなかったから大丈夫」

少年は静かな口調で言った。

奇妙な感じがした。

「封印されているみたいだね」

「・・・？」

「魔法。誰かの力で使えないようになってる。だけど君の魔力の方が強いから不自然な方向に飛んでいくようにしか作用しないみたい」

「魔法使いなの？ ええつと・・・」

「？」

彼は不思議そうに少し首を傾げる。エリーは言葉にして問い直した。

「名前、何て言うの？」

「知らない。我が王って呼ばれているけど」

「ワガオウくん？」

少年は笑うこともせず答える。

「好きに呼べばいいよ」

「好きに？ あつ、私、エリードっていうの。エリーって呼んで」

「エリー？」

「うん」

「エリーって、どんな花？」

「え？ 花の名前じゃないよ」

少し、少年は驚いたようにした。

「君、それだけの魔力を持っているのに、一族の者ではないんだね。」

「・・・エリー？ 僕の瞳の色が珍しい？」

「え？」

少年に問われ、彼女は自分が瞳に見とれていたことに気付く。

瞳孔の方は黒く、光彩は少し鈍い赤。あまり見たことのない色だった。どこもなくあの時のカナリアの瞳に似ている。それなのに、冷酷さも残忍さも感じない。

不思議な感覚だった。

「ご、ゴメン！」

「いいけど、口から汁出てるよ」

「え？ ああ！！ ハズカシイ！ イチイみたいだな、って思った
らよだれが！」

「イチイ？」

「うん、赤い木の実。宮殿・・・じゃなくて、家の庭にあつて、小さい頃に良く食べていたんだ」

「好きなの？」

「うん。あ・・・イチイ」

「え？」

「ワガオウくんって言いにくいから、イチイくんって呼んでも良い？」

「・・・僕の名前？」

「嫌？」

彼は首を振る。

そして初めて微笑んだ。

「ううん、嬉しい」

「えへへ、良かった。……あれ……目の色が」

彼のイチイの実のような瞳の色はだんだんと色を失っていく。だんだんと色あせ、瞳孔の黒い色もだんだんと緩くなっていく。やがて彼の瞳の色は髪の毛と同じ鈍い銀色で止まった。

まるで灰色の瞳。

「……信じらんねえ」

がさり、と音がする。

草むらをかき分けて傭兵風の男が顔を覗かせる。血の匂いを漂わせている危険な感じの男。エリーは覚えず後退った。イチイは振り返り、男を見た。その表情には先刻のように微笑む様子はなかった。

男は呆れたとも驚いたともとれる表情でエリーを見つめ呟いた。

「人間の子供が、名付けちゃった」

声音には絶望に似た感情が含まれていた。

Story 4 心臓のない少年（8）

8 王の器

「ぼくたちは、あいんはいと、出るとかたち保てないです」

ラネルはベッドの上に座りながら言う。

「あせーれいの中でも、みずのみすていあ、はとくべつダメです。長いあいだはなれると、しょうめつしてしまうです。そういうびょうきです」

それはカナリアも聞いたことがあった。

亜精霊はアインハイトで暮らす。それは彼らにとってあの場所が特別な場所だからだ。平気な種族もちろんいるが、人間とは異なる外見を持つ種族の中にはアインハイトを離れると本来の姿を保てない。リーティアは老婆の姿になりながらも平気そうでいたから気にも留めていなかったが、本来ならば生命そのものに関わる問題なのだ。

「あねうえは異端です。水さえあればへいきで外をあるけるです。でも、ぼくはだめでした」

「じゃあ、どうして外に出たりした？」

「さらわれたです」

「さらわれた？」

「そうです、ぼくは外にだされて、消えそうになりました。消えるすんぜんに、トーアに逃げたです。ここは、あいんはいとのくうきに近いから、すがたを少ししたもてるです。でもこのままじゃ戻れないから、あせーれいのびょうき、にくわしいせんせいを呼んでもらったです」

マリンは難しい顔をした。

「詳しいと言っても、治せるわけではない」

ラネルは気にしないと言う風に笑った。

子供の外見のくせに、全てを悟りきったような顔だ。それは二人の男の目には不自然に映る。

「知っているです。戻れるだけのあいだ、かたちが保てればいいです。ぼくは、あせーれーの王につたえる‘ぎむ’があるですよ」

「伝えるって何を？」

「ぼくをさらったあななすが、何をしようとしているかです」

「アナナスだって!？」

声を荒げてカナリアは口元を覆った。

その名前は聞いたことがある。シェラン城でハーレルの身体を支配していたイソトマが最期に口にした名前だ。

・・・アナナスめ、計画が綻んだことも知らず今頃

彼は確かにそう言った。

花の名前を持つ者たち。アナナスは、おそらくその中心にいる人物。

「おにーさん、知ってるですか？」

彼はぐつと拳を握りしめた。

手が、震える。

「面識はない。名前を聞いたことがあるくらいだ。奴は・・・何をしようとしている」

「かおこわいですよ」

「カナリアの顔がおかしいのは元々だ」

「・・・マリン、言っている事が変わっているし、それは突っ込みではなく暴言だぞ」

「思った事を口にしたまでだ」

診察の準備を始めながらマリンは淡々と答える。

壁に寄りかかりながらカナリアは腕組みをした。

「余計悪いっつーの。っーか、俺、容姿は標準点クリアのはずなんだけど」

「随分低い標準点だ」

「・・・初恋の相手が俺のくせに偉そうに」

初恋の相手、という点を否定せず、マリンは彼を睨む。
どうやら事実らしい。

「このことにつきましては、番外編にてこーかい予定になっていますです！」

「・・・？ 誰に言っているんだ？」

「どくしゃのかた'です！」

何か分らない力に言わされている感のあるセリフだ。

不思議と、力が抜ける。

「読者つて・・・まあいいか。それでアナナスは一体何をしようとしているんだ？」

「おうをふつかつさせる'と言っていましたです」

カナリアは頷く。

およそ見当はついていていた。このところ頻繁に動いているのを見ればおそらく封印された王を復活させようとしているのだろうとトキたちも言っていた。鳥は、王の復活をさせないために監視を続けているのだ。

それこそ、神話の時代から。

「お前に王の器を描かせるつもりか？」

ラネルは首を横に振った。

「ちがいます。ぼくが描くのは'かりそめ'でしかありません。あせーれいの手足を繋ぎあわせて、りゅーおーのけいやくしゃの血をそそぐです」

「それは禁呪だ。それに、現代魔法技術では不可能だ」

「あねうえのうでが切り落とされました」

「・・・」

「あななすのそばに、たましいのない男の子、いたです」

「まさか・・・」

「まだ'しんぞう'と'なまえ'がありません。だけど、かたちは

完成しています。あれが、おうのうつわ、です、まちがないです」

カナリアは口元を押さえる。

王の器がほぼ完全体となると、もう一刻の猶予もない。急いで彼らを止めなければ王が復活し、取り返しが付かないことになってしまふ。

「・・・お前ら、どこの王の話をしているんだ？」

『灰の王』

言葉が重なった。

三人は一斉に振り返った。

レースのカーテンの向こう側。戸口に近いところに男は立っている。腕組みをして、こちらを楽しそうに見やっていた。

迂闊だった。

話に夢中で彼が近くにいたことを全く気が付かなかった。いや、もつと早くに気付くべきだったのだ。

「ゼラニウム・・・お前やっぱり」

「おっと、勘違いするなよ。俺はムスカリだ。そのガキを連れて行くためには、トーアに入る必要がある。だが、ここの霧は俺たちを阻む。だからこいつに間借りしただけだ。残念ながらこいつの親族は無関係だよ」

くっ、と彼は笑う。

「まさか、亜精霊の長達以外に俺たちのことを知っている奴がいるとはね。お前、鳥か？ それにしては気配が妙だが」

「・・・悪かったな、雑種だよ」

カナリアは腰元に手を這わせる。

この環境で戦えるだろうか。トーアの特殊な深い霧の中で戦うことが出来るだろうか。

もつとも、それは彼とて同じ事だ。

「マリン」

「何だ」

「万が一にも俺が戻らなかったら、ラネル連れてレバンに戻れ。ばーさんに頼めば下まで連れて行ってくれるだろう。戻ったらトキという男に今聞いたこと全て話してくれ。居場所はキツシュが知っている」

「分かった」

頷いたのを確認してゼルの身体を‘間借り’しているムスカリに向き直る。

「こいつ連れて行くつもりなら、俺を倒してからにしろよ」

「いいけど、混血種が俺に敵うとも思ってる？」

「やってみなきゃわからねーよ」

「おにーさん、ダメです。殺されますよ」

分かっている。スイレンやイソトマのようにはいかないだろう。ムスカリと名乗った男は間違いなく強い。それこそ、シャレにならないほど。

身体が危険だと囁いている。

それでも、戦わない訳にはいかない。

そう自分で決めたのだから。

カナリアはナイフを指の間に挟んだ。

袖を掴んで行かせまいとする少年の手をマリンが剥がす。

「後で説明してもらおうぞ」

「……サンキュー」

Story 4 心臓のない少年（9）

9 レバン攻防戦

ぞくり、とした。

全身の毛が逆立つような感覚とえばわかるだろうか。キッシュは大鎌を振り下ろした。視線の先には少年とにこにこ笑った大人しそうな女が立っている。

人ではないものと対峙しているような奇妙な感覚に襲われた。

「ぞわっふーぶわぶわって感じね」

「言いたいこと何となく分かりますが、意味が分からない表現ですわね」

「じゃあ・・・ぞわぞわにやーご何かどうかしら？」

「どうかしら？ と可愛く言われても答えようがありませんわね」

「仕方ないわね。ジェラさんお父さんスクランブルエッグよ」

アンナの頭の上に載っていたジェラートは少し二人を気にする素振りを見せながら地面に降り立つ。そのまま尻尾を高く上げてとてと歩き始めた。

「あら、可愛らしい猫」

女がにこにこ笑いながら言う。

年からは少女から少し外れてはいるが、美少女センサーが作動してもおかしくないレベルにもかかわらず可愛いという印象すら受けない。

不気味な女、それがキッシュの彼女に対する第一印象だった。

「ジェラさんバリバリ三本線ジャージよ」

「まあ、それはステキね」

「ええ、とっても」

「ちょっとそれって会話が成り立ってるの？」

的確な突っ込みを入れたのは少年だった。

キッシュは表情を陰しくさせた。少年は、死んだはずの男によく似ている。七、八年前の話だが、他ならぬキッシュ自身が首を切り落として殺した男によく似ていた。

年は若いが、無関係に思えない。

あの後、彼の遺体は見つかっていないのだ。

「ドリドリさん、鬼が顔のようよ？」

「それを言うのなら鬼のような形相ですわ。私を形容するには間違った単語ですけど」

「そうね、鬼はアフロだったわね、ごみんさい」

「謝るところそこなんだ！？ しかも微妙に謝罪の仕方が変だよ」

「あら、ごきげんよう。茶アフロさんに金アフロさん。只今レバンではアフロの方のご入場を固く禁じておりますので、お引き取り奉ります」

「アンナちゃん、奉ってどうしますの？」

「あはは、愉快だね君たち。・・・面白いから、少し遊んであげようか？」

少年の目が鋭くなる。

反射的にキッシュは身構える。

少年は嘲笑した。

「いいね、いい目。僕は嫌いじゃないよ。気に入ったから特別に名前を教えてあげるよ」

「知っているわ、アームレスラーの葦崎さんでしょ？」

「誰！？」

「葦崎さん（ 実在しません。実在しても無関係です ）」

「ふーん、それ、僕に似ているの？ だけど、残念ながら違っよ。

僕はスイレンだ。覚えておいた方が良いでしょう。これから有名になる男の名前だから」

「・・・スイレンですって？」

同じ名前。

よく似た容貌。

キツシュは腹の底が震えるのを感じた。

「あれ？ 僕のことを知っているの？ ひょっとして僕が死ぬ前の知り合い？」

「あら、茶アフロ葎崎さん死体だったの？」

「だから葎崎じゃないって。僕らはね、灰が残っていれば何度でも蘇るんだよ。まあ、今回はアナナスが急いで作り直したから記憶の劣化を引き起こしたけどね。能力は衰えていないよ」

「・・・作り直す？ 記憶の劣化？」

にやりと、少年は見下したように笑う。

「早い話、僕らは死ぬけど不死身だってこと」

「富士山が見えるのね。驚き桃の大サンショウオね」

「君さ、分かってやっているの？ だとしたら少し見直すかも」
ふつ、と少年の身体しずむ。

アンナは身構えた。

キツシュも鎌を構える。

耳元で、女の囁くような声が聞こえた。

「・・・あなたの相手はこっち」

「！！」

キツシュは鎌を振るった。

女が空中を舞う。

鎌が何かを斬った気配はない。長い刃物は空中を薙ぎ、生じた衝撃波がつい先だって立て替えられたばかりの商店を破壊する。

「強すぎる紫外線はお肌の大敵よ」

魔法の障壁で何とかスイレンの攻撃を交わしたアンナはキツシュと背中合わせになりぽつりと呟く。

「分かっていますわ」

市街戦は派手にやるわけにはいかない。

この街の人間はそう弱い人間ばかりではないが、キツシュたちの

ように強い人間ばかりというわけではない。

戦いに巻き込まれれば怪我人だけではすまないだろう。

キツシュに、街の人間を守りきる余裕なんかない。

「・・・油断したわけではありません」

そう、油断したわけではない。

スイレんに気を取られたのは確かだ。けれど、女の動きにも注意を払っていた。あの時、スイレンが動き始めた瞬間、まだ彼女の姿はスイレンの後ろにあった。だが、気付けば彼女は自分の真後ろに立っていた。

人間の視覚を凌駕するスピード。

女に、それだけの身体能力があるとはとても思えない。

全身が妙に粟立った。

「リコリス、そっちはあげるよ。こっちの方が面白そうだもん」

女はふふ、と笑う。

「じゃあ私、こっちで我慢するわ」

「・・・我慢ですって？」

「だってあなたじゃ物足りないもの」

酷い侮辱だ。

魔法を使うアンナに比べれば能力は落ちるだろう。キツシュの使える魔術などたかが知れている。

だが、仮にも便利屋達の間で二つ名で呼ばれた程の実力を持つ身。そう簡単にやられるわけにはいかない。

キツシュはリコリスの瞳を見返す。青い瞳の奥で黒い瞳孔が妖しく震えている。自分の持つ色とは対照的だ。

「真紅と呼ばれた私を、あまり見くびらないで頂きたいですわね」

「真紅？ そう、なら貴方自身が赤く染まるといいわ」

女の姿が消える。

今度はスイレんに気をとられてなどいなかった。だが、女を目で追うどころか、動けば当然聞こえるはずの地面を蹴る音すら聞こえなかった。

（上？）

キッシュは鎌を空にかざす。
女が姿を現した。

（後ろ！）

鎌を振り下ろすが押さえきれなかった。

激しい衝撃とともにキッシュの身体は跳ね飛ばされる。キッシュは衝撃を和らげるために回転しながら地面に着地する。

手が痺れていた。

凄まじい力だった。その力は到底女のものとは思えない。自分の倍近くある体格の男とも戦った事があるが、彼女の力はそれに勝るとも劣らない。武器を持たない女が掌底だけの攻撃でここまでの力を出せるのは尋常ではない。

（魔法で強化しているんですわ。だけど、あのスピードは一体・・・）

スピードも精霊を纏わせれば補う事が出来る。だが、彼女の速さはそれを遥かに旨回るスピードだ。魔法で空間を移動することも出来ると聞くが、彼女からはそう言った魔法の気配を感じない。そんな魔法が存在し使っているとしても、一瞬で術を組み上げられるものではないはずだ。

「ふふ、反射神経は悪くないようね。・・・だけど、いつまで持つのかしら？」

女の姿が再び消える。

次はどこだ。

キッシュは感覚を研ぎ澄ます。

「！」

女の気配。

感じた瞬間、防ぐには間に合わない事を悟った。

Story 4 心臓のない少年（10）

10 深い霧の牢獄

「奥義・・・骨断ち！」

からからと笑うような声と共に、繰り出される上からの攻撃は何とか避けた。

横からの攻撃は・・・避けられなかった。

「ぐっ・・・」

食い込んだ刃が遠慮なく彼の腕を抉った。

そのまま骨を断つことも出来ただろう。しかし刃はそのまま霧の中に消える。右腕は刃が消えた直後激しく血を吹いた。

カナリアは右腕を押さえ、出血を抑える。

男は強かった。

トーアの霧はどちらの味方をするともない。だからこそ分かる。純粹に彼の身体能力が優れていることが。

仮の身体であるものの、これだけの動きが出来る者はそうはいない。花の名前を持つ者は魔法の才能に頼る傾向があるためトーアのような魔力を使うのがままならない環境であれば勝てる可能性が高いと思っていた。だがムスカリは魔法を使わずにカナリアを追いつめてきた。

そう、技術や才能の段階でカナリアの方が遥かに劣っているのだ。おそらくムスカリは剣の才能を持つ鳥の一族の中で、今もつとも優れた者とされるヒバリを相手にしても引けを取らないだろう。

彼に遊ぶつもりがなければカナリアなどとつくに死んでいる。

カナリアは意識を集中させる。

何度試みても霧が邪魔をして上手く魔力を集めることが出来ない。

ここの霧はやはり普通の霧ではないのだ。おそらく封呪と同等の効力をもっている。いわば魔法の霧。人を惑わせ、そして捕らえて離さない牢獄。

「・・・鳥はもう少し楽しませてくれると思ったけどね」

霧のどこからか、男の冷淡な声が響く。

「霧の中に入ったのは間違いだったね。どうせ俺の魔力を封じてっ
て思ったんだろうけど、俺は魔法を使わなくても強い。・・・って
か、俺は間借りの以外に特に強い力なんてもってねーんだよ。上な
ら霧の影響も少ない。勝てたかも知れないのに、残念だったな」

そう、霧の中ならば少し有利に運べるとおもっていた。しかし実際は深い霧に阻まれて気配は探りにくい。投げたところで簡単には
じかれてしまうのだ。

花の名前を持つ者たちの中で剣技に長けている者がいるとは思わ
なかったのが不運だった。霧の影響の少ないトーアの街中であつた
なら、まだ魔法が使えた可能性のある分マシだったのだ。

投げてナイフが当てられないのであれば、起死回生のチャンスは
一度しかない。

ムスカリが本気で自分を殺しに来た瞬間。

その瞬間だけに、チャンスが生まれる。

「なあ・・・あんたさ」

カナリアは止血しながら言う。

声が掠れるのは痛み of せいだ。挟まれた腕は炉で溶かした鉄を注
がれたように熱い。

（いや、注がれた事なんかねーけど・・・何でこんなに痛いんだよ）
今まで感じたこともない痛みに意識を手放したくなる。

「技を繰り出す時にいちいち『奥義』とか叫ぶのはダサイと思うぞ」
「え？ 格好良いと思うんだけどな」

「つい・・・剣投げとか、骨断ちとか、紙一重とか言ってたけど、
直接的すぎて何だか微妙な感じだよ」

「奥義・紙一重って、格好よくね？」

それが一番グサイ。

しかも名前から言って当たってないし、奥義でも何でもない。

カナリアは拳を握りしめ爪を立てる。手のひらに生じた小さな痛みに集中し、腕の痛みを忘れるように勤める。

「俺の師匠でももう少しマシなネーミングしたんだけどな。あんた格好悪いよ」

「・・・黒コートに格好悪いって言われたー」

「アフロならもう少し格好良くなるんじゃない？ あの今レバンで大流行、叩くと『ぽきゅ』って鳴る魔法機能のついたやつとか」

「なるほど！ それは名案だ！」

ぽん、と手を鳴らしてから、男はふふふ、と笑い出す。

「なーんて言うと思ったら大間違い。その魔法機能を目印にして俺に攻撃をするつもりだな？ そうはいかの塩辛雑炊！」

「・・・不味そうだな」

「あんたに攻撃される前に倒してから、心おきなくアフロを堪能してやる！」

「結局、かぶるのかよっ！」

「受けよ、奥義・貫き簡単マイペット（ひねりを効かせたネーミングだ！）」

「余計にグサイ！！？」

そんな奥義名で倒されたら立ち直れない。

カナリアはコートを大きく翻した。

衝撃があつた。

コートを突き破り、ムスカリの持つ剣がカナリアの身体を貫いた。喉の奥からせり上がる血の気配。

「がはっ」

カナリアは咳き込むと同時に血を吐き出す。

真正面から肺を貫かれた。

膝を折り、横向きに倒れ込む。

濃いミルクを垂らしたような霧の向こう側で、それとは別の何か

が落ちる音がした。霞む視界の中で男が肩を押さえて膝を折る姿が見えた。

彼の肩口にはコートを翻した瞬間、カナリアの投げたナイフが突き刺さっている。

彼がナイフを投げたことはムスカリも承知していた。だが大した怪我にならないと避けることをしなかったのだろう。

それが命取りになるとも知らずに。

「……お……まえ、こんなナイフ一本で……何を……した」

ごはつと、彼の口から砂が吐き出される。

灰だった。

口からこぼれたした灰はさらさらと落ち、地面に小さな山をつくった。それを見つめながらカナリアは答える。

花の名前を持つ者の支配にある身体が通常の毒でどうにかなるわけがない。

ナイフにはカナリア自信の血が塗ってあった。

「……この霧でも……血の中の、魔力まで……押さえられねーんだよ」

「どういう……意味だ？」

「……花は……強い魔力を持った方が……支配者になる」

「馬鹿な……お前……からは、花の気配なんて……」
ざば、と再び灰が吐き出された。

カナリアは薄く笑う。

「……俺は、雑種なんだよ」

「我々が……鳥の連中と混じれる訳が……」
ない、と言いかけて三度灰が吐き出される。

それが最後だった。

ゼルの身体は支配から解放され、ばたり、と地面に落ちる。

カナリアは確認をして目を閉じた。

もう限界だった。

普通の人間より回復が早いとは言え、肺を貫いた剣を抜く気力がなければ傷が治っても無駄だった。それに、この場所はカナリアに味方をしない。

そう誰の味方も、しない。

（・・・ああ・・・そう言えば出かける前にタマネギ処分するの忘れたな。・・・腐るとんでもない匂いになるんだよな）

風通しのいい場所に置いたから一ヶ月くらいなら平気だろう。

だが以前長雨で浸水した時に悲惨な状態になっていたこともある。マスターが気付いて処分してくれればいいのだけだ。

（あ・・・キツシュに金貸したまんまだ）

前に持ち合わせがないからと言われ立て替えたままだ。どうせ「端金を請求するなんて、みみっちい」ですわよ」と一笑されるだろう。

アンナはまた危険な実験をして父親を困らせていないだろうか。

エリーの魔法もなんとかしなければ危険だろう。危険と言えば咄嗟にそのまま出てきてしまったが、ラネルとマリンを二人きりにしてしまっただけだったのだろうか。

（ああ・・・しかし俺、こんな走馬燈しかないなんてちょっと嫌だな）

全部心配ごとばかりだ。

心残りが多すぎて死にきれない。

ざり、と砂が鳴った。

「・・・？」

カナリアは僅か目を開く。

霧の中に闇がいた。

不思議な形状の長い剣を持った男。髪は長く灰を落とした緑色をしていた。生きているのかすら分からない感情のない瞳は朱赤色。引きずるほど長い外套を纏った男はそこにあるだけだった。

一瞬、ここに封じられた神なのかと思った。
でも違う。

（俺は・・・この男を知っている・・・？）

男の目がカナリアを見た。

それは誰かを見たと言うよりも、道に落ちている石が視界に入っ
たというくらい何の感情も示さない瞳。

深い、闇の瞳だった。

Story 4 心臓のない少年（11）

11 老兵

彼女の気配を感じた瞬間、キッシュは防ぐには間に合わないと悟った。

衝撃を覚悟して目を瞑る。

しかし、彼女の身体には衝撃は走らなかった。

「街中で暴れるのは感心しませんね」

キッシュは目を開く。

バーテン姿のロマンスグレー。

少女好きのキッシュだったが一瞬見惚れてしまうほど美しい立ち姿。

「・・・マスター！」

銀の麦のマスター。

トレードマークはネクタイに付いた黒猫マーク。

「枯れ葉も山の賑わいと申します。この老兵、及ばずながらお相手させて頂きますよ」

普段通りの柔らかな物言い。

威厳などあまり感じさせないと言うのに、その立ち居振る舞いには一寸の隙もない。

だが、その手に持っている者はハエ叩き。

「まさかそんな武器で戦いますの？」

指摘されてマスターは瞬く。

「おや、急いできたので剣と間違ってしまったね」

「ま、間違いすぎですわ！」

遠くでスイレン相手に魔法を使っていたアンナは「グッドジョブ

！」という風に親指を突き出す。

「ああ、アンナに褒められてしまいましたね。怪我の功名ですか」
「・・・致命傷ですけどね」

マスターがどれだけ強いのか知らないけれど、いくら何でも八エ叩きでは戦えまい。

キツシユは蟀谷を揉んだ。

それとは対照的に険しい表情をしているのはリコリスの方だった。警戒するように間合いを取り、低く構えている。

まるでマスターに怯えているようだった。

スイレンもまた戦闘を中断してマスターを睨む。

「・・・あなた・・・何者？」

リコリスの問いにマスターは笑顔で答える。

「私は妖精です」

どーん。(効果音)

「よ、妖精って・・・？」

「若死によ」

「それは夭逝ですよアンナ。妖精って言うのはこのくらいの大きさで・・・まあ、精霊の子供みたいなものですよ」

「いや、僕は妖精の説明を求めたわけでは・・・」

「ああ・・・私が妖精には見えないって事ですね。それはそうですよ、私は妖精ではありませんからね」

がびーん(心理描写用効果音)

「ま、マスター・・・？」

「アンナは妖精なんですよ。父親の私が妖精でないとみんな混乱しますからね、妖精っていうことにしているんですよ」

「そう、お父さんは大人だから」

「説明になっているようで全く意味不明ですわね」

「だからあんた何者なんだよ」

機種依存文字でなければ彼の語尾には青筋マークが付いていただろう。

マスターは八工叩きを持ったまま改めて挨拶をする。立ち居振る舞いが格好良いのに、装備品が八工叩き。

八工叩き。

「銀の麦の主人で、アンナの父親です」

「だ・か・ら！ 名前！！」

「ああ・・・それならそうと早く言っして下さいよ。私は、リツ・リドフィールと申します」

「なっ！」

キッシュは驚きの声をあげる。

「名前ありましたのね！」

「どんな驚きだよ」

「マスターが名前かと思っていましたわ」

「あははは、もう名前みたいなものですけどね」

「一応序盤から名前はあったのよ・・・一応」

二回も「一応」というあたりが誰かを責めているようだ。名前を出す機会を恵まなかった誰かを。

「そして剣技の業界ではそれなりの有名人」

「昔は多くの方に名前を覚えていて頂いただけですよ。もう引退して久しいですけど」

「・・・剣技は、あまり衰えていないようね」

「お褒め頂き光栄です。・・・ところで」

マスターは八工叩きの柄の部分から、活用しない人が結構多い死んだ八工を掴むためのアレを引き抜きかちかちと動かした。

「つままれるのと叩かれるの、どちらがお好みですか？」

「どうせつままれるなら美人のネーちゃんに優しく、の方が俺としては嬉しいな」

突然今まで無かった男の声が響き一同は振り返る。

目つきの鋭い傭兵風の男が半眼で薄笑いを浮かべている。彼の後方には灰色の髪の少年。そして肩に何かを担いでいる。小柄な人くらしいの大きさの、塊だった。

何か、嫌な予感がした。

「あら、マニアックね。しかもお父さんに対して微妙にセクハラ」

「じーさんナンパしてもつまらねえよ。・・・スイレン様、王の器を回収してきました」

「ふうん、早かったね？　ところでそれは？」

男は僅かに笑いを浮かべる。

「名付け親ですよ」

「まさか名付けちゃったの？　人間が？」

「ええ、とんでもない魔力の持ち主です。何者かに封印されているようですが、それでも使い方によっては役立つかもしれません。儀式には莫大な魔力が必要ですからね」

「へえ、なかなかやるじゃん、グラス」

グラス、と呼ばれた男は卑屈っぽい笑いを浮かべる。

目つきは相変わらず鋭かった。

「初めて名前を呼んで下さいましたね」

「僕は役立つ奴は認める主義なんだ。で、それは何て言う名前？」

「エリードと名乗っていました」

「！」

「エリーちゃん!？」

彼の肩にかかっている塊は布にくるまれているために中まで確認することはできないが、確かにエリーくらいの大きさだった。

先刻からピクリともしないところを見ると、気を失っているのかもしれない。

「女の子さうなんて変態ね」

「言っておくが同意の上だよ」

「強姦魔が良く吐く台詞ですわね。私のエリーちゃんを返しなさい！」

さりげなく自分の所有物であることをアピール。

グラスはそれを一笑で終わらせる。

「彼女はあんたらの仲間の力ナだかりアだかって奴に不信感を持つ

ているようだね。少しつついたら一緒に来ることを納得してくれたよ。まあ気の変わらないように少し寝てもらったけどね。どちらにしても、彼を名付けた以上はこちら側に来て貰う他ないけどね」

彼はちらりと後ろを見た。

無表情の少年がじつと成り行きを見守っている。瞳の色は髪の色と同じ、灰色をしていた。

隙を見て動き出そうとしたキツシュを一瞥もせずにグラスは片手を上げる。

「姉さん動くなよ。そっちの嬢ちゃんも、だ。この子は人質と思っただ方が良い」

「・・・っ！」

アンナは組みかけた呪文を途中で中断させた。

「まるで目が二つ付いているようね」

「それ普通だよ」

「そう？ 目玉のおやじは一個だけよ」

「いえ、目玉しかないんですよ」

「ってどうか目玉のおやじって誰なんですよ!？」

Story 4 心臓のない少年（12）

12 ネセセアの神

朱赤色の瞳の男はゼルの身体の前で膝を折った。

その手がゆっくりと灰を掴む。

「・・・ムスカリ・・・」

呟かれた声はもう随分と喋っていない印象を受けるほど静かで不慣れなものだった。感情が含まれていないだけにぞっとするような声だった。

男はカナリアの姿も、ゼルの姿も見ることなく、灰の山の上に手をかざす。

ぼんやりと彼の手が光を放った。

「私はお前達の入山を許可した覚えはないよ」

「・・・」

男が顔を上げる。

霧の中に女がいた。

ふわふわとした癖のある赤い髪を短くまとめた二十代くらいの女。夜空に輝く青い星のような不思議な瞳。

恐ろしい程輝いているのに、穏やかだった。

「そのの空けた穴を利用して入り込んだようだね。そこまでしてそれを取り戻したかったのか、それともトーアで保護している亜精霊の子供が目的かい？」

口調は強かったが、彼女は面白いものでも発見したかのように微笑んでいた。

「どちらにしても私はお前がここにすることをよしとしないよ、アナナス」

「・・・！」

「名乗った覚えはない」

驚くカナリアとは対照的に彼は冷静に答えた。

生を感じさせないほどの動きで立ち上がり、女と向かい合う。その目にはやはり感情らしきものは見あたらなかった。

「名乗らずとも知れるよ、お前ほどの強い名前は。ここは私の守る場所だからね」

女はそう言つてカナリアの前で膝を付いた。彼女はカナリアを見て一瞬だけ不快そうに眉をひそめた。

だがすぐに彼女は笑う。笑つて、カナリアの肺に突き刺さった刃を抜いた。

鞘から剣を抜き去るよりも簡単に。

傷口から血は吹き出さなかった。それどころか先刻まで地獄の責め苦のように痛んでいた傷が嘘のように何も感じなくなった。代わりに来る感覚はまるで夢を見ているかのような、熱に浮かされているような奇妙な高揚感。

これは現実だろうか、それとも痛みあまり見えた幻覚だろうか。それすらも分からないまま彼は息を吐く。

身体は相変わらず動くことを知らない。

「太古の契約により、お前達は私の域に立ち入る事は許されていない。禁を破り、その上さらにここから持ち去ろうとしている。それならば相応の覚悟があるだろうね？」

「許してやる代わりに何かをよこせということか」

いくら何でも意識しすぎだろう！ とカナリアは心の中で突っ込みを入れる。

確かに話の流れではそれっぽくもとれないこともないが、この場合合は命、あるいは魂を差し出すだけの覚悟があるかと問われているのだと思う。

そう、この人はおそらく・・・。

「今流行の等価交換というやつだよ」

女は本気で盗賊的な発想の言葉を口にした。

この人は「もしかして」って思ったけどカナリアには自信がなくなつた。

「灰は置いていく」

「足りないね。上の子供を持っていくつもりなのだろう？」

「ならば言葉を」

「私を口説くなんて十年早い」

「シェラン王が守っていた竜王の言葉を」

ぴくり、と女の表情が動く。

「・・・それはお前達が命がけで集めていたものだろう？」

「欠けた言葉では間に合わない」

「五つのうち一つは回収に失敗し、もう一つは行方知れず。まさか王が生まれてもいなかったシェリル王女に言葉を託しているとは思つていなかったんだね。回収を待っていれば蝕の日には間に合わない。そのために言葉を使うことは諦めた。・・・私に説明させるとはいい度胸をしている」

「・・・」

女は立ち上がった男の方に手をかざした。

「いいだろう。かの者は好きにするといい。ただし、私の民に手を出したならば目的を果たす前に朽ちることを覚悟しておく事だね」

彼女の手がぼんやりと光を帯びた。

アナナスの喉元が同じ光を帯びる。ゆつくりと球体が生まれ、彼女の手のひらに吸い寄せられるように消える。

「感謝を」

言い残して、アナナスは踵を返す。

灰を落とした緑の髪はやはり生きていることを感じさせない動きで霧の中に消えた。カナリアはぼんやりとその様子を眺める。

何故か、涙がこぼれた。

さて、と女が呟く。

「お前のことは、どうしたものかね」

「……」

「半分は別の血を流すとはいえ、使命に逆らい生きるのは苦痛だろう。精神が蝕まれるような力を持ちながら正気を保つのはさすがシエラン王家の血を引く者というところか」

「……何故」

「ここは私の場所だと言っただろう？ お前の持つ力と血は匂いで分かるよ」

「俺、そんなに臭くねーよ」

「随分と余裕があるようだね。元来ならばお前も招かれざる者として裁かれるべきなのだが……」

彼女はちらりと遠くを見やる。

霧の向こうに何か見えているかのような素振りだった。

「？」

「私の血に連なる者がお前の幸せを祈っている。だから私はお前を裁くことはしない」

「血に連なる者？」

女は自分の目尻を伸ばして細い目を作る。

「こーんな目をした老人だ。あれで世の中が見えているのかね」

その容姿に合致する人は一人しか知らない。

「……ルースが？」

大好きな若様に顔が似ているからというだけで？

カナリアは複雑な気持ちになる。彼とは仕事のために旅をしただけだ。キスはしたけれど、それ以上の関係はない。あ、いや、キス自体も言葉を移すだけで別に好意あつてのものではなかったはずだ。そんな彼が何故自分の幸せを祈るのだろう。

「彼はお前に感謝をしているのだよ。だから私はお前に慈悲と赦しを与える」

ぼう、と彼女の手のひらが光った。

戦闘で傷ついた身体と腕がみるみるうちに回復していく。魔法で治されているのとは違う感覚だった。そう、元々回復能力の高い力

ナリアの体質がさらに加速されたかのような感覚。彼女の力で治したわけではなく、カナリア自信が本来持っている力を引き出したのだろう。

彼女の手から光の球体がこぼれる。

それは口から入り、喉に落ち、胃の腑に染みこんでいった。

言葉だった。

アナナスから彼女の手に渡った王の言葉だ。

それが、カナリアの中に染みこんでいった。

「……どうして」

「それはシェラン王が持つべきもの。今の王が亡ければ、お前が持つていても構わないものだ。だが、ハーレルはまだ玉座にある。お前の手で返しに行くといい」

「……ひょっとして貰ったのはいいけど、ハーレルに返すべきだって気付いて、返しに向かうのが面倒だから俺に託す、とか？」

女は満面の笑みを浮かべる。

カナリアは身体を起こしながら溜息をつく。

あの人ではないかと思当付けたけれど、何か本当にこの人があの伝承の人なのか自信がない。ここの主を名乗り、霧の中で平気で力を使える人物と言ったらそのくらいしかないのだろうと思うのだが。

カナリアは意を決して彼女を見る。

「言いたいことは色々あるけど、取り敢えず感謝します。……ネセセア様」

女は否定も肯定もせずに笑った。

その後、カナリアは気を失ったままのゼルを連れてトーアの街に戻った。相変わらず霧は深かったものの、何故かどの道を進んで良

いのが彼にはよく分かった。それはおそらく、彼女が与えた赦しなのだろう。

戻った彼はマリンからラネルが緑色の髪の子にさらわれた事を聞かされる。それは彼女とアナナスの会話から予測が付いたことだった。

だが、もう一つの事実は彼に衝撃を与えた。それはラネルが男にさらわれた後に飛んできたアナスの伝書鳩が伝えてきたという。

レバンが襲撃に遭い、エリアードが連れ去られた。

S t o r y 5 に

続く

Story 5 太陽が堕ちる日(1)

微睡みの中で歌が聞こえた。
女の人の声。
優しい声。

・・・お母さんみたい。

1 ナスタチウム

「・・・？」

エリーはゆっくりと目を開いた。
夢で聞いた歌声はまだ続いていた。
どこの国の言葉なのか分からないけれど、母親が子守歌を歌うよ

うな優しい声だった。女の姿が見えた。

窓の上の方に貼り付いている黒髪の女の姿。

「あれ？ 何で落ちないの？ もしかしてコウモリさん？」

女が振り向いた。

歌が、止まる。

「あら、目が覚めたのね。ふふ・・・元気いっぱい寝相ね」

「え？ あれ？」

エリーは言われて初めて自分がベッドから落ちかけて逆さまになっていることに気付く。身体を起こすと、女は窓枠のところに座っているのが分かった。

別に逆さまに貼り付いていたわけではなかった。

「えっと、おはようございます」

「おはようございます」

「あの・・・ここは？」

エリーは部屋の中を見渡す。

見覚えのない部屋だった。簡易な内装であるが質素というわけではない。毛足の長い絨毯は高級品だ。調度品の趣味は悪くない。飾らない分、逆に洗練されて見えた。

「ここは灰の迷宮よ」

「灰の・・・迷宮？」

「私たちの最後の王ハイドランジア様がカサンドラ様の為に創られた身を隠すためのお城よ。今は、あの人が私を隠すために使っているのだけだね」

女は優しく答えた。

琥珀色の瞳をしていた。宝石のように美しい澄んだ瞳。どこか、悲しげで優しい目をしている。

「あの人、ってだあれ？」

「アナナスよ」

「え？ アイナス兄さん！？ 何で！」

「・・・アナナスよ」

「ええつと・・・」

エリーは少し考え込む。

別の人だと理解するのに少し時間がかかった。名前がそっくりでなんかややこしい。

「えつと、そのアナナスさんがどうしてあなたを隠しているの？」

「つていうか、何で私までここにいるの？ お腹空いたけど、三食昼寝付き？」

早口でまくるように問うと、女は少し間を置いてから順番に答えた。

「彼が私を隠すのは、私が逃げ出すからよ」

「つまり、監禁されているって事？」

問うと彼女は頷く。

黒い髪が薄紫のローブの上にさらりと落ちた。彼女は長い黒髪をしている。しかし乱雑に切られているために長いところと短いところとあった。まるで誰かに無理矢理切り刻まれたかのようなのだ。あなた、スイレんたちに連れてこられたのよ。理由は分からないわ」

スイレん、と呟く。

ぼんやりと何かを思い出した。イチイと話していた時に山吹っぽい髪色の男が近付いてきて、一緒に来るかを尋ねられたのだ。それからあまり良く覚えていない。

「それと食事は定期的に運ばれてくるわ。することもないだろうから寝放題よ」

「ホント？ やった、アスパラが出てこなければいいな」

「私もアスパラは嫌いよ。あの人何か気持ち悪いもの」

「人！？」

「@人@」

「え？ 何か顔文字で説明された！？ しかも微妙な」

「そんな顔しているのよ」

「・・・謎な人だね、アスパラさん」

ひよつとしたらボケキャラかもしれない疑惑がついたところでエリーは彼女の側に近付いて座った。

「あの、色々教えてくれてありがとう。私、エリー、エリアードっていいです」

「エリーちゃんね。私はキンレンカ……いいえ、ナスタチウムって言うわ」

「？」

「あの人から逃げている時にはキンレンカって名乗っていたのよ。でも、もう逃げられない場所まで来たのだから、偽名を使う必要もなくなってしまった」

「逃げられないの？」

ナスタチウムは視線を逸らせて外を見る。エリーも自然にそちらに目を向けた。

そこは、

「どこ！？」

悲鳴にも似た声をエリーは上げる。

逃げられないっていうのだから、せいぜいバカ高い塔の上とか、そんなものを想像していた。だがその先にあったものは色とりどりのカビを混ぜ合わせてパウンドケーキでも焼いたかのような奇妙な色の空間。

身乗り出して上下左右全方向見回しても同じだった。違うのは今いる部屋の中だけだ。

「異空の狭間。落ちると、二度と戻れなくなるわよ」

「うほおー！」

嘘！？ と叫び声と一緒にあってゴリラのような雄叫びを上げながら彼女は後ろに飛び退く。

「ナスタさん、そ、そんなところにいると危ない……」

「私は落ちても構わないわ。何度もここから身を投げようと思ったもの」

「……ナスタさん」

「でも、私にはシェリルがいるから
ちらり、と彼女は窓の脇を見る。

先刻部屋を見渡した時には気付かなかったが、小さなゆりかごが
そこにあつた。小さな塊がシヨールのような布で包まれている。

「赤ちゃん？」

「女の子よ」

「へえ」

エリーはゆりかごの中を覗き込んだ。

「っ！！」

一瞬、息を飲む。

人間ではなかった。

子供ですらなかった。

・・・生物ですらなかった。

百歩譲つてようやく子供の人形だと言える程度の木の塊が横たわ
つていた。墨で目や口が描かれていたようだが、すり減っているた
めにもう半分以上消えかかっている。幼い子供が見たら引き付けを
起こしそうな代物だ。無理矢理付けたような黒い髪の毛が余計に怖
い。

「・・・」

エリーは人形をそつと抱き上げた。

「シェリルちゃん？」

「そうよ、可愛いでしょ」

「・・・うん、ナスタさんの子供なんだね」

「そう、私と・・・あの人の子供よ。あら、笑つた。シェリルは
エリーちゃんのことが好きなのね。お姉ちゃんだと思っているの
かしら」

そう言つて彼女は慈しむように人形の髪を撫でた。

そして優しく歌つた。

小鳥がさえずるような優しい歌声。まるで全てのものを愛し慈し
んでいるかのような・・・そう、オーナディアの神話にある女神の

ような歌声だ。

彼女の喉から奏でられる歌の意味は分からない。

異国の言葉。それとも古い神話の時代の言葉だろうか。
聞いているだけで涙がこぼれそうになった。

Story 5 太陽が堕ちる日(2)

2 灰の目の一族

「・・・そうか、エリーはあいつらが」

レバンの「銀の麦」に戻ったカナリアは事のあらましの説明を受けた。

沈痛な面持ちでマスターが頭を下げる。

「力及ばず申し訳ありません」

「いや、あんたのせいじゃないし俺に謝られる事でもない。どちらにしても連中相手には分が悪い。あんたらが無事だけマシだよ」

「・・・その連中を知っているという口ぶりだな」

マリンの問いにカナリアは頷いた。

「知っているな。スイレンはキツシユも良く知っているだろう？」

「ええ・・・でも、スイレンは私がきつちり首を落としたはず。それに随分と若返っていましたけど」

「あいつらの仲間に・・・その、死体を蘇らせる技術を持った奴がいるようなんだ」

「それは禁忌だ。それにそんなことが出来るわけがない」

死体を操る人間はいる。

死人使いと呼ばれ、魔法によりかりそめの命を与えて意のままに操る者のこと。だが、それは死体動かすというだけで蘇らせると言うわけではない。死体を生きているように見せかけたり腐敗をさせないことは出来るが、元通りに動かすのは技術的に不可能であるし、禁忌とされている。

ふう、とアンナが息を吐く。

「この期に及んですつとぼけるつもりね。腹を切りなさい、小鳥ちゃん」

「腹を括れ、だろ？　っていうか、お前どこまで知っているんだ？」

「どこまでも限りなく」

「歌の文句かよ。・・・まあ、深く知っているわけじゃないだろう。俺だって実際あいつらのことはよく分からないんだ」

「あいつら、あいつらって何なんだ？」

「・・・」

どう説明していいのか分からずに黙り込んだカナリアに変わってアンナが答える。

「花の名前を持つ者・・・灰の目の一族よ」

「灰の目の一族？」

頷いて彼女はどこから取り出したのか分厚い本を開いた。シエラの王宮図書室から盗んで・・・もとい、拝借してきたものだ。

「色々あるけど、割愛するわ。灰の目の一族は‘灰の王’の血を引く一族で、不死の一族とも言われている。不死って言っても死なないわけではなく、死んだとしても何度でも蘇るって意味だけだ。大昔‘灰の王’が冥王・・・冥府の神から貰った力を返し忘れたせいで輪廻から外れちゃった一族よ」

「な、何だか色々ありそうなのに本当に一瞬で片づけてしまいましたわね」

「と言うより、何故それがラネルをさらったりラネルをさらう必要があるのだ？」

「両方ラネルさんになってますよ」

「どちらかは本当なら‘エリアード’とでも言うつもりだったのだから。さすが美少年好きのマリンだ。」

頭の中はラネルでいっぱい

アンナはそんな彼を気にかけることもなく続ける。

「赤バンくんは‘儀式には莫大な魔力が必要’っていつていたことから推測すると、王様を蘇らせるためにノー娘。を利用するつもり

ね」

「蘇らせるって……死なない一族なんでしょう？」

「灰の王は古い大戦で、恒星落陽、っていう世界を滅ぼしかねない凶悪な魔法を使ったために竜王、魔王、精霊王、冥王の力で封印されたそうだ。死なないから魂そのものを封印した」

不可解、と言う風にマリンは首を傾げる。

「冥王が与えた力ならば冥王が取り上げれば良かった話ではないのか？」

「それは俺には分からない。だが、王は封印され、残された灰の目の一族は王を再びこの世界に復活させようとしているんだ」

「それがどうして今なんですの？ 大昔の話ならばもう既に復活しているとも良いと思いますけど」

「それは」

「それは俺が説明しよう」

言いかけた時、扉がばん、といい音で開け放たれた。

開け放たれた瞬間戻った！

金髪の中年男は避けて入ってきた！

だが更に跳ね返った扉に後ろから攻撃をされた！！

「……うごっ！ 両開きの扉のトラップか！ やるな！！」

男は後頭部をさすりながら扉を睨み付けた。

偉そうな派手な鎧に身を包んでいる割に軟派そうで、どこことなく馬鹿っぽい。

「だから馬鹿とか言うんじゃないよ」

「ト……キ……キだよな？」

「こんな美しい奴が俺の他にいても思っているのか、カナ坊」
「カナブンみたいね」

「虫と一緒にするなよ。つか、トキ、そのヒゲ」

普段トキは年齢不詳さを隠すために無精髭を生やしている。だが今日は綺麗にそり落とされツルピ力だ。その代わり……と言っては難ありな感じの奇妙な形に渦を巻いた口ひげが鎮座坐している。

「・・・どうされましたの、その髭」

「おお、シュリー嬢久しぶりだな。このヒゲ似合うだろう?」
そう言つて顎に手を当てながら決めポーズをつくるトキ。

服装や金髪という点はともかくとしてそのヒゲはまさしく、

「インチキマジシャンみたいですわ」

「ふつ、美しい俺様に見とれたからつて照れるなよ。つていうか、これは付け髭なんだけどな」

「何のために付けているんですか?」

「ああ、リツさんご無沙汰してます。変装ですよ、これは変装」

「・・・おい、カナリア」

突然現れた変人に少し退いているのか、マリンはカナリアに耳打ちをする。

「あの脳みその少なそうな奴は何だ?」

「俺の兄弟子で・・・今は王都で王の盾の隊長をしているんだけど・・・」

説明していて悲しくなる。

トキは確かに凄い人材だ。強い上に人をまとめる才能もある。仲間を大切にするので人望も厚い。なのにこの性格だ。嘘か冗談を言っているようにしか聞こえないのが悲しい。しかも自分の兄弟子。

「リツとは?」

「? マスターのことだよ」

「!!! 名前あつたのか!!!」

「どんな言い草だよ」

「マスターが名前かと思つていた」

「それ、紅ドリさんと同じ発想」

「・・・!!!」

「何この世の終わりみたいな顔をしていますの? 失礼ですわね」

相変わらず姉弟そろつてそっくりだ。

吹き出すと両方から攻撃されかねないので、必死に笑いをこらえながらカナリアは話題をトキに向ける。

「変装つて、何で？」

「鳥の族長だからだな。連中、俺の首を狙ってきやがった」

「鳥？」

「これは先刻のシュリー嬢の質問の答えにもなるんだが、俺たちは大昔から連中が王を復活させるのを阻止し続けていた。連中に余計な力を与えない為に死んでも復活してくる連中を監視し、殺し続けていた」

彼らのように再生を繰り返さない代わりに、彼らの血を流す者は灰の目の魔力に打ち勝てるだけの剣の才能を持って生まれてくる。彼らの魔力を区別出来る才能を持って生まれてくる。もしも彼らが妙な動きを見せたらすぐにでも狩れるように監視を続けてきた。

死んだ後に残る灰さえあれば、多少時間がかかりはするものの何度でも再生してくる連中。神話ほど昔から彼らはそれと戦ってきたのだ。

一族には鳥の名前を付ける風習がある。彼らが花の名前を名乗るのは理由は異なるが、生まれた子供には鳥の名前が付けられる。だから彼らは「鳥の一族」と名乗った。

「元々連中は、なんつーか我の強い奴らが多いんだ。で、長い間再生とか繰り返ししているから精神が少しかれている。だからまとまりなんてなくて、おかげで今までこんな状況にはならなかった」

「・・・それはつまり、今灰の目の一族には統制を取っている奴がいると言うことか？」

「勘が良いな」

トキは小さく笑う。

「俺たちは連中が一致団結して何かを始めるなんてこれっぽっちも思わなかった。だけど連中は始めた。・・・リーダーが出来たと考えるのが自然だろう」

Story 5 太陽が堕ちる日(3)

3 寂しい人

そろりとエリーは扉を開いた。

鍵はかかっていなかった。

シェリルを寝かしつけた後、ナスタチウムもまた眠りに入ってしまったようだ。彼女を起こさないようにエリーは扉をゆっくりと閉めた。

薄暗い廊下は先が見えないほど長い。

どちらの方向を向いても同じような扉が続き少し出歩いただけでも迷ってしまいそうだった。

エリーは取り敢えず出てきた扉の左隣にある扉を開いた。

「・・・あれ？」

そこはエリーが今し方出てきた部屋と全く同じ造りをしていた。

否、同じ部屋だった。

最後に見た時同様にナスタチウムがシェリルの横で眠り込んでいる。

エリーは慌てて扉を閉め、次の扉へと向かう。

「・・・」

結果は同じだった。

やはり同じようにナスタチウムの姿がある。その隣も、またその隣も同じだった。試しに扉の内側に自分のリボン置いて次の扉に行ってみる。部屋に入るとちゃんとエリーのリボンが置いてあった。

無限回廊。

その言葉が脳裏をよぎる。

昔なんかの本で読んだことがある。魔術で端と端を繋げて永遠とループする廊下を造るのだ。中にある人は外に出ることが出来ず永遠に彷徨い続ける。

ぞっとした。

こんなところにいたくて彼に付いてきた訳ではない。そもそも彼はどこに行ってしまったのだろう。

エリーは無限回廊を歩き出した。

こういう魔術を解くにはどうしたらいいだろう。

「ふぎやっ！」

鼻先に何か柔らかい感触を覚えてエリーは悲鳴を上げる。

「わ、っわ、ご、ごめんささい！」

突然体当たりをしてしまったことに詫びを入れるエリーだが自分が当たったものを見て首を傾げた。

赤い瞳に、灰を落としたようなうす緑色の髪。背の高い男。表情は全く動いていないところを見ると良くできた人形なのだろう。

エリーはその身体を触った。

「何これ・・・こんなさつきなかったのに」

柔らかい質感は本物の人間と変わらない。少し暖かくて、本当に生きているかのようだ。

「・・・すごい、本物みたい」

「・・・何をしている？」

「うぎゃあ！！ 本物！？」

不意に男が言葉を発してエリーは悲鳴を上げる。

男はやはり表情のない瞳でエリーの方を見つめていた。

「ご、ごめんささい、私偽物だと思って・・・」

「かまわない」

男は言葉少なく答えた。

声にも表情が感じられない。だけど、酷く寂しい気配がした。

長い時間、誰とも心を通わせたことのないような、まるでずっと長い時間を一人で過ごし、感情を全て捨ててきてしまったような空

虚な声。

聞いていると、涙がこぼれる。

「……怪我をしたのか」

男が問う。

エリーは首を振った。

「ううん、違う。でも何だか分からなくて」

「……。……お前のことは、報告を受けている」

「？ ひょっとしてイチイくんのお父さん？」

どうしてか分からない。

顔立ちも瞳や髪の色も違うのに、二人は良く似ている気がした。

「イチイ、と名付けたのか」

「あ、うん、ワガオウくんっていいにかつたし」

「作ったという意味では親になる。だが、父ではない」

「え？ 女の人だったの！？ ごめんなさい！」

「……、男だ」

「ふえ？」

意味が分からずエリーは首を傾げる。

男は静かな口調で言った。

「あれは歌巫女の子供の代わりにつくったものだ」

「歌巫女って……ナスタさんのこと？」

すぐに連想したのは、つい今し方まで彼女の歌声を聞いていたからだろう。あの声は人の心を動かす。巫女と呼ばれるに相応しい気がした。

彼は肯定するように首を振る。

「巫女は既に狂ってしまっている」

エリーはぶうつと頬を膨らませる。

「ナスタさんは狂ってなんかないよ」

「あれは私に利用され、子を失い、もう呪いの歌しか歌わない」

ほんの僅か、言葉のなかに感情がさざ波のように浮かんた。

戸惑いながらもエリーは続ける。

「だ、だけどさ、狂ってなんかないよ。ただ、寂しいだけなんだよ。赤ちゃん死んじゃったみたいだし、大好きな人とも一緒にいけないから、寂しくてどうしようもないだけ。狂ってなんかないよ」

「・・・」

「私のお姉ちゃんもそうだったの。赤ちゃん出来たけど、お腹の中で死んじゃって、寂しくて、寂しくて、大好きな人に何も言えなくて、結局死んじゃった」

もしも彼が、ヴィクレアの領主だったあの人が気付いて姉を慰めていれば姉は死ななかったのかも知れない。そう思ったら腹が立った。そして何より男が姉の事が別に好きじゃなかったことも、赤ちゃんのことも知っていたということも知って殺意を抱いた。

あの男は最後に姉が飛び降りた時に一緒にいたのだという。

最後にどんな会話が交わされたかはわからない。だけど、優しい言葉だったら、姉は死なずに済んだかもしれない。兄は止めたけれど、エリーには放っておくことが出来なかった。

殺そうと飛び込んで、カナリアに止められ、男は発狂した。

理由は分らない。だけど、もし姉のことを少しでもすまないと思つてのことなら、少し嬉しかった。

「ナスタさんは寂しいだけ。シェリルちゃんと、お父さんと、三人で一緒にいたいだけなんだよ」

「娘の父親も、この世にはない」

「え？」

「私が喰した」

「え？ 食べたの！？ どっちの意味で！？」

「言葉通りの意味だ。私は死屍を喰らうことで一時的にそのものと成り代わることが出来る。シェリルはその時の子であった」

「・・・じゃあ、あなたがお父さん？」

「違う。父はかの国の王だ。王と巫女の子でなければ何の意味もなかった。・・・どちらにしても、女に生まれた子供に、何の意味もなかった」

エリーは睨む。

「女の子じゃいけなかったってこと？」

「そうだ。王の器となるものは、男でなければならない」

「……それで殺したの？」

「殺す必要など無い。命を落とした理由があるとするならば、それはかの国のものが、妾腹の子をよしとしなかったただけのことだ」

「……」

「何故泣く」

「だって……悲しすぎるよ」

シエリルも、ナスタチウムも、そして彼も辛いことばかりだ。シエリルはもう泣くことも出来ないし、ナスタチウムは泣くだけ泣き尽くしてしまっただろう。そして彼はおそらくもう自分のために泣くことはない。

こんなにも辛く悲しい事があっても誰一人自分のために泣くことはない。

そんなの、悲しすぎる。

エリーは大粒の涙をこぼしながらその場に崩れた。

静かな廊下に嗚咽だけが響いていた。

Story 5 太陽が堕ちる日(4)

4 依頼

「鳥の一族の現時点の長である俺を殺そうとするって事は、連中邪魔されたくない何かをするつもりだな」

「つまり、その灰の王とやらを復活させる準備が整ったと言っただな」

トキは頷く。

「そういうことだ。王を復活させるためには少なくとも器になるもの、そして歌巫女が必要だ」

「歌巫女？」

「・・・灰の目の一族の中で、王を蘇らせるための呪文を受け継いでいる女がいる。呪文は歌の中に読み込まれ、巫女の灰が二度と蘇らない程に朽ち果てても灰の一族の血を引く女の誰かに受け継がれるようになっていらい。今、歌巫女と呼ばれるのはナスタチウムという女性だ」

カナリアは言い終えて口を閉じた。

あまり話したくない、といった様子で顔を伏せる。

「彼女は俺の師匠が保護するはずだったが、それ以前にさらわれた。ちょうど・・・マリンとキツシユの・・・」

「お父様とお母様が殺された時ですわね」

「・・・」

「簡単に推測できますわ。あの時はキンレンカと名乗っておりましてが」

話すキツシユの表情は存外と穏やかだった。

それとは対照的にマリンは険しい表情を浮かべている。まるで、両親の敵に会ったかのような表情だ。

「あの時暴動を起こしたのはおそらく灰の目の連中だ。ナスタチウムを攫うために、もつとも手っ取り早い手段をとったのだろっな」マリンは厳しい視線をトキに向ける。

「つまりは、貴様らのせいであんな事が起こったと言うことか？」
「ふーちゃん」

「否定は出来ない。俺たちがもつと早くに対応していれば防げたかもしれない」

「・・・なら！」

「おやめなさい！！」

キツシユは一喝する。

「あなたも分かっていますわよね？ あの暴動を起こしたのは彼らだとしても、参加したのは国民の意思です。法治国家であるバーグであんな事件が起こったのは、私たちの両親が私欲を貪り始めたからです」

例え灰の目の介入がなかったとしても遅かれ早かれ暴動は起きた。両親の生死如何はともかくとして、少なくとも一家が頂点から引きずり降ろされたのは間違いないのだ。

最初は恨むばかりだった。そんな状況に陥った原因を恨むしか出来なかった。だが、便利屋の仕事を始め、世の中のことを知っていくに連れてキツシユは愚かだった事を知る。今でも両親が死んでしまったのは悲しい。両親を殺したスイレンは憎い。だが、だからといって暴動の原因となったもの全てを憎むのはまた違う気がする。

マリンだってそんな単純なことが分からない訳がない。

彼が声を荒げるのは意外な感じがした。

「・・・」

マリンはばつが悪そうに座り直した。
すかさずアンナが突っ込みを入れる。

「海ちゃんったらシスコンだったのね」

「・・・余計なお世話だ」

「小鳥ちゃんに初恋したり、シスコンだったり、変態だったり、シヨタシヨタ先生は大忙しね」

「何故お前が知っている」

「乙女の神秘」

「ええ！？ ふーちゃんの初恋ってカナちゃんでしたの！？ 初耳ですわ！」

「・・・これに初恋って・・・お前・・・という趣味しているんだ」

「トキ・・・お前俺に対してまで失礼なことを。つか、お前も初めて遭った時はマリンと似たような反応をしていたぞ？」

「そんな昔のこと、この俺様が覚えている訳がないだろうが！」

「いやあ、皆さん、お若いですねえ」

くすくすと笑うマスターの声に、一同は話が逸れたことに気付く。ごほん、とマリンが咳払いをする。

「ともかく、歌巫女とやらは今連中の手にあると言うことが。そして王の器というのはマスターの話にもあった少年。ラネルの言っていた心臓と名前のない少年のことか」

「彼は普通に生きているように見えましたわ。心臓がないなんてとても・・・」

アンナは先刻取り出した本とは別の本を取り出して開く。

本のタイトルは「赤ちゃん産み分け法」著者は「アンナ・リードファイル」だ。

「この本によると」

「お前のだろうが」

「心臓のない子供を作るには、精霊、若しくはそれに準ずるものの、身体をつなぎ合わせて作った肉体と竜の血に連なるものの血液が必要」

「ひよつとして、切り落とし事件に関係あるんじゃないやありませんの？」

「ご明察だ、嬢ちゃん。俺も調べていくうちにそこに辿り着いた。」

切り落とされた箇所を考えるとちょうど一人分出来る量になる」

カナリアは感心したように頷く。

「トキにしては随分と調べたものだな」

「俺だつて遊んでいる訳じゃないぞ。っていうか、別の奴が調べただけだな」

「・・・やっぱり」

トキは確かに人望は厚いし、剣の腕も確かだ。だが、情報収集の面で役に立つなんて思っていない。

別の人間が調べたと聞けばむしろそっちの方が納得いく。

でも、とアンナが本をめくりながら言う。

「切り落とした部位が生命として機能していなければつなぎ合わせても無意味。どんなに魔力を込めても生きる屍と大差ない。大佐と言えばロ×キスとマ××ングどっちが好みかしら？」

「お前・・・著作権に引つかかる可能性があるから喋るな」

「失礼ね。このくらい平気よ。ごめん被るのは作者くらいなもの」

「意味不明ですし、何の話をしていますの二人とも？」

再び話が脱線した。

「まあ、大佐は別の人に任せるとして、身体から切り離された場所は生命としての機能を失う。花*花した人達が作ったとしたら、どんな技術を使ったのかしら？ 心当たりある人、いる？」

「そうですね、事件の話を聞くには犯人は妙な武器を持っていたと聞きます。そうなると、古代の武器が発見されたのでしょうか」

「でなければ最近になって作られたのだろう」

「・・・そんなコトできる方、現代にいらっしゃいますの？・・・あ」

キツシュは思い出したように顔を上げた。

そんな恐ろしい武器を作れる者など限られている。

カナリアも頷いた。

「なるほど、イーア・ガンか」

ちらりとアンナを見上げると彼女は頷く。

「不倫調査開始するわ」

「そんな依頼してねーよ」

「・・・カナリア、いちいち突っ込みを入れずとも構わないだろう。アンのそれはボケではなく確信的に言っている事だ」

「うつ・・・わ、分かっているけど・・・」

「ふん、突っ込み体質め」

否定出来ないのが辛い。

「ああ、そうだ」

トキが思い出したように手を鳴らした。

一同の視線がトキに注がれる。

反射的に彼はポーシングをした。

「お、俺様大注目！」

「そうじゃないだろう」

「そうだったな。えっと・・・何言おうとしたんだっけか？」

「・・・老化現象？」

「こらこら、魔女っ子、人を老人扱いするなよな？ ああ、思い出した。依頼の言葉で思い出したんだが、俺はそう言う事情でカナリアを連れに来たんだ」

「大体想像は出来ですけど、理由説明全くされていませんわよ」

「そうだったか？」

「突っ込みが欲しいってこと位しか分からないわ」

「それなんか違うかい？」

Story 5 太陽が堕ちる日(5)

5 発展途上

流れてくる涙は暫く止めることが出来なかった。

泣き崩れたエリーの側に座り込んだ男は、感情のない朱赤色の瞳でじつと彼女を見つめていた。

やがて彼女はやっとの思いで涙を止め、ぐしぐしとまぶたをこすった。

「落ち着いたか」

「・・・」

「すまない、どうして良いのかわからない」

「・・・こう言う時は、慰めるものだよ」

「慰める・・・」

「頭を撫でたり、抱きしめたり・・・でも、いい。本当は、あなたに慰めてほしいわけじゃないもん」

エリーは視線を彼に向けないようにした。

本当に彼に慰めて欲しい訳じゃない。慰めるより泣いて欲しかった。この人だつて、よく分からないけど色々悪いことしたようだけど、本当は悔やんでいるハズだ。悲しいはずだ。・・・そう思った。

だからせめて泣いて欲しかった。

けれど、それを言葉で伝えて強要しても意味はない。

無理に泣いて貰っても意味がない。

「・・・ねえ、あなた、何て名前なの？」

「アナナス」

「え？ アイナス！？」

「・・・・・・」

「ああ！ そっか、本日二度目のボケは一回目を聞いた人じゃないと突っ込んでくれないんだった！ 久しぶりに計画的にボケたのにつ！」

「すまない、どうして良いのかわからない」

「セリフコピーなんていう高度テクニク！！ ひょっとして結構笑いのセンス有り！？」

「・・・・・・」

「つて・・・冗談はこのくらいにしておいて。あなたがアナナスさんなんだね」

エリーは彼を見る。

彼は無言で頷いた。

アナナスは、予想していた人とは少し違う。もっと残酷で自分勝手な人だと思っていた。だけど、説明するのは難しいけれど、何か違う気がした。

「なんであなたこんな事しているの？」

「全ては王を復活させるため。灰の目の者が今もなお輪廻の輪に戻らないのはそのためだ」

「んん？？ よく分からないけど、王様が欲しいってこと？」

「そうだ。巫女もそのために存在している」

エリーは首を傾げた。

「でも、ナスタさんってあなたから逃げたんでしょ？ 目的が一緒のハズなのに何で？」

「抗えば身体に刻まれた灰の一族の紋章が地獄のような苦しみを与える。巫女が」

一瞬、言葉が途切れた。

無表情の中にも僅か嘲ったような表情が浮かぶ。それは誰に対してのものだろうか。

「巫女が苦しんでまで私から離れるのは、私を憎んでのこと。望み

を果たさせないために逃げ、王の復活の妨げになっている」

「憎んでいるの？ ナスタさんがあなたを？」

「私は巫女よりも魔力が高い。無理にでも従わせることができる。子を産ませ、かような場所に監禁し続けているのだから憎まれて当然のことだ」

「・・・そうかなあ」

エリーは首を傾げる。

ナスタチウムは消して憎んでいるとは口にしなかった。死んでしまおうとか考えている人だけど、アナナスを憎んでいるとか、そんな風には言わなかった。

むしろ、

「アナナス様」

不意に声が聞こえ、エリーはぎくりとする。

声に覚えがあつた。

彼だ。

血の匂いのする傭兵風の男。

一緒に来るかどうか尋ね、はいと答えた彼女をここまで連れてきたのはこの男だ。イチイは彼のことをグラスと呼んでいた。

「バビアナが鳥殺しを失敗したようですよ。思いの外あのトキという男は強いようです」

「・・・そうか」

「私が行きましようか？ それとも、アナナス様自ら参りますか？」

「リコリスに」

「御意に」

グラスは例の姿勢を取る。

ちらりと、アナナスがエリーを見る。

「部屋に」

「ああ、はい。分かりました。・・・そう言えばスイレン様が探していましたよ。相変わらず不機嫌そうでしたが」

「・・・」

アナナスは無言で頷き暗い廊下の向こう側へと歩いていく。
程なくして彼の姿は見えなくなった。

「じゃあ、エリアード、部屋に戻るつか」

「むー」

「そんな顔してもダメだ。ここから抜け出すには鳥と一緒に出るか、アナナスに許可を貰うしかない」

差し伸べられた手を払ってエリーは頬を膨らませる。

「私、グラスさんにカナリアの事聞きに來たんだよ？　なのはどうしてこんなところに閉じこめられるの？　もしかして女の子監禁して、‘ご主人様’とか呼ばせて喜んでいる犯罪者の人！？」

「何だよ、その具体的な描写は」

「メイド服に猫耳なんていうオプションまで付けちゃうの！？　やだ、私、グラスさんに対して偏見持ちまくり！」

「ちよつとまで、どうしてそんな話になるんだ！」

「うわーん、変態」

「俺は妹に刃物マニアとか罵られた事はあるが、そんなマニアになった覚えはないぞ！　むしろ俺は胸とかでかくて気の強い姉さんの方が好みだ！　巻き髪なら三割り増しで好きになる！」

「うわーん！　やっぱり男の人って胸の大きい人が好きなんだ！」

「それは好みの問題だ！　大体そう言う悩みは成長しきってから言えよ、発展途上が！」

「うわーん！！！！　貧乳って言われた！！！！」

「言ってねえ！　あー、もう面倒くせえ！」

怒鳴ってグラスは自分の髪をかき混ぜる。

「くそっ、やっぱてめーなんか連れて來なきゃ良かったぜ」

「行くなんて言わなきゃ良かった」

「どっちにしたってイチイはお前のこと、連れて行くつもりだっただろうけどな」

エリーはピタリと泣き止む。

「え？　何で？」

「お前が奴に名前を付けたからだよ」

「？ あだ名付けたことが何か意味あるの？」

「あだ名・・・つーか、植物の名前を付けた時点でそれが真実名前だ。お前が‘母親’になったってことだよ」

「え？ 私産んでないよ！？」

「百も承知だ。本来アレには名前がないはずだった。花の名前を持つ者は産んだ母親が名前を付けるらしいからな、人の腹から産まれていない奴に名前はないはずだった」

分らない、とエリーは首を傾げる。

名前がないとか、人の腹から産まれていないとか、常識では考えられないことが多すぎる。しかも、自分がイチイの母親になったなんてとても信じられない。

「お前が名付けた以上、お前はこの件に関して無関係じゃなくなつた。正直どっちに付くのか分からないお前をここに連れてくるのは嫌だったんだが、いざとなつたら殺せばいい」

かちりと、腰に吊られた剣が鳴る。

エリーは緊張で身を固くした。

「いいか、死にたくなかつたら俺の言葉を信じるんだ。俺の言葉に従え・・・全部終わつたら責任持つてあの街まで戻してやるから」
「グラスさん・・・」

殺す、とか物騒な事を言っているくせに、最後の言葉は優しくかつた。

ひよつとしたら、とエリーは彼を見つめる。

ひよつとしたらこの人はいいい人じゃないだろうか。口は悪いし、怖いこと言うし、貧乳とか言うし、血の匂いはするし、とてもいい人には見えないけど、本当は優しい人ではないだろうか。

彼は相変わらずの様子でエリーを睨み付けている。

恐ろしいはずの彼の視線が、今は何故か怖くは無かった。

Story 5 太陽が堕ちる日(6)

6 かなりアホ

「で、キツシュはともかくとして何でマリンまで付いてくることにしたんだ？」

協力が欲しいとカナリアを連れに来たトキに、最初に自分も行くと言い出したのはキツシュだった。協力者が増えるのは嬉しいけれど巻き込むわけにはいかない、と断ったトキを強引にねじ伏せ勝手付いてくることになった。

その行動は彼女の性格から半ば予測出来ていたし、さらに無理に断ったとしても、別ルートで必ず同じ場所にたどり着きそうな彼女をしぶしぶ容認した。

それはともかくとして、まさかマリンまで行くと言い出すとは思っていなかった。

カナリアが尋ねると彼は仏頂面で答えた。

「ラネルとラネルが心配だ」

「・・・だから両方ラネルになっているってば」

「俺がラネルに施した治療は長期間持つものではない。魔薬を使って表面を覆った事で何とか形を保っているだけのことだ。薬が切れれば消滅しかねない」

ふう、と溜息をついてトキは頭の後ろで腕を組んだ。

「ああ・・・そのラネルとかいう奴は亜精霊だったな。国元離れると消滅しかねないなんて面倒なもんだな」

「同じ亜精霊でも平気な種族もある。ある種族などは処女以外が触れると病気になるって聞いた。命を落とすこともあるそうだ」

「兄ちゃんやけに詳しいな」

「俺はアインハイトの中に入ることを許可されている。人の医者の中では唯一だそうだ」

それはすごい、とトキは口笛を吹く。

アインハイトはそもそも閉鎖された国だ。亜精霊という特殊な種族が住むために、外界とあまり関わりを持ちたがらないのだ。人間側もあの特殊な国には好んで入ろうとは思わない。その上、今の代の王になって出入りの管理が強固になった。

出入りが自由に出来るものなどそうそういない。

もつとも、カナリアは許可されていようがされていまいが、時々出入りしていたのだから。

「医者つてもんは便利だねえ。俺も医者になろうかな」

「トキがなれるとは思えないな」

カナリアの言葉にトキは睨む。

「何でだよ」

「お前はかなりアホだから」

「カナリアはお前だろ」

「カナリアほーじゃねーよ」

やはりこの男が医者になれるとは思えない。そもそも、医者になれば国境なんかほぼ無視して各国回れそうだという勝手な解釈で医者になろうかなんて口にしたのだから、動機の方も相当間違っている。

マリンは頭痛がするという風に頭を押さえた。

「お前のような輩が医者になるから、魔術を使わない医者がヤブとか言われるんだ。俺の足を引っ張る気なら今すぐ楽にしてやるぞ」

「うわっ・・・医者言う台詞じゃねえ」

「つーか、マリン、何でトキが医者になった前提で話しているんだ？ どうせこいつの言うことは一過性のもので、三歩進んだら忘れるから安心しろ」

「俺は二ワトリか!」

カナリアはせせら笑う。

「そういう使い方を覚えているんだな。偉いぞ、トキ」

「くっそ、馬鹿にしゃがって」

馬鹿なんだよ、とカナリアは付け加える。

くすり、とキツシュが吹き出した。

「前々から思っていたんですけど、カナちゃんってばトキに遠慮ありませんよね。扱いが酷いを通り越して愛すら感じますわ」

「愛・・・」

「ははん？ カナリアにとって俺は兄貴みたいなもんだからなあ。

うんうん、俺様ってばやっぱり愛されキャラ？」

「寝言は永眠してから言え！」

カナリアのストレートパンチをトキは笑いながら交わす。

彼の行動はいつもと少し違う。やはりトキを相手にしているからなのだろう。カナリアはマリンに対しても遠慮なく接するがそれはむしろ親友に対してという感じだ。トキを相手にしている時は家族に接するかのよう。

親がいないとそれとなく聞いたことがあったが、けして孤独であった訳ではないと知ってマリンは少し笑んだ。

口に出して言えないが、少し気がかりだった事だ。

他人と接触するのがあまり好きではない自分でさえ寂しさを覚えることもある。人と接することがむしろ好きという感じのカナリアが、孤独を味わっていないなんてとても考えられなかった。

何より彼は時々夢にうなされている。

何気にキツシュが出会う前にカナリアと出会っていたマリンは（一目惚れをしたという弱味もあってか）気になっていた。

自分にキツシュがいたように、彼にも家族があったのなら、少しは安心した。

「ふはは！ お前如き実力でこの俺様が倒せる訳がなからう！」

「くそ、ちよろちよろ動くんじゃないねえ！」

「それで配送ですか？ はいそうですか。なんて止まるやつなんかいね・・・ぐはっ！」

笑いながら走っていた男は前方不注意で木の枝に激突し、粉碎する。

「はん、ざまあ・・・どはっ！」

粉碎された木の枝が頭の上に落ちてきたカナリアは奇妙な叫び声を上げる。

マリンは頭を押さえた。

「・・・かなりアホだ」

「ええ、どっちもどっちですわね」

「これと一緒にするな！」

「これとか言うなよ、カナリア！俺様に失礼だろ！」

「お前なんぞ、これ、で十分だ！」

「・・・まるで子供のケンカですわね」

ふふん、とトキが笑う。

「若いなんて良いことだろ、嬢ちゃん」

カナリアが馬鹿にしたように笑う。

「六十超えた奴がこの馬鹿さ加減だとさすがに引くよな」

「まだ六十超えてねーよ」

まだ、ということはそれに近い年齢ではあるということだ。彼の外見は四十代くらい。とても六十近いようには見えない。

驚いて目を見開いた。

「・・・！あなた、そんな年齢でしたの！　ぜひ若さの秘訣を！」

「アホが増えたか」

「俺の若さの秘密は極秘だ！　何しろ二十歳過ぎても十代前半くらいの若々しさでいられるほどの技術だからな！　他の奴に話せる訳がない！」

「何！？　それは俺の美少年培養計画に必要不可欠のものだ！　教える！」

アホもう一人追加。

ここまでアホばかりのメンバーであるとかえって清々しいほどだ。

「うおっ！ 俺様なんかすごく人気者！ ふはは！ つかまえてご覧なさい！」

「それは浜辺で男女がやる奇行だ！ 止まれ！ 止まらなないとメスを突き刺すぞ」

「ダメですわ！ そんなことをしたら話を聞けなくなってしまうわよ！」

「ああ、大丈夫だ、トキはその程度じゃ死なない」

「うははは！！ 俺様は不死身の男！！ 不死鳥の……むっ
突然立ち止まる彼に会わせて一同も止まる。

「どうしましたの？」

「匂う」

「カナリア、お前か」

「俺じゃねえ！」

「花の匂いだ」

俺様、俺様と騒いでいる時とはまるで別人のような彼の瞳はまるで何かを射るように鋭い。長年灰の目の一族を監視し続けた者の目だ。

一同はきゅつと表情を引き締める。

「数は？」

「一つ。だが、これは……」

トキは胡散臭い付け髭を装着する。

「ちよつと厄介な奴だ」

「その顔で真面目な話すんなよ」

Story 5 太陽が堕ちる日(7)

7 分かれ道

「見つけたわ、あなたね？ バビアナが殺し損ねた鳥の族長、トキ」
トキの示した方向から現れた女を見て、キツシュは息を飲んだ。
金髪の、眠そうな半眼の女。彼女のことは知っている。

「リコリス」

武器を握る力が強くなる。

倒せなかった相手。トキの言うように厄介な相手だ。

名を呼ばれてリコリスはちらりと顔を上げる。

「ああ・・・、この間の？」

「まさか再び会うとは思っていませんでしたわ、リコリス！」

「別に会いたいとも思っていないかったし、あなたに用はないわ。私
が用があるのはそっちの金髪の男だけ」

リコリスは笑いを浮かべてトキを見る。

完全に眼中にないと言われたキツシュは顔に朱を上らせた。

トキはにつ、と笑う。

「それ人違いアルよ」

「誰！？」

「ワタシ、謎のモロコシ星人ね！ トキとか言う色男とは別人ね！」

ヒゲを撫でながら怪しげな言動をするトキに一同は頭を抱えた。

口調を変えて、ヒゲを変えただけの変装では変装の口には入らない。しかもさりげなく自画自賛。騙される人間は騙す側よりよっぽどアホでなければ成り立たない。

そんな嘘で誤魔化される訳がない。
しかし。

「そう言えばヒゲが違うわね」

「え？ 騙された！？」

「・・・しっ！ 口に出すな！」

トキは険しい表情で指を口元に当てる。

「どうしたの？」

「何でもないアルね。さっき、金髪の格好良い男が向こうに行つたの見たアルよ、きっとその男ね」

「本当？ そっちに行つてみるわ。教えてくれてありがとう、それと間違えてごめんなさいね」

去つていくリコリスをトキは大きく手を振つて見送る。

「気にすること、ないあるよ！・・・と言つわけで、早くこの場を離れるぞ」

「まさかアレで騙されるとは」

「俺様の変装がそれだけ完璧だったってことさ・・・だが、奴はそのうち戻ってくるだろう。そうになったら戦闘になりかねない。今のうちに二手に分かれよう」

その方が良いだろう、とカナリアも同意するように頷いた。

出来ることなら全員が辿り着ければいい。だが、そう出来る可能性は低い。ならば誰か一人でも花の所行を止められる位置まで行かなければ行けないのだ。もっと厳密に言うならば、トキがカナリアかどちらか一方が。

「・・・何故？ 彼女と戦闘になるならみんなでかかった方が早いんじゃないませんか？」

「嬢ちゃんも奴と面識あるならあの強さを知っているだろう。戦闘になつて生き残つたとしても満身創痍の状態じゃ意味がない」

「満身創痍なんて言葉お前知っていたんだな」

「茶化すな、カナリア。俺は俺ではなくお前に辿り着いて欲しいと思つている」

「トキ・・・」

「俺はモズのような力もないし、お前のような能力もない。ただ一

番血が濃いつていう理由で族長をやっているだけだ。だが、鳥は俺の命令でみんな動いている。お前が指揮した方がよっぽど上手く機能するのにな」

自嘲するように彼は笑う。

常に自身に満ちた彼の言う言葉ではないように聞こえた。だが、この言葉を聞くのは本当のところ二度目だ。モズが健在だった頃、自分に何かあれば次の族長にはトキを、と告げた時、彼はカナリアの方がよほど向いていると言った。

だが、モズは首を縦には振らなかった。

その理由はトキもカナリアもよく分かっている。どうしてもカナリアが族長になってはいけない理由があるのだ。

トキはずい、と自分の腰に帯びた二振りの剣の一本を差し出した。「俺自身が辿り着いたら俺が指揮する。その代わり、お前が辿り着いたらこの剣を持って族長を名乗れ」

「だけど・・・」

「俺が許す」

「・・・分かった」

剣を受け取った彼を見てトキは満足そうに頷く。

族長の証、鳥の一族の最初の剣士が使っていたとされる剣。けして何でも簡単に切ってしまうような名剣ではないけれど、何百何千年も、へたをすればもつと長い時間朽ちることなく残っている剣。

代々鳥の族長が扱い続けた剣。

「んで、今から戦力を二分する。いいな？」

「二人が決めたのであれば選択肢は私たちにありませんわ」

「同感だな」

「ありがとう、それで、カナリア。どう二手に分ける？」

カナリアは思案するように口元に手を当てた。

「と・・・モなら間違はなくキツシュを選ぶな」

「あらん？ 私を軟派するつもり？ んふ、でもダメよ、私は殿方には興味がありませんの」

「・・・カナリア、お前はこんな女が趣味なのか」

「こんな女ってなあ・・・俺は嬢ちゃんみたいなの・・・身体にもメリハリがあるのは結構好みだけどな」

「メリばっかりだ」

「まあ、失礼ね、弟のくせに」

「俺が年下であることを主張するのであれば、それ相応の行動をとってから仰って下さい、お姉様？」

「うわ・・・笑顔のくせに思いつきり決ったな、兄ちゃん」

「俺は単純に選ぶんだったら女の方を選ぶって話をしたかったんだけど・・・」

それはそれで問題です。

キツシュは腕組みをして問う。

「そう言う言い方をするということは、私ではなくふーちゃんを選ぶのですね？」

カナリアは頷く。

「そういうことだ」

意外そうにトキが彼を見つめる。

「嬢ちゃんこつちでいいのか？」

「ああ、いいんだ。腹はもう据わっている」

意味ありげな問いに、意味ありげな答えが返る。

不可解ではあったが、キツシュもマリンもそれに対して突っ込みは入れなかった。それは追々問いただせばいいこと。今は先に二手に分かれ一方がリコリスを、そしてもう一方がエリー達のいる場所までたどり着かなければならない。

カナリアはマリンの方を向いた。

「一緒に来てくれ、マリン」

「分かった」

「キツシュ、悪いが別行動だ。万が一の事があつたらトキを盾にして逃げる」

「分かりましたわ。全力で逃げます」

「うん、そうしてくれ」

「別に盾になるのが嫌だって訳じゃないが……その言い方、少し傷つくぞカナリア」

Story 5 太陽が堕ちる日(8)

8 告白

「聞いて良いか？」

彼らとは別の道を進み始めて暫く経った。

黙ってカナリアの後に付いていたマリンはようやく口を開いた。

いつ、その質問をするかと構えていたカナリアは安堵の息と共に軽口を吐き出す。

「何でお前と一緒に選んだか、だろ？ そんなの簡単じゃん、お前を愛しているからさ」

「お前がそういう言い方をする時は、大抵何かを隠している時だ。今更それで誤魔化したもりか？」

「俺と、お前との仲で、な。まあ、誤魔化せりゃいいとは思ってたけど」

マリンを振り返ってカナリアは口ごもった。

「何故？」

「お前が怒るから」

「怒られるような理由か」

「だって、お前、なんだかんだ言っでシスコンじゃねえか」

「・・・否定出来ないな」

「あ、しないんだ」

カナリアはちらりと笑う。

普段の彼なら「茶化すな」と切れて誤魔化すか、「気色悪いことを言うな」と全力で否定しているところだ。それをしないところを見ると彼もまた腹を割って話をするつもりらしい。

そこまで覚悟を決められてしまえば、カナリアもへらへら笑って誤魔化す訳にはいかなかった。

カナリアは口元から笑みを消した。

「リコリスは十中八九トキを狙ってくるよ」

「あの女、強いのか？」

「恐らく。・・・トキは強い」

「うん？」

「あいつが、二手に分かれる事を提案した。一人で残る選択肢もあったはずだが、キッシュと組むことを拒まなかった。あいつは・・・あいつも、俺も、俺が確実に連中の元に着ける方法を選択したんだ。例え誰かを犠牲にしたとしても」

「・・・っ」

マリンの目つきが険しくなった。

それは、二人が死ぬ可能性もあると言うことを意味している。それを承知で彼は二手に分かれたのだ。カナリアがどんなときも最も犠牲の少ない方法を選ぶことを知っている。トーアで自分だけがある場から離れたのも、トーアの住人に被害が及ばないようにするためだった。

分かっているから、責められない。

第一、付いてきたのは自分たちの判断だ。巻き込まれて相手を責めるのは間違っている。

それは分かっている。わかっているが、犠牲の側にキッシュを立たせたことは許せない。

彼女はマリンにとってただ一人の肉親だ。変態で、変質者で、自分勝手わがままの「××」という罵倒語を付けて呼びたくなるような女でも、ただ一人の姉で、親代わりでもあるのだ。

握った拳に、力が入る。

「殴りたいなら、殴ってもいい」

「・・・誰が、殴るか」

カナリアは微笑を浮かべる。

マリンは視線を外した。見ていれば殴りたくなってくる。罵って、キッシュを助けると言いたくなる。だが、彼にはそう出来ない理由

があるのだ。

犠牲を最小限にしたがる彼に、犠牲になるかもしれない仲間を救いに行けない理由があるのだ。

手のひらに爪が食い込んだ。

「誰が責めて楽にしてやるものか。いいか、もしものがあつたらお前、俺が死ぬまでずっと俺の顔を見続ける」

キツシュと同じ顔の自分を。

髪の色こそ違うが、思い出さずにはいられないほどの顔を。

カナリアは複雑そうに表情を変えた。

「・・・愛の告白みたいだな」

「愛の告白なら、出会ったその日にした」

「真顔で言っなよ」

ボケでも何でもなく切り替えされてしまつと逆に恥ずかしくなる。カナリアは赤面してうつむいた。

「今からキツシュ達のところに戻る選択肢もあるぞ、マリリン」

「バカを言っな。俺はそのためにお前に付いてきたのではない。ラネルとラネルを助けるために来たんだ」

「・・・俺、それ突っ込まなきゃいけないか？」

「どこに何を突っ込むというのだ？」

「お前が言つと、嫌らしく聞こえるのは何故だろう」

「それはお前の脳みそが沸騰しているからだ」

「ボケか本気かわからないから、冗談を真顔で言っのは止めてくれ」

真剣な話をしている時にでもナチュラルにぼけるのはこの医者 of 厄介なところ。しかも本気がそうでないか判断がつきにくいから余計に厄介さが際だってくる。

美少年の話をしている時は十中八九本気だろうが。

「エリアードは」

不意に彼の口から少年以外の名前が出て、カナリアは硬直した。

「エリアードはお前に不信感を抱いていたと言う。それに心当たりはあるのか？」

「ねえよ。留守にすること多いから、あんまともに話出来ないのは悪いと思っていたが」

「彼女はお前に好意を抱いていた」
カナリアは肩を竦める。

「あいつは俺を恩人だっと思ってているんだよ。オーナディアから出てからめぐるしく色んな事が起こった。まだ夢の中にいるようなもんなんだよ。夢から覚めたただけの話かも知れない」

彼は自虐的な笑みを浮かべる。

マリンには、どうしてもこれは何かを隠している顔にしか見えなかった。

「それが見ず知らずの人間に付いていく理由になるか？」

「彼女は気を失っていた。こっちを混乱させるために連中がついた嘘かもしれない」

「・・・お前、やっぱり心当たりあるだろう」

「知らねーよ。あつたとしても確証無しに話したくもない」

凍てつくような視線がマリンから放たれた。

決まりが悪そうにカナリアは頭を掻いた。

「・・・お前、俺何に見える？」

「男」

「いや、女には見えないだろうが・・・そう言う事じゃなくて」

「成人男子」

「お前には、性別年齢以外の括りはないのか？」

「便利屋の成人男子」

「・・・もういい」

質問の仕方でも聞く相手が間違っていた。

だが、まともな回答こそ返って来なかったが、そのほうがかえってすっきりしたのも事実だ。

自分の事を話すのは正直勇気がいる。

それは自分に自信がないからでもあり、真実に対して自分自身が劣等感に似た罪悪感を抱いているからだ。

この医者は、きつと「だからなんだと言っんだ」と鼻先で笑うだろう。

自分自身ですら否定したい部分を、あっさり受け入れてくれるだろう。だから余計に話したくなかったのかもしれない。

それに予想を裏切って彼が自分を否定したら、おそらく誰に否定された時よりも傷つく。多分、とても甘えているのだ。彼に。

「マリン、俺は・・・うわっ、何だ!？」

一歩踏み出した瞬間。

それを阻害するように足場が大きく揺れた。

Story 5 太陽が墮ちる日(9)

9 悪魔かあるいは

「動くなよ。動いたら、この綺麗な顔のお兄さんの首、吹っ飛ぶからね?」

一瞬、状況が理解できなかった。

目の前には茶色い髪の少年に剣を突きつけられているマリンの姿があった。大地の揺れに気を取られた一瞬に、人質に取られたのだ。まだ十代前半くらいの少年に。

「・・・お前、スイレンか」

カナリアは少年を睨む。

少年は剣さえ持っていなければ手を叩いて喜んでいただろうと思えるような笑みを浮かべる。

「正解。鳥の人、いつ代替わりしたの? 僕が聞いていたのは今の族長、金髪の男のはずだったけど?」

「残念だけど、俺は族長じゃねーぞ。マリンを放せ。そいつは無関係だ」

スイレンはせせら笑う。

「無関係って割に、動揺しているね。人質としては随分と役に立つと思うけど?」

「少年に人質にされる・・・ああ、滅多に出来ない経験だ」

「マリン、何で若干嬉しそうなんだよ」

「彼は俺の『範囲内』だ」

「・・・堂々と言っなよ」

「聞いたのはお前だ」

少年は少し興味深そうな顔でマリンを見上げる。

大木に追いやられ、剣を向けられている彼は涼しい顔で見下ろした。

「へえ、お兄さん、あれだ。ラネルとかいうガキンちよが言っていた年下の男の子にしか立た・・・」

「ラネルを知っているのか」

「マリン、ナイスタイミングだ」

もう半分くらい言っちゃったけど、何とか誤魔化した。

さすがマリンの仕事は完璧だ！

「あのガキには王の復活までは消滅去れると困るからね、丁重に扱っているよ」

「丁重ね。そのことも丁重に扱ってくれると嬉しいんだけど」
言われて、スイレンは非道の限りを尽くしたような笑みを浮かべた。

「・・・。お前の顔、虫歯が走るんだよね」

「虫歯！？ 走るの！？ どうやって！」

「あ、違った、虫唾だ。とにかく、お前の顔嫌いだ」

「少年に嫌われるとは、可哀想な顔を持っているな」

「俺の顔が悪いみたいない方だな」

「頭は悪くはないな。良かったな、少しはそれで救われるだろう」

「・・・ムカツク」

人質に取られている奴が味方に対して吐く台詞ではない。

いつそこで見捨てて行こうかとさえ思える。

だが、そもいかなない。どのみちマリンを見捨てたとしても、スイレンとの戦闘は避けられないだろう。仮に、避けられたとしても邪魔をしてるのは火を見るよりも明らかだ。どこかで叩いておかなければ泣きを見るのはこちらだ。

カナリアは自分の服に仕込んだナイフの位置を頭の中で確認する。
「お前、僕を殺したね？」

「覚えていないそうだな。だけど、殺したからって何だって言うんだよ。お前だって俺と同じ顔をした奴を殺しただろう」

「そんなの、忘れたね」

魔法の匂いが立ちこめた。

カナリアは腰に手を這わせた。

「動くなって言っただろう？ 言葉の通じない馬鹿だね」

「鳥だよ」

「減らず口。くちばし黄色いくせに偉そうに」

簡単な挑発に乗ってきた彼に、カナリアは笑う。

「・・・大人しくしていたからってマリンを助けてくれる訳じゃないだろう？」

「当然だよ。大体殺したからって何だって言うの？」

「人間はお前らと違って再生しないんだよ」

「知っているよ。僕らだって簡単に再生する訳じゃない。そのまま朽ちる可能性だって十分あり得る。だけど、あいつにとってはどっちだって同じなんだよ。動いていたものが、動かなくなる。それだけのことなんだ」

一瞬、笑っていた彼の顔が泣きそうに見えた。

見下したような顔。歪んだ微笑み。

それでもどこか辛そうな、悲しそうな顔。

「まったく、その通りだな」

「え？」

刹那、マリンの手が少年の肩を目がけて振り下ろされた。その手には医療用のメス。それは少年の肩に深く突き刺さり、血しぶきを上げた。

スイレンは戸惑ったように目を見開く。

一瞬の隙をカナリアは見逃さなかった。

腰元のナイフを引き抜きマリンが刺した側とは別の肩に向けて投げつける。それと同時にマリンの方向に向かって走った。

「お前・・・っ！」

「戦えないと思って油断したな」

「可愛い少年が好きじゃなかったのかよ」

「その通りだ。俺は可愛い少年が好きなんだ！」

「それって僕が可愛くないってこと！？」

「マリン！」

カナリアはマリンの肩を掴んで後ろに押しやった。

瞬間、紫色の雷がスイレンとの間を駆け抜ける。

「っっ！」

カナリアが振り返る。

見開かれた青い瞳が一瞬にして赤く染まった。瞳孔が収縮し、微振動を起こす。

カナリアは勢いよくマリンを押し倒す。

暗い茂みに向かって二人の身体が転がるように落ちた。スイレンによって放たれたハズの魔法による衝撃は不思議となかった。

「・・・お前ら！ 何をした！」

茂みの外で、スイレンが剣呑な声で喚いた。

その声に、カナリアはまともな反応を示さなかった。

「？・・・カナリア？ そんなに俺と抱き合っていたいのか？」

「・・・」

緩慢な動きでカナリアは身を起こした。

当然のことのように突っ込みが来るだろうと予測していたマリンは困惑する。そして、カナリアの瞳を見て瞬いた。

血を吸ったような赤い瞳。

それは、普段の彼には見られない色だった。

まるで悪魔の瞳のように冷たく感情の伴わない赤い瞳。瞳孔だけが黒く残り、微かに揺れている。

目を、離すことが出来なかった。

「お前・・・その目」

「・・・大丈夫だ、問題ない」

見ないでくれ、そう言うように彼は手のひらで目元を覆った。

瞳を覆ったまま彼は立ち上がる。

スイレんがその姿を見て激昂した。

「思い出した！ お前は、あの時の！」

少年の表情が宿敵に会った時のように歪められる。

カナリアは歪な笑いを返した。

Story 5 太陽が堕ちる日（10）

10 終わりの刻

「……雑種の鳥とか言って生意気な事を言っていた裏切り者・・」

「……俺は鳥だよ」

カナリアはトキから預かった剣を引き抜いた。
鈍く銀色に輝く刀身が眼前に構えられる。水平の構え。鳥の一族
が代々受け継ぎ続けた独特の型。

「お前のそれが、鳥の訳がない！ お前は俺たちの・・」
「黙れ！」

カナリアの声が波動のようにスイレンの脳に突き刺さった。
少年は額を抑える。

その表情は酷い頭痛でもするかのようにだった。
マリンは身を起こして二人の様子を窺った。

「……んつとに、生意気！ お前のせいで俺があいつにどれだけ
借りを作ったと思っているんだ！ それに」
「黙れと言っている！」

カナリアの瞳がスイレンの瞳を捕らえた。
彼は不敵に笑う。

「何だ、今更その変態医師に聞かれるのが怖いのか？ 知られよう
が知られまいが、お前が何であるかという事実は変わらないじゃないか」

「……」

カナリアの身体が動いた。
少年は動かなかった。

ただ諦めたように半笑いを浮かべていた。

花の名前を持つ者、灰の目の一族は魔力の高い方が低い方の魔力を支配する。

魔法が使えないスイレンは、子供と同じだ。

カナリアの手元で剣が煌めいた。一撃目は薙ぐように胸元を切り裂き、二撃目は真っ直ぐ心臓に向かって突き立てられた。

「・・・っが」

少年の口から吐き出されたのは血ではなかった。

さらりとした砂。

灰。

「・・・つとに、お前、生意気・・・」

彼の身体が後ろに向かつて倒れた。

ぱたり、と冷え切った音がした。

カナリアは剣を振って鞘に納める。

「カナリア」

呼びかけられても振り向く事が出来なかった。振り向くのが怖かった。勘の良いマリンならば今の会話で気付いたことだろう。

いや、ひよっとしたらとっくに見当を付けていたかも知れない。

けれど、怖くて振り返ることが出来なかった。

「・・・殺してしまえ。」

悪魔がざわつく。

「・・・言葉に傷つく前に殺してしまえ。」

この身体に流れる血。悪魔の血。その力を使うたびに悪魔が目を開く気配がするのだ。理性が壊れかけ、例え仲間であっても、平気で手に掛けられるほど感覚が鈍くなる。

なのに、どうして使わずにはいられないのだろう。食事と同じで暫く使わないとやはり理性が壊れかける。もっと残忍になる。

こんな呪われた血。

呪われた性。

誰かに知られるのは怖かった。

マリンが自分の衣服に付いた土埃を払う音が聞こえる。

「お前、鳥ではなかったのだな」

「・・・」

「カナリアという名は似合わないと思っていた」

「・・・ほっとけよ」

「いや、だが、ウサギのほうがよほど似合わないな」

「・・・は？」

覚えずカナリアは振り返って。

思案するように口元に手を当てたマリンは静かにカナリアを見据えている。

「赤い瞳といえばウサギだな。花に鳥にウサギ。・・・世の中には色んな一族があるもんだな」

「マリン？ え、お前」

「むしろお前は・・・そうだな、アンモナイトという感じだな」

「化石！？」

「ああ、だがカナリアという呼び名で慣れた今となっては別の名称で呼ぶには多少苦勞しそうだ。カナリアでいいだろう。似合わないがそっちの方がしっくりする」

「似合わない似合わないうるせーよ」

「俺をマリンと呼ぶお前が文句を付ける筋合いなどない」

きっぱりと言い切った医師は少し満足そうだ。

カナリアは肩をすくめる。

気付かないふりをしてきているのだろうか。どちらともとれる態度だ。けれど、多分、そうなのだろう。

直接言えば追及される。

カナリアは目を閉じ心の中でだけ礼を述べた。

収縮していた瞳孔が拡散し、徐々に自分が戻ってくるのを感じた。悪魔の血が、彼を殺してしまわなくて良かった。

静かだ。

ここは静かな場所だった。

先刻まで男たちが何かを喋っていたがもうそれも遠ざかって聞こえない。剣で突き刺され、灰を吐き出した瞬間、死んだものだった。

男たちもまた、自分を死んだと思いこんでいた。

だが、生きていた。

身体は動かないけれど、今まで何度も味わった灰化する感覚とはまるで違った。

だから生きているのだろう。

早くアナナスの元に戻りたかった。あの一族の中で初めて自分の死を悲しみ嘆いてくれた人。何度も蘇り、何度も彼に会った。彼はいつだって自分を迎えてくれた。不器用でどこか寂しげな男。自分が再生して再会するたびに彼は徐々に感情を失っているように見えた。それでも、アナナスは差し伸べる手を用意してくれている。

助けになりたい。

一刻も早い再生を望んだのも、彼を一人にしたくなかったからだ。あの寂しい人を一人にしたくなかった。

ここで自分が死ねば、また彼の感情は薄くなるだろう。

悲しみを感じないために彼は自分の精神を削っている。

多分、灰の目の一族として輪廻の輪から外れ、王の復活だけを目標として生きるには、彼は優しすぎたのだろう。自分が産まれるより前から生きている人。他の仲間が朽ち果てて二度と再生しない状態になるのを何度も見てきた人。

彼にまた灰化した自分を見せるのは嫌だった。

だから生きていたことが嬉しかった。

（早く・・・あいつのところに戻らないと）

無理に動かそうとした体がみしり、と嫌な音を立てた。

まるで何百年もかけて乾いた木が繊維に沿って碎けるように動かそうとした手が割れて落ちた。

「・・・・」

何故、と呟こうとした唇が軋んだ。

動かずそのまま碎け散る。

それを合図にするように、身体に至る所が碎け始めた。皮膚が結晶化して割れていくのを碎けそうな瞳が見つめていた。

死だ。

彼は悟る。これは灰化するのではない。本当の意味で朽ちようとしているのだ。

死のうとしても死ぬことが出来ない灰の目の一族の自分が、何故今朽ち果てようとしているのだろう。

何故、今なのだろう。

まだ早い。

まだ彼が残っているのに。

（死にたくない）

あいつが悲しむから。

眼球に亀裂が走る。

涙は出なかった。

もう目も見えない。音も聞こえない。

あいつに伝えていないこと沢山あるのに声も出ない。

・・・・アナナス。

Story 5 太陽が堕ちる日（11）

11 ショコラフォンデュ

「なるほど、バビアナが殺し損ねるわけね」

剣を素手で受け止めて女は笑った。

予測通り、彼女は戻ってきた。狙いはトキだけだ。それをカナリアも分かっていたのだろう。だからキツシュを残していったのだ。

「だけど、私は強いわ。アナナス様には劣るけれど」

女はふふつと笑う。

トキも笑った。

「俺も強いよ。まあ、ヒバリには敵わないがな」

「あら、族長が最強じゃないの？ 残念だわ」

彼女はトキから離れ、間合いを取った。

強さを感じる。だが、先だって戦ったバビアナに比べれば随分と劣る気がした。だが、一筋縄ではいかないのが灰の目の一族。

強いと言い切るからには何か特殊な能力があるのだろう。

トキは彼女の様子に注意しながら腰に手を当てた。

「主人公が最強じゃない方が物語面白だろう？」

「あなた、主人公のつもりでしたの？」

「嬢ちゃん分かってないな。この美貌、この才能、主人公になるために産まれてきたようなものだろう？」

うーん、トリコリスが唸る。

「美貌とかはともかくとして・・・確かに馬鹿で熱血は主人公要素として確立しているわよね。ただその年齢でオバカだというのはど

うかと思うけど」

「うるせーよ、謎のモロコシ星人に騙されたお前が言っなよ」

「あんな巧みな変装、見破れる訳がないじゃない!」

「・・・あれ、巧みだったんですの?」

「ほらー、だから言っただろう? 俺の変装は完璧だって」

どこをどう見たら完璧と言えるのだろう。

リコリスは頬を赤らめて咳払いをした。

「ともかく! あなたのこと殺させて貰うわ、鳥の人。私たちの邪魔をされると困るのよ」

「俺も、俺様の代で王が復活するのはごめんだな。俺様の名前に傷が付く」

「そう言う問題ではない気が致しますけど」

突っ込みを入れながらキツシュは鎌を振りかざした。

一度彼女と戦闘しているから、その強さの程を知っている。力が強い上に、異常なスピードを持っている。

あのスピードがある限り二対一でも勝てる見込みは少ない。

ふと、リコリスの姿が消える。

(?)

まるで空間を移動したかのように彼女はトキの目の前に姿を現した。

「くそつたれがっ!」

トキが剣を振る。

彼の剣はリコリスに当たったように見えた。

しかし、

「!?!」

剣は完全に宙を薙ぎ、そこに相手の姿はない。

「後ろ!」

キツシュは叫んだ。

トキが振り向く。

どん、と重い音がした。

多々良を踏むように移動したトキが今までいた位置をリコリスの拳が通過する。それは勢い良く地面に突き刺さり、半球体の穴を開けた。

キツシュはリコリスに向かって切り込んだ。

一瞬遅く、刃先は彼女の髪を掠めただけで終わった。

リコリスは小さく笑う。

「あら、見直したわ、お嬢さん」

「私は、キュスラ・リンですわ！」

鎌を振り切ってキツシュは魔力を溜めた。

手のひらに集中させた力は柄を伝うようにして刃先に集まる。魔力を帯びて鎌の形が徐々に変化を始めた。飾り気のなかった鎌に古代文字と独特な装飾が加わっていく。

リコリスの拳には確かに魔力が籠もっていた。あの力はそれによるものなのだろう。だが、速さの正体が掴めない。

本当に空間を移動する能力なのだろうか、それとも。

「嬢！」

トキが叫んだ。

目の前にリコリスが迫ってくるのが見えた。

瞬間的に鎌を地面に突き立てる。

地面に魔法陣が描かれた。

円陣は電撃のような力を垂直方向に向けて吹き上げる。

「……」

目の前のリコリスの姿が消えた。

代わりに遥か後方に間合いを取って佇む彼女の気配を感じた。

（……今の？）

トキが駆け寄ってきた。

「おい、嬢ちゃん今のは……」

「シヨコラフォンデュの力を解放しましたの」

「しょこたん？」

「コスプレしている人ではありませんわよ、この鎌の事ですわ」

口元に手を当ててリコリスが叫ぶ。

「な、なんて美味しそうな名前なの!？」

「いや、突っ込むところはそこじゃないだろう。鎌なのになんで甘い名前が付いているんだ？」

トキの突っ込みも大きく間違っている。

「これはイーア・ガンが私の為に作った私専用の鎌。甘い名前なんて私にぴったりでなくては？」

キツシュの受け答えも何か間違っている。

「お嬢、礼の武器職人の知り合いだったのか？」

「んふ、私のお父様は顔が広かったのですわ」

「え？ あなたのお父さんはせん●い博士だったの!？」

「・・・それ顔がでかい人ですわよ。私の父親が、あんな1・5頭身な訳がありませんでしょう？」

「いや・・・それより博士って誰だよ」

「一応天才ロボット工学者よ。結構有名よ。七つ集めると願い事が叶うもやっ。ボールを発明した人を父親に持つのよ」

「あなたの知識、どこか間違っている気がしますわよ」

「ああ、そうね、産みの親だから母親になるのね、えっと確か名前は鳥何とかかんとか。・・・あら、その人も鳥の一族かしら？ という事はあなたも鳥の一族？」

どうしてそう言う発想に至るのか。

キツシュは額に手を当てた。

「違いますわよ。そもそも博士は私の父親ではありません」

「キュスラってあのフルーツみたいな鳥よね？」

「そりゃキウイだ!　っーかお前、人の話聞いていないだろう」

「・・・トキに突っ込まれるなんて・・・あなたとても頭が悪いのではありませんか？」

「まあ、失礼ね!　私、真剣に考えているのよ」

「お嬢、俺に対しても暴言・・・」

「真剣に考えているのならばなおさら悪いですわ」

「無視かよ」

「人の話を聞かないのは老化現象ですわよ」

リコリスは思い当たる節があるのか「うっ」と小さく呻いた。

「お嬢もそうだろうが」

キツシュはトキを睨め付ける。

「聞こえてましてよ、トキ。女性に年齢の話をするのは御法度と決まっておりますでしょう？」

「そうよ、あなた失礼よ！」

「何で俺が責められるんだ！？ 俺様女難？」

Story 5 太陽が堕ちる日(12)

12 傲慢

「・・・トキ、耳を貸して下さいませんか？」

キツシュはトキに寄り添うようにして小声で囁いた。

若干嬉しそうな声でトキが答える。

「貸せれるもんなら貸してやっても良いが、耳引きちぎると痛いしなあ」

「・・・それ、本気で言っているのですしたら、その耳そぎ落として犬も食わない事を証明して差し上げますわよ？」

「犬が食わないのはタマネギだろう？・・・いや、悪かった。

もう茶化さないから睨まないで下さいお願いします。姉ちゃんみたいな美人に睨まれるとなんつか、し・・・ああ！すみません！

！ 下品なことも言いません！」

皆まで言わせないキツシュの鋭い眼光。

トキの意外な趣味が発覚したところでキツシュはトキの耳元に囁いた。

彼は一瞬驚いたように目を見開き、納得したように頷いて見せる。その瞳はキツシュに対して感心しているようでもあった。

「・・・なるほどな、それなら合点がいく。しかし嬢ちゃんよく分かったな」

キツシュは、んふ、と甘い声を立てて笑う。

「彼らを常識で考えるのは止めましたの。それで、トキ、準備はよろしくて？」

「はいよ、よろしくていらっやいます」

赤髪のキツシュが鎌を構えるのと背中合わせにするようにトキが

剣を構えた。

どうしても隙が出来てしまう後ろの部分をお互いに補っていると言っことだろう。弱い人間が互いの欠点を補おうとする時によくやるうとする手法だ。だが、これは互いの信頼と息が合っていないければお互いに足を引っ張る結果になる。

リコリスは二人を見下したように見つめた。

「何を話していたかと思ったら、そういうこと？　・・・ふふ、なら、二人まとめて相手してあげるわ」

彼女が動いた瞬間、

「そうはイカスミ！」

「タコスミですわ！！」

キツシュとトキが同時に真逆の方向に走り抜ける。

「敵前逃亡！！」

まさかそれぞれがバラバラの方向に逃亡するとは思っていなかったリコリスは一瞬戸惑った。

二人を一度に相手して一度に葬り去るつもりだっただけに、どっちを追うべきか迷ったのだ。その上捨て台詞が「イカスミ・タコスミ」という意味不明な単語であるだけに、動揺が隠しきれない。しかし、彼女はすぐに自分を取り戻す。

自分がどんな命令を受けてここに来たのか、それを思い出せば追うべき方がどちらであるかは容易に判断できる。

そう、自分は鳥の族長を殺すために・・・

「あら？　キウスラも鳥だったかしら？　親が鳥だから・・・えっと、そう！　子供は卵ね！　ニワトリが先よ！！」

卵と鶏は卵が先ですよ、リコリスさん。

などという突っ込みをくれる相手はいない。

リコリスは何か誤解をしたままトキを追いかけた。

彼はすぐに見つかった。

森の中の、少し広くなった場所に抜き放たれた剣を携えて立っている。追いついてリコリスは笑った。

「なるほど、卵を逃がすつもりだったのね」

「卵って・・・嬢ちゃんはむしろメロンって感じたよなあ」

「何の話をしているの？ 失礼ね！」

「いやドレスのこの辺がアミアミネットって感じだろう？ だからメロンなんだが・・・お前こそ何の話をしているんだ？」

「ぐっ・・・！」

リコリスは言葉を詰まらせる。

色々とコンプレックスがあるらしい。

トキは笑う。

「あんたも結構魅力的なんだから、花なんか辞めて暮らせばいいのに。俺様は女の子大歓迎！ 俺、花辞めて暮らしている奴のこと知っているぜ？」

彼女の気配が鋭くなる。

「・・・あなた、それがどういう事か分かっていつているの？」

「うん？」

「竜王の契約に縛られているだけのあなた達に言われたくないわ！ 私たちは、王の為にでなければ、生きることすら死ぬことも許されない。死ぬたびに蘇り、抗おうとすればこの身に刻まれた灰の紋章が地獄の業火で焼かれるような苦しみを与える。花をやめた？ 笑わせないで。そんなことをすれば果てることも許されない苦しみを味わうのよ！」

「・・・！」

トキは目を見開く。

「それ・・・本当なのか？」

ようやく絞り出したように言う。

嘘を付いてもしかたがないでしょう、とリコリスは答えた。

確かに嘘をついても仕方のないことだ。リコリスはこちらを情で流そうとしている訳ではない。花と鳥は戦うように仕組まれている。ここで情に訴えたとしても、この状況下でトキが彼女を見逃すわけがない。

だから彼女の言ったことは真実なのだろうと思う。

だが、それでは自分のした選択も、彼のした選択も、あまりにも・

・・・

「あいつ・・・んなことは一言も・・・」

言わなかった。

だが、思い当たる節がないわけではない。そもそも魔力を使いきたと言っていたが、大々的に魔法を使った後の彼の衰弱の原因がもしもそうだとしたら。平気そうにしていたが災禍のような苦しみを味わっていたのだとしたら、自分たちは彼にどれだけの苦痛を与えてきたのだろう。

それとも、彼は半分だけなのだから、苦しみも半分だけで済んでいるのだろうか。

どれだけの事を、隠しているのだろうか。

鳥の一族の中でも彼のことに關してはごく僅かしか知らない。彼が鳥ではなく、灰の目の一族の血を引いているなどとても吹聴して歩けることではない。

だから彼は「雑種の鳥」を名乗る。

先代族長のモズが危険と知りながらも殺せなかった子供。

「・・・カナリア、お前」

可哀想だ、そう思ってしまうことだって傲慢なことだろう。

誰も彼にそれらしい選択肢を与えてやれなかったのだから。

「・・・難しいこと考えるの、俺様らしくねーな」

「タラバガニは実はカニではない、とか考えていたの？」

「え？ あれカニじゃねーの？」

「動物学上ではカニ類よりヤドカリ類に近いらしいわ。ほら、足の数が違うでしょう？」

「えー？ マジで！？ 俺、ずっとカニだと思って食ってたよ！

あ、何か軽くショック」

「分かるわ、その気持ち」

リコリスは眉根を寄せて頷いた。

今までカニだと信じ込んでいたのが実はカニではなかったなんて、
胴って事ないはずなのだが、真実を知ってしまうと軽くシヨックを
うけるものだ。

「でも、なんであんた知ってるの？」

「通販番組でやっていたのよ！ カニカニ15ハイセットで198
00えーん」

「おっ！ 安い！ 買った！ 電話番号と支払い方法教えてくれ。

届け先はシェラン城の王の盾隊長で」

「職場に届けて大丈夫なの？ お届けは黒猫急便一步前ニヤー」

「あつ！ そうか、連中勝手に開けて勝手に食うかもしれねーよな
んー、自宅の方には滅多に戻らないからなあー、おっ、私書箱とか
どうだ？ 俺様宛のファンレター用に借りてあるんだ！」

「ファンレター届くの？」

「そりゃ俺様大人気だからな！ ……って、そろそろ誰か突っ込
めよ」

二人しかいない上に両方ボケだから、突っ込む人がいない。

これは実に寂しいことだ。

Story 5 太陽が堕ちる日(13)

13 シェリル・アナ・シェラン

「いーから、てめーは部屋で大人しくしてろ。どっちにしろ、空間を抜けるまではじっとしているしかねーけどな」

「むう、分かったよぉー」

言ってエリーはそつとドアを開けた。

まだナスタチウムは眠っているだろう。起こすのが忍びなかった。しかし、部屋にはいると既に彼女は目覚めていた。

人形を抱き、子守歌を歌っている。

・・・そして目覚めた太陽が

無限の未来を紡ぐから

だから泣かないで

私の愛しい子

（綺麗な歌・・・あれ？ だけどさつきまで・・・）

彼女は知らない国の言葉で歌っていたはずだ。どうして急に公用語の歌詞に変えたのだろう。もう一度良く歌詞を聴き取ろうとする
と、彼女の歌はやはり知らない国の言葉だった。

聞き違いだったのだろう。

彼女はエリーが戻ったことを知るとピタリと歌を止めた。

「ああ、エリーちゃん、お帰りなさい」

「ただいま・・・起きちゃったの？」

「ええ。シェリルが寂しがって目を覚ましてしまったの」

「そっか。・・・眠ったみたいだね」

「お姉ちゃんがもどって安心したのね。ふふ、あなたって不思議な子」

ナスタチウムは優しく笑って抱きかかえた人形を揺すった。

ちつ、と、グラスが舌打ちをする。

彼女は初めてそこにグラスがいるのに気付いたかのように、ぎゅ
っとシェリルを抱きしめて睨んだ。

「なーにが不思議な子だ。自分の罪から逃げるために狂いやがって
このアマ。んな出来損ないの人形抱きしめてシェリルシェリル。恵
まれた歌巫女さんはお幸せなことだ」

「グラスさん！？」

エリーは慌ててグラスの口を塞ごうとした。

しかし、伸ばした手は簡単にはね除けられた。

ナスタチウムは警戒した様子で彼を見る。

「・・・あなた、何を言っているの？」

「お前だっけわかってんだろう？ それがシェリルでないって事く
らい」

「何言っているの？ この子は私の子、シェリルよ」

グラスは鼻先で笑い飛ばした。

「まだ言うかクソ女。てめーのせいでどんだけの命が失われたと思
ってんだよ。大体、シェリルだ？ 雄の子供に付ける名前じゃねー

「だろ？」

「え？ お酢？ 酸っぱいの！？」

「男だ、オトコ」

「乙子ちゃん？ ふぎやつ！」

「チップを喰らってエリーは呻く。

ボケをかますようなシーンではなかったようだ。女の子を殴ることないじゃん、という言葉を読み込んで、彼女はおずおずと質問をする。

「・・・シェリルちゃんって、男の子なの？」

「そうだよ。なあ、ナスタさんよ？」

「・・・」

「え？ え？ 男の子ってそれじゃあ・・・あれ？」

記憶のなかで蘇るアナナスの言葉。

王の器となるものは、男でなくてはならない。

それはつまりシェリルが王の器として条件を満たしていることにならないだろうか。だけど、アナナスは女の子だと思って、必要ないと捨てて、赤ちゃんはシェランの王族が妾腹の子だからって理由で殺してしまった。

それはつまり、

「ど、どういう事だろう・・・」

頭のなかぐるぐるした。

そのあと、死んだシェリルの代わりにアナナスはイチイを作った。シェリルが男と知っていればアナナスはイチイを作らなかったという事で、イチイがいなければエリーがここに連れてこられることもなかった。

「あれれ？ 何だかよく分からなくなってきた」

「・・・シェリルは花の名前を持って産まれなかったわ」

「灰の目としての性を持って産まれなかった、か。ならば何故、性別を偽る必要があった？ 名前があるか否かはお前しか知らない。

母であるお前以外が名付ける事が出来ない」

「出て行つて！」

金切り声でナスタチウムが叫んだ。

「シェリルが起きてしまっわ！」

「・・・いや、むしろナスタさんの声で起きると思うけど」

「珍しくいい突っ込みだ。だが、それ以前にあれば人形だよ」

くくつ、と笑ってグラスがナスタチウムに近づく。

ナスタチウムの瞳の奥が微かに揺れている。

苦痛に歪んだような彼女の瞳が、残虐を求めるかのように妖しく輝いた。

そう、それはいつか見たカナリアの赤く光る瞳とよく似ている。

「逃げるな、歌巫女！」

どん、と床が鳴った。

グラスが腰に帯びた剣を鞘ごと抜いて床を叩き付けたのだ。

驚いたようにナスタチウムの目が見開かれた。その瞳には先刻のような禍々しい光は感じられなかった。

グラスは強い瞳で彼女を見ている。

「やるべき事を果たせ、お前が何故、生かされた、のかももう一度よく考えてみることだな」

ひしひしと伝わってくるような嫌悪感。

今にも殺してしまいそうな勢いだ。

だけど、とエリーは思う。

（だけど・・・グラスさんって別にナスタさんが嫌いな訳ではないような・・・）

ぼんやりと考えていたところに突然窓から黒い物体が入り、グラスに直撃する。

「うわっ！ 何だ！？」

「え？ 何？ あ、ジェラートさん！？」

「・・・！！ 何だ？ お前の飼った猫か！？」

グラスは黒猫の首根っこを捕まえた。

猫の目を覗き込みながらエリーは問う。

「違うよー、アンナちゃんの恋人だよー。だけど・・・本当にジェラートさん？」

「わん」

「あ、本物だー！ わーいふかふかー」

エリーは猫をガラスの手から奪い取り、抱きかかえてもふもふ撫でまくる。

「・・・ちよつと待て、今わんって・・・っか、亜空間から・・・えー？」

ガラスは外を覗き込んで不可解そうな顔をする。

亜空間に迷い込めば二度と出られない。そこから飛び込んできた妙な猫に違和感を覚えずにはいられない。

振り返ると猫は「ふふん」と笑うように鼻を鳴らした。まるで挑発しているようだ。

「~~~~っ！！ つんの・・・クソ猫！ 猫だったら猫らしく鳴けよな！」

「え？ 怒るところそこなの！？」

「ひひーん」

「わっ！ ジェラートさん馬のモノマネうまい！！」

Story 5 太陽が堕ちる日(14)

14 淘汰される者

「さあ、話はそのくらいにしておいて、終わらせて貰うわよ」

「注文したものの支払いは？」

「あなたの命で構わないわ」

「ふうん？ それじゃあ未払いになっちまうぜ」

トキは剣を眼前で構えた。

リコリスが動く。

同時に彼は瞳を瞑った。

気配がする。

彼女の気配に混じって異様なもう一つの気配。

トキは真横に飛ぶ。

「ふうん？ やるじゃない？」

今まで彼がいた場所の後ろから現れたリコリスの気配。異様なもう一方の気配が消えた。

トキはにやりと笑った。

「リコっち」

「何？ 突然馴れ馴れしいわね」

「お前の能力は自分自身を5：7分けにすることだな」

「 $5 + 7 = 11$ で10を超えるじゃない！！」

12です。

「数字なんかどうだっていいんだよ。お前の能力はいわゆる、デュー・ドウ？・・・トウーランドット？ 何だっけ？」

「ドッペルゲンガー？ あ、言っちゃった」

「うはは！！ オカマ掘ったな！ 俺様力マかけ超上手い？ みた

いな」

晴れやかに大笑いするトキの横でリコリスは悔しそうになる。

「くう、何と巧妙なテクニク・・・さすが鳥のリーダーねっ！」

トキが本当にぼけていた可能性もあるが、突っ込みがないこの場所では真実が赤競れることがない。

「ともかく、お前は分身の術で別れたりコリモスも同時に操れ、戻る時はどっちか好きな方に戻れるんだな？　そうだろう？」

「その通り、そのとおり・・・だけど・・・人の名前を変な位置で分けないでよ。何だか悲しい気持ちになるわ」

「ん？　じゃありと子リス？」

「子リスって可愛いよね。じゃあそれでいいわ！」

ここで一旦コマーシャル。

緊急募集！

この二人に突っ込みを入れてくれる方！

未経験者歓迎！

とにかく突っ込みに自信のある方なら誰でもOK！

連絡先：レバン仲介酒場「銀の麦」

「空間移動をしたように見えた速さはそのせいだったんだな。けど、長い距離を開けることは出来ないようだな」

「どうして？」

「離れられるのなら嬢ちゃんを追ったはず。逃げ延びた方が仲間を呼ぶ可能性もある以上、野放しにはしないはずだ。あちら側で戦闘の気配がないということは、嬢ちゃんを追ってはいない」

リコリスはくすりと笑った。

「ひょっとしたら彼女を殺した後かもしれないわよ」

それはない、ときっぱりと言いつ返す。

むっとした表情でリコリスは見返した。

「彼女だつて真紅の二つ名で通っている便利屋だ。相手がいくら花の名前を持つ奴だからといって、易々やられたりはしねーよ」

それは自信と信頼の表れだ。

彼女は強い。

最初に会った時からそう思っていた。あの時の彼女は多少荒んではいたが、鎌の切れ味は抜群だった。恐らく魔法を抜きに戦えば力ナリアと同等か、負かすことも可能なくらいに強いだろう。

リツに、「銀の麦」のマスターに掃除屋を任されるというのは、そういうこと'なのだ。

「さて、どうする？ お前の能力が露呈したぜ？」

「・・・分かったからといってどうなるという分けでは無いわよ」
挑戦的な瞳。

それは余裕のある振りを見せているのか、それともまだ秘策があるのか。

彼女がたん、と大地を蹴った。

トキは構えて目を瞑る。

気配が真横から、そして正面。

来た攻撃を彼は剣と鞘で受け止める。

魔力の籠もった拳はその辺の鈍器よりもずっと破壊力があり、そして使いようによつては刃物同様の切れ味を生じさせる事も出来る。剣同士なら負けることを知らない。

トキは受け止めた力を押し返した。

刹那。

「ぐあっ！！」

脇腹に鋭い痛みを感じトキは大きく飛び退いた。
止めどなく流れ出る赤い液体。

目の前にはいなかったハズの場所から突然姿を現した「三人目のリコリス。」

なるほど、と、トキは痛む脇腹を押さえながら呟いた。

分けられるのはリとコリとスだったわけだ。

「お前……いくつまで分裂できるんだよ」

「スラ。ムみたいに言わないでよ」

「能力劣化しているくせに偉そうに言うなよ」

「その能力劣化した私に、やられたくせに、偉そうに言わないでよ。もっともだ、とトキは笑う。」

こういう大詰めのところだ。甘いのだ。だから自分は鳥の長には向いていないと何度も言った。それなのに、モズは自分を指名した。

それに応えたい。

そう思ってきた。

だから……。

「なあ、リコつちは何体まで分裂出来るんだ？」

「さあ、四体までしかやったことないけど……そう言えばどのくらいまで別れられるのかしら」

ぶつぶつと言いながら彼女は二人、三人、四人と次々に分裂していく。

「ん？ おお？ 俺様取り囲まれた？」

「うふふふ、結構大人数になれるのね。どう、気分は？」

「女の子に囲まれるのは嬉しいんだけどなあー、みんな同じ顔だと少し……」

キモイ、と言いかけて彼は口を押さえた。

集団の女ほど怖いものはない。

この状況でそんな台詞を口に出したらそれこそ「俺様大ピンチ！」になりそうだった。

なおもわらわら分離していくリコリス。

(……これは……)

自分は存外と運が良いのかも知れない。

トキは自嘲した。

「リコっち」

「何よ、さっきから」

「一対複数ってのはどう考えたって卑怯じゃねえ？」

「勝てば正義よ。まあ、でもさすがにこの大人数じゃあ、私も動きにくいわね」

「だろう？ まあ、だけどな」

彼は目の前にいるリコリスの肩に手を置いた。

「？」

「俺も、一人じゃねーんだわ」

トキは彼女の肩を利用して垂直に跳ね上がる。

「なっ！」

リコリスが驚きの声を上げて上を見上げた。

同じ顔が一斉にトキの方を見る。

トキが空中に舞い上がった瞬間、その場にいるリコリス全員を薙ぎ払うように魔術の一閃がきらめいた。

慌ててリコリスが一体に戻り逃げようとする。

しかし、遅かった。

「！！」

逃げ切れなかった彼女達を魔術の光が薙ぎ払い、直撃を免れなかった何体かは灰となって崩れ去る。

残った者を集めて一人に戻ったリコリスだったが、身体には無数の傷跡が残っていた。

「なるほど・・・真紅と呼ばれる訳がようやく分かったわ」

リコリスは現れた巻き髪的女を睨め付けた。

鮮やかな髪が、死を連想させる血のように赤く風になびいていた。

Story 5 太陽が堕ちる日（15）

15 真紅のシュリー

「覚悟しなさい、リコリス。次の一撃で確実に決めますわ」
妙な形に姿を変えた鎌を斜めに構えて、キツシュは赤い唇を少し
つり上げた。

真紅の異名は彼女が好んで着るドレスの色でも、真っ赤になびく
髪の色でもない。魔法の力を含んで赤く輝く鎌、シヨコラフォ
ンデュの色からくるものだ。

そしてその紅色で狙われた者で生きていた者はいない。
今までそれに対峙した全てのものが赤く沈んでいった。

故に彼女は真紅と呼ばれる。

リコリスは、赤を見て恍惚の笑みを浮かべる。

「当たれば、でしょう？ あまり見くびらないでほしいわ。私、こ
れでも五本の指に入るほど」

彼女の瞳が黒く染まる。

見開かれた目全体が黒く染まり、瞳孔の部分だけが鈍い金色に輝
いた。

「まずい！」

はっとしたようにトキは剣を構えたままキツシュの前に躍り出た。
魔法が来る。

認識した瞬間、凍てついた刃が二人を目掛けて突進してきた。

「トキ！」

「いける！」

彼はきっぱりと言い放ち剣を構えた。

キツシュは瞬く。

トキの全身が青白い輝きを帯びていた。

「魔法？」

一斉にこちらに飛びかかってきた氷の刃が、彼の前ではじき飛ばされるようにいたる方向へ飛んでいく。

トキは魔法を使わないのでは無かっただろうか。

魔法障壁を使つてはじき飛ばしたように見えた。だが、キシシュの記憶している限り彼は魔法を使わない。あの一瞬で魔法障壁を組み上げられるほど術が卓越しているようにはとても思えなかった。

第一、彼からは魔力を一切感じない。

何故、と動揺している場合ではなかった。キシシュははっとして鎌を振り上げる。きん、と金属と金属がぶつかり合うような澄んだ音が響いた。

リコリスの手には氷の刃。・・・彼女の腕自体が刃の形に変わっていた。

黒い瞳と、残忍な印象を与える口元が大きく開かれていた。

「魔力を持たない鳥の一族が何故お前達と渡り合ってきたのか、分かったか、リコっち」

リコリスの真後ろでトキが静かな口調で言った。

つつ、と彼女の唇から血が漏れる。

腹部には後ろから蒼く輝く剣が突き立てられていた。

剣自体が蒼いわけではない。トキの身体を包んでいた光同様に魔力の膜のようなものがそうみせているのだと分かった。

「今でなければ・・・これも一興と笑えたのにね」

彼女の身体が砂のように灰色に変化する。

氷の刃の重さが消え、そして彼女の身体は衣服だけを残して地面に落ちた。それは既に人の形を無くした砂だった。灰のような、軽い砂。

「灰・・・」

何かの燃えかすのような塊。

それは風にさらさら流されて拡散した。

トキは、はぁ、と深い溜息をつく。

「・・・殺せなかったか」

「え？」

「灰になったということは、いずれ再生する・・・らしい」

「らしい？」

「俺も良く知らね。ちゃんと話を聞く前にモズが・・・殺されちまつたからな。一番理解しているのはヒバリだろうけど、あいつは今・・・っ・・・たたた・・・！！！」

「トキ!？」

腹部を押さえて蹲るトキ。

キツシユは慌てて彼を支えた。

彼の腹部は真っ赤に染まっている。

「あなた、この傷」

「大丈夫、ダイジョーブ、モンキーターン、致命傷じゃねえ。少し休んでいれば治る」

「そんなことある訳がありませんわよ」

少し休めば傷が癒えるなんて、それはどんな回復力だろう。

トキはけらけらと声を立てて笑った。微かに切れ切れになったのは振動で痛んだせいだろう。

「さすがにすぐにつて訳にはいかねえよな。だけどまあ、嬢ちゃん心配する程でもねえよ。嬢ちゃんは先にカナリア達をおっかけてくれ」

「あなたをこの状態で放っておけるわけがありませんでしょう？」

キツシユにとって、カナリアは恩人だ。そして同じようにあの時立ち合ったトキも恩人なのだ。どちらか一方がいなくても今のキツシユは無かった。

放っておけるわけがない。もしこのままカナリアと合流して、トキに何かあったとしても誰もキツシユを責めないだろう。けれど、自分だけは責める。

「リコリスみたいな名前を持った奴を倒して生き残ったのはめっけもんだ。ちゃんと生き延びたことを伝えに行ってくれ」

「あなた、名前で強さ分かりますの？」

トキは真顔で首を振る。

「いや、全然」

「……」

「あ、だが、長い名前を持った連中だけは特殊だ」

「それって危険という意味で、なんですか？」

「いや、存在自体が特殊なんだ。説明がしにくからしいけど」

「出来ない」の間違いでは無いだろうか。

トキは頭は悪くないけどバカなのだ。

「おい、今誰か暴言吐かなかったか？」

「気のせいですよ」

キツシュはにこりと笑う。

そつと彼の身体を支え肩を貸す。

「せめて、近くの街まで送りますわ」

「いや、だめだ行け」

いつになく真剣な眼差しでトキは彼女を見る。

「今はあいつらも少しでも戦力の欲しいところだ。それに、一つ仕事を頼みたい」

「仕事？」

彼女は彼を見返した。

仕事という単語を出されてしまうとどうしても断れなかった。

「ヒバリという男にこう伝えてくれ、灰は朽ちなかった」

「どういう人なんですか？」

「多分、青年で、山吹色の髪をしている」

「多分ってあなた……」

「変装している可能性があるから、何とも言えん。腕っ節は強いが生意気で、そんな生意気な言葉を吐くのはこの口か！！」って口を塞ぎたくなる奴だ」

「……どんな説明ですよ」

全く説明になっていない。

うーん、とトキは唸ってから何かひらめいたように頷いた。

「ヒバリちゃん、と呼んでぶつちぎれた奴がヒバリだ」

「その説明もどうかと思いますわよ」

突っ込みを入れて、彼女は木にもたれ掛からせるようにトキを降ろした。

その顔色は血の気が引いて青ざめて見えた。

「本当に大丈夫なんですの？」

「ああ。仕事の方、頼んだぞ。報酬は銀の麦で受け取ってくれ」

「分かりましたわ」

トキは笑う。

キツシュも笑った。

彼女はそれ以上何も言わずに踵を返した。

その背を見送りながらトキはふうと深い息を吐いて目を閉じた。

腹部を押さえる真つ赤な手がことりと地面に落ちる。

空を仰ぐように彼の首がゆっくりと上を向く。バランスを失って

彼の身体は横向きに倒れ込んだ。

重い……音がした。

キツシュは僅か振り向いて瞳を揺らした。

閉じられた彼の瞳が開くことは……無かった。

「おい、勝手に殺すんじゃないよ！」

「あはん　その方が面白い展開になると思いますけど？」

Story 5 太陽が墮ちる日（16）

16 レンジャー部隊

以前にもカナリアと「どきつ 男三人小旅行」をしたことのあるマリンは彼の手際の良さに再び感心した。

さすがに何年もこういう仕事をしているだけの事はあって、彼の動きには無駄がない。

それは野営の準備の時もちろんだったが、闇に潜む者達への対処もそうだった。

先刻も、突然茂みに向かって何かを投げ込んだ。

初めは気付かなかったが、後からそれが潜んだ夜盗を牽制したのだと分かった。ほとんど武装をしていない男二人が歩いていて盗賊達に襲われないのはそのためなのだろう。

まるで差し向けられたように襲いかかってきた灰の目の一族を除けば彼らの旅路は安全なものだった。

野営の準備を済まし、手に付いた土埃を払いながら彼は言った。

「さてとー、寝る準備出来たところで、ちよっと思つてくる」

「どこへ？」

「自然が俺を呼んでいる」

マリンはとつとと行け、という風に手を振った。

その直後どこからともなく聞こえてきたうめき声と人が殴り合うような鈍い音でようやく彼が何をしにいったのか、今までしてきた不審な動きの理由を悟った。

何喰わぬ顔で戻ってきたカナリアにマリンは苦笑した。

「ああいうのは、賞金はかかっているのか？」

カマをかけるつもりで問うと、隠すつもりは最初から無かったと

いう風な返事が返ってきた。

「最寄りの街の自警団とかに突き出せばお礼くらいはもらえるけど・
・今は緊急時だし、手続きも面倒だから、旅費をカンパしてもら
った」

彼は腰の辺りをぽんと叩いて焚き火の側に腰を下ろした。

「それはカツアゲと言わないか？」

「ん？ ああ、ジューシーで旨いよなあ」

「下手なボケは止める」

「あははは」

けらけらとカナリアは楽しそうに笑った。

炎の色が反射して、彼の瞳が赤く光る。一瞬、ぎくりとするが、
スイレンと戦っていた時の彼のような禍々しさは感じなかった。

瞳のことは、気付かない事にした。追及すれば仕方ないとばかり
に吐き出すだろう。だが、痛い部分に簡単に触れてしまえる程無神
経ではいられない。彼に告白されたとしても、マリン自身どう反応
を示して良いのか分からない。考え倦めた結果、知らない振りを通
そうと決めたのだ。

多分、カナリアも自分が気付いたことに気付いているだろう。

だから、これでいいのだ。

「これでいいのだー」 ぼんぼんバカボン馬鹿凡々なら毛糸洗いに
アクロン」

抑揚のない声の割に楽しそうな歌声が聞こえ、カナリアもマリ
ンも頭を押さえて溜息をついた。

聞き覚えのあるこの声と、素っ頓狂な歌詞は彼女しかない。

「・・・アンナか」

「通りすがりの妖精さんよ」

ばさりと羽音を立てて降り立ったのはコウモリの翼を生やした
白猫。アンナにしては随分とマシな変身だった。

「早かったな、例の件はどうだった？」

「不倫調査の結果、トンテンカン武器職人1は灰かぶり姫Aと不倫

中よ」

「意味が分からないぞ」

マリンはすかさず突っ込みを入れる。

うん、とカナリアは頷いた。

「なるほど、よく分かった、ありがとう」

「！？」

「やっぱリーア・ガンの作った武器が関連していたか。ん？ ど

うしたマリン、奇妙なものを見るような顔をして」

「何故今ので会話が成立する？」

「え？ ああ……んつと、慣れ？」

「小鳥ちゃんは脳年齢カツセイカマンね」

「それは某地方にいるレンジャー部隊の名前だ」

「もう、わがままね」

ぼん、と音を立てて翼の生えた白猫の身体から煙が吹き出した。

もくもくと立ちこめる中から現れたのは紛れもなくアンナだった。
ただし

装備

武器：デッキブラシ

鎧：魔女つ子服（お。や魔女風味）

頭：ジャック・オ・ランタン風かぶり物

アクセサリー：スプー人形（しょ。こお姉さん風）

という奇妙な出で立ち。

「お前……その格好……」

「リサイクル戦隊エコ。ンジャー！！」

「違っ！ 決めポーズも間違ってるし！」

「なるほど、もうそんな時期か。診療所にお菓子を準備しておかなければならないな」

「ピツカチュー」

「それを言うなら、お菓子か、イタズラか、だ。少年の可愛らしいイタズラも好きなのだが、それではお菓子が渡せなくなる。どうせなら、andで繋げれば良いものを。だが今年もあの可愛い仮装行列を見れると思うと××してくるな」

「・・・マリン、突っ込んだつもりっぽいが、途中からボケになっっているぞ?」

「何を言う、俺は常に本気だ」

「堂々と言うことか! お前もピカピカ騒ぐな! 毎度の事ながら著作権法に引っかかるだろう!」

「もう、細かいわね」

アンナはパチンと指を鳴らす。

もう一度小爆発が起こり彼女の身体は煙幕を使ったように煙に包まれた。ようやく普段の姿に戻った彼女は焚き火の前にヤンキー座りをした。

もうこの際突っ込みは無し。

「武器の名前はタルト・タタン」

「甘そうな名前だな」

アンナは頷く。

「その昔、女の魔王がとある人間の男に恋をして送ったという逸話のある甘夏甘納豆な武器。それをリンリンカンカンが鍛え直してシンデレラが持っていたようなね」

「イーアは何故そんな危険な武器を?」

「話によると、シンデレラ(♂)はフェイフェイの知り合いで、頼まれたのと、興味でついつい作り直したそうよ。それが予定外の力を持っていたから神々した人達の力で封印しようと思ったけど、先にツンツンが持ち去っちゃったみたい」

恐らくシンデレラというのがアナナスのことだ、とカナリアは担当を付ける。アナナスとイーアは昔からの知人で、何か事情があり、イーアは彼に頼まれるまま、力が失われていた武器を溶解して新た

な形に作り直したのだ。

それが恐らく、切断しても生命を残すことが出来る不気味な武器
「タルト・タタン」。

「ついでに灰被りちゃんたちが潜んでいるほぼ正確な座標も特定出来そう」

「ついでって・・・よくそんな間があつたな」

「乙女の神秘。ジェラさんは猫猫よ」

「ああ、最近ジェラートの姿を見ないと思ったら、レバン襲撃の後からずっと連中を追いかけていたんだな。それで、どの辺りにいる？」

「その前に報酬の話」

アンナは髪の毛をいじりながら言う。

カナリアは顔をしかめた。

「お前がそう言う話をするの、珍しいな」

「今回は特別料金。ジェラさんと離ればなれは命がけなの」

どこまでが本当かどうか分からないが、アンナが仕事中に報酬の話を持ちかけるのは珍しい事だった。時々怪しい薬を取り出して「これを飲んでくれたら」とかは言い出すものの、こんな取引みたいな形で言い出すのは初めてだった。

「・・・何が目的だ？」

問うとアンナはいつになく真剣な表情で応えた。

「欲しい物があるの。王の器と呼ばれたあの子、若しくは彼らを束ねている統括者が死んだ時に出る灰かそれに準ずるもの」

カナリアは瞬いた。

「それを私にくれるのなら、教えるわ。・・・悪いようにはしない。だからお願い、約束して、カナリア」

Story 5 太陽が堕ちる日（17）

17 あなたを氣に入る理由

ぼかん、としてカナリアはアンナを見た。

今、名前を呼ばれなかっただろうか。記憶にある限り、アンナが名前をちゃんと呼ぶのは初めてだ。ジェラートの事をジェラさんとか呼ぶことはあってもその他の人間を名前で呼んだことなど今までに会っただろうか。

一体何が起こったのだろうか。

というか、今のは聞き違いだろうか。

「おい、カナリア」

「うわっ！　なんだ、マリンの方か」

「何だ、とは何だ？　何を馬鹿面晒している」

「馬鹿つて酷い言い草だな！　いや、そのな、アンナが俺の名前を呼ぶなんて初めてだと思って」

「そう言えばそうだな。こういう風の吹き回しか知らないが、俺も少しは驚いた」

本当かよ、とカナリアは心の中で突っ込みを入れる。

普段通りむっつりスケベっぽい表情のマリンからはとても驚いたというのが感じ取れない。

アンナは少し肩をすくめる。

「私も、驚いたわ」

「お前もかよっ！」

「驚き桃の木、三時のおやつは文明堂よ」

「相変わらずワケワカメだな、お前は」

「それ、褒め言葉。ところで、どうなの？」

「まあ、回収出来るかどうかは分からないが、もしも手に入ったなら保障してやるよ」

アンナはこくりと頷く。

「そう、それでいいわ」

マリンは首を傾げた。

「いいのか、カナリア？」

「ああ、どっちにしたって俺のもんじゃないし」

「そう言うことではなく、その・・・」

彼は言葉を選ぶように言い淀む。

「危険ではないのか？」

どうか、と聞かれればカナリアには分からなかった。

時が来れば灰は元の形へと戻ろうとする。それは例え灰を水に流しても燃やしたとしても変わらないとモズから聞いたことがあった。本当に朽ちて果てるまで彼らは何度でも再生する。どうすれば灰化せずに朽ち果てるのかは知らない。

ただ、一度灰になってしまえば元の姿に戻るまでに何年も必要になる。

アンナが何のために灰を求めているかは知らないが、今以上の窮地には立たされないだろうと思う。アンナはこれで結構常識的な者の考え方をしている。本当に危険なことはやらないだろう。

「大丈夫じゃねーかな」

「そうか。ならいい」

マリンは中指でメガネを押さえた。

同じ仕草をマネしながらアンナが言う。

「もう一つお願い」

「ん？」

「@人@」

「な、何なんだよいきなり！　びびるじゃねーか」

「・・・それは人の顔か？」

鼻眼鏡をかけたアンナは深刻そうに頷く。

しかしこれでは真面目な話をしているのかそうでないのかがよく分からない。さすがアンナだ！ 今月のレバンの流行は鼻眼鏡！みんなを和ませる憎い奴！ 今なら鼻の頭をつまむと「ぼえー」と鳴く魔法機能付き 定価3万円のところを今回会員特別価格49800えーん！

「そう、もし、こんな顔をした人がいたら、生きていても、死んでいても、お問い合わせは黒猫急便にアツチョンブリケ」
「教えるって事か？」

アンナは鼻眼鏡の鼻をつまむ。

「ぼえー」

力の抜ける音が響く。

「それ・・・ひよっとして返事のつもりなのか？」

「ぼえー」

「口で言うなよ」

アンナはぶうと頬を膨らませた。

「もう、わがままね。・・・お焦げちゃんと彼らは今亜空間の中よ。城とか迷宮とかトカゲとか呼ばれている所のお腹の中」

トカゲは余計かもしれない。

「いつ、どこに、現れる？」

「およそ二週間後、太陽が月に隠れる日、場所は」

アンナは懐から明らかに容積の大きい地図をにゅう、と取り出す。これはイリユージョン、こんな大きな羊皮紙の地図が懐にしまわれていたなんてなんと不思議な事でしょう。これはテンコウもセロもビックリ仰天、猫灰だらけ。

しかし、今更力ナリアは驚かなかった。

今リアクションをすれば話が続かない。ただでさえケツカッチン。こんなところで時間を怒濤のように浪費している場合ではないのだ。「この辺。古い地名でオミオスという村のあった周辺よ。今は湖しかないけど、ここに、王の魂が眠る場所がある。私は先に行って正

「確な場所を特定するわ」

カナリアは頷いた。

「亜空間にある城と、こちら側の世界が繋がれば復活の儀式が始まる・・・ハズ。完全に太陽が隠れた時が最後ね。それまでにノー娘助けて除草剤ばらまかなきゃダメダメよ。多分、世界が滅びるわ」

「滅・・・お前、そんな重大なことそんなさりと」

「確証はないけど、ジェラさんが持ってきた文献にはがっかりした王様が恒星落陽を起こすって書いてあるのよ」

「・・・」

恐らく、文献にはもつと難しい文体で書いてあったのだろうが意識した上に、相当主観をぶち込んでいるために極論のように聞こえる。

だが、恒星落陽を引き起こそうとした結果、空を統べる四王の力によつて封印された王なのだ。そのくらいの可能性を考慮しておかなければならない。

「分かった。間に合わないなんて事が無いように努力しよう」

「もう一つ情報」

「うん？」

「途中でドリルさんに会った」

「無事だったのか？」

マリンの言葉にアンナは頷く。

「トキは？」

「トリトリさんも無事だけど、離脱したっぽいわ。ドリドリさんが合流するべくこっちに向かっているけど、ルートが違うせいで向こう側で落ち合う事になりそう。取り敢えず黄色い人は倒したそうよ」
ではリコリスはトキが倒したのだ。

さすがに鳥の族長になるだけのことはある。トキが早々とキツシユをレバンに戻し、援軍を要請してリコリスを討つのがベターだと思っていたが、どうやら役目は逆になったようだ。

二人で戦い討ち取ったのだろうか。その場合、どちらか一方でも

生き残れば良い方だと思っていたが、二人が生き残ったとなると頼もしく感じる。欲を言えば、本当ならキッシュには戦線離脱して欲しいと思っていた。彼女が加わることで増す戦力は嬉しい。だけど彼女を今回の戦いに巻き込みたくは無かった。

それは多分、自分自身が満足するだけの理由でしかないのだろうけど。

「それじゃあ、伝えることだけは伝えたから私はレッツラゴー。フエリペさんはロングロングあーごー」

ぼん、と彼女はアフロの白鳥の姿に変身する。

「お前、その格好好きだな」

「これがカッコウに見えるなんてあなたさては鳥目ね」

「それを言うなら目が節穴だ。つーか、俺だってカッコウじゃないことくらい分かってるってば」

「カナリア、アンナのボケにいちいち反応するなと何度言えば・・・」

「アフロはアンナの声で笑う。」

「やっぱり小鳥ちゃんはツッコミニストグランプリン」

「嬉しいかねーよっ!」

Story 5 太陽が堕ちる日(18)

18 魔法猫とイチジクの不思議な関係

真夜中に目が覚めた。

と言つても、外は変な色をした亜空間。昼なのか夜なのか、今がいつかすら分からないから実際にはどうなのか分からない。先刻起きた時にナスタチウムが夜泣きと行つていたから今は夜なのだと思う。

「んん？ ジェラートさん？」

エリーは自分の傍らで眠っていたハズのジェラートが起き部屋の外に向かったのを見て慌ててその姿を追いかけた。

と廊下に出るとジェラートは廊下の窓のさんに飛び乗る。

「あれ？ こんな所に窓なんかあったっけ？」

「ぶなー」

黒猫はここを開けると言わんばかりに窓枠をかりかりと引つ掻いた。

促されるままエリーは窓に手をかけた。

ジェラートも引つ掻くのを止めて片方の前足を窓枠の上にかざした。まるで人間がそうするような仕草だが、猫の小さな手では妙に可愛く見えてしまう。

「何かもきゅ ってかんにで可愛いね ♪ あっ・・・」

一瞬窓枠に沿うように閃光が煌めいた。

エリーは覚えず目を瞑る。

「・・・？」

おそるおそる目を開くと、きい、と小さな音を立てて窓が開いた。

エリーは驚いて窓を見た。

まるで封印されていた扉を開いた時のような感覚が手のひらに残っていた。わきわきと閉じたり開いたりを繰り返しながら彼女はじつと手を見つめた。

「今、私魔法使った？ あれ？ でも……あ、ジェラートさん？」

ジェラートが窓の向こう側に飛び出したのを見て、エリーもそれを追いかけた。窓の外が亜空間かも知れない事に気付いたのは窓から飛び出し、思いの外近くにあった地面を踏みしめてからだった。

「ぎゃー！！ 飛び降りちゃった！！ もしかして私、死んじゃった？ うわーん、まだおいしいもの食べ尽くしてないのにつ！！ って……あれ？」

エリーは久しぶりに感じる土と草木の臭いにくんくんと鳴らした。足下にはよく整備された芝生が広がっている。同じようによく手入れされた木々や花が咲き乱れているその場所は、オーナディアの庭園を思い出すほど美しい庭だった。

しかし、見上げた空は恐ろしい紫のマーブル模様。

どうやらここも亜空間の中であることには変わらないようだ。

エリーはきよきよと辺りを見回す。

薔薇で出来たアーチの下に銀髪の青年が立っていた。彼はエリーに気が付くと満面の笑みを浮かべて駆け寄ってきた。

「やっと会えた！」

彼は嬉しそうに微笑んでエリーの両手を握りしめた。

一瞬、誰なのか分からなかった。しかし、その面影には見覚えがあった。

「……イチイくん？」

「うん」

青年は嬉しそうに笑った。

エリーの知っているイチイは自分よりも少し年下くらいだったが、今のイチイは二十歳前後に見える。背もすっかりと高くなり、「イ

チイの兄です」と名乗られてもそう信じてしまっただけで彼は大人びていた。

「僕のいる場所と君のいる場所の間には結界が張られていて僕の力じゃどうしようも無かったんだ。逢いに行けなくてごめんね」

「えっと・・・イチイくん、何か大人っぽくなったよねえ」

「エリーは嫌？」

伺うような彼の声。

エリーは慌てて首を振った。

「うっん、格好良くなったよ」

「そう、なら良かった」

たった数日会っていないだけなのに、不自然な成長ぶりだったが、エリーは全く気にしていなかった。まるで休みの前後で髪型を変えてきた友達に驚きながらも「似合っているね」という女子高生のような反応だ。

にやあ、とエリーの足下で猫が鳴いた。

イチイは首を傾ける。

「この猫、エリーの猫？」

「うっん、アンナちゃんのジェラートさんだよ」

「ぶな」

「可愛いね、エリーと仲良しで少しうらやましい」

イチイはしゃがみ込んでジェラートの首筋を撫でた。

ジェラートは去れるがままに撫でさせている。イチイはその様子をみて穏やかな表情を浮かべた。

数日前に会った時と受ける印象が少し違った。

「そのアンナって子も、仲良しなの？」

「うん、他にも、先生とか、マスターとか、キッシュさんとか、八百八さんとか、仲のいい人一杯いるよ」

「僕は？」

不安そうに伺う目。

エリーは微笑んだ。

「イチイくんも友達だよね？」

「うん」

イチイもまたにこりと微笑む。

「他にもいるの？ エリーのことは、何でも聞きたい」

「他に？ うーん、カナリア・・・とか」

「・・・？ その人の事、好きなの？」

イチイが笑みを消した。

質問に戸惑ったエリーは彼のそんな表情には気付いていなかった。

「え？ えーっと・・・んーと、大切な人、だよ」

「そう」

声音に妙な響きが混じっているのに気付き、エリーは首を傾げ彼を見つめる。

視線に気付いた彼は微笑んで、そして不意に表情を曇らせた。

「・・・ねえ、エリー。僕がイチイじゃなくなっても、僕はエリーのことずっと好きだからね」

「うん？ どうしたの？」

「あのね、僕の身体は王様を入れるために作られたんだ。だから、もうすぐ僕の身体は僕のものじゃ無くなる」

エリーは首を傾げる。

意味が分からなかった。いや、アナナスが王の器と言った時から何となくイチイは特別なのだと分かっていた。けれど、彼の身体が彼のものでは無くなるという意味が分からない。そうしたら、このイチイはどこに行ってしまうのだろう。

「王が蘇るのは僕らの本能。それは嬉しい。だけど、もし、僕が他の誰かになってエリーを忘れてしまったら、エリーを平気で傷つけられるような人間になるなら、僕は・・・」

びくり、とジェラートが動いた。

警戒するように耳を伏せ低く呻り声を上げる。

「どうしたの？ 毛が逆立っているよ」

「っていうか次第にもこもこしているような・・・」

「うー」

今まで見たことのないジェラートの猫らしい姿にエリーは動揺した。

エリーはジェラートが睨んで呻り声を上げている方向を見る。

そして驚いたような声を上げた！

そこには「@人@」という顔をした男がいた。

「あー！ アスパラさん！」

「指をさすんじゃないですね！ 失礼な娘ですね！」

アスパラは「人」な形をしたヒゲを撫でながら癩癩を起こしそんな口調で怒る。人を外見で判断してはいけないが、ナスタチウムが言うように確かに少し気持ちが悪い。

「それとですね、私の名前はアスパラガスです。ガスまできちんと付けなさい」

エリーは了解と敬礼をする。

「分かったでガス」

「誰が語尾に付けろといいましたか！？ まったくあんばんたんな娘ですよ」

「わーん、アンパンマンって言われたー！？」

「誰がそんなことを言いました！？ 耳までおかしいようですね！？」

イチイは冷たく彼を睨め付ける。

「エリーを悪く言うな」

「あなたに命令される覚えはありませんね、王となった後はまだしも、今のあなたは心臓のない出来損ない。従う必要はありませんね」
「大した能力も持たないお前が、僕に偉そうな口をきくなよ」
ぞくり、とする赤い瞳がアスパラを見据えた。

銀色だったハズのかれの瞳が初めてであつたとき同様に赤く染まっている。その奥は燃え残った芯のように黒く鈍く揺れている。
強い魔法の気配を感じた。

（??? 魔法の気配ってこんなに敏感に感じるものだったけ？）

イチイがそれだけ強くなったのか、それともエリー自身が気配を感じるようになったのかはわからない。ただこの場所にいることが酷く恐ろしい事に感じられた。

「ぼわっ」

「・・・ぼわ？」

突然、足下から奇妙な鳴き声が聞こえ、三人は一斉に視線を降ろす。

まるで電子レンジで加熱したマシュマロのように膨らんだじえらーとが足下でもこもことしていた。

「ど、どうしたの、じえらーとさん、可愛い」

レンジで三分、モコモコホカホカのジェラートさんのできあがり

（注 猫を電子レンジに入れてはいけません）

イチイはジェラートを見下ろした。

「うーん、これは飼い主がいちじくを食べちゃったんだね」

「え？ イチジク食べると膨らむの！？」

「うん、魔法猫だから」

「へえ、魔法猫って凄いだねえー」

Story 5 太陽が堕ちる日（19）

19 そんな訳があるか！

夢を見ているのだ、と彼は自覚をしていた。
揺りかごの中で眠る夢。

傍らに誰かがいる。

子守歌が聞こえる。

小鳥がさえずるような優しい女の歌声。

けれど、どこか寂しげで、そして詞は子供を呪うような歌。
それなのに、歌声は優しい。

誰も君を愛さない

誰も君を欲しがらない

神様からも嫌われて

どこにも行く場所はない
だけど

歌が途切れた。

『殺せるわけがない』

男が言った。

脅威となるかもしれない、と他の誰かが言った。

『その可能性があるだけだ。・・・お前は、何の罪科もない子供をその血が呪われていると言っただけで殺すことが出来るか？』

使命ならば、と誰かが応える。

男は深く溜息をついてベッドの上で眠る彼へと近付いた。大きな手のひらが頬を撫でた。暖かくて、覚えず彼から笑みがこぼれた。

『あんたはホント堅物だねえ、トキ』

ベッドの側で女が言った。歌声の女とはまた違う女の声だった。

『カナリアさん・・・』

トキと呼ばれた若い男が呟くように言った。

女は笑う。

『まだそうとなるとは決まっていけない子供だよ。それに、この子からは花の臭いなど感じられない』

『けれど、歌巫女の子供です』

『その巫女は、子を逃がすために一族を裏切った。切羽詰まって私に頼るほかないほど必死に逃げた』

『それがそもそも作戦かも知れませんが』

ふう、と再び息を吐いたのは男だった。

すう、と剣が抜ける音がした。

『ならば今ここでお前が殺せ。私には出来ない』

『モズ』

咎めるような女の声。

男は真剣な口調で言った。

『眠っている今ならばすんなり殺せる。お前の力ならば痛みを感じる間もなく殺せるだろう。もしも脅威になる前にと考えるならお前
の手で殺せばいい。私は止めない』

わかりました、と若い男が応える。

剣が若い男の手に渡る。

ひゅん、と音を立てて剣が振り上げられた。

振り下ろされる直前で、剣はぴたりと止まる。

かたかたと剣先の震える音がした。

若い男は何度か振り下ろそうと試みるが、なかなか彼の上に剣を降ろすことは出来なかった。

『殺せぬだろう？』

男が言った。

『それが、人として正しい』

『モズ・・・』

『この子は脅威にはならない。・・・させはしないよ』
そのために私たちがいるんだ、と女が笑った。

彼は、ゆつくりと瞳を開いた。

まだ夢の中にいるのだろうか。景色が全て逆さまに映っている。

「お前」

呆れと感心の入り交じった声が聞こえカナリアは瞬いた。

目の前に逆さまになったマリンの顔が見える。

「随分と器用な格好で眠るんだな」

「・・・んー？ あれ？ 俺なんで木に逆さまにぶらさがってんの？」

「俺に聞くな。起きたらお前がそこにいて寝言を呟いていた。むしろ、何で、は俺が聞きたいところだ」

カナリアは眉をひそめた。

「・・・寝言？」

「と言うよりは、随分と前衛的な歌だったな。子供番組で流れたらすぐに苦情の電話が掛かってきそうな内容だったぞ」

「どんなだよ」

「歌って良いのか？」

「いや、苦情が来るの嫌だから止めてくれ・・・って、そんな訳が

あるか！ 実際の所、俺どんな寝言言っていた？」

マリンは少し考え込むように口元に手を当てた。

「実際に聞き取れたのは人の名前だけだ。……お前、寝言で自分の名前呟くのはどうかと思うぞ」

「ああ……それは別の人の名前だよ」

「？」

「昔、お世話になった人だ。俺はその人から名前と場所を貰ったんだ」

彼はなるほど、と頷いた。

それ以上追及する気配が無くて正直ほつとする。彼女のことは実際に詳しく知っているわけじゃない。物心が付く頃にはもういなかった人だから、ほんの僅か記憶にあるだけだ。本当に断片的な古い記憶の中に。

「ところで、カナリア」

「うん？」

「そろそろそこから降りたらどうだ？ いい加減頭に血が上るだろう？」

「ああ、そうか」

どーりで会話がしづらいと思った。

カナリアはひょいと身体を回転させて木から降りる。まるでサルだな、と揶揄するような声が掛かった。

「お前は野営地でいつもそんな格好で眠っているのか？」

「んな訳ねーだろうが。……正直、外に出ててちゃんと寝たのなんて久しぶりだな。うーん、疲れているのか、お前と一緒にだから安心したのか、どっちだろうなー」

「そんな風に俺を誘う言い方するのは13年ほど遅い」

「……数字が具体的に嫌なんです」

普段、仕事で野宿をする時は目を瞑っていても精神を尖らせて眠らない事が多い。野獣魔物はもちろん、こんな仕事をしていればいつどこで誰に狙われるか分からないからだ。誰かと共に旅をしてい

る場合、寝首を搔かれる可能性だってあるのだ。

それを今回はあつさりと眠ってしまった。

魔法を使ったために疲れていたのか、それとも、一緒にいるのがマリンだったからか。

どちらにしても、珍しいことだ。

「！」

不意に鋭い気配を感じてカナリアはナイフを投げた。

それはマリンの顔の横を通過し、髪の毛を掠め、茂みの方に向かって一直線に走る。

突然の行動に驚いたマリンが一拍置いて腕組みをした。

「貴様、何のつもりだ？」

カナリアは片手を上げてそれを制する。

さすがですね、と茂みから女の声が聞こえた。

「その剣を持つだけのことはあります。あなたが、新しい族長ですか？」

まだ十代後半くらいの若い女だった。山吹色の髪を三つ編みにして前に垂らした少女の瞳は蒼い。

カナリアはナイフを投げるために構えていた手を下ろす。

「お前・・・スズメか？」

「私をご存じなのですか？」

少女は瞳を瞬かせた。

しげしげと少女を観察していたマリンが「ふむ」と頷く。

「カナリアの隠し子発覚！ 次回に続く！・・・といったところか」

びし、とカナリアの突っ込み。

「んな訳あるか！！ ってか、俺、今回突っ込み三回目！」

Story 5 太陽が堕ちる日(20)

20 姪っ子

「彼女はトキの姪だよ」

「姪？ 甥はいないのか？」

「すぐそう言う質問に転じるのがお前だよなあ。いるにはいるが、ヒバリは彼女の兄さんだからお前の範囲じゃ・・・何だよ、あからさまに残念そうな顔する事無いだろう？」

残念と言うよりは嫌そうな顔をしている。

二人のやりとりにスズメは困ったように首を傾げた。

「あの？」

「ああ、悪い。まだ小さい時に会っただけだから覚えていないよな。俺はカナリアだ」

「カナリアさん？」

少女は不思議そうに瞬いてから、思い出したようにぱつと表情を明るくさせる。

「ああ、あの寝相がとっても悪かったカナリアさん！」

「俺の印象はそれかよ」

「確かに一度見たら忘れられない程個性的な寝相ではあるが」

「す、すみません！！ あんなアクロバティックな寝相を披露してくれたのは、後にも先にもカナリアさんだけなんで」

「フオローになってねえよ」

どっちにしたってカナリアの寝相は悪いと言うことだ。

そう、それは激しく記憶に焼き付くほどに。

ところで、とスズメは居住まいを正す。

「そちらの方は」

彼女の瞳はマリンを見ていた。

剣でカナリアを仲間と判断したようだが、彼は戦いに向いている格好をしているわけではない。ここにいることは異質に見えるのだから。訝るような、観察するような目。

「ああ、こいつはマリ・・・じゃなかった。ファーマ・リン医師だ。今回、亜精霊種の子供を助けるために同行している仲間だ」

「亜精霊種の？・・・それはミスティアの子のことですか？」

「ラネルを知っているのか!？」

マリンは覚えず怒鳴った。

彼女は少しうつむき表情を曇らせた。

「・・・私たちの仲間が保護しました。ですが・・・」

「何だ？　言ってみろ」

彼女は言いにくそうに目を伏せてからすぐに表情を戻した。まるで任務を遂行する軍人のように感情を伴わない表情だった。

感情を殺していないといられない。それはカナリアにも覚えがあった。

「本人の申告では、消滅までにそれほど間がないそうです。私が最後に彼を見たのが数時間前ですから、あるいはもう・・・」

「すぐに案内しろ!」

「ですが」

「命に関わる!　俺ならまだ救えるかもしれん」

「!」

彼女の表情に優しいものが戻る。

「・・・ご案内します」

彼女の案内した場所は目的地にしていた湖から少し離れた位置に

ある洞窟だった。湖の半分を囲うようにして出来ている崖の南端。その岩肌を抉るようにして出来た空洞だった。中には僅か霊力のよ
うなものが漂い、奥には薄緑に光る水が渺々と奥まで広がっている。
その湖畔に数人の男女の姿が見えた。

そのほとんどがスズメ同様に山吹色か金色に近い髪をしている。
カナリアのような黒髪の姿は一つも無かった。

近付くと、彼らは一瞬警戒する素振りを見せるが、カナリアの腰
にある剣を見るとすぐに表情を緩ませた。

（随分と、意味のある剣なのだな）

マリンは一見何の変哲もなく見える剣を見やった。

この剣がなければ、この洞窟に入ることを拒まれていただろうと
容易に推測出来る。カナリアが自らを「雑種」と呼ぶ理由が分かる
気がした。

「スズメさん、その人は新しい族長ですか」

「彼は・・・」

「込み入った話ならば後にしてくれ」

マリンは話を折って奥に進む。

光る水の中に、ラネルの姿があった。

トーアで連れ去られた少年。

記憶にある彼の姿と変わらない。ただ、身体の色が抜け落
ち、薄緑の水と同じ色をしていた。個の消滅に近い証拠だ。形を保
っているのは彼が水を司る亜精霊種の中でも特別な家「ミステイア」
の血を引いている子供だと言うことと、ここの水に含まれる僅かな
霊力のためだろう。

水辺に座ると、水の中の彼が少し目を開いた。

「まっていたですよ、かなりあさん」

「・・・これは、ひどいな」

マリンは覚えず呟いた。

「俺ではなく、カナリアを待っていたとは」

「どういう意味だよ、それ」

「そのままの意味だ」

「あたまぐるぐるするです。そんなに保たないですよ」

「分かっている、しゃべらなくて良い」

「伝えたいことが、あるですよ」

「大丈夫だラネル。それは、後にしよう」

マリンは微笑んだ。

その笑みに違和感を覚えたのか、カナリアが耳打ちをする。

「……まずいのか？」

カバンを開きながら頷く。

中には複数の魔薬と道具が詰め込まれている。ラネルを救うために持ってきたものだった。

「何とか間に合ったようだが、この状況では一番強いものを使う必要がありそうだ。正直気が進まない」

「副作用ですか？」

スズメの問いにマリンは頷いた。

魔薬はそもそも副作用がある。強い薬となればそれが顕著に表れる。長い間亜精霊種の住む場所に入りをしてきたマリンは何とかその副作用を抑えるために様々な調合をくり返しようやく副作用の少ない魔薬を作るに至った。

だが、完全にその副作用が無くなったわけではない。それに、相手がラネルだから、もう一つ彼独特の薬の効果というものが現れてしまうのだろう。

「気が進まないが、やるしかあるまい。カナリア、お前、魔薬の知識は？」

カナリアは苦笑する。

「……一般人よりは豊富だぜ」

「非合法的な知識でもかまわん。手伝え」

「りょーかい」

「まずはシンパナーで……」

「収斂剤だな」

「任せた」

カナリアに指示を出しながらマリンは魔薬の最終調合に入る。様子を見ながら強い薬を使う必要があれば再調合できるようにとそれなりの準備をしてきて正解だったようだ。出来ることならば使いたくはないが、ラネルの命には替えられない。

（それにしても）

彼はちらりとカナリアの方を見る。

正直彼の魔薬の知識を期待していなかったが、薬品の知識も、調合の知識もその辺のまじないしなんかよりもずっと正確かもしれない。

これだったら、彼に調合の手伝いの依頼をしても良かったと、今更ながら思う。レバンに戻ったらマスターに頼み込んで一ヶ月くらい彼を拘束して新薬の開発を進めてもいいかもしれない。

（まずラネルを救ってからの話だな）

マリンは気を引き締めて調合に取りかかった。

Story 5 太陽が堕ちる日（21）

21 副作用

ぼたり、と水銀のような液体が細長いガラス管の中に落ちた。

それに反応するように中の赤い液体がうす紫色に変化した。そもそも魔薬精製は古い錬金術の流れを汲む。本来この変化は周りの魔力を取り込んでのことらしいが、魔力を持たないマリンにはそれを感覚で理解することは出来ない。

そもそも、なぜ魔力を持たないマリンが理論だけで魔薬精製など行えるのかがよく分からなかった。

（まあ、薬が完成するならば問題あるまい）

彼はガラス管を振って出来た液体をそつと水の中に垂らした。

「大丈夫なのか？」

心配そうに覗き込むカナリアに黙っているように促し、マリンはそつと水の中に手を入れた。

ラネルの身体が青白い光を放つ。

ゆっくりと彼を水から引き出すように彼の腕を掴んで引き上げた。

水から上がり始めると、トーアで会った時と同じように徐々に色を帯び始める。

「成功か……って、何かでかくないか？」

「……だからこの薬を使いたくはなかったのだ」

水から出てきたラネルは可愛い少年の姿では無かった。

背が高く、髪も長い（ついでに言うと美形）。妙な品格があり、水を司る種族の長と言われれば納得できる外見をしていた。

「・・・副作用？」

「副作用ですか？」

「ああ、副作用だ。せつかくの可愛いラネルが台無しだ。まったく××××××！！」

彼にしてみれば珍しいほどの口汚い言葉をカナリアは聞かなかつたことにした。

呆れたようにラネルが息を吐く。

「こちらの私が本来の姿なのだが、それでも副作用と言い切るのか」
マリンよりも背の高いラネルは腕組みをた。

トリアの一室で見たような天真爛漫な風の彼の面影は遙か彼方に吹っ飛んでいる。

さらにシヨックを受けた様子のシヨ×ン医師はがっくりと肩を落とした。

「そんな、口調まで変わって・・・！」

「なーんかりーティアを思い出すんだが、やっぱ姉弟は似るもんなんだなあ」

姉の方は武器を握ると性格が変わったが、弟の方は本来の姿と少年の姿で性格が違うようだ。もっともこの外見であのラネルの性格でも、少年の外見でこのラネル性格でも奇妙なものには変わらないだろうが。

「残念ながら無駄話をしている場合ではない。呪医、この状態はいつまで保つのだ？」

「幸いな事に副作用はそれほど続かない」

「何が幸いだ。ふむ、いくら魔薬とはいえアインハイトの外では長くは保たぬか。ならば私は水辺から離れられぬな。・・・その黒頭、カナリアと言ったか」

「なーんか偉そうな物言いだなあ、俺も少年の方が好きだな」

ぼつりと漏らした言葉にマリンが過剰反応をする。

「何！？ 少年ラネルは俺のものだ！ 貴様などに渡さん！」

「そっちの趣味の話じゃねーよっ！ つーかいつからラネルはお前

のものになっただんだ？」

「話を聞かぬか、人間！」

ラネルの怒号と共に揺らめいた水面から水塊が飛び出し、マリンとカナリア、そしてとぼつちりを食った約三名の鳥の一族が壁際に吹き飛ばされる。何故か間近にいたはずのスズメには被害は皆無だった。

「時間が惜しい、手短に説明する。・・・ん？ お前達、寝ている場合ではないぞ」

「・・・ たった今、あなたが吹き飛ばしたんですけど」

「私はそんなことはしていない」

スズメに突っ込まれたラネルは不満そうに腕を組み直した。

「ともかく私の話を聞け。アナナスという男は私の能力を勝手に使い、王の器を完成させてしまった」

「・・・！」

「名前と、心臓を手に入れた少年は魂の封印さえ解ければ灰の目の王として復活するだろう。最早一刻の猶予もならぬ。城に入りイチイという名の男と、アナナスを殺せ。そうでなければ、恒星落陽、が起こる」

「恒星落陽・・・」

信じられないと言う風にカナリアは呟いた。

鳥の一族からもざわめきが起こる。

恒星落陽、こうせいらくよう、コウセイラクヨウ。

それは天体を地上に落とすことで星の軌道と全ての運命を変える禁呪。神話の時代、滅びの運命を修正するために神々が起こしたとされる。だがそれが起こされれば地上に残されたものは死滅する。

かつて灰の王と呼ばれた男は冥王に与えられた力を利用して「恒星落陽」を引き起こそうとした。鳥の一族の始まりである男は神たる四王の力を借りて灰の王の魂を封印した。

始まりの男と同じ血を引き、王の復活を阻止するために戦い続けた彼らはもちろん、恒星落陽の起こる可能性も考えている。アンナ

にも指摘されたからもちろん頭の中にはあつた。

だが、実際にその言葉を誰かから聞かされると改めて重大な事と思ひ知らされる。

もしも必要であれば人間がどうあがいても神が恒星落陽を起こす。果たして今がその時なのだろうか。

「奴ら、世界を滅亡させる気なのか？」

「総意がそれなのかは知らぬ。だが、アナナスの最終目的は、‘恒星落陽’だ。少なくとも私はそう聞いた」

「直接、聞いたのか？」

脳裏によぎるトーアの霧の中で出会った男。朱赤色の瞳は無機的で無感情だった。恐ろしいほど静かな男。生きているのかすら疑いたくなるような男だった。

あの男の最終目的が『恒星落陽』というのはどうも納得がいかなかった。

彼が世界を滅ぼそうとしているとは釈然としない答えた。

だが彼は肯定するように頷いた。

「私はアナナスに何をするつもりなのか問うた。奴は答えた、‘太陽を墮とす’と」

「……復活した王はそれが可能だと思うか？」

「冥王の力が及ぶのであれば」

「……」

灰の目の一族が死なない種族である以上、人の生き死にを司る冥府の王の力が何らかの影響を及ぼしているのは明白だ。

亜精霊種として自分よりも永く生き、知識もまた人間よりも正しく得ているだろう彼の意見を信頼するのならば、王が蘇れば世界が滅びる可能性が高い。それは日蝕が起こる日。

アナナスが気にしていた『蝕の日』。

カナリアは剣を握りしめた。

振り返り、鳥の一族の人々を見据え鞘ごと構えて見せる。

「聞いての通りだ、みんな。俺はカナリア、族長トキにここの指揮

を任されている」

一瞬、彼らがざわついた。

不審と困惑の瞳が彼を見つめた。族長ではないのか、という声がどこからか聞こえた。

カナリアはその視線を全て受け止めて言う。

「俺は鳥として臭いも分らない半端物だ。だが、この剣を託してくれたトキの信頼には応えたい。……力を貸してくれ」

「……格好つけだな」

ぼそり、とマリンが突っ込む。

カナリアは頬を赤くして唇をへの字に曲げた。

「う、うるせーよ。とにかく俺は、恒星落陽なんか起こさせない。そのためには」

「プロテイン」

「そう、プロテインだね……って違う！」

つい反射的にそれっぽいポーズングをしてしまった彼は声のした方に突っ込みを入れる。

一同も一斉にその方向を向いた。

そこには黒い塊を抱きしめる少女の姿があった。

「アンナ？ それ、何だ？」

カナリアは黒い塊を指差した。

一瞬ジェラートかと思ったが、それにしても丸まりすぎている。しかも妙にしっとりした感じだ。

「あかんこ」

「マリモ！？ 大きすぎませんか！？」

「耳たぶくらいの柔らかさになるまでこねるのよ」

「何か違うし、意味わからねーよ。……場所が分かったのか？」

アンナは巨大マリモを頭の上に載せて頷いた。

「私、今、アフロよ」

カナリアはうん、と頷く。

「感謝するぜ、アンナ」

「そんなにアフロが好きなんですか？」

「ちげーよ」

的はずれな突っ込みをするスズメに突っ込みを入れてはみたが、考えてみれば今一番おかしな応対したのはカナリアの方だったと後で思った。

Story 5 太陽が墮ちる日（22）

22 灰の迷宮

アンナの力を借り、城に突入した瞬間、鳥の一族の者たちの殆どが顔をしかめた。

彼らは灰の目の一族が近くにいると匂いで分かる。厳密に言えば気配とでもいうのだろうか。とにかく彼らの反応から、この城の中には多くの灰の目の一族がいる事が分かった。

アンナはこの城のことを「灰の迷宮」と呼んだ。

亜空間の中に存在する城は現実世界と多少時間の流れが違う。どちら側にどれほどの誤差があるのかは知らないが、空間側の方が流れが速いとすれば取り返しの付かない事態になりかねない。

カナリアは長い回廊をひたすら走っていた。

「そろそろ来るかもしれないわ。気を付けてね、とりとりーず」

妙な愛称を付けられた鳥の一族達は族長の代理人が連れてきたマリモをかぶった女に神妙な表情で頷いて返した。

「何でもみなこんな不自然な女を受け入れちゃうんだろうなあ・・・ひよっとしてアンナ変な薬でも使ったのか？」

「何をぶつぶつオレンジしているの、小鳥ちゃん」

「ぶつぶつって何か不味そうだな！」

「カナリアさん、来ます！」

スズメの声にカナリアは走りながら剣を抜いた。

ぼとり、ぼとり、と虫が天井から落ちる等に人の形をした何かが無数に落ちてくる。

襲いかかってきたのは出来損ないの人形のような生き物だった。

これも灰の目の一族だろうか、それとも、アナナスの作った失敗作達だろうか。

カナリアは切り捨て、後を確認することなく走り出した。先を行き血路を開いている男が切り捨てた人形がざらりと灰に変わっていく。

「先に行つて下さい！」

男が叫んだ。

「頼んだ！」

カナリアも叫び返して更に先を急ぐ。
小物を相手にしている時間が惜しい。

一刻も早くアナナスがイチイを見つけ出し殺さなくてはならない。万が一にも城から逃した時の為に、空間の外側にはラネルとマリン、後方支援として一緒に城に入らなかった鳥の一族達が控えている。かつてオミオスという村のあった湖周辺に、この大陸にいる鳥の一族の殆どが終結していた。そして今活動出来る灰の目の一族もここに終結している。

「いつになくシリアスな展開が始まるうとしていた」

「その一言で全てぶちこわしましたけどね」

「つーか、いつになくシリアスな展開って一体何なんだよ!？」

突っ込みを入れながらカナリアは走る。

その後を「きーん」という妙な効果音を口で言い続けるアンナと、後方から追いかけてくる人形を切り捨てて行くスズメが続いた。

随分と長い間走ったところで壁に突き当たった。

左右に道が開いている。

「どっちだ？」

「まっすぐよ」

「真っ直ぐつて、壁を壊して行くんですか？」

「おふこーすなりー　ボンバーヘッドで今日もウキウキアフロ犬！　犬も喰わない棒に食中り！」

「確かに犬は棒を喰わないと思うが・・・」

カナリアは突っ込みをいれかけるが、アンナの頭部が爆発したのを見て口を噤んだ。今のは何かを伝えたかったのではなく呪文だったのだ。

ぼん、と爆発したアンナの頭部（というか、マリモ）は壁に激突すると新しい道を開き跳ね返ってアンナの頭に戻った。

「なんつー呪文だよ」

「マリモって天然記念物じゃないんですか？」

「時々優しく抱きしめて」

「そのネタ、分かる奴いんのかよ」

書いている奴だって何年も前のドラマのネタだからうる覚えだっというのに。

大体、スズメの質問の答えになってはいない。

もつとも、彼女にまともな会話を望むのは大きな間違いなのだが。

「と言うわけで、ここから別行動よ」

「別行動？」

「そう、マリモちゃんは行き先を告げずに出て行ったのよあなた、胸の奥ですつと。かぶっているだけでカーナビゲーション。車が三つで轟きよ」

「え？ 一体それってどういう意味なんですか！？ 全く分かりませんよ」

「それはワカメを食べたからよ。増えるワカメを一袋全部」

「うつ・・・想像しただけで胃が大変な事に・・・」

覚えず口元を押さえるカナリアの頭にアンナはぐっしり濡れたマリモを置く。

何かイヤーな感じのするどろっとした液体がカナリアの額に垂れた。

「水も滴る小鳥ちゃんね」

「それは褒め言葉と取って良いのか？」

「木。憲武ではないわ」

「石橋。明なんですね？」

「意味がわからねーよ」

突然、と×ねるずにされても困る。

「車に気を付けて、小鳥ーず。先を急ぐのよ！ あれは私が食い止めまくるわ」

「あれ？」

「@人@」

アンナの指差す方向、通路の左側にまさしく「@人@」な男がいた。

「本当にそう言う顔なのかよっ！」

男はちらりとこちら側を見やって、すぐに近くにある部屋の中に入っていった。まるでこちらで何が起きているのかに全く感心の無い様子だった。

「・・・カナリアさん、あの男、普通じゃありません」

険しい表情でスズメがいう。

強い魔力の気配は感じない。トーアで会ったアナナスの方がよほど魔力が強いように見えた。普通ではないとはどういう事だろうか。カナリアには感じ取れない事がある可能性がある。

「あのヒゲ、不自然です、絶対付け髭ですよ！」

「普通じゃないってそこかよ！ つーかまともそうに見えてお前結構ボケキャラだな！？」

まあ、だけど、確かに「@人@」のヒゲは不自然だ。

トキの謎のモロコシ星人スタイルよりも不自然だ。

「ヒゲの謎は私が解明するわ。・・・急いで、おこげちゃんを無事に救出するのよ。私、結構コケコッコーなのよ」

「お前はニワトリか！・・・つき合ってられるか、行くぞ、スズメ」

「あ、はい！ あの、アンナさんもお気を付けて」

言ってスズメは先に走り出したカナリアの姿を追う。

アンナは二人の姿を見送って指をぱちんと鳴らした。

長い魔法使いが使う錫杖のような、キャッチボールのようなもの

が彼女の手の中に現れる。半円状のモチーフの中心に赤い光を放つ宝玉が静かに浮いていた。

普段の彼女ならば突っ込み体質の人間が突っ込まずにはいられないような代物を出すのだが、今回はそれをしなかった。

的確に突っ込むカナリアがいないからか、それとも彼女の気持ちに余裕が無いからなのか。

「取り敢えず、次回に続く？」

アンナは部屋に向かいながら少し首を傾けた。

Story 5 太陽が堕ちる日(23)

23 この恨み、地獄に流します

「部屋に入るならばノックくらいはしなさい」

男は顔を上げずに言った。

アンナはにこりともせずに答える。

「千本くらいでいいかしら？」

「そのノックではありません」

「変わらず、面白味のない男・・・顔以外」

男は「@人@」の顔をこちらに向けた。

「顔は関係ありません。・・・どこかで、お会いしましたかな？」

「あの時はそんな顔では無かったわ。それから名前も違った。・・・

イエーン」

「ほう？」

興味深そうに男は笑い、顔に手を掛ける。

まるで「ルパン三世」が変装を取ったかのようにぱり、と表層面の皮が剥がれる。いや・・・そんな恐ろしい事態ではなく、「@人@」の部分がとれたただだが、まるでそんな変装をしていたかのように晒された彼の素顔はまるで別人だった。

「セーラー。ーンの変身前変身後よりもよほど素晴らしい整形技術ね」

「整形ではありません」

素顔の彼は真面目そうな顔をしていた。

リーダー格ではないが、それに近い位の外見。そう、ちょうど丞尉といった顔つきだ。軍属の融通のきかなそうな副官。超絶美形という訳ではないが整った顔をしているために、人気ランキングでは

主人公と準主人公に次いで三位くらいにつけてきそうだ。ただし、一部地域ではそのエセっぽい顔がどうも嫌だと人気伸び悩む傾向にある、そんなタイプの顔をしていた。

「因みに私は猫耳毛むくじゃらが好みよ」

もちろんアンナはジェラートの事を言ったのだが、毛深いマッチョが猫耳を付けている姿を想像してしまった男はげんなりしたような表情を浮かべる。因みに服装はメイド服（鈴と尻尾のオプション付き。ニーソ）

「私を知っている者に出会うとは思ってもいませんでした。さて、あなたに覚えはありませんが」

「あの頃私は若かった」

「その言動……どこかで覚えていますね。髪や目の色は違いますが……さて、記憶に自信はあるのですが、あなたの名前は思い出せませんね」

彼は口元に手をやって思案するように言った。

挑発している訳ではない。

本当に覚えていないことをアンナは知っていた。思い出そうとしても誰一人思い出せない。過去の自分の名前。

冷めた口調でアンナは言った。

「老化現象よ」

男は頷く。

「そうですね、私も長く生きていますからそれもあるでしょう。……私と戦うつもりですか？ 私は死にませんよ」

アンナは武器を構え、そこに魔力を集中させる。

「知っているわ。だけど私も品川商事株式会社よ」

「ほう？」

「死ぬまで死なないって決めたのよ」

一瞬、男が考え込む。

「……それは、普通の事ではありませんか？」

刹那、アンナの呪術が発動する。

室内に稲妻が発生する。

それはアンナだけを避けるように至る所に次々と攻撃を加えていく。アスパラ・・・イエンは、それを避けながら部屋をあちこち移動した。

壁を破壊し、調度品を破壊し、やがて沈黙する。

ばさばさと千切れた本の破片が砕けた壁の向こう側の亜空間に飲まれて消える。

部屋は散々な様子だ。

しかし男には傷一つ付いていない。

にい、と狂気じみた笑いが浮かぶ。

真面目な顔に、不似合いな笑い。

「・・・！」

アンナは咄嗟に自分の眼前に手をかざした。

激しい風がアンナの身体を壁際まで吹き飛ばす。

「生憎と、私も灰の力を持っているのですよ」

「・・・それも、知っているわ」

強く叩き付けられ咳き込みながらアンナは答える。

「でも、あなたはジェラートさんには勝てない」

「どういう意味で・・・ぐあ！！！」

イエンの身体の中からよきつと手が生えた。

白い、人の手。

それが後ろから突き立てられた物だと悟るのにそれほど時間はかからない。イエンは真後ろに立つ存在を睨んだ。

遅れて血が噴き出す。

「貴様・・・一体・・・！」

イエンの口から、ざらりとした砂が吐き出される。

手が、ずるりと抜かれた。

イエンの瞳に青い髪が映る。男だった。まるで風になびくように片側だけはねた癖毛を持つ短髪の青年。瞳孔は縦に長く、アンナと同じ凍えるようなアイスブルーの瞳をしていた。

耳に付けられた金の耳飾りが、何かに触れた訳でもないのにキンと澄んだ音を立てる。

男は指に付いた血を舐めた。

「そんなもの、食べたなら阿寒湖よ、ジェラさん」

「穢れの味がするな。喰らう気にもなれん」

深く落ち着いた声だった。

イエンはよろめくように彼から離れた。

「・・・気配など、感じなかった」

「当然よ。『その人』は元来こちら側にいるべき存在。一つの個がいくつにも別れているために力が弱まっているとしても、異物である私たちに気配を悟られるほど衰えてはいないわ」

「・・・魔族か」

イエンは呟く。

「いかにも」

「たこにも」

反射的に放たれたアンナの言葉はこの場では無視をされた。

「貴様とて、元は魔族。今更驚くことでもあるまい。だが、灰に支配されるとは落ちたものだ」

「支配されてなど、いない」

更に灰を吐き出し、男は口元を拭った。

「退屈しのぎに灰の者を喰らっただけのことだ」

「アナナスという男に『喰』の能力を分け与えたのは貴様か」

「そうだ。王の復活とやらに少し興味を持ったのでな。貴様とてそんな崩れかけの亜精霊種に使役されるとは・・・退屈をしていたのだろう？」

「ジェラさんをあなたと何かと一緒にしないで」

アンナの持つ杖がぐんと魔力を増す。

くすくすとジェラートが笑った。その笑みは魔族には見えない。

「確かに、それと一緒にされるのは心外であるな」

魔族の王なのだ。

地上に降りた時に複数の個に別れたとはいえ、彼も魔王の一人。一部、と言うべきか。最早魔族としての形を失いかけているそれと同一視されるのはあまり嬉しいことではない。

だか、笑う彼はどこか楽しそうでもあった。

時々彼はこんな笑みを浮かべる。

「ジェラート」

アンナは名前を呼ぶ。

何も言わず理解した彼は頷いて答えた。

「私は、かまわないよ」

ざわり、とアンナの気配がざわめく。

杖に蓄えられた力が意思を持つ巨大な手のようにイエンの身体を縛り付けた。ジェラートに寄って身体に穴の空いた男はその力にいつもあつさりと捕まる。

「誰か殺しても、死んだ人は帰ってこない。だけど……私の憎しみ、地獄に流すわ」

「私は……死なぬ！」

イエンが叫ぶ。

口から血と砂が吐き出される。

「ならば、闇に飲まれるがいい」

ジェラートが笑みを浮かべたまま手を握る動作をする。

刹那、アンナの力に被さるように亜空間から飛び出した黒い巨大な手が男を掴んだ。

巨大な手がゆっくりと亜空間の中へとずるずると引きずり込んでいく。

「さようなら」

呟いた言葉に答えは返らなかった。

どこからも。

Story 5 太陽が堕ちる日(24)

24 意思の力

「!？」

カナリアは振り返った。
妙な気配がした。

今まで感じたことのない強い魔力。それはトーアで出会ったネセ
セア神の纏う威圧感にもよく似ているが違う。

深い暗黒の気配。だが、それは消して邪悪では無かった。

「どうしたんですか？」

スズメが心配そうに呼びかける。

「今・・・あ、いや何でもない」

「あの」

「ん？ どうした？」

「マリモが、猫耳に変わっていますけど・・・」

「ん？ うわっ！ なんだこりゃ！」

カナリアは自分の頭部に付いた猫耳に触れて叫ぶ。

いつの間に猫耳に変わったのだらう。アンナの仕業だろうか。

「こう言うのはむしろスズメの方があ・・・」

似合う、と言いかけて彼は耳を澄ませた。

自分の耳の方ではなく、頭に付いた耳の方が何かの音を捕らえた。
中途半端に言葉を切ったために「にゃー」と言ったように聞こえ、
スズメが内心「かわいいー!!」とか思っているとか、彼には知る余
地もない。

「スズメ」

「え？ あ、はい！」

「これから何を見ても、俺は鳥の一族の一人だって信じてくれ」

「猫耳でもですか？」

「これは関係ねーよ」

初めから話しておいた方が楽だろうか。

だが、今は説明する気力も、時間も惜しい。

カナリアはスズメの返答を待たずして走り出した。

音の聞こえた方。

そこには大きな扉がある。今し方、誰かがその扉を開けたのだろう。半開きの状況だ。カナリアはその扉に滑り込むように突入した。そこにいた全員が一斉に振り向く。

魔法陣の描かれた祭壇に登っていこうとする人々。

その中にエリーの姿が見えた。灰色の髪 of 男に守られるようにして歩いている。横には黒髪の女と、それを引きずるようにした山吹色の髪をした男。そしてその先頭をきつて歩いているのは、緑色の髪をした男。

「アナナス」

声音には思いの外憎悪が含まれていた。

男は静かに瞬いた。

「カナリア！」

エリーがカナリアの姿を見つけ駆け寄ろうとする。それは灰色の髪 of 男に阻まれた。恐らくこれが王の器。

引きずられていた黒髪の女がエリーの声を聞いて瞬いた。

「カナリア？・・・私の知っている人は、女の人だったわ」

「え？ カナリアって性転換したの！？」

「エリーは元女の猫耳野郎が好きなの？」

銀髪のおかしな質問。山吹色がけけつと笑った。

「男の猫耳にはさすがに萌えねーよな」

「萌とか言っふなよ、気色悪い！　っていうか、何でお前ら同じ名前っていう発想がねーんだよ」

カナリアの突っ込みにエリーがぼんと手を鳴らす。なるほど、じ

やねーよ、と心の突っ込み。無駄な会話をして時間を費やしたくない。

まさか、と黒髪の女がガタガタと奥歯を鳴らしながら漏らす。

「……鳥の者か」

アナナスは呟くように言った。

「排除をする」

「駄目！」

黒髪の女が叫ぶ。山吹色とエリーが同時に息を飲んだ。

アナナスはそれを黙殺し片手を上げた。強い魔法の気配。カナリアは咄嗟にスズメを後ろに隠した。

ばちん、と魔法同士がぶつかり合う音がした。

カナリアたちと、アナナス達との間に魔法の塊と塊とがぶつかり合っただけの壁が生まれる。生まれた爆風にエリーが悲痛な声を上げる。

「カナリア！！」

「っ！！」

カナリアは目を見開く。

その瞳は赤く染まっていた。奥が闇色に揺れる。その瞳の色は、アナナスの朱赤色の瞳に良く似ている。お互いに血を好むような、赤。

（駄目だ、奴の方が、強い）

飲まれるような感覚があった。

持ちこたえろ、と自分自身に活を入れる。

猫耳がぴくり、と動いてカナリアの頭から剥がれた。刹那、それは魔法の壁に向かって飛んでいく。

ばかり、と激しい音を立ててカナリアは後方に飛ばされた。魔法がこちらに直撃した訳ではない。消滅の反動で飛ばされただけだ。咄嗟にスズメの身体を庇う。巨大な扉にぶつかり、カナリアは小さく呻いた。

「カナリアさ……っ！」

スズメが息を飲むのが分かった。
瞳を見たのだ。

鳥の一族には消して出ることのない赤い瞳。奥に揺れる黒は灰の一族の証。

「お前は」

アナナスがカナリアの瞳を見ながら言う。

その目を睨め付けてカナリアは叫ぶ。

「俺は鳥の一族だ！」

「……」

「恒星落陽なんか、起こさせはしない」

この世界にとって自分が異質であることは物心ついた頃に既に理解していた。力を使うたびに、頭のどこかで「王の復活」を求めてきた。それは自分の本能に、灰の目の一族全てが持つ本能的なことだけど、自分には意思があつた。その衝動を抑え込む意思が。

モズの与えてくれた安らぎ、アンナの与えてくれた衝撃、リン姉弟の変態、エリーの天然ボケ、トキのおかしさ、マスターの威厳の無さ。何だか羅列すると凄く下らないものに思えるが、それを守りたいと言う意思があつた。

錯覚でも良い。

大切に思うものを守りたいという意味はカナリアの精神を支えてきた。

「グラス」

アナナスは小さく呼んだ。はつとしたように山吹色が答える。

「あ、はい、俺が処分しますか？」

「扉を開け」

「ああ、じゃあ、ナスタチウム様をよろしくお願いしますよ」

彼はナスタチウムの身体をアナナスに預ける。

彼女はカナリアを見つめたまま小声で「シェリル」と呼んだ。エリーが顔を上げる。彼女に近付こうとするエリーを銀髪が止めた。

「……側を離れないで。君のことは僕が守るから」

「イチイくん」

カナリアはよろめく身体をスズメに支えられながら剣を抜いた。王の器、そう呼ばれた彼を殺せば終わる。だが、何故だろう。彼がエリーに向ける表情は穏やかでとても悪いものには見えなかった。これを殺せと言うのか。

ただ、王が蘇る、それだけの理由で。

脳の隅で、先に行つて下さい、と言つた鳥の男の声が聞こえる。族長の代理として、彼らはカナリアを信じてくれた。期待に答えるべきだという意味と、目の前にいる敵という明確な意思のない青年を殺したくないという意味が戦っているように思えた。

カナリアは一步踏み出す。

「……」

「カナリアさん！」

「イチイくん！」

衝撃を覚えてカナリアはその場に蹲つた。同時にイチイも蹲る。

歌が、聞こえた。

Story 5 太陽が堕ちる日(25)

25 歌巫女のうた

揺れる揺りかごの中 のばされた小さな手
鳥が鳴いても 花が笑っても
何も持たない手のひらを 誰かがつかむことはない

激しい頭痛と吐き気がした。

アナナスの手の中でナスタチウムが歌っている。その歌には魔力が込められ、まるで身を引き裂かれるようだった。

同様の苦痛を、イチイも味わったのだろうか。エリーの近くで灰の髪を持つ男が蹲っていた。

「……あんたまで、王の復活を切望するのか」

カナリアは吐き捨てるように言う。

歌が止み、虚ろな瞳がカナリアを見ていた。

同じように虚ろな瞳をしたアナナスが愛おしそうに彼女の髪を撫でた。

「ナスタチウム、歌を」

「……」

「魂の具現を」

ゆつくりと、女が歌い始めた。
グラスがアナナスの横に立つ。
扉が開く、と彼は言った。

部屋が、床の魔法陣がゆつくりと動き始める。空間が歪み始めたのが分かった。亜空間にあるこの迷宮と、先刻までカナリアたちのいた次元がゆつくりと繋がれていく。

天井が・・・空が、恐ろしい程青い色を湛えていた。

ばさりとその割れた天井から何かが落ちてくる。

「あらん？」

全身が燃えるような赤。

「確か、私、道を歩いていたはずだけどどうしてこんな所に落ちるのかしら？」

「キツシュさん？」

「あらん？ そこにいるのはエリーちゃん！ んふ、なんて言う偶然！ これはもう運命としか言えないわね？ んまあ！ 何て事！

エリーちゃんの他にも可憐で純情そうな乙女が・・・っは！」

突然降って湧いたキツシュはスズメを確認するなり猛ダツシュをかける。

しかし、鋭い気配を感じ彼女は後方に飛んだ。

ガラスの剣の鞘が彼女目がけて飛んでいた。

「な、何をなさいますの！？ あなたひよつとして私とあの子との関係を嫉妬して・・・！」

「誰がするか！ 畜生、せっかく好みのタイプなのに変態なんて！」

「誰が変態ですの！？ 美しいものを愛でる行為は人として正常なことですわ！・・・あらん？ カナちゃんそちらで何をしてますの？」

「何をつて・・・お前」

カナリアは戸惑った声を上げる。

状況が飲み込めない。

空間が開かれて何故キツシュが落ちてくるのだろうか。

「まあ、良いですね。私、ヒバリちゃんを捜していますの。ヒバリちゃん、この中にいらっしやいますか？」

「俺をちゃん付けで呼ぶんじゃないねえ！」

グラスが叫ぶ。

アナナスが少し表情を動かした。

エリーに支えられているイチイが呻く。

「お前・・・気配が妙だと思っていれば、鳥の者だったか」

ちっ、と彼は舌打ちをする。

「もう暫く隠しておくつもりだったのにお前のせいで台無しだ」

「え？　グラスさん、ヒバリちゃんって名前だったの！？」

「だからちゃんを付けるなよ、学習機能のねえ女だなっ！」

「エリーを悪く言うな！」

イチイは頭を抱えながら叫ぶ。

不意にカナリアは自分の頭痛が軽くなったことに気付く。相変わらず酷い頭痛だったが、動けない程ではなかった。

「？」

空間が変わったせいだろうか。

それともナスタチウムの歌う歌が変わったから？

アナナスは冷淡な口調で言う。

「座標を歪めたか」

「そうそうてめえの思い通りにはさせねえよ」

ヒバリがむき出しの剣を片手に躍りかかった。

「ここで決着付ける！」

「無駄なことを」

アナナスの瞳が闇を帯びる。

危険だ。

悟った瞬間に身体が動いていた。

「スズメ！」

「はい！」

剣を手にアナナスに向かうカナリアにスズメが続いた。反射的にキッシュも走った。

四本の刃物が煌めいた。

カナリアの乱入に気が付いたアナナスは顔色を変えずに彼を見た。

赤い瞳だというのに凍えるように冷たい。

対照的にカナリアの瞳が赤く燃えた。

悲鳴に似たエリーの声がカナリアの名前を呼んだ。

三本の剣が、一つの鎌が、ナスタチウムを抱え込むアナナスに向かって振り下ろされた。

「！」

剣は彼に到達することは無かった。

強い魔力の壁に阻まれ、四人の身体は遙か上空に跳ね飛ばされる。

（こんな時に）

エリーは声にならない声で叫ぶ。

（こんな時に何で、何も出来ないの！？）

みんなアナナスと戦っている。

あの悲しい瞳をした人と。

分からなかった。

何故戦っているのか。どちらがしようとしていることが正しいのか。エリーには分からない。ただ、目の前で誰かが傷つくのは嫌だった。

姉が亡くなった時のように、また自分は何も出来ないのか。

あの時は側にいられなかったから助けられなかった。今は側にいるのに何も出来ない。

何で自分はこんなにも無力なのだろう。

「お願い、誰か、こんなの、もう嫌だよ！」

だけど覚えていて

歌が重なる。

ナスタチウムの優しい歌声。
愛おしむような、慈しむような声。

たとえ神様があなたを嫌っていても
私だけはあなたを愛しているから

エリーの中から魔力があふれ出す。それは法術を使うためのものでも、魔術を使うためのものでも無かった。もっと根本から吹き出るような力。

誰かが、力を貸してくれるような感覚だった。

ただ目の前の人を守るために、

「全てを無に帰す為に」

耳元でイチイが呟いた。

イチイがエリーの手を握る。

まるで違う物に触れたような気がした。

「この世から全ての悲しみを消し去るために、力を貸そう、人の子
よ」

だから泣かないで 誰より愛しい子

Story 5 太陽が堕ちる日（26）

26 太陽が堕ちる日

歌が、響いた。

カナリアの鳴くような美しい声。

頭の中に流れ込んでくるものは今現実に行っていることか。それとも誰かの記憶か。

どこか森の中にある小さな村のような場所。

そこで緑色の髪を持つ青年は、黒髪の少女を呼んだ。

『歌巫女様』

歌を止め、少女が振り向く。

不機嫌そうに、眉根を寄せて。

『あなたまで私をそう呼ぶの？』

『そのように定められています』

『なら、歌巫女になんかなりたくなかったわ』

『・・・・・・』

『歌巫女はね、死ぬのよ。歌いければ死ぬる。だから私、歌巫女になれた時嬉しかったの。・・・・でも、あなたまでそう言う態度をとるなら、歌巫女にならない方が良かった』

誰もかももう、自分のことを巫女としてしか見ない。

それは今までの自分を全て否定されたかのようなだった。

歌を覚えた事以外、今までの自分と変わらないのに。

『ねえ、あなただけでも、私を呼んで』

『・・・・・・』

『お願いよ。・・・・約束したじゃない。忘れたの？』

男は首を振った。

『共に、死ねる方法を探そうと』

女は微笑んだ。

『そう、私たちが一緒に死ねる方法を。歌に何かあればって思ったけど、結局駄目だったわ。私の歌は王の魂を慰める揺りかごではないの。でも、まだ諦めないわ。歌い終わるまでにまだ何十年もあるんだもの。ねえ、アナナス』

『ああ』

『私、まだ、子供産めるのかしら』

『・・・・・・』

『あなたの子が欲しいわ』

自分が先に死んでしまっても、あなたが寂しくないように。

『ねえ、名前を呼んで』

忘れないように、何度も。

「・・・・ナスタ・・・・チウム？」

声を聞いてカナリアは身体を起こした。

受け身を取り損ねたために全身が地面に叩き付けられた。激しい痛みを感じるが、骨が折れたような様子はない。

朦朧とする意識を呼び戻すために頭を強く降るとようやく意識が戻ってくる。

自分の倒れていた場所の近くに、アナナスの姿があった。

「お前は、子を守るために」

その手に抱かれた黒髪の女はぐったりとしている。

全身が粟立った。

「・・・・・・！」

反射的に剣を握り直した。

アナナスが振り返らずに答えた。

「もう、遅い。歌は終わった」

「何？」

「王が蘇った。全てが終わる」

「何だって？」

カナリアは慌てて辺りを見回す。

亜空間にあった城と、繋がった高台の向こうには湖が見える。湖の真上に、太陽が燦然と輝いている。それは普段彼らが目にする太陽よりも大きなもののように見えた。

「恒星、落陽？」

始まったのだ、とアナナスが呟く。太陽が、落とされるのだ、と彼は無感情な口調で言った。

「お前・・・」

憎悪を吐き出しかけた瞬間、叫ぶような声と共にヒバリが突進してくる。

彼の剣はあっさりとアナナスの身体を貫通した。男の身体がぐらりと揺れ、女の身体と共に地面に倒れ込む。苦痛を感じている様子は無かった。

ただ、目を開き小声で「それでは死ねぬ」と呟いた。

「カナリア！ てめえ、なにぼさつとしてんだ、早く止めるぞ！」

「止めるって・・・」

「奴め、天然ボケ女の力を使って太陽を引き寄せやがった！ てめえの馬鹿みたいに高い魔力ではじき飛ばせ！ あいつらは俺たちが止める！」

あいつら、と言って見えたのはエリーとイチイの姿だった。

エリーの肩を抱きしめたまま、男は太陽を凝視している。

慌てたようにエリーが叫んでいる。

「イチイくん！ 太陽を直視すると目が見えなくなっちゃうよ、止めて！」

「そう言う問題じゃねーんだよ！ 女、早くそれから離れろ！ お前の魔力が利用されているんだぞ！」

「むむむ無理だよ！ 何かさつきから足が動かなくて・・・!!」
彼女の足下は見えない。

しかし何故かそこからは生命が感じられなかった。

「・・・生命そのものを使っているんだ」

「何だつて？」

「ありったけの魔法たたき込んで結界を壊す。でないとうしようもない」

カナリアは瞳を赤く染めた。

奥の芯が揺れ、闇が勝り始める。

「止める、お前は太陽を跳ね飛ばすことに専念するんだ！」

「だが、奴が術を続ける限り終わらない！」

「俺たちがやる！ 灰の目と戦うのは俺たちの使命だ！ 魔力のない俺たちには、太陽は押し戻せない・・・だから」

ヒバリはカナリアの耳元で囁く。

「悔しいけど、頼れるのはお前しかないんだよ」

「ヒバリ・・・お前」

「認めた訳じゃないが、鳥になろうとしたお前の気持ち、今だけ信じてやるよ」

答えて見せろ、と彼は言う。

鳥の一族の中で、カナリアが本当は何者であるか知っている者は少ない。ヒバリはその数少ない側のものだ。初めて知った時、彼は「こんな奴とは一緒に戦えない」と言い切った。それを証明するよ
うに、彼は単独行動をとる。

灰の目の一族の中に入り込み、内情を報告する役目に就く。鳥の一族が、灰の目の一族に囲まれて生活して平気なわけがない。カナリアには分らないが、独特の気配は鳥の一族にとって不快なものでしかない。城に突入した時の彼らの反応を見れば彼がどれだけの苦痛を味わったのかが知れる。

その彼が、信じると言ったのだ。

「これに答えなきゃ、男じゃねーよな」

カナリアはぽつりと呟いた。

ヒバリが怪訝そうに振り向く。

「やっぱりてめえ、女だったのかよ」

「ちよつと待て、どうしてそんな発想になるんだ？　っていうか、何で若干嬉しそうなんだ？」

男じゃない、という部分しか聞いてなかったんだろつ。

「う、うるせえ！！　初恋だったんだよ！」

「・・・あ」

思い当たる節があつてカナリアは呻く。

この場にルースがいれば「もてもてですな！？」と喜んだことだらつ。

幼い頃のカナリアは本人の知らないところで何人もの男を落としていたのだ。その事実を今知つて、少し死にたい気分になったのは、誰にも言えなかった。

ていうか、今の状況で女だったとして、軽く喜べるヒバリの根性が凄いと思ったとか、本人を目の前には言えなかった。

Story 5 太陽が堕ちる日（27）

27 紫陽花

太陽に向かって手をかざすと、まるで自分があの太陽を欲しているように見えた。

多分、それは真実だろう。

心のどこかで、恒星落陽が起こることを祈っていたのだから。

死なない一族が、どうして王の復活にこだわるのが、ようやく分かった。死なないからなのだ。

死なないからこそ、渴望する。

恒星落陽の方法を、それを出来るだけの力と知識を持った人を。

『お前とて、本気で死を欲したことがあるだろうに』
うるさい。

『何故、止めようとする？』

それは灰の目の王が見せる幻覚だろうか。それとも、自信の心に棲む悪魔の囁きだろうか。カナリアは幻聴に答えず魔力を注いだ。

身体全体から抜き出されるように強い魔力が落ちてこようとする太陽を支える。

気力と魔力。

どちらが先に尽きるだろう。

昔ならば、大声で泣いていた。助けてくれ、と叫んでいた。でも、いつからかそれを止めてしまった。

立つことを知ったからだ。

……いや、立つことを自分で選んだからだ。

『何故止めようとするのだ』

「師匠と、約束したんだ」

『何の意味がある。死んだもののとの約束が。お前は真実終結を望んでいるというのに』

「違う」

『何が違うというのだ、アジサイ』

「俺は……」

『ハイドランジアの名を継ぐ資格のあるお前が、何故鳥との約束にこだわる』

師匠は、自分を殺さなかった。

脅威になる可能性のあった自分を殺さず育ててくれた。そして何よりも、最後まで信じた。自分の命と引き換えに、カナリアを守り通したのだ。

期待に答えなければ、恩義に報いなければ、そう思って突き進んだ時期もあった。

だが、今は違うとはつきり言える。

選ばなければいけない時はあっても、しなければならぬことなんてこの世界にはない。

確かに昔、終わりを望んだことがある。今もなおどこかでそう思っている。

けれど、違うのだ。

どこかで思うことと、強く思うことは、思うことと実行することは違う。

守りたいものがある。

どこかで自分を呼ぶ声が聞こえる。

それを、守りたい。

「俺は、カナリアだ」

言葉が喉の奥からせり上がってくる。

いつの、誰の言葉？

「再び門が開くまで、永久に、妨げるものが無きよう、盟約す」
知らない言葉。

バラバラのパズルがつなぎ合わされるような、奇妙な感覚を覚える。剣が輝きを増し、ここに力があると示すようにカナリアの腕を動かした。

影が、幻影が僅かに笑った気がした。

カナリアは剣を振り上げる。・・・幻影に向けて。

「・・・眠れ・・・灰の王」

「イチイくん、お願い、止めて！」

エリーは叫んだ。

何をしようとしているのか分からない。だが、危険なのは分かった。危険なことをしようとしている。このままでは、

「みんな死んじやうよ！」

「お前が望んだことだ」

「違う、私、そんなこと望んでないよ！」

「人が傷つき傷つけ合う姿を見たくないと望んだ」

「そうだけど・・・」

「ならばそれは全てを滅ぼすより他にない。人は、その傲慢さ故に傷つけ合う。人が無ければお前はその姿を見ることはない」

「そんなの、曲芸だよ！」

二人の周りに張り巡らされた魔力の壁の中を、のそりと近付いてきたヒバリは呆れた口調で言う。

「・・・それ言うなら曲解だ、馬鹿女」

「うわーん、馬鹿にされた！？」

「喚くな！手を伸ばせ、そいつから離れるんだ」

「近付くな」

イチイは冷たく言う。

やはり、エリーの知っているイチイとは違う。エリーはヒバリに向かつて手を伸ばした。あと少しなのに、伸ばされた手には届かない。

キッシュや、カナリアと一緒にいた女の子が、遠くで壁と戦っているのが見える。ヒバリが通るための穴を広げているのがよく分かった。

魔力の壁は人を阻む。

阻まれた者は傷つく。

見ればヒバリの身体は無数の傷に覆われていた。

「嫌だよ、イチイクン、お願い、もうやめて！」

彼女の声に、一瞬、イチイの瞳が揺れた。

僅か弱まった魔力の合間を縫ってヒバリの手がエリーに届く。

「いたたたた！　痛いってば！　どっちなか、放してよ！」

イチイとヒバリに片手ずつ捕まれる格好になったエリーは痛みに呻いた。

ヒバリが口の端を上げて笑う。

「こういう場合、最初に離れた方が本当のお母さんなんだぜ」

「・・・」

「えええ？　お母さんって、二人とも男でしょ？　って、何で二人とも真剣なの？　いたたた・・・んつと・・・あ、そうだ！　カナリア！　カナリア！　助けて！　私じゃ誰を突っ込むべきか分からないよっ！」

言ってから、そんな状況でもないことに自分でも気付いた。

エリーはイチイの方を向く。

かち合ったイチイの瞳が光を取り戻したように暖かみを覚える。

「・・・エリー、えりあーど？」

「え？」

瞬間、魔力の壁が消え失せる。イチイの手の力が抜け、ヒバリに引つ張られていたまんまのエリーはそのままヒバリと一緒に転倒した。

ぐえ、と下で変な声。

気にせずエリーは起きあがってイチイの方に近付いた。ばたり、と倒れる音が聞こえたのだ。

「イチイくん！」

彼女は叫んだ。

一瞬見えたイチイは、間違いなくあのイチイだった。確かめるようにイチイの側に膝を付くと、彼はぼつりと漏らした。

「……良かった」

「え？」

「エリーがいる」

イチイは笑った。

伸ばされかけた手が、ごとりと地面に落ちる。手は、腕ごと外れていた。まるで、人形がバラバラになっていくように、イチイは徐々に壊れていく。

「うそ……そんな……」

「偽りの器じゃ、王の重みに堪えられなかったんだろっな」

よろよとした足取りでカナリアが近付く。

彼の頭上では、太陽が徐々に遠ざかっていた。

イチイが彼の方を見る。

「あなたの事は嫌いだ」

「いきなり酷い告白だな」

「でも、ありがとう。おかげで、エリーが……」

声は続かなかった。

微笑んだ姿のまま、彼は動かなくなった。

最終話

最終話 金系雀は太陽のように輝いて

よろり、とカナリアが動いた。

泣きじゃくるエリーを通り過ぎ、どこかへと向かう。

「カナリア？」

「どう・・・しましたの？」

呼吸を整えながらキツシュが問う。

先刻壁を壊すために魔力を使い切った彼女は立っているのがやつの様子だった。その脇をすり抜け、彼は地面に倒れるアナナスの元に向かう。彼の上にはまるで木彫りの人形のような女が横たわっていた。それが今までナスチウムであったことは容易に想像がついた。

緑の髪の子はちらりとカナリアの方を見た。

「言い残すことは無いか？」

カナリアが言うと言は「一つ」と答えた。

「タルト・タタンを、かの人に」

「分かった、俺も便利屋だ。引き受ける。報酬はお前の命で構わない」

「・・・」

男は満足そうに目を閉じる。

カナリアは剣を男の首に当てた。

冷えた刃が輝きを増した。

エリーが慌てたように駆け寄った。

「だ、駄目だよ！ この人、カナリアのお父さんだよ！」

ナスチウムはカナリアを見て「シェリル」と呼んだ。だとした

ら、アナナスはカナリアの父親なのだ。少なくとも、ナスタチウムはそう思っていた。

親子なら、戦ったらだめだ。

カナリアが殺しちや駄目な人なんだ。

そう思ってた言葉は、拒絶の言葉で返される。

「俺の親父はもう死んだ」

「・・・私に息子はいない」

「でも・・・」

エリーちゃん、とキッシュが宥めるように言う。

「・・・決着を付けさせてあげましょう」

「だけど、こんな・・・」

「死んだ方が幸せな時もあります。その人にとって、朽ちることこそ、本望でしょう」

スズメが優しく諭すように言う。

ヒバリも同意するように頷いた。

「朽ちなければ再び繰り返される。それだけのことだ」

「でも・・・」

悲しかった。

ここでアナナスを死なせてしまったら、カナリアは一人だ。母親も、父親ももうこの世にはいなくなってしまうのだ。

「安らかに」

「っ！」

どん、という音と共に、カナリアの持つ剣が振り下ろされた。

見えなかった。

涙で何も。

ばかり、と何かが砕けたような音が聞こえた。

朽ちたか、と淡々としたカナリアの声が聞こえて余計に悲しかった。

一番悲しいのはカナリアのはずなのに。
泣いていないのだろう、彼は。

「泣いてくれ、エリー」

「・・・カナリア・・・」

「それだけで、十分だ」

「カナリア・・・!」

「それだけで・・・」

涙で歪んだ視界の中で黒い影が揺らぐ。

ばさりと重いものが地面に落ちる音が聞こえた。

「・・・カナリア?」

声は、戻らなかった。

「たっだいまー!」

エリーは元気よく『銀の麦』の戸を開いた。

開いた瞬間、キツシュが勢い良く飛びつく。

「あはーん　お帰りなさいませ!　待っていましたわ、エリーちゃん!」

「わわわ!!　何!?　キツシュさん!」

「んもう、キツシーとお呼びなさいな、私とあなたの仲じゃない」
「仲むつまじく」

カウンターの向こう側でジェラートを抱いたアンナが呟く。

あらん、とキツシュが喜び、エリーは蒼白になる。

「こ、怖いこと言わないでよ、アンナちゃん!」

レバンに戻り二ヶ月が過ぎた。

銀の麦にはいつもと変わらない平穏な日々が戻っていた。そこに、黒髪の男の姿が無いこと以外、何も変わらない。

エリーは便利屋の仕事を手伝いはじめた。

とはいえ、まだ簡単な荷物運びや手伝い程度の事以外は任されていない。

カナリアのように色んな仕事をこなすようになるにはまだ随分と先のことになるだろう。

「お疲れ様です、エリーさん」

「楽しかったよー、って、マスター？ どうしたの？ その頭！」

マスターの頭から二本のタケノコがまるで角のように生えている。出かけた時には無かったはずだ。

お恥ずかしい、とマスターは朗らかに笑いながら答える。

「アンナの料理をつまみ食いしてしましまして、そのせいでしょー」「そのせいつて」

「庭に生えていた緑色に輝く怪しげなタケノコとか入れて無いわよ」「い、入れたんだ」

さすがのエリーもこれには引きつった笑いを浮かべるしかなかった。

「ところで、エリーさん、帰る早々頼み事をしたいのですが」

「まあ、マスターったら、労働基準法に引っかかりますわよ」

「いーよ、いーよ、どーせ暇なんだから。それで頼み事って何？」

マスターに内容を聞いた瞬間、エリーは店を飛び出した。

『お迎えをお願いしますよ』

マスターはそう言った。

大通りを駆け抜け、八百八さんに声を掛けられたが「後で」とあしらい、とにかく街の入り口へと急ぐ。

どん、と誰かに激突した。

「うわっ！・・・なんだお前か。これで少年であれば新たな愛が芽生えたというのに」

マリンはつまらなそうに腕を組んだ。

ぶつぶつ言う彼の足下に迷子の子供がまわりついているのが見えた。

もちろん、少年だ。

突っ込みたいところはあるが、それどころではない。

「えっと・・・ごめんなさい、後で！」

「エリアード？」

とにかく走った。

今までに無いくらいに。

急がなければ、の意思が強すぎて途中転倒しそうになりながらも彼女は急いだ。

街の入り口の方まで辿り着くと、黒い影が見えた。

エリーはそれに向かって飛びかかる。

「お帰り！」

「モー」

「あれ？ 何か毛深く・・・それに何だか臭い」

「人聞きの悪いこと言なよ、それは牛だ」

牛に抱きつくエリーに掛かる黒い影。

眩しい太陽の光を背負って優しい笑みを浮かべる男。

本当に眩しくて、目がくらみそうだった。

二ヶ月半振りだ。

戻ってくると分かっている、あのまま、どこかへ行ってしまうんじゃないかと不安だった人。

長い仕事と療養を終え、ようやく戻ってきた。

今度こそ、間違わずにその胸に飛び込んだ。

うわ、と彼が悲鳴を上げる。

「お帰りなさい、カナリア！」

ふう、と息を吐いて彼は青い瞳を細めて笑った。
まるで、何か眩しいものでも見るように。

「ああ、ただいま」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7857c/>

カナリア

2010年10月8日12時04分発行